愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第148集

清洲城下町遺跡X
朝日遺跡X

2021

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

清洲城下町遺跡と朝日遺跡は、愛知県清須市から名古屋市西区にかけて広がる愛知県を代表する遺跡です。両遺跡は、愛知県北西部に広がる尾張平野のほぼ中央に位置し、木曽川の支流である五条川の流れとともに、古くから多くの人々が生活を営んできました。特に弥生時代の朝日遺跡は、農耕の受容とともに大きく発展し、日本列島における東西文化の結節点となりました。一方戦国時代の清須城は、京都応仁の乱以後に尾張地域の守護所がおかれ、後の織田信長の居城となり、その後の天下統一に向けての礎となりました。本能寺の変以後には、織田信雄をはじめとする城主による改修が行われ、東海地方を代表する城郭・城下町として栄えました。

清洲城下町遺跡と朝日遺跡は、古くから遺物の採集調査、文献史料による研究などが行われ、特に昭和末期からは周辺の開発事業に伴う発掘調査が数多く実施されて、遺跡の様子が徐々に明らかになってきました。昨年 11 月には、あいち朝日遺跡ミュージアムが開館し、これまでの発掘調査成果を広く県民に知っていただく施設となりました。

本書は、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センターにおいて、平成 12 年から平成 14 年にかけてと平成 29 年から平成 30 年にかけて総合治水対策特定河川事業に伴う清洲城下町遺跡の発掘調査と、新川西部流域下水道事業に伴う事前調査として朝日遺跡の発掘調査を行った成果をまとめたものであります。その結果、清洲城下町遺跡では、戦国時代から江戸時代初期にかけての清須城に伴う船着場や城下町の武家屋敷や町屋に関連する遺構や遺物などが発見され、近世城郭の始まりと城下町建設の具体的な姿を考える貴重な資料として注目されています。また、朝日遺跡では弥生時代の居住域があいち朝日遺跡ミュージアムのある貝殻山から西にさらに広がることがわかってきました。今後学術的な資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財の理解への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に対してご理解、ご協力を賜った関係諸機関並びに地元の皆様、発掘調査や資料整理に参加協力していただきました多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

令和 3年 3月

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長　森田　利洋

清洲城下町遺跡X

例　言

1．本書は、清須市清洲他に所在する清洲城下町遺跡 (県遺跡番号 210002:『愛知県遺跡分布地図Ⅰ（尾張地区)』1994 による) の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、総合治水対策特定河川事業に伴う事前調査として、愛知県建設局（発掘調査受託時は愛知県建設部）河川課尾張建設事務所より愛知県県民文化局（発掘調査受託時は愛知県教育委員会）を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが調査を実施した。

3．調査期間と調査面積は平成 12 年度が平成 12 年 12 月 11 日～平成 13 年 3 月 30 日で調査面積が 1,800 ㎡、平成 13 年度が平成 14 年 1 月 7 日～平成 14 年 2 月 27 日で 1,000 ㎡、平成 29 年度が平成 29 年 7 月 18 日～平成 29 年 9 月 1 日で調査面積は 320 ㎡、平成 30 年度が平成 30 年 6 月 12 日～平成 30 年 10 月 12 日で調査面積は 1,280 ㎡である。

4．調査担当者は、平成 12 年度が赤塚次郎・渕嵜和宏・蔭山誠一、平成 13 年度が石黒立人・松田　訓・堀田剛史、平成 29 年度が酒井俊彦・蔭山誠一、平成 30 年度が酒井俊彦・蔭山誠一である。現地における発掘調査は、平成 12 年度が朝日航洋株式会社、平成 13 年度が株式会社人間文化都市研究所、平成 29 年度が株式会社波多野組（現場代理人：初澤和博、調査補助員：雨宮瑞生、測量技師：尾崎裕司)、平成 30 年度が株式会社アコード（現場代理人：大倉　崇、調査補助員：坂口尚人、測量技師：田村和久）の業務支援を受けて行なっている。

5．整理および報告書作成作業は、平成 30 年 4 月～平成 31 年 4 月と令和元年 5 月～令和 2 年 3 月で、蔭山が担当した。

6．遺物整理、製図については次の方々のご協力を受けた。

　阿部裕恵・鈴木好美・瀧　智美・時田典子・堀田祐美・前田弘子・山田有美子・山本孝枝 (整理補助員)

7．遺構図の合成・調整については株式会社アコードに、遺物実測・デジタルトレースについては、株式会社文化財サービスと株式会社アルカに、遺構図版編集作成・地形等高線図デジタルトレースを国際文化財株式会社に委託し、蔭山・鬼頭が校正した。

8．金属関連資料の分析は日鉄テクノロジー株式会社（分析者：鈴木瑞穂・渡邊緩子・半田章太郎・隅　英彦・平尾良光）に、木製品等の樹種同定は株式会社パレオ・ラボ（分析者：小林克也・佐々木由香）に、動物遺体等の同定は株式会社パレオ・ラボ（分析者：三谷智広）、AMS 年代測定は株式会社パレオ・ラボに、出土遺物の保存処理は株式会社東都文化財保存研究所に委託した。

9．本報告書掲載の出土遺物の写真撮影については金子知久氏 (有限会社写真工房遊) の手を煩わせた。

10．発掘調査および報告書作成に際しては、次の関係機関の指導・協力を受けた。

　愛知県建設局河川課（尾張建設事務所）・愛知県県民文化局文化部文化芸術課・愛知県埋蔵文化財調査センター・大分市歴史資料館・清須市教育委員会・津市教育委員会・三重県立総合博物館 (五十音順、敬称略)

11．発掘調査および報告書作成にあたり、次の方々から御教示・御協力を頂いた。

　石田泰弘・葛西有香・甲斐由香里・河野史郎・香名貴彦・熊崎　司・塩地潤一・柴垣哲彦・藤澤良祐・間渕　創・米山浩之（五十音順、敬称略）

12．本書の執筆は、第 1 章～第 3 章を蔭山誠一、第 4 章第 1 節を香名貴彦（独立行政法人国立科学博物館理工学研究部）・堀木真美子、第 4 章第 2 節を鬼頭　剛、第 5 章第 1 節を蔭山誠一、第 5 章第 2 節を武部真木が担当した。

13．本書の編集は蔭山誠一が行った。

14．調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠する。ただし、新基準で表記してある。

15．調査記録および写真記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

〒 498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町字野方 802 の 24　　TEL：0567-67-4163

16．出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

〒 498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町字野方 802 の 24　　TEL：0567-67-4164

目　次

第１章　調査の概要 ……1
第１節　調査に至る経緯 ……1
第２節　調査の方法 ……1
第３節　地理・歴史的環境 ……4
第４節　清洲城下町遺跡の時期区分 ……7
第２章　遺構……9
第１節　層序 ……9
第２節　00A 区・01 区・17A 区・17B 区・18A 区～ 18F 区（南部地区）……12
第３節　00B 区（御園地区）　……29
第３章　出土遺物 ……37
第１節　出土遺物の整理方法……37
第２節　土器・陶磁器……37
第３節　石製品……85
第４節　金属製品……88
第５節　木製品……91
第４章　自然科学的分析……107
第１節　清洲城下町遺跡の金属製品の蛍光 X 線分析……107
第２節　清洲城下町遺跡における層序と古環境 ……117
第５章　総括……129
第１節　清洲城下町遺跡の遺構変遷－南部地区と御園地区－ ……129
第２節　清洲城下町遺跡における茶陶の分布－黄瀬戸と楽系陶器－ ……147

写真図版 ……157

添付 CD
遺構一覧表・出土遺物一覧表・遺構図版補遺・自然科学分析補遺

図 目 次

図 1　清洲城下町遺跡の位置 ……1
図 2　清洲城下町遺跡調査区位置図（1：10,000）……2
図 3　清洲城下町遺跡の立地（1：100,000）……3
図 4　周辺の遺跡（1：25,000）……5
図 5　清洲城下町遺跡に関わる旧河道（約 1：40,000）……6
図 6　清洲城下町遺跡の時期区分 ……8
図 7　00A 区遺構平面図（1：300）……10
図 8　00A 区西壁土層図（1：100）……11
図 9　00A 区南壁土層図（1：100）……11
図 10　01 区遺構平面図（1：400）……13
図 11　01 区東壁トレンチ土層図（1：100）…14
図 12　17A 区・17B 区遺構平面図（1：200）……15
図 13　17A 区西側北壁土層図（1：100）…16
図 14　17A 区東側北壁土層図（1：100）…17
図 15　17A 区東側西壁土層図（1：100）…17
図 16　17A 区 033SD 断面図（1：100）…18
図 17　17B 区北壁西側土層図（1：100）…18
図 18　17B 区北壁東側土層図（1：200）…19
図 19　17B 区東壁土層図（1：100）……19
図 20　17B 区南壁土層図（1：100）……20
図 21　18 区遺構平面図（1：400）……21
図 22　18 区東壁土層図（1：100）……22
図 23　18 区の遺構の変遷……23
図 24　18A 区 040SD・041SD 平面図（1：200）……24
図 25　18A 区 043NR 平面図（1：200）…24
図 26　18A 区 002SD・034SD・047SE 平面図（1：200）……24
図 27　18C 区 034SD・040SD・041SD・043NR・044SD 断面図（1:100）……24
図 28　18E 区北壁土層図（1：100）……25
図 29　18E 区 060SD 遺物出土状況図（1：50）……25
図 30　18A 区 031SE 断面図（1：100）…26
図 31　18A 区 030SK 断面図（1：100）…26
図 32　18A 区 035SE 断面図（1：100）…26
図 33　18A 区 038SE 断面図（1：100）…27
図 34　18C 区 047SE 断面図（1：100）…27
図 35　18D 区 052SX 出土状況図（1：50）…27
図 36　18F 区 073SK 断面図（1：100）…27
図 37　18F 区 075SK 断面図（1：100）…27
図 38　18F 区 083SE 断面図・遺物出土状況図（1：100）……28
図 39　18F 区 084SE 断面図（1：100）…28
図 40　00B 区 2 面遺構平面図（1：300）…30
図 41　00B 区西壁トレンチ土層図（1：100）…31
図 42　00B 区南壁トレンチ土層図（1：100）…31
図 43　00B 区 SK30 土層図（1：100）……31
図 44　00B 区 1 面遺構平面図（1：300）…32
図 45　00B 区 SK51・SX04・SX06・SW01 平面図、SW01 立面図（1：80）……33
図 46　00B 区北 4 トレンチ土層図（1：100）…35
図 47　00B 区北 2 トレンチ土層図（1：100）…35
図 48　00B 区北 1 トレンチ土層図（1：100）…35
図 49　00A 区出土土器・陶磁器（1：4）…38
図 50　00A 区出土土器・陶磁器（1：4）…40
図 51　00A 区出土土器・陶磁器（1：4）…41
図 52　00A 区出土土器・陶磁器（1：4）…43
図 53　00A 区出土土器・陶磁器（1：4）……44
図 54　00A 区出土土器・陶磁器（1：4）…46
図 55　00A 区出土土器・陶磁器・瓦（1：4、瓦は 1：8）……47
図 56　00A 区・62D 区出土土器・陶磁器・瓦（1：4、瓦は 1：8）……48
図 57　62D 区出土土器・陶磁器（1：4）…50
図 58　62D 区出土土器・陶磁器・瓦（1：4、瓦は 1：8）……51
図 59　62D 区・63D 区・00B 区出土土器・陶磁器（1：4）……52
図 60　00B 区出土土器・陶磁器（1：4）…54
図 61　00B 区出土土器・陶磁器（1：4）…56
図 62　00B 区出土土器・陶磁器・瓦（1：4）…58
図 63　00B 区出土土器・陶磁器・瓦（1：4、瓦は 1：8）……59
図 64　00B 区出土土器・陶磁器・瓦（1：4、瓦は 1：8）……61
図 65　00B 区出土土器・陶磁器・瓦（1：4、瓦は 1：8）……62

図 66　00B 区出土土器・陶磁器・瓦
（1：4、瓦は 1：8）……64
図 67　00B 区・01 区出土土器・陶磁器・瓦
（1：4、瓦は 1：8）……65
図 68　01 区・17 区出土土器・陶磁器・瓦
（1：4、瓦は 1：8）……67
図 69　17 区・18 区出土土器・陶磁器（1：4）…68
図 70　18 区出土土器・陶磁器・ガラス製品
（1：4）……70
図 71　18 区出土土器・陶磁器（1：4）……72
図 72　18 区出土土器・陶磁器（1：4）……73
図 73　18 区出土土器・陶磁器・瓦
（1：4、瓦は 1：8）……75
図 74　18 区出土土器・陶磁器（1：4）……76
図 75　18 区出土土器・陶磁器（1：4）……77
図 76　18 区出土土器・陶磁器（1：4）……79
図 77　18 区出土土器（1：4）……80
図 78　18 区出土土器・陶磁器（1：4）……82
図 79　18 区出土土器・陶磁器・瓦
（1：4、瓦は 1：8）……83
図 80　18 区出土土器・陶磁器・瓦
（1：4、瓦は 1：8）……84
図 81　石製品 1（1：4、S-001 ～ S-003 は 1：2）
……86
図 82　石製品 2（1：8）……87
図 83　金属製品 1（1:4、M-004 ～ M-010 は 1:2）
……89
図 84　金属製品 2（1：4）……90
図 85　木製品 1（1：4）……92
図 86　木製品 2（1：4）……93
図 87　木製品 3（1：4）……95
図 88　木製品 4（1：4、W095 は 1：8）…96
図 89　木製品 5（1：4）……98
図 90　木製品 6（1：4）……99
図 91　木製品 7（1：4）……101
図 92　木製品 8（1：4、W-193 は 1：16、
W-201 ～ W203 は 1：8）……102
図 93　木製品 9（1：4、W-210 は 1：8）…103
図 94　木製品 10（1：4）……104
図 95　本報告の金属製品の透過 X 線画像 …110
図 96　報告済の金属製品実測図 ……111
図 97　報告済の金属製品の透過 X 線画像 …112
図 98　報告済のルツボ・銅滴・銅塊実測図 …113
図 99　報告済のルツボ・銅滴・銅塊の
透過 X 線画像 ……114
図 100　金属製品 3119（キセル 吸口）の
分析結果 ……115
図 101　ルツボ 3198 の分析結果 ……116
図 102　17A 区における分析試料採取地点 …118
図 103　17A 区における分析試料の採取状況…118
図 104　18B 区 ,18E 区の地層観察および分析試
料採取地点 ……119
図 105　18B 区南端における東西方向の地層断
面 ……119
図 106　18B 区南端の東西方向地層断面の様子…120
図 107　18E 区北端の遺構 060SD と下位層の東
西地層断面 ……120
図 108　清洲城下町遺跡と周辺地域の等高線図
……123
図 109　清須市 2011 年（平成 23 年）調査地点
……126
図 110　00A 区・62D 区・63D 区・91C 区・
95A 区の遺構変遷（1：500）……130
図 111　62B 区・90Fa 区・91C 区・95B 区 の
遺構変遷（1：500）……132
図 112　90Fa 区～ 90Fc 区・95B 区・清須市
2015 区の遺構変遷（1：500）… 133
図 113　01 区・17A 区・17B 区・18A 区～ 18F
区の城下町Ⅱ -1 期～Ⅲ -1 期の遺構変遷
（1：500）……135
図 114　01 区・17A 区・17B 区・18A 区～ 18F
区の城下町Ⅲ -1 期の遺構変遷
（1：500）……136
図 115　01 区・17A 区・17B 区・18A 区～ 18F
区の城下町Ⅲ -2 期の遺構変遷
（1：500）……137
図 116　63S 区・89D 区・91B 区・18 区の遺構
変遷（1：500）……140
図 117　00B 区 2 面　中世～城下町期の遺構変
遷（1：500）……143
図 118　00B 区の城下町Ⅱ期～Ⅲ -2 期の遺構変
遷（1：500）……143
図 119　名古屋市蓬左文庫所蔵『春日井郡清須村
古城絵図』（中央部分）における 00B 区
の位置……144

図 120　00B 区の調査中の風景（南より、丸の位置が SX04 の位置）……144
図 121　00B 区の船着場の想定（1：5,000）……145
図 122　清洲城下町遺跡出土の黄瀬戸類（1）縮尺 1/6 ……150
図 123　清洲城下町遺跡出土の黄瀬戸類（2）縮尺 1/6 ……151
図 124　清洲城下町遺跡の黄瀬戸・楽系陶器の分布　縮尺 1/10,000 ……152

表 目 次

表 1　木製品・木材の樹種同定結果 ……91
表 2　本報告の金属製品の分析結果 ……110
表 3　報告済の金属製品の分析結果 ……111
表 4　報告済のルツボ・鉄滴・鉄塊の分析結果…113
表 5　17A 区分析試料の放射性炭素年代測定結果 ……122
表 6　18B 区南端、東西方向地層断面の放射性炭素年代測定結果 ……122
表 7　18E 区遺構 060SD から採取した分析試料の放射性炭素年代測定結果 ……122
表 8　清須市 2011 年調査地点試料の放射性炭素年代測定結果調査区 1tr. 地点 1 ……125
表 9　18 区の遺構変遷 ……139
表 10　清洲城下町遺跡出土の茶陶類（1）…153
表 11　清洲城下町遺跡出土の茶陶類（2）…154
表 12　清洲城下町遺跡出土の茶陶類（3）…155
表 13　清洲城下町遺跡出土の茶陶類（4）…156

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

清洲城下町遺跡は愛知県清須市に所在する遺跡で、旧西春日井郡清洲町を中心として、春日町・新川町に広がる遺跡である（図１、県遺跡番号21002）。各事業者より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた愛知県埋蔵文化財センターによる発掘調査は、名古屋第二環状自動車道(一般国道302号)建設、五条川河川改修事業、県道新川清洲線建設、県道西市場助七線建設にともない、昭和57年度より平成23年度にかけて継続的に実施されてきており、その総面積は約91,000㎡に及ぶ。また、これらの調査に並行して清洲町教育委員会、その後の清須市教育委員会などによる発掘調査も実施されている(図２)。

本書において報告するのは、総合治水対策特定河川事業に伴う事前調査として、愛知県建設局河川課尾張建設事務所より愛知県県民文化局を通じて委託を受けた公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが調査を実施した部分のものである。調査期間と調査面積は平成12年度が平成12年12月～平成13年３月で調査面積が1,800㎡、平成13年度が平成14年１月～平成14年２月で1,000㎡、平成29年度が平成29年７月～平成29年９月で調査面積は320㎡、平成30年度が平成30年６月～平成30年10月で調査面積は1,280㎡である。

第２節　調査の方法

調査は、愛知県建設局河川課と愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センターの立会いのもと調査区の現地確認を行い、その後調査区を設定して表土掘削、調査区の地層確認後遺物包含層の掘削を行い、遺構検出を行った。遺構検出後は検出状況の写真撮影、遺構の簡易測量、遺構掘削と作業を進め、必要に応じて遺構断面の地層確認・観察、その写真撮影、遺物の出土状況の観察、写真撮影、これらに伴う測量を行い、遺構掘削が大略完了後清掃を行い、ラジコンヘリコプター及びドローンによる全景写真撮影を行った。その前後には個別の遺構の写真撮影も行っている。調査区全景の写真撮影後は調査区壁面などの補足調査を行い、随時埋め戻しを行い、調査を完了した。

調査区は、平成29年度の17A区・17B区を除く平成12年度の00A区と00B区、平成13年度の01区、平成18年度の18A区～18F区は五条川の河川敷の地点にあたる（図２）。平成12年度の調査では、五条川の水位が低い冬季にも関わらず、表土掘削を行い遺構検出面から遺構掘削進める中で、五条川の干満による水位の影響を受けた。その為、00A区・00B区の壁面の地層確認では、壁面の下部が湧水により崩れて、確認ができなかった部分もあり、00A区のSX8001の調査では、名古屋港の満潮・干潮の時間を確認して遺構掘削を行わなければならな

図１　清洲城下町遺跡の位置

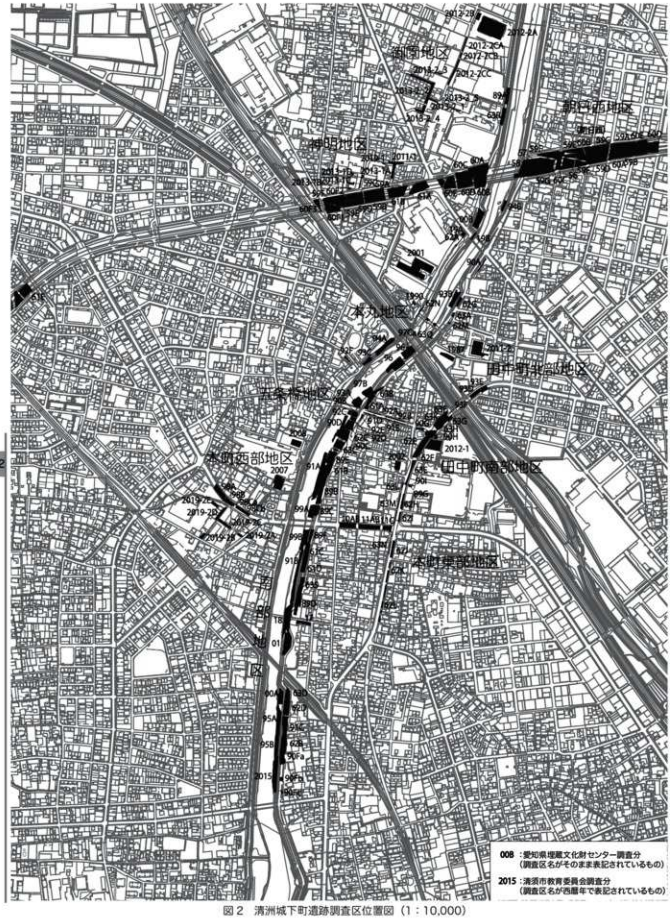


図２　清洲城下町遺跡調査区位置図（1：10,000）

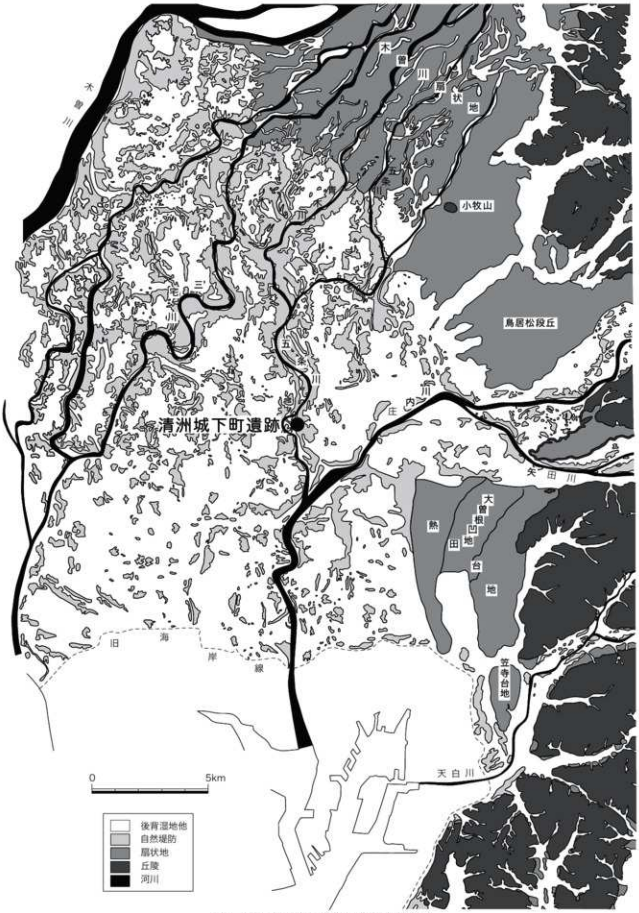


図3　清洲城下町遺跡の立地（1：100,000）

かった。また、17B区の060SEでは、河川敷から離れていたが、夏季の調査であったこともあり、湧水のため井戸の下端を確認することができなかった。一方で、夏季の調査となった18A区～18F区では、井戸や溝の遺構掘削において基盤の黄灰色細粒砂～中粒砂の深さまで掘っても湧水はなかった。この地点の調査では、猛暑であったために遺構埋土であるシルト層の水分が抜けてスコップの先が入らない程固結して、調査には困難を極めた。また降雨による雨量が増加した時や先に述べた満潮時の五条川の水位が高い時には、調査区全体が冠水状態となり、上流側からの土砂により遺構面が埋没することがあった。このような調査環境であったため、降雨や調査区全体の冠水後の遺構面が柔らかい時点で遺構検出を実施したり、五条川の水位の低い時間に深い遺構の掘削を行うなどの作業工程の工面もした。

尚、発掘調査は平成12年度が朝日航洋株式会社、平成13年度が株式会社人間文化都市研究所、平成29年度が株式会社波多野組、平成30年度が株式会社アコードの支援を受けて行なった。

調査に伴う整理作業は、遺構図は発掘調査時において測量を行った後に順次製図・校正作業を行い、DXF形式で遺構平面図・遺構断面図・基本土層図などを作成した。出土遺物については、遺物の洗浄と乾燥までの一次整理を各発掘調査現場の事務所にて行い、遺物の分類、接合と復元作業とその後の実測作業、写真撮影、遺物の登録作業は、愛知県埋蔵文化財調査センターにて、平成30年度から令和元年度に実施した。

遺構図のデジタルトレースと座標変換作業は株式会社アコード（平成30年度・令和元年度）に、遺構図版編集作成・地形等高線図デジタルトレースを国際文化財株式会社（令和元年度）に、地籍図のデジタルトレースは株式会社知立造園（平成30年度）に委託し、蔭山・鬼頭が校正した。出土遺物の実測・デジタルトレースは株式会社文化財サービス（平成30年度）と株式会社アルカ（令和元年度）に、遺物の保存処理は株式会社東都文化財研究所（平成30年度・令和元年度）に、金属関連資料の分析は日鉄住金テクノリサーチ株式会社（平成30年度・令和元年度）に、樹種同定と動物遺体同定分析は株式会社パレオ・ラボ（平成30年度）に委託して実施した。

第3節　地理・歴史的環境

清洲城下町遺跡（図4-1）は、濃尾平野の氾濫原地帯に立地し、平野を流れる五条川の両岸に形成された自然堤防とその後背湿地上に展開している（図3）。

本遺跡周辺では北東に隣接して朝日遺跡（図4-2）、東に隣接して西田中遺跡（図4-6）があり、西に隣接して廻間遺跡（図4-3）、土田遺跡（図4-5）、松ノ木遺跡（図4-4）が分布する。現在までの調査成果などからは、縄文時代後期における朝日遺跡の竪穴状遺構と貯蔵穴と思われる土坑などが最古のもので、朝日遺跡を流れる自然流路付近に最古の営みが認められる。その後、弥生時代前期には現在のあいち朝日遺跡ミュージアムのある貝殻山地点に環濠集落が築かれ、水田稲作を伴う弥生文化が始まったことが知られる。続く弥生時代中期には尾張地域の拠点集落として自然河道の南北に幾重にもめぐる大規模な環壕が掘削され、北集落の環壕には逆茂木や乱杭による防禦施設を伴うことは日本の歴史上でも大きな発掘調査成果である。また同時期には、首長墓として想定される大型の方形周溝墓をはじめとする墓域の形成、環壕内に帯重なるように検出された大小の竪穴建物はまさに日本の都市の成立を考える上で貴重な調査成果となっている。清洲城下町遺跡の田中町地区においても弥生土器が出土する地点が知られ、弥生時代中期後葉に集落の存在が想定される。同時期の周囲の遺跡では西南西約1.3km に阿弥陀寺遺跡（図4-12）、南西2.0km にある大洲遺跡（図4-13）があり、阿弥陀寺遺跡では三重に巡る環壕とその集落が調査されている。朝日遺跡近郊に営まれたこれらの遺跡の調査成果は、弥生時代の社会を考える上で貴重な成果となっている。

弥生時代後期には埋納銅鐸をはじめとする青銅器が発見されている朝日遺跡では引き続き環濠集落が営まれるが、その他の遺跡では遺構・遺物が見つかっていない。

弥生時代後期末から古墳時代前期にかけて清洲城下町遺跡周辺の廻間遺跡や土田遺跡では集落が営まれ、廻間遺跡では前方後方形の墳墓が確認されている。

古墳時代後期から平安時代には、清洲城下町遺跡の田中町地区を中心として竪穴建物や溝、土坑などからなる集落が営まれ、平安時代後期以後には本遺跡の北東にあたる朝日西地区（朝

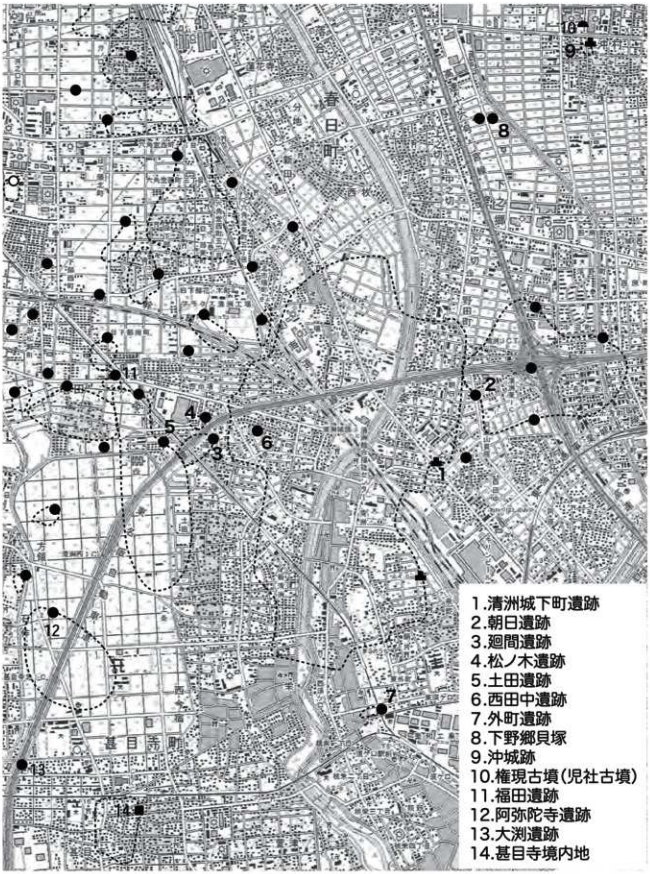


図4　周辺の遺跡（1：25,000）

日西遺跡）において、溝や土坑などからなる集落が確認されている。そして平安時代末には先に述べた土田遺跡や本遺跡の田中町地区などにおいて、中世に続く集落の形成が開始され、鎌倉時代から室町時代を通じて継続する。関連する資料としては本遺跡の南東に所在する日吉神社が古代に遡る伝承を伝え、貞治3（1364）年の『神鳳抄』にみる「清須御厨」は本遺跡との関連が想起されるところである。

また、近年江戸時代前期に描かれた名古屋市蓬左文庫所蔵『春日井郡清須村古城図絵』と発掘調査成果や遺跡分布、明治17年作成の愛知県公文書館所蔵『地籍字分全図』の解析、現在の都市計画図を用いた表層地形の解析により、弥生時代から江戸時代にかけての清須市周辺の自然河川の変遷についての検討が進められた（鬼頭2013、蔭山・鈴木2013など）。旧五条川の河道の大きな変化としては、弥生時代に清洲城下町遺跡の北東にある朝日遺跡の中を流れていた河道が、古墳時代～古代には清洲城下町遺跡と朝日遺跡の間を北東から南西に流れるようになり、古代以後に名古屋市蓬左文庫所蔵『春日井郡清須村古城図絵』に描かれた清須川の流路に移っていくことが指摘されている（図5）。

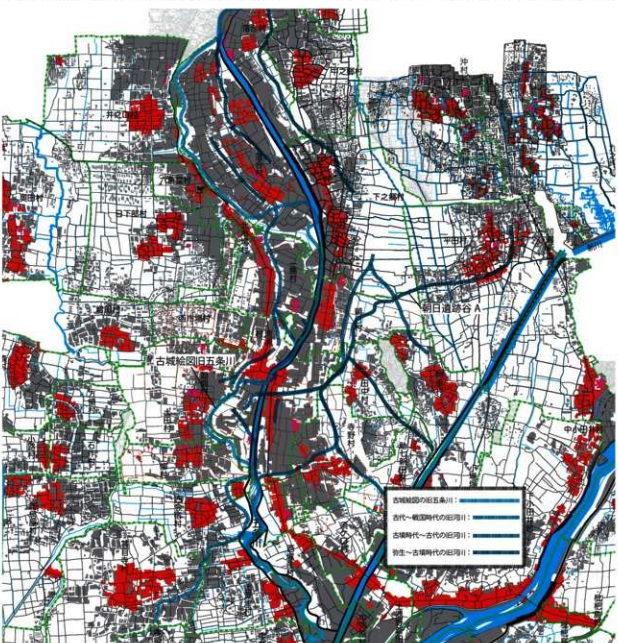


図5　清洲城下町遺跡に関わる旧河道（約1：40,000）

清洲城下町遺跡とその周辺を流れる河道の変遷は、遺跡の歴史や景観などと密接に関わる重要なテーマである。

清須城の沿革は、応永 12(1405) 年頃に室町幕府管領で尾張守護職であった斯波義重が下津城の別郭として築城したと伝えられるが、本格的な城郭と城下町の形成は文明 8(1476) 年に守護代織田敏定が清須に守護所を構えてからのことと思われる。弘治元 (1555) 年、那古野城にあった織田信長は清須城を攻略、織田信友を切腹させ清須城に入城した。信長は、永禄 2 (1559) 年 に岩倉織田家も打倒、永禄 3 (1560) 年には桶狭間の戦いで今川勢に勝利、永禄 4 (1561) 年に尾張守護斯波義銀を追放し、尾張一国を統一した。永禄 6 (1563) 年に小牧城しが行われるが、その後も清須城は織田信忠、織田信雄、豊臣秀次、福島正則、松平忠吉、徳川義直が城主となった。天正 12(1584) 年には清須会議が行われる重要な位置にあり、天正 14(1586) 年の大改修を経て尾張随一の戦略上の重要な都市として機能し続けた。大改修によって清須城は、天守閣、小天守、書院が築造され、内堀・中堀・外堀の三重の堀を構え、城下町の範囲は南北約 2.7km、東西約 1.5km に及ぶ。

慶長 15(1610) 年に名古屋築城が開始されると、清須城と城下町の移転が進行した（清須越し）。元和 2(1616) 年には、美濃街道の宿場として清須宿が設置され、清須は尾張三宿として繁栄した。

第４節　清洲城下町遺跡の時期区分

清洲城下町遺跡の愛知県埋蔵文化財センターによる発掘調査報告も 11 報告となり、近年の発掘調査では、鈴木正貴による『清洲城下町遺跡Ⅴ』に報告された戦国時代の出土遺物について設定された 3 期 6 段階区分（鈴木 1995）が指標とされている（図 6）。その内容は、清洲城下町遺跡における多様な出土遺物の中で、主要となる土師器皿、土師器鍋・釜、瀬戸美濃窯産陶器椀・皿・擂鉢の型式分類と『清洲城下町遺跡Ⅳ』において報告された主要な遺構などの出土遺物の組成などをもとに時期設定がなされたものであった。この編年は、清洲城下町遺跡の遺構変遷とも深く関連しており、その中にある遺跡固有の年代として、「①遺跡の本格的開始を守護所移転の 1478 年に当てること（城下町Ⅰ期の開始を 1478 年とする）、②遺跡の終末を清須越し完了の 1613 年に当てること（城下町Ⅲ期の終末を 1613 年とする）、③遺跡全体を包括する総構え構築を織田信雄の清須入城に当てること（城下町期Ⅱ期とⅢ期の境界を 1586 年とする）」が述べられている。

この清洲城下町遺跡の時期区分は、瀬戸・美濃産陶器の戦国時代の大窯編年と江戸時代の登窯編年とも一定の対応があり（藤澤 1993）、遺跡の画期を遺跡の開始と終末、天正 14 年の織田信雄の清須入城の総構え構築、瓦葺き建物の近世城郭・城下町につながる画期として捉えた点で、遺跡理解の発展に大きく寄与しており、今日に至る。しかし、遺物からみた画期の設定について述べられたように、この編年が遺構の時期を決定する際に全遺跡的な統一基準をあらかじめ設けるために瀬戸美濃窯陶器を主体に設定されたものであること、6 小期を 3 期に大別した理由としてある清洲城下町遺跡の遺構で、比較的容易に認められる段階が城下町期Ⅰ期と城下町Ⅲ期であり、城下町Ⅱ期の様相が明確でないために、暫定的な大別を行ったとされている [1]。城下町Ⅱ期の状況は、織田信長による小牧城・城下町の建築と移転による影響があるものとも考えられる。

以上の出土遺物の編年と遺構の時期区分を基に、本報告を行う。

早野浩二編 2005『清洲城下町遺跡Ⅸ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 131 集、財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴編 2013『清洲城下町遺跡Ⅺ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 183 集、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
鬼頭 剛 2013「清洲城下町遺跡周辺の地形解析と五条川の流路について」『清洲城下町遺跡Ⅺ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 131 集、財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
澁山誠一・鈴木正貴 2013「清須における河川跡の研究」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第 14 号、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴 1995「第Ⅸ章 考察 第 1 節 清須城下町の遺物様相」『清洲城下町遺跡Ⅴ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 54 集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
藤澤良祐 1993『瀬戸市史陶磁史篇四』
註 (1) 近年では、鈴木正貴によるにより城下町Ⅱ期の出土遺物についての再検討がある。鈴木正貴編 2013「第 5 章 考察・総括 第 1 節 城下町期における土師器の編年・第 2 節 城下町期の瀬戸・美濃窯産陶器」『清洲城下町遺跡Ⅺ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 183 集、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター センター 愛知県埋蔵文化財センター

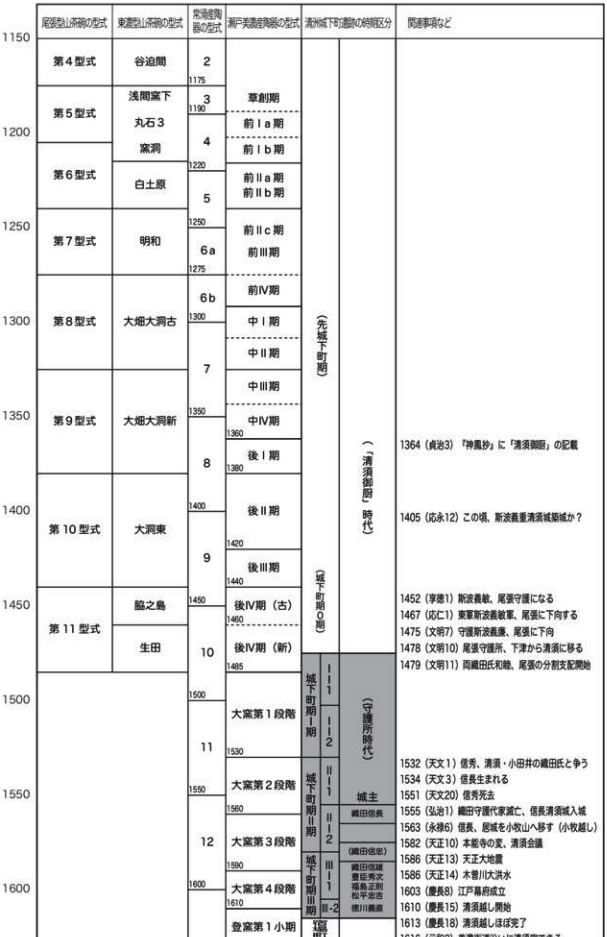


図6　清洲城下町遺跡の時期区分（早野浩二編 2005『清洲城下町遺跡Ⅸ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第131集、財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センターより転載）

第２章　遺　構

第１節　層序

本報告に関わる調査地点が清洲城下町遺跡の北側に位置する御園地区（00B 区）と遺跡の南側に位置する南部地区（00A 区･01 区･17A 区･17B 区・18A 区～ 18F 区）に分かれる。

御園地区にある 00B 区は、現五条川西岸堤防から河川敷に降りた部分にある。調査区の西端が標高 4.0m 前後、東端が標高 3.5m 前後と西側の堤防から東側の五条川にかけて地表面が下る地形で、現在に近い整地と考えられる攪乱層と五条川の現在の護岸の整地層と考えられる攪乱層を除くと、調査区西端部では南北に伸びる堤状の SX01 が確認でき、また遺構こそ確認できなかったが、標高 3.50m 前後の面で江戸時代に描かれた名古屋市蓬左文庫所蔵『春日井郡清須村古城絵図』に描かれている姿の遺構面にあたるものと考えられた。遺跡埋土は色調が褐灰色・褐色・黄褐色・にぶい黄褐色・オリーブ褐色・暗灰黄色・黄灰色・灰黄色・灰色・灰白色など多岐にわたり、シルトから砂質シルトを主体とするもの、細粒砂・中粒砂・粗粒砂を主体とするものがあり、これらが斑土状になるものと葉理状に薄い互層になるものがある。人為的な遺構の埋土では単一の土に見えても斑土状になっており、自然堆積がある遺構の埋土では葉理状の薄い互層がみられる。全体には遺跡の上層では褐色や黄褐色、にぶい黄褐色などの酸化色で赤味のある色調、下層では灰色や暗灰黄色、黄灰色などの還元された青みのある色調が多くなる傾向にあるが、この調査区の地山となる下層の自然流路においても比較的酸化色の褐色シルト・砂質シルトもみられることから、一様ではない。

南部地区にある 00A 区・01 区・18A 区～ 18F 区は、現五条川東岸堤防から河川敷に降りた部分にある。地表面の高さは 00A 区が標高 2.8m ～ 2.9m 前後、01 区が標高 2.0m ～ 3.0m、18A 区～ 18F 区は調査前の船杁橋の工事により､遺構検出面の上位に当たる標高 2.0m であった。17A 区・17B 区は現五条川東岸堤防から東にある民家に囲まれた宅地にあたり、調査区の西端が標高 4.0m 前後、東端が標高 3.5m 前後と西側の堤防から東側の五条川にかけて地表面が下る地形である。

地表面と遺構検出面の間には、17A 区・17B 区では近代以後の水田耕作土（灰色・暗灰黄色・灰オリーブ色・明褐色の砂質シルト・シルトなどの斑土）や道路建設に伴う盛り土が、00A 区には江戸時代中期～後期にかけての五条川東岸堤防の盛り土と思われる地層がみられる。これらの盛り土は、灰白色の細粒砂～粗粒砂、黄褐色や灰黄褐色、オリーブ黒色、にぶい黄褐色などの色調のシルトや粘土の斑土からなる。

遺構検出面は、00A 区が標高 1.50m ～ 1.95m、01 区が標高 1.50m ～ 1.85m、17A 区･17B 区が標高 1.80m ～ 1.85m、18A 区～ 18F 区は標高 1.60m ～ 2.00m の高さで、各調査区において戦国時代末～江戸時代前期の遺構が確認できた。

基盤砂層と考えられる明褐色や灰白色、灰色、灰黄色、明黄褐色、黄褐色、褐色、灰オリーブ色などの色調をもつ細粒砂～粗粒砂層の上面の高さは 00A 区で標高 1.60m、01 区で標高 0.90m ～ 1.20m、17A 区・17B 区で標高 1.80m、18A 区～ 18F 区で標高 1.50m 前後となり、17A 区の西側では基盤砂層の上に灰オリーブ色砂混じりシルトが堆積しており、18A 区～ 18F 区では、遺構検出面と基盤砂層の間に上方へ細粒化する褐色～にぶい黄褐色シルト混じり細粒砂からにぶい黄褐色シルト、遺構検出面となるにぶい黄褐色粘土質シルトや黄褐色粘土の地層がみられる。

遺構埋土は 00B 区と同様で、色調が褐灰色・褐色・黄褐色・にぶい黄褐色・オリーブ褐色・暗灰黄色・黄灰色・灰黄色・灰色・灰白色など多岐にわたり、砂質シルトからシルトを主体とするものがほとんどである。基盤砂層の一部を掘り込む遺構では、その砂が全体に混じるもの、ブロック状に入るもの、シルト層と互層に入るものがみられた。

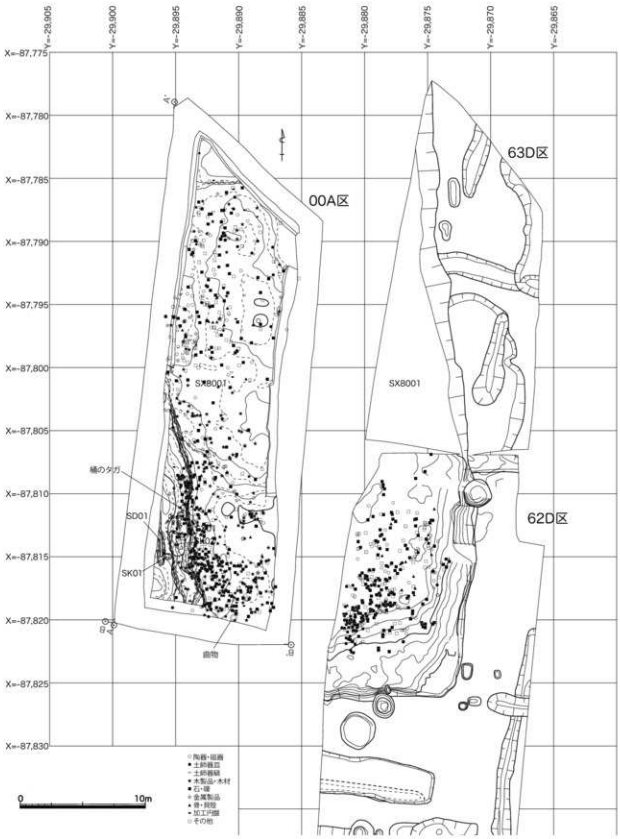


図７　00A 区遺構平面図（1：300）

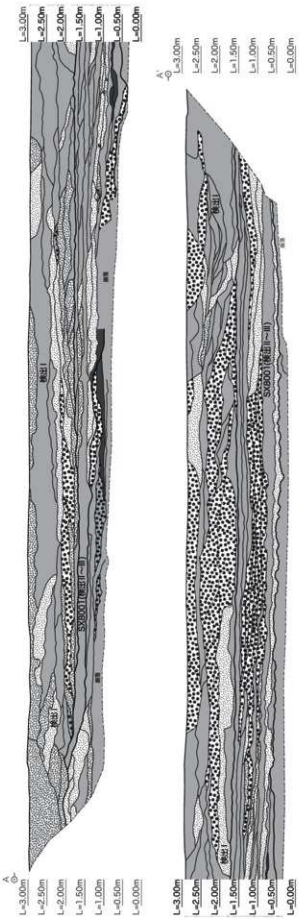
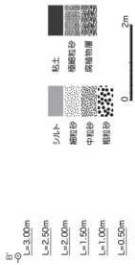


図８　00A区西壁土層図（1:100）



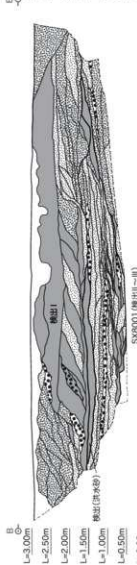


図９　00A区南壁土層図（1:100）

第２節　00A 区・01 区・17A 区・17B 区・18A 区～ 18F 区（南部地区）

（1）00A 区（図７～図 9）

大型の土坑 SX8001、柱穴状の土坑２基、溝１条を確認した。SX8001 は東に隣接する 62D 区・63D 区において確認されている城下町期Ⅲ-2 期の SX8001 の西側部分にあたる。清洲城下町遺跡Ⅳ報告において土坑Ⅲ類（比較的大規模で、平面プランが方形または長方形を基準とした形態となるもの。）とされたもので、東西 22.5m、南北 45m 以上、深さ 1.3m ～ 1.45m を測る。全体の堆積状況では、上層の 0.30m ～ 0.40m 程がシルト層、中層の 0.50m ～ 0.70m 程が細粒砂～粗粒砂層、下層に 0.10m 程のシルト層、最下層に 0.10m 程の細粒砂層と続く。遺構検出に伴う上層の上側の掘削を検出１、上層の下側と中層を検出２、下層と最下層を主に検出３にて掘削した。詳細は出土遺物の項で述べるが、層序による出土遺物の時期差や種類の差は見られなかった。出土遺物は陶器・磁器、土師器皿・鍋、木製品・木材、石製品・礫、金属製品、骨・貝殻、加工円盤、その他にわけて個別で取り上げができたものを図７に表した。遺物の出土状況は 62D 区の西側から 00A 区の南西側にかけてが集中しており、00A 区の北側 62D 区の北側にかけて少なくなり、63D 区にかかる遺構の北東側は少ない状況があり、遺物は遺構の南西側を中心に廃棄されたものと考えられる。遺構の軸線は N-8°-W となり、62D 区・63D 区で確認されている溝の軸線 N-10°-E とは異なり、遺構の前後関係も不明である。00A 区の 8001SX の外になる部分に軸線を同じくする幅 0.70m 前後の溝 SD01 があり、その東に隣接して径 0.50m 前後の土坑 SK01 と SX8001 の中にある長軸 2.21m、短軸 1.22m、深さ 0.2m の土坑 SK02 があり、その北に西肩から中位に残る南北の石列 SX01 が見られた。SX01 は長径 0.1m ～ 0.4m 程の 20 個前後の亞角礫～亞円礫が長さ 1.5m にわたり並ぶもので、SX8001 には石積みが存在した可能性がある。

（2）01 区（図 10・図 11）

00A 区の北 85m にある調査区で、北側は 18A 区・18C 区と接する。溝４条、土坑 10 基、不明落ち込み１基がある。調査区中央からやや南に東西方向の溝３条 SD01 ～ SD03 があり、北側の SD01 から SD02、南側の SD03 への前後関係がみられるが、出土遺物より SD01 ～ SD03 の時期は城下町Ⅲ-1 期と考えられる。SD01 は幅 2.60m、深さ 0.52m、SD02 は幅 2.60m 以上、深さ 0.38m、SD03 は幅 6.40m、深さ 0.32m を測り、溝の軸線は SD01 と SD02 が N-85°-E、SD03 が N-17°-W で検出状況にもよるが、最も新しい SD03 が南東に振れる軸線をもつ。埋土は SD01 が極細粒砂～シルト、SD02 がやや細粒砂を混じるシルト、SD03 がシルトを主体に極細粒砂層が互層になる状況が観察された。SD03 は大窯第３段階～大窯第４新段階の瀬戸・美濃産陶器の他に常滑産陶器甕・鉢、土師器ロクロ皿と柿経の木簡・卒塔婆が出土し、柿経や卒塔婆の出土から付近にあった寺院・墓地に関係する区画の可能性がある。SD04 は北に隣接する 18 区 043NR と関連する遺構と思われる。

SD03 の南東に隣接する SK01 は長軸 2.20m 以上、短軸 1.68m、深さ 0.31m を測る平面楕円形の土坑で、城下町Ⅲ-2 期のものである。

（3）17A 区・17B 区（図 12 ～図 20）

18E 区の東 15m に位置する調査区で、溝３条、井戸１基、土坑 42 基、柱穴６基自然流路１条を確認した。溝と自然流路、井戸、土坑は重複しているものがあり、遺構検出面の上面にて 033SD と 039SD と溝から外れる位置にて土坑や柱穴を確認した。溝と自然流路はおおよそ重複しており、17B 区の北東側から西に折れて流れる軸線をもち、033SD と 063NR の間層として灰オリーブ色～明褐色の細粒砂～中粒砂があるが、033SD と 039SD・042SD は溝の軌道と埋土の色調の違いから主に区別した。主な遺構の前後関係は古い方から 063NR → 042SD → 039SD、063NR → 060SE → 039SD → 033SD を確認した。出土遺物では、063NR が瀬戸・美濃産陶器大窯第１段階～大窯第２段階のものと土師器非ロクロ成形小皿２類と３類のものが出土し、060SE が瀬戸・美濃産陶器大窯第３段階～大窯

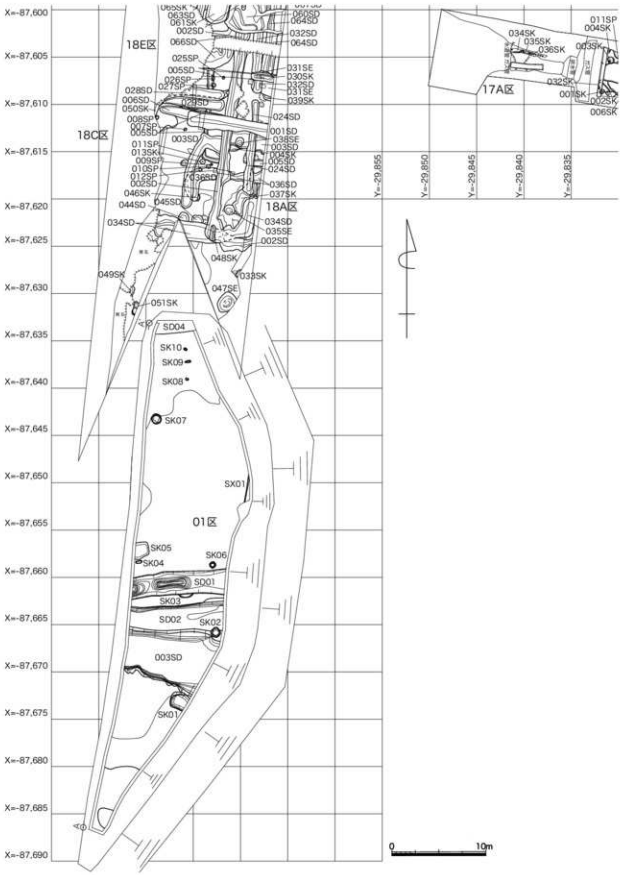
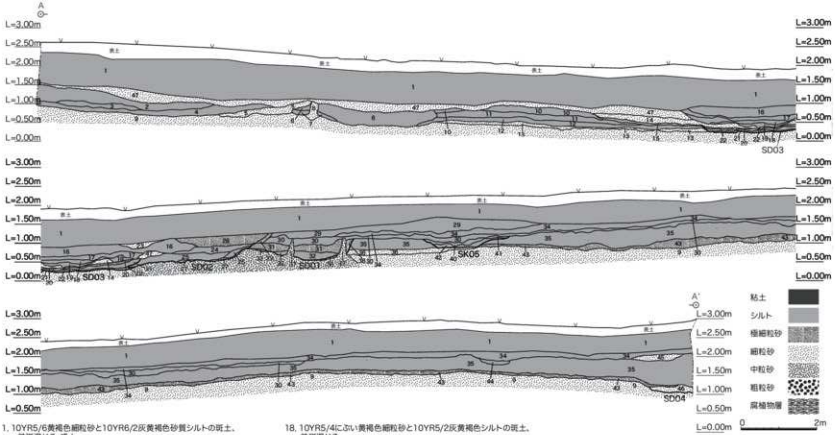


図10　01区遺構平面図（1:400）



1. 10YR5/6黄褐色細粒砂と10YR6/2灰黄褐色砂質シルトの斑土。鉄斑混じる、盛土
2. 10YR6/6明黄褐色細粒砂と10YR5/2灰黄褐色シルトの斑土、鉄斑混じる
3. 10YR5/1褐灰色砂質シルト、10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトが混じる、鉄斑混じる
4. 10YR4/1褐灰色砂質シルト、鉄斑混じる
5. 2.5YB/2灰白色細粒砂、2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトが混じる、鉄斑混じる
6. 10YR5/1褐灰色砂質シルト、10YR6/3にぶい黄褐色細粒砂が混じる、鉄斑混じる
7. 10YR5/1褐灰色砂質シルト、鉄斑混じる
8. 10YR8/2灰白色細粒砂(鐵砂?)
9. 10YR8/2灰白色細粒砂
10. 2.5Y5/3黄褐色シルト、鉄斑混じる
11. 10YR5/2灰黄褐色シルト、鉄斑とマンガン斑混じる
12. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト、鉄斑混じる
13. 10YR6/2灰黄褐色極細粒砂、鉄斑混じる
14. 2.5Y7/2灰黄色細粒砂、10YR5/1黄灰色シルトが混じる、鉄斑混じる
15. 10YR3/1黒褐色シルト、10YR5/1黄灰色シルトが混じる、鉄斑混じる
16. 10YR6/2灰黄褐色砂質シルト、鉄斑混じる
17. 10YR6/3にぶい黄褐色シルト質極細粒砂、鉄斑混じる
18. 10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂と10YR5/2灰黄褐色シルトの斑土、鉄斑混じる
19. 10YR5/1褐灰色砂質シルト、鉄斑混じる
20. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂、10YR6/1褐灰色細粒砂が混じる、鉄斑混じる(SD03)
21. 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト、鉄斑混じる(SD03)
22. 2.5Y5/1黄灰色シルト、鉄斑とマンガン斑混じる(SD03)
23. 2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂、鉄斑混じる(炭丸?)
24. 10YR5/1褐灰色シルト、10YR5/2灰黄褐色細粒砂が混じる、鉄斑混じる(SD02)
25. 10YR4/1褐灰色シルト、鉄斑混じる(SD02)
26. 10YR5/2灰黄褐色シルト、10YR6/2灰黄褐色細粒砂が混じる、鉄斑混じる(SD02)
27. 10YR4/2灰黄褐色シルト、10YR6/2灰黄褐色細粒砂が混じる、鉄斑混じる(SD02)
28. 2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂、鉄斑混じる(炭丸?)
29. 10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト、鉄斑混じる
30. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト、鉄斑混じる
31. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂、10YR5/1褐灰色砂質シルトが混じる、鉄斑混じる(SD01)
32. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト、鉄斑混じる(SD01)
33. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂と10YR5/1褐灰色砂質シルトの斑土、鉄斑混じる(SD01)
34. 10-YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト、10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂が混じる、鉄斑混じる
35. 10YR5/4にぶい黄褐色シルト、10YR6/2灰黄褐色シルトが混じる
36. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂、鉄斑混じる
37. 10YR5/3にぶい黄褐色中粒砂(鐵砂)
38. 10YR4/4褐色極細粒砂、鉄斑混じる(SD01)
39. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂、鉄斑混じる
40. 10YR5/2灰黄褐色シルト、鉄斑混じる
41. 10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト、鉄斑とマンガン斑混じる(SK05)
42. 10YR5/3にぶい黄褐色シルト、鉄斑とマンガン斑混じる(SK05)
43. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト質極細粒砂、鉄斑混じる(SK05)
44. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト、鉄斑混じる
45. 10YR4/4褐色極細粒砂、10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルトが混じる、鉄斑混じる
46. 10YR5/2灰黄褐色極細粒砂、10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂が混じる、鉄斑混じる(SD04)
47. 10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂(盛土)

図11　01区東壁トレンチ土層図（1:100）

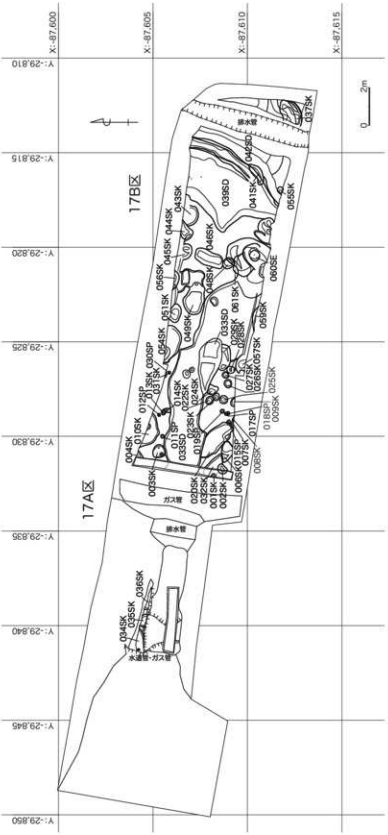
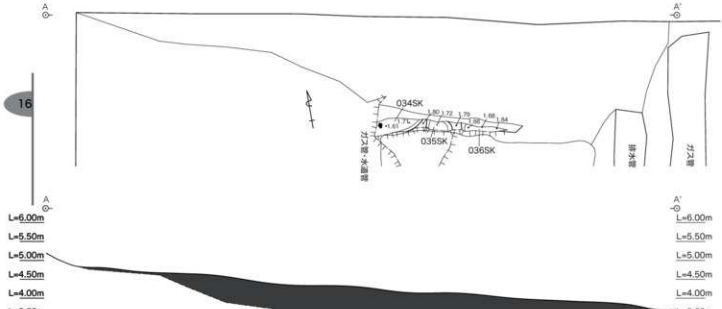


図12　17A区・17B区遺構平面図（1:200）

第４段階前半のものと土師器非ロクロ成形小皿３類のものが出土し、042SD から土師器非ロクロ成形小皿１類のもの、039SD から土師器非ロクロ成形小皿１類のものが出土し、033SD から清洲城軒平瓦、瀬戸・美濃産陶器大窯第１段階～大窯第２段階のものと土師器非ロクロ成形小皿３類のものが出土しており、おおよそ城下町Ⅱ－２期～城下町Ⅲ－２期の遺構変遷をたどることができる。033SD は幅 2m ～ 3m、深さ 0.15m の断面皿状の溝で、17A 区と 17B 区の境部で溝の南肩に平面雫形で、長軸 2.8m、短軸 1.1m、深さ 0.35m 程の土坑状に落ち込む部分が見られた。033SD は N-80°-W 前後の軸線をもち、調査区北壁の観察からは、溝の南東隅から北に折れて北北東へ伸びるものと考えられた。039SD と 042SD は調査区北東隅部から西に折れて流れる溝と思われ、039SD が幅 3.39m、深さ 0.30m で南側にてやや細くなる。042SD は 039SD より東側を流れ、幅 4.77m、深さ 0.46m を測る。042SD の南東肩部にて平面楕円形の 037SK を上面にて検出した、土師器ロクロ成形皿２類が出土しており、城下町Ⅱ-2 期以後の土坑の可能性がある。

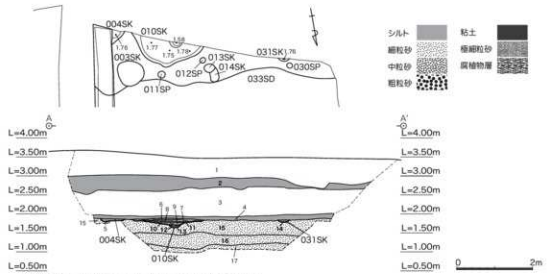
060SE は径 1.31m、深さ 0.73m で、遺構の下部に結桶が残っており、標高 1.00m 付近で湧水のため、最下端を確認できなかった。

020SK は平面楕円形で丸底の土坑で、長軸 2.38m、短軸 0.92m、深さ 0.18m を測る、青磁皿と土師器非ロクロ成形小皿２類が出土しており、033SD より古い遺構である。034SK は 17A 区の北壁際に検出された長軸 1.19m 以上、



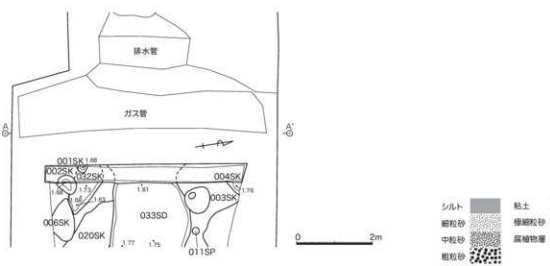
1. 10YR5/4にぶい黄褐色砂質粘土、多量の礫含有、地表は砂石(表土)
2. ガス・水道管埋土
3. 5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト、礫・現代ゴミ廃材含有(表土)
4. 排水管埋土
5. 10YR7/1灰白色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂、円礫・現代ゴミ含有(表土)
6. 7.5YR5/6明褐色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂、円礫・現代ゴミ含有(攪乱)
7. 2.5Y5/1黄灰色シルト、下部に5YR5/6明赤褐色の離化鉄重中、炭化物を含む(検出1-旧水田耕作土)
8. 7.5Y4/1灰色砂質シルトと5Y5/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(034SK)
9. 5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(035SK)
10. 5YR4/6赤褐色砂質シルトと5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土(036SK)
11. 5Y5/2灰オリーブ色砂混じりシルト(基盤砂層)
12. 7.5Y6/2灰オリーブ色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂(基盤砂層)

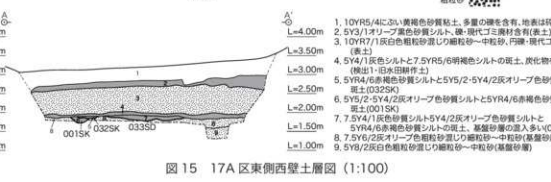
図 13　17A 区西側北壁土層図（1:100）



1. 10YR5/4にぶい黄褐色砂質粘土、多量の礫含有、地表は砕石(表土)
2. 5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト、礫・現代ゴミ爽材含有(表土)
3. 10YR7/1灰白色と2.5Y4/2褐灰黄色と7.5YR5/6明褐色砂、粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂、円礫・現代ゴミ含有(表土)
4. 5Y4/1灰色シルトと7.5YR5/6明褐色シルトの斑土、炭化物含有(検出1・旧水田耕作土)
5. 5Y5/2・5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(004SK)
6. 5Y4/1灰色砂質シルトと5Y5/2灰オリーブ色砂質シルトと7.5YR5/6明褐色砂質シルトの斑土(010SK)
7. 5YR4/6赤褐色砂質シルトと5YR5/2・5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土(010SK)
8. 5Y5/2・5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土(010SK)
9. 5YR4/6赤褐色砂質シルトと5Y5/2(・5Y4/2)灰オリーブ色砂質シルトの斑土(010SK)
10. 5YR4/6赤褐色砂質シルトと5Y5/2・7.5Y6/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(010SK)
11. 5Y5/2・7.5Y6/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土(010SK)
12. 5Y5/2・5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土(010SK)
13. 5YR4/6赤褐色砂質シルトと5Y5/2・7.5Y6/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(010SK)
14. 5Y5/2・5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(031SK)
15. 7.5Y6/2灰オリーブ色粗粒砂混じりの細粒砂～中粒砂(検出2・基盤砂層)
16. 10Y7/1灰白色-7.5YR5/6明褐色粗粒砂混じりの細～中粒砂、最下部には5GY2/1オリーブ黒色黒雲母濃縮層が10cm前後堆積(検出2・基盤砂層)
17. 7.5Y6/2灰オリーブ色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂(検出2・基盤砂層)

図 14　17A 区東側北壁土層図（1:100）



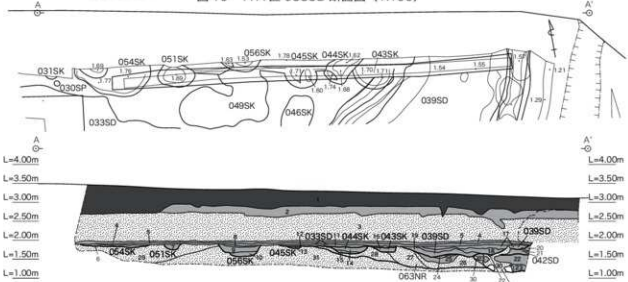


1. 10YR5/4にぶい黄褐色砂質粘土、多量の礫を含有、地表は砕石(表土)
2. 5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト、礫・現代ゴミ爽材含有(表土)
3. 10YR7/1灰白色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂、円礫・現代ゴミ含有(表土)
4. 5Y4/1灰色シルトと7.5YR5/6明褐色シルトの斑土、炭化物を含む(検出1・旧水田耕作土)
5. 5YR4/6赤褐色砂質シルトと5Y5/2・5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土(032SK)
6. 5Y5/2・5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土(001SK)
7. 7.5Y4/1灰色砂質シルト5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(033SD)
8. 7.5Y6/2灰オリーブ色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂(基盤砂層)
9. 5YB/2灰白色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂(基盤砂層)

図 15　17A 区東側西壁土層図（1:100）

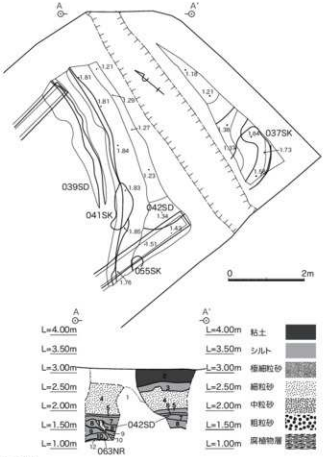
1. 5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6 赤褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層混入多い
1. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルトと2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルトの斑土(033SD)
2. 5Y5/2-5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6 赤褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(033SD)
3. 5Y5/2-5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルトと7.5Y4/1 灰色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(033SD)
4. 7.5Y4/1 灰色砂質シルトと5Y5/2-5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルトの斑土、炭化物を含む、基盤砂層の混入多い(033SD)
5. 5Y5/2 灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6 赤褐色砂質シルトの斑土(029SK)
6. 5Y5/2 灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6 赤褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(029SK)
7. 5Y5/2-5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルト、基盤砂層の混入多い(029SK)
1. 5YR4/6 赤褐色砂質シルトと5Y5/2-5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い
2. 7.5Y7/1 灰白色砂
3. 5Y5/2-5Y4/2 灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6 赤褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い

図 16　17A 区 033SD 断面図（1:100）



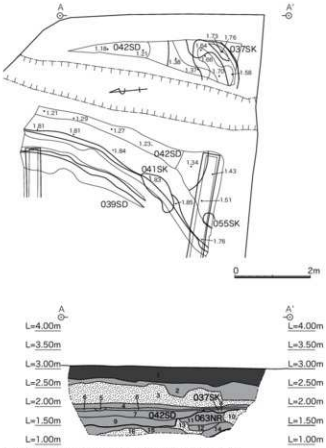
1. 10YR5/4にぶい黄褐色砂質粘土、下部は7.5Y2/1黒色粘質シルト、多量の硬含有、地表は砂石(表土)
2. 5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト、微-現代ゴミ廃材含有(表土)
3. 10YR7/1灰白色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂、円礫-現代ゴミ含有(表土)
4. 5Y4/1灰色シルト と2.5Y4/2暗灰黄色シルトの斑土、炭化物を含む(検出1-旧水田耕作土)
5. 5Y5/2灰オリーブ色砂質シルトと2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトと7.5YR5/6明褐色砂質シルトの斑土(検出1-旧水田耕作土)
6. 5Y5/2灰オリーブ色砂質シルトと5Y4/6赤褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(054SK)
7. 5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルト(051SK)
8. 5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルト(056SK)
9. 5Y3/1オリーブ黒色砂質シルトと5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土、多量の炭化物を含む(056SK)
10. 5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルト、基盤砂層の混入多い(056SK)
11. 5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土(033SDの可能性あり)
12. 5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルト、基盤砂層の混入多い(033SDの可能性あり)
13. 5YR4/6赤褐色砂質シルトと5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(045SK)
14. 5YR4/6赤褐色砂質シルトと5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(044SK)
15. 5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルト、基盤砂層の混入多い(044SK)
16. 5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルト(043SK)
17. 5YR4/6赤褐色砂質シルトと5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土(039SD)
18. 5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(039SD)
19. 7.5Y4/1灰色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土(039SD)
20. 5YR4/6赤褐色砂質シルトと5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土(042SD)
21. 5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(042SD)
22. 7.5Y4/1灰色砂質シルトと7.5YR5/6明褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(063NR)
23. 7.5Y5/1-7.5Y4/1灰色砂質シルトと7.5YR5/6明褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い(063NR)
24. 7.5Y5/1灰色シルト質砂、基盤砂層の混入多い(063NR)
25. 7.5Y4/1灰色砂質シルトと7.5YR5/6明褐色砂質シルトの斑土(063NR)
26. 7.5Y6/2灰オリーブ色砂-5Y8/2灰白色砂混じり10Y4/2オリーブ灰色シルト質砂～7.5YR5/6明褐色シルト質砂(063NR)
27. 7.5Y6/2灰オリーブ色砂-5Y8/2灰白色砂混じり10Y4/2オリーブ灰色シルト質砂～7.5YR5/6明褐色シルト質砂(063NR)
28. 7.5Y6/2灰オリーブ色～7.5YR5/6明褐色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂(063NR)
29. 7.5Y6/2灰オリーブ色～7.5YR5/6明褐色粗粒砂混じり細粒～中粒砂(基盤砂層)
30. 7.5Y6/2灰オリーブ色～7.5YR5/6明褐色粗粒砂混じり細粒～中粒砂(埋砂)
31. 7.5Y6/2灰オリーブ色～7.5YR5/6明褐色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂(基盤砂層)

図 17　17B 区北壁西側土層図（1:100）



1. 雨水管
2. 10YR5/4にぶい黄褐色砂質粘土、下部は7.5Y2/1黒色粘質シルト、多量の礫含有、地表は砂石（表土）
3. 5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト、礫・現代ゴミ痕材含有（表土）
4. 10YR7/1灰白色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂、円礫・現代ゴミ含有（表土）
5. 5Y4/1灰色シルトと2.5Y4/2褐灰黄色シルトの斑土、炭化物を含む（検出1・旧水田耕作土）
6. 5Y5/2灰オリーブ色砂質シルトと7.5YR5/6明褐色砂質シルトの斑土（検出1・旧水田耕作土）
7. 5YR4/6赤褐色砂質シルトと5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土（042SD）
8. 5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い（042SD）
9. 7.5Y4/1灰色砂質シルトと7.5YR5/6明褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い（063NR）
10. 7.5Y5/1-7.5Y4/1灰色砂質シルトと7.5YR5/6明褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い（063NR）
11. 7.5Y6/2灰オリーブ色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂（礫砂）
12. 7.5Y6/2灰オリーブ色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂（基盤砂層）

図 18　17B 区北壁東側土層図（1:100）



1. 10YR5/4にぶい黄褐色砂質粘土、下部は7.5Y2/1黒色粘質シルト、多量の礫含有、地表は砂石（表土）
2. 5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト、礫・現代ゴミ痕材含有（表土）
3. 10YR7/1灰白色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂、円礫・現代ゴミ含有（表土）
4. 5Y4/1灰色シルトと2.5Y4/2褐灰黄色シルトの斑土、炭化物を含む（検出1・旧水田耕作土）
5. 5Y4/1灰色シルトと5Y5/2灰オリーブ色シルトと2.5Y5/2褐灰黄色シルトの斑土
6. 5Y5/2灰オリーブ色砂質シルトと2.5Y5/2褐灰黄色砂質シルトと7.5YR5/6明褐色砂質シルトの斑土（検出1・旧水田耕作土）
7. 5YR4/6赤褐色砂質シルトと5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土（042SD）
8. 5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトと7.5Y3/1オリーブ黒色砂質シルトの斑土、炭化物を含む、基盤砂層の混入多い（037SK）
9. 5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い（042SD）
10. 7.5Y6/2-7.5Y5/2灰オリーブ色シルト質砂と5YR/2灰白色シルト質砂の斑土、基盤砂層との混土（063NR）
11. 7.5Y4/2灰オリーブ色砂質シルト（063NR）
12. 7.5Y4/1灰色～7.5Y4/2灰オリーブ色砂質シルト（063NR）
13. 7.5Y5/2灰オリーブ色シルト質砂、基盤砂層との混土（063NR）
14. 7.5Y4/1灰色砂質シルト、基盤砂層の混入多い（063NR）
15. 7.5Y4/1灰色～7.5YR5/6明褐色砂質シルト、基盤砂層の混入多い（063NR）
16. 7.5Y6/2灰オリーブ色～7.5YR5/6明褐色シルト質砂、基盤砂層との混土（063NR）

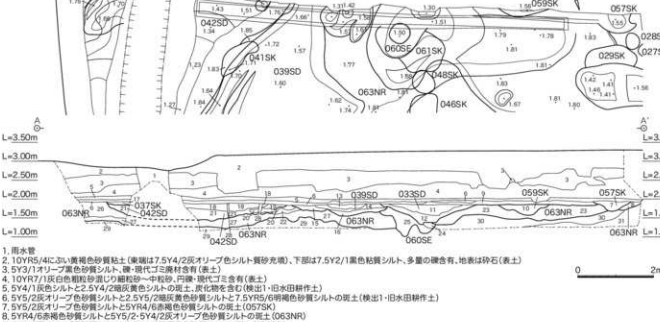
図 19　17B 区東壁土層図（1:100）

短軸 0.38m 以上、深さ 0.21m の平面円形状の土坑で、底部から大窯第２段階～第３段階の擂鉢底部片が出土している。

（4）18A 区～ 18F 区（図 21 ～図 39）

先に述べた 01 区の北に隣接し、17A 区の西 15m にあり、91B 区と 89D 区の南に隣接する。溝 35 条、井戸 7 基、土坑 40 基、自然流路 1 条を確認することができた。検出された遺構は、複数で重複しており、一時期に存在する遺構数は少ない。

溝（SD）は、040SD と 041SD が東西方向で N-11°-W 前後で、他の溝は南北方向のものが N-10°-E 前後、東西方向のものが N-80°-W 前後の軸線をもって掘削されており、複数が重複している。したがって２条の溝がほぼ並行して検出されても、屈曲した位置では重複する場合が多く、道路遺構に伴う側溝としては確認できなかった。溝の幅は、0.30m 程の 18F 区 071SD から 7m 程の 18D 区 017SD までの規模の違いがあり、溝の断面もやや逆三角形状の薬研掘り状のものや逆台形状のものもあるが、おおよそ半円形の丸底のものが多い。溝の規模に



1. 雨水管
2. 10YR5/4にぶい黄褐色砂質粘土（東端は7.5Y4/2灰オリーブ色シルト質砂充填）、下部は7.5Y2/1黒色粘質シルト、多量の礫含有、地表は砕石（表土）
3. 5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト、瓦・現代ゴミ廃材含有（表土）
4. 10YR7/1灰白色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂、円礫・現代ゴミ含有（表土）
5. 5Y4/1灰色シルトと2.5Y4/2暗灰黄色シルトの混土、炭化物を含む（検出1・旧水田耕作土）
6. 5Y5/2灰オリーブ色砂質シルトと2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルトと7.5YR5/6明褐色砂質シルトの斑土（検出1・旧水田耕作土）
7. 5Y5/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土（057SK）
8. 5YR4/6赤褐色砂質シルトと5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土（063NR）
9. 5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトの斑土（033SD）
10. 5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土、炭化物を含む（059SK）
11. 5YR4/6赤褐色砂質シルトと7.5Y4/1灰色砂質シルトと5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土（033SD）
12. 5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと7.5Y4/1灰色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土、炭化物を含む（033SD）
13. 5Y5/2灰オリーブ色砂質シルト（039SD）
14. 5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土（039SD）
15. 5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い（039SD）
16. 7.5Y4/1灰色砂質シルトと5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土、基盤砂層の混入多い（039SD）
17. 5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトと7.5Y3/1オリーブ黒色砂質シルトの斑土、炭化物を含む、基盤砂層の混入多い（037SK）
18. 5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトと2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトと5YR4/6赤褐色砂質シルトの斑土、炭化物を含む（042SD）
19. 5Y5/2-5Y4/2灰オリーブ色シルトと2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトの斑土（042SD）
20. 5Y4/2-7.5Y6/2灰オリーブ色シルト質砂と5YR4/6赤褐色シルト質砂の斑土、基盤砂層の混入多い
21. 7.5Y4/1灰色砂質シルトと7.5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土（042SD）
22. 7.5Y4/1灰色砂質シルトと7.5Y6/2-7.5Y4/2灰オリーブ色砂質シルトの斑土（063NR）
23. 5Y5/2-5Y4/2-7.5Y6/2灰オリーブ色シルト質砂と5Y3/2灰白色シルト質砂と7.5YR5/6明褐色シルト質砂の斑土、基盤砂層との混土（063NR）
24. 5Y5/3灰オリーブ色砂と5Y7/2灰白色砂の斑土、基盤砂層の混入が極めて多い（060SE）
25. 7.5Y4/1灰色砂質シルトと7.5Y3/1オリーブ黒色砂質シルトと5Y5/3灰オリーブ色砂質シルトの斑土、炭化物を含む、基盤砂層の混入多い（060SE）
26. 7.5Y6/2-7.5Y5/2灰オリーブ色シルト質砂と5Y8/2灰白色シルト質砂と基盤砂層の斑土（063NR）
27. 7.5Y4/1灰色砂質シルト、基盤砂層の混入多い（063NR）
28. 5Y8/2灰白色粗粒砂混じりの細粒砂～中粒砂（層砂）
29. 7.5Y6/2灰オリーブ色粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂（基盤砂層）
30. 7.5Y5/2灰オリーブ色と5Y8/2灰白色と7.5YR5/6明褐色の粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂（基盤砂層）
31. 7.5Y6/2灰オリーブ色と5Y8/2灰白色と7.5YR5/6明褐色の粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂（基盤砂層）

図20　17B区南壁土層図（1:100）

ついては、清洲城下町遺跡Ⅳ報告において溝の幅から堀を含めて７類に分けられている。それを参考に分けると、18A 区～ 18F 区において堀と思われる幅 15m 以上の溝や幅 10m 前後となる溝Ⅰ類の規模を持つ溝はない。溝Ⅱ類（幅 4m ～ 7m 前後、深さ 1m 以下）が１条（017SD）、溝Ⅲ類（幅 2.5m ～ 4m 前後、深さ１m 以下）が７条（015SD・040SD・041SD・060SD・086SD・088SD・091SD）、溝Ⅳ類（幅 1m ～ 2.5m 前後、深さ 50cm 以上）が５条（001SD・002SD・034SD・064SD・066SD）、溝Ⅴ類（幅 1m ～ 2m 前後・深さ 50cm 以下）が 13 条（003SD・006SD・024SD・028SD・029SD・032SD・036SD・053SD・055SD・056SD・063SD・078SD・079SD）、溝Ⅵ類（幅 1m 以下の小規模な溝）が６条（005SD・044SD・045SD・054SD・067SD・077SD）みられる。また 18F 区 077SD では、溝と重複する位置で５ヶ所の柱穴と考えられる小土坑が確認できており（092SK、095SP ～ 097SP、東壁断面において１基）、掘立柱建物の桁側柱穴列か柵の柱穴列の可能性がある。

また溝と溝の途切れ部分を 0.5m ～ 1.5m 前後挟んで関係する溝は 18E 区にある 024SD と 032SD、その南にある 18A 区の 024SD と 034SD、18A 区にある 003SD と 044SD、同

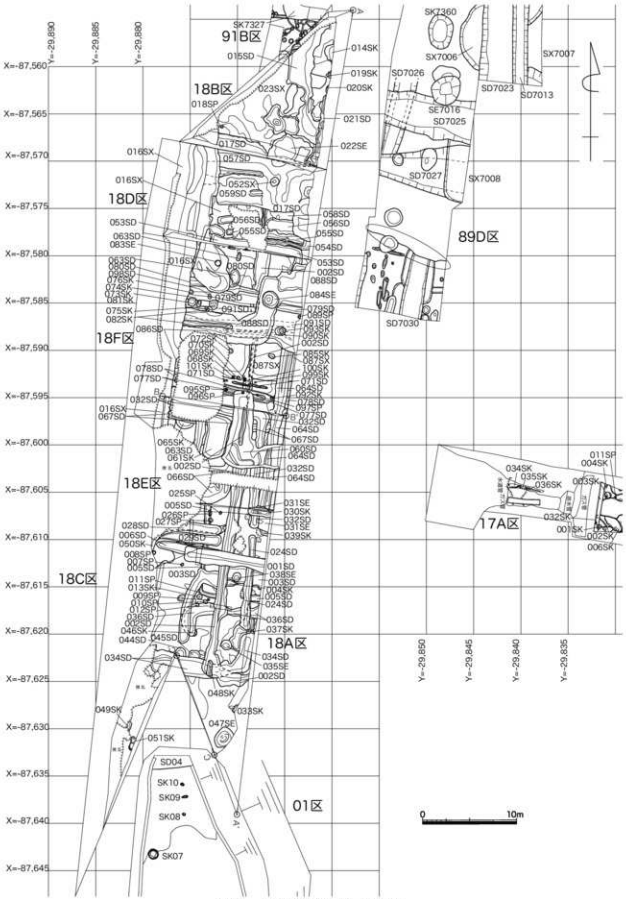


図 21　18 区遺構平面図（1:400）

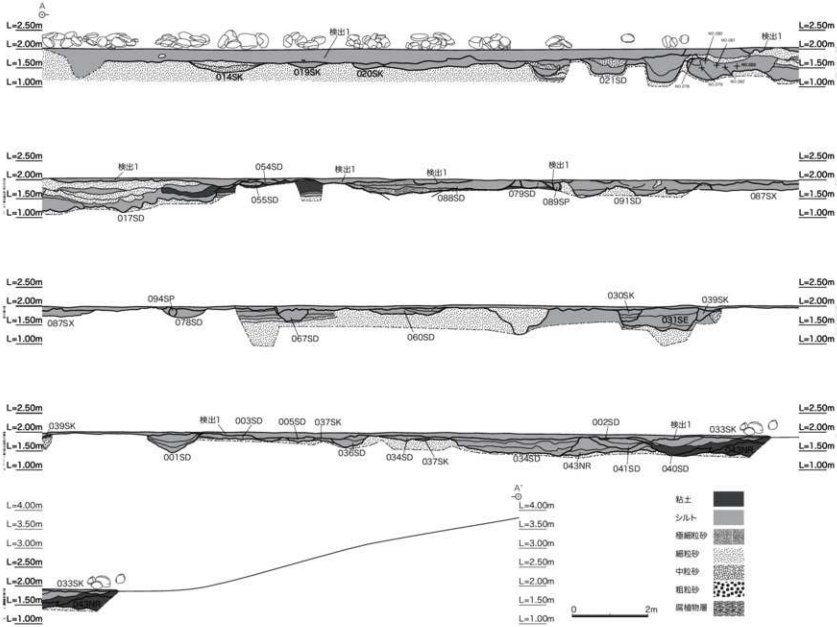


図22 18区東壁土層図（1:100）

じく 036SD と 045SD がみられる。他の調査区とつながる溝は、015SD が 91B 区 SK7317 と 89D 区 SD7027 と、017SD が 89D 区 SD01 とつながるものと考えられる。調査区内でつながる可能性のあるのは、18B 区 021SD と 18D 区 054SD と、064SD が 18E 区 039 とつながるものと考えられる。

よって 024SD・032SD・034SD は南北に 24m ～ 25m 程を囲む区画溝と考えられ、幅 1m ～ 1.5m、深さ 0.50m 前後の溝のタイプとなる。また溝Ⅳ類に分類した 002SD は南北に 50m 程続くようであり、幅 1.5m を超えてくる溝ではより大きい区画を囲む溝の可能性がある。

溝の時期について北側の 18B 区から南側の 18A 区・18C 区にかけて調査区毎に主な溝、井戸・土坑の変遷をまとめたものが図 23 である。どの調査区においても４段階～６段階の遺構の前後関係が確認され、頻繁な遺構の埋没と掘削が行われたことがわかる。この中で特徴的なのは、井戸と考えられる遺構が溝より新しく、井戸の前に存在した溝は先に述べた溝Ⅱ類～溝Ⅳ類のものが多いことから、井戸が掘削される前は比較的大規模な溝で囲まれた区画が存在したことが想定される。次に出土遺物から検討すると、021SD では瀬戸・美濃産陶器大窯第３段階後半～第４段階後半・江戸時代前期の陶器と土師器非ロクロ成形小皿１類～３類のものが出土していることから城下町Ⅲ -1 期～Ⅲ -2 期に、040SD からは瀬戸・美濃産陶器大窯第２段階～第４段階の陶器、041SD から瀬戸・美濃産陶器大窯第４段階の陶器と土師器非ロクロ成形小皿３類のものが出土しており城下町Ⅲ -1 期に、060SD からは瀬戸・美濃産陶器大窯第３段階

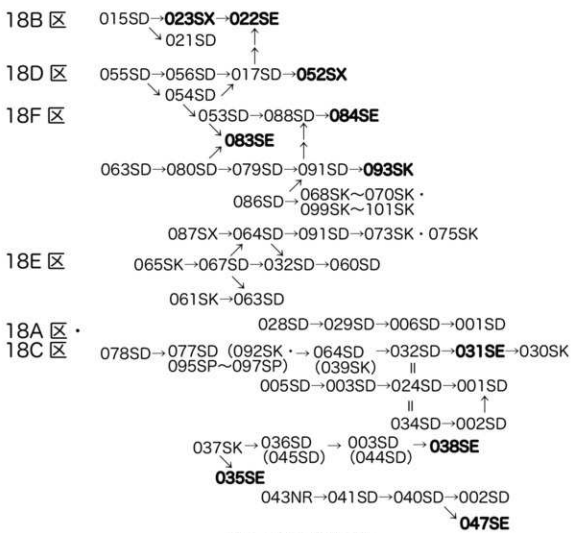


図 23　18 区の遺構の変遷

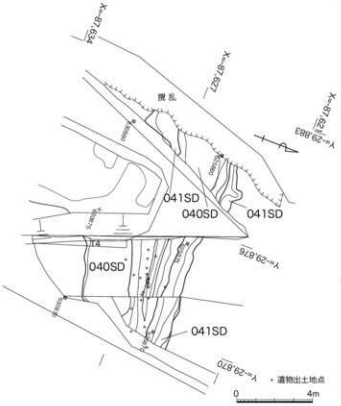


図 24　18A 区 040SD・041SD 平面図（1:200）

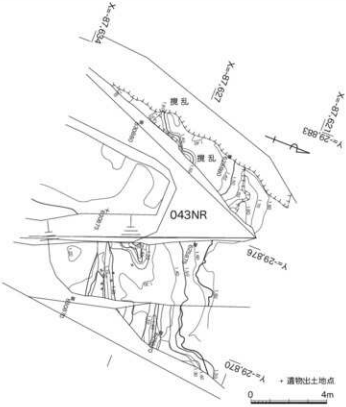


図 25　18A 区 043NR 平面図（1:200）

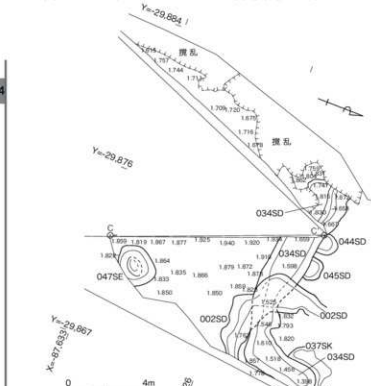


図 26　18A 区 002SD・034SD・047SE 平面図（1:200）

1. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト(検出1)
2. 10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルト(034SD)
3. 10YR5/2灰黄褐色シルトと2.5Y6/4にぶい黄色細粒砂が混じる斑土(034SD)
4. 10YR5/2灰黄褐色シルト(044SD)
5. 10YR6/2灰黄褐色細粒砂混じりの極細粒砂(043NR)
6. 2.5Y6/4にぶい黄色細粒砂から中粒砂(遺跡の基盤砂層)
7. 10YR5/1褐灰色細粒砂混じりシルト(040SD)
8. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト(040SD)
9. 10YR4/1褐灰色シルトと10YR4/2灰黄褐色細粒砂の互層(040SD)
10. 10YR5/1褐灰色シルト(040SD)
11. 10YR5/2灰黄褐色シルト(040SD)
12. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じりシルト(040SD)
13. 10YR5/1褐灰色シルト(040SD)
14. 10YR5/2灰黄褐色シルト、南側深い方は1 0YR2/1黒色粘土へ漸深的に変化(041SD)
15. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じり粘土質シルト(041SD)
16. 10YR5/1褐灰色細粒砂混じりシルト、層の上部に暗砂の跡(041SD)
17. 10YR5/1褐灰色細粒砂混じりのシルト(041SD)
18. 10YR5/2灰黄褐色シルト(043NR)
19. 10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂と10YR5/2灰黄褐色シルトの互層(043NR)
20. 10YR4/1褐灰色シルト(043NR)
21. 10YR5/1褐灰色シルトに10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂層を含む(043NR)
22. 2.5Y6/2灰黄色細粒砂と10YR5/1褐灰色シルトの互層(043NR)
23. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり粘土質シルト、上部は10YR5/3にぶい黄褐色の酸化色になる(043NR)
24. 10YR4/1褐灰色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂の互層(043NR)
25. 10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト(043NR)
26. 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト(検出1)
27. 10YR4/1褐灰色細粒砂を多く含むシルト(043NR)
28. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂を多く含むシルト(043NR)
29. 10YR6/1褐灰色細粒砂多く含むシルト(043NR)
30. 2.5Y6/2灰黄色細粒砂から中粒砂（遺跡の基盤砂層）

粘土
シルト
極細粒砂
細粒砂
中粒砂
粗粒砂
腐植物層

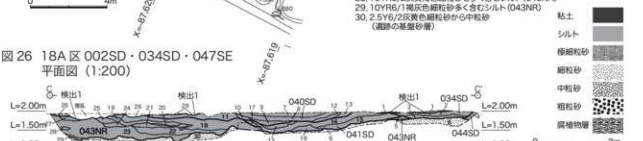


図 27　18C 区 034SD・040SD・041SD・043NR・044SD 断面図（1:100）

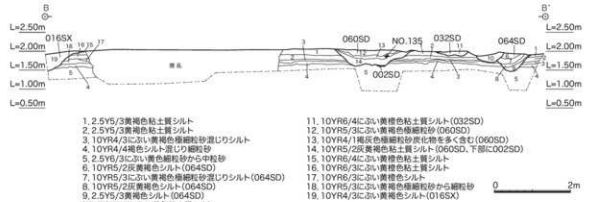


図 28　18E 区北壁土層図（1:100）

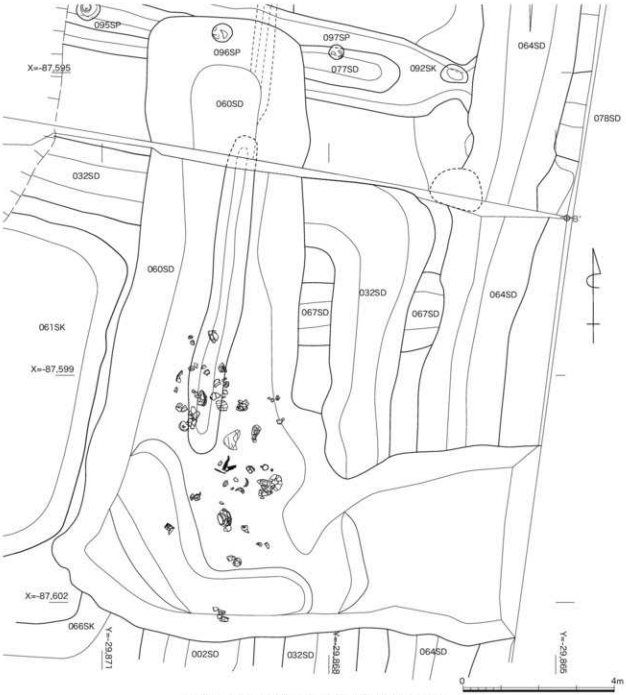


図 29　18E 区 060SD 遺物出土状況図（1:50）

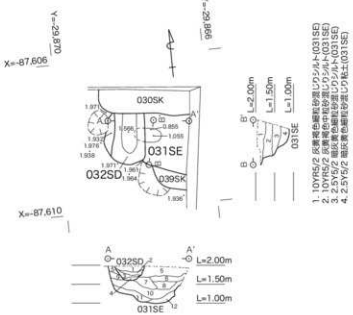


図 30　18A 区 031SE 断面図（1:100）

後半～第４段階前半を中心に大窯第１段階～登窯第１小期の陶器と土師器非ロクロ成形小皿１類・３類のものが出土していることから城下町Ⅲ-1 期～Ⅲ-2 期の時期と考えられる。また出土遺物には江戸時代後期以後の遺物も混じるが、上面で検出された井戸と考えられる 052SX から瀬戸・美濃産陶器大窯第４段階の陶器が出土していることから 18 区になる溝はおおよそ城下町Ⅲ-1 期～Ⅲ-2 期に営まれたものと考えることができる。また出土遺物では、18E 区 060SD からは一括で廃棄された陶器や土師器の鍋などが、18D 区 017SD と 18A 区 041SD からは、陶磁器や土師器とともに、獣骨片や漆碗、曲物などが出土した。

井戸（SE）は 083SE を除くと調査した範囲の東側に沿って南北に並んでみられ、18B 区から 18E 区と 18F 区にかけて５基（北から 023SX・022SE・052SE・084SE・093SK）と 18A 区と 18C 区にみられる４基（北から

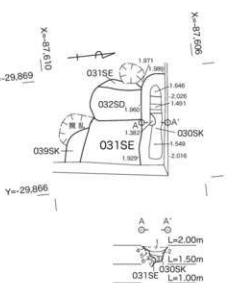


図 31　18A 区 030SK 断面図（1:100）

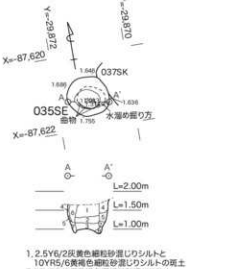
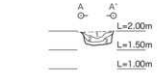


図 32　18A 区 035SE 断面図（1:100）

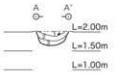
図 33　18A 区 038SE 断面図（1:100）

図 34　18C 区 047SE 断面図（1:100）



1. 10YR6/1褐灰色細粒砂混じり粘土質シルト
2. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり粘土質シルト
3. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂

図 36　18F 区 073SK 断面図（1:100）



1. 10YR6/1褐灰色細粒砂混じり粘土質シルト
2. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂混じり粘土質シルト
3. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂

図 37　18F 区 075SK 断面図（1:100）

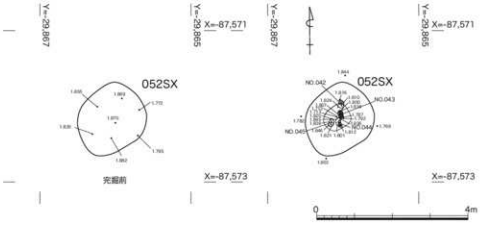


図 35　18D 区 052SX 出土状況図（1:50）

図 39　18F 区 084SE 断面図（1:100）

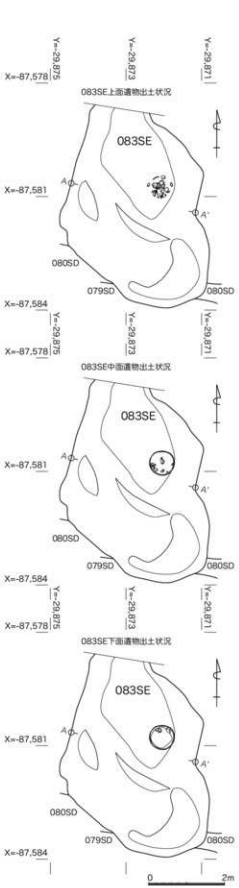


図 38　18F 区 083SE 断面図・出土状況図（1:100）

031SE・038SE・035SE・047SE）の井戸が、7m から 14m の間隔で確認された。井戸の規模は 18F 区 083SE の長軸 6.93m 以上、短軸 3.44m、深さ 1.15m の大型のものから、18A 区 038SE の長軸 0.94m、短軸 0.81m、深さ 0.1m の小型のものまで規模の違いがみられた。井戸の構造物は結桶が確認されるものがあり、18A 区 035SE と 18F 区 083SE では、結桶の木材が残っていた。また 18F 区 083SE では、結桶の上部から川原石の円礫や亞円礫、亞角礫が廃棄された状態で出土し、18D 区 052SX では貝殻と炭化物が多くみられた。

土坑（SK・SX）では、18F 区 091SD に重複する土坑 073SK と 075SK は 073SK が径 0.86m、深さ 0.37m の断面丸底のもの、075SK が長軸 1.0m、短軸 0.87m、深さ 0.43m の断面丸底のもので、出土した陶器から城下町Ⅲ-2 期のものである。18F 区 087SX は残存状態が良くなかったが、長軸 4.62m 以上、短軸 3.98m 以上、深さ 0.39m を測る、埋土は黄褐色シルトを主体とするものであった。18E 区 061SK は長軸 4.65m、短軸 2.21m、深さ 0.16m のにぶい黄褐色極細粒砂を主体とするもので、先に述べた 087SX と同様の状態で、近くにある 086SD も同様な埋土をしており、関連する遺構の可能性がある。18A 区 037SK はにぶい黄褐色粘土質シルトと褐色シルトの斑土を埋土とする長軸 3.68m 以上の不定形な大型土坑で、89D 区で確認されている SX7006・SX7007・SX7008 のような自然流路状のものと考えられた。

自然流路としては、18A 区・18C 区の 040SD・041SD の下層で 043NR を確認した。043NR は調査区南端部において底面となる細粒砂～中粒砂層が高まる部分があり、流路が一定していないことがうかがわれた。17B 区で確認された 063NR の下流に当たる可能性があり、流路の北肩部は 18 区の遺構の下にあるシルト層になるものと思われた。

柵か建物の柱列と考えられるものとして、18F 区の南側に２列の柱穴列を確認できた。086SD より新しいものとして、068SK ～ 070SK・099SK ～ 101SK の６基の柱穴があり、068SK ～ 070SK は径 0.30m ～ 0.38m、深さ 0.06m ～ 0.09m の平面円形の浅いもので、099SK ～ 101SK は径 0.15m ～ 0.20m 前後、深さ 0.15m ～ 0.25m であった。092SK・094SP・095SP ～ 097SP の５基の柱穴は、径 0.20m ～ 0.45m、深さ 0.12m ～ 0.22m の柱穴が 078SD の上から掘り込まれた状態で 2m 程の間隔で検出できた、092SK の底部からは、根太と思われる円柱状の木材が出土した。

他に江戸時代末～近代の遺構として、旧五条川の流路を埋めたものと考えられる 016SX を確認した。016SX は現在の五条川東護岸の東に埋没していた旧東護岸石積みのさらに東にあり、18B 区南西隅部から 18D 区西端部、18F 区西端部にかけての範囲に検出できた。出土遺物は、江戸時代末から近代にかけての陶磁器、瓦、ガラス瓶などが多く出土した。

第３節 00B 区（御園地区、図 40 ～図 48）

戦国時代末の城下町Ⅲ期と考えられる石垣 SW01 や土塁 01SX に伴う時期の溝５条、堀の埋没遺構の可能性もある土坑８基と土塁 01SX 造成前の溝５条、土坑４基、中世の自然流路１条が確認できた。

（１）中世の自然流路 NR01（図 40 ～図 42）

中世の自然流路は、調査区南側のみにて確認・掘削できただけであるが、上層にシルト層を主体に堆積しており、中層から下層にかけて粗粒砂層や粘土層を介在するシルト層との互層となっていた。東濃産山茶碗が出土しており、14 世紀～ 15 世紀の河道部にあたる。NR01 の西側に NR01 より古い SD05 を検出した、幅 0.28m、深さ 0.42m を測る。

（２）土塁 01SX 造成以前の溝と土坑（図 40）

土塁 01SX 造成以前の遺構は、調査区北側にて確認できた。確認できた遺構の前後関係は SD12 → SD07 → SD11 → SX07、SD07 → SD08 → SD06 で、SD11 より土師器羽付鍋・内耳鍋、古瀬戸後４古型式～大窯第３古段階の瀬戸・美濃産陶器、明和型式・生田型式東濃産山茶碗が出土し城下町Ⅱ-2 期に、SD07 より古瀬戸後１型式～古瀬戸後２型式の瀬戸・美濃産陶器、SD08 より土師器羽付鍋、SD06 より古瀬戸後４古型式～大窯型式の瀬

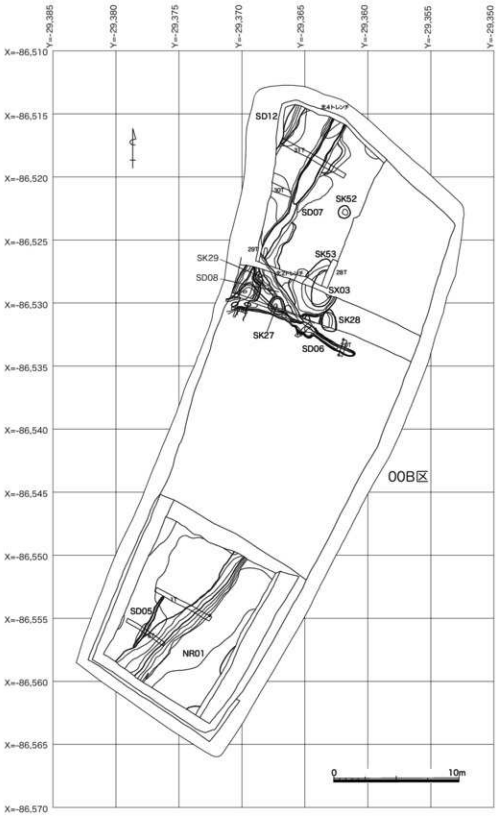
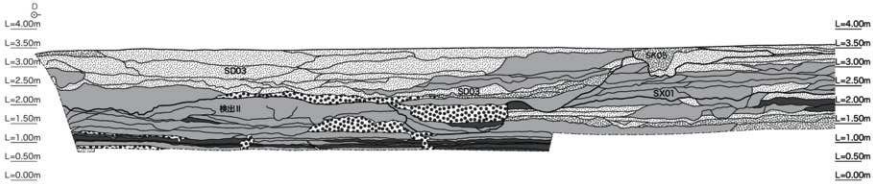


図 40　00B 区 2 面遺構平面図（1:300）



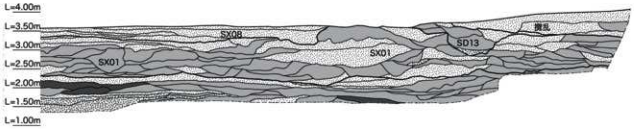


図41　00B区西壁トレンチ土層図（1:100）

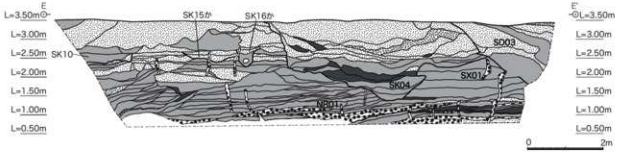
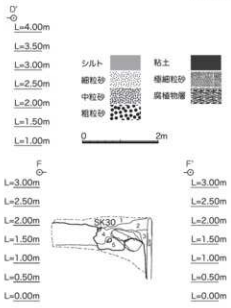


図42　00B区南壁トレンチ土層図（1:100）



1. 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂と2.5Y7/1灰白色中粒砂、2.5Y4/2暗灰黄色細粒砂の互層
2. 2.5Y4/1黄灰色細粒砂、と2.5Y5/1黄灰色中粒砂の斑土、焼粒が混じる、炭粒が少量混じる
3. 5Y4/1灰色シルト、5Y5/1灰色細粒砂が混じる、炭粒が少量混じる
4. 7.5Y5/1灰色細粒砂と5Y4/2灰オリーブ色細粒砂の斑土、5Y3/1オリーブ黒色砂質シルトと腐植物が混じる
5. 5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト、5Y4/1灰色粘土と5Y4/1灰色細粒砂が混じる、腐植物が混じる

図43　00B区SK30土層図（1:100）

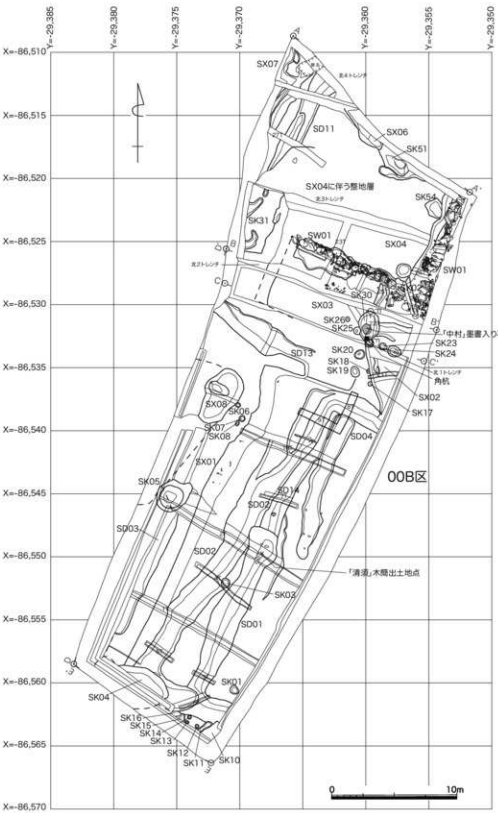


図 44　00B 区 1 面遺構平面図（1:300）

図 45　00B 区 SK51・SX04・SX06・SW01 平面図、SW01 立面図（1:80）

戸・美濃産陶器が出土し、SD12 と SD07 が城下町Ⅰ期以前の可能性がある。SD07・SD11・SD12 は N-25°-E ～ N-30°-E の軸線をもち、SD06 もこれらに直行する N-67°-W であるが、SD08 は N-32°-W の軸線をもち斜行する。遺構検出面の高さによるが、断面形は全て丸底のもので、SD06 は幅 1.05m、深さ 0.61m、SD07 は幅 1.55m、深さ 0.28m、SD08 は幅 1.19m、深さ 0.26m、SD11 は幅 2.08m、深さ 0.39m、SD12 は幅 3.0m 以上、深さ 0.48m を測る。これらの溝の付近に SD11 より新しい SK27・SK28 があり、土塁 SX01 造成以前の遺構である、SK27 が長軸 1.34m、短軸 1.25m、深さ 0.42m を測る平面不整円形のもの、SK28 が長軸 1.65m、短軸 1.20m、深さ 0.18m の平面楕円形のものである。

（3）土塁 SX01（図 41・図 42・図 44 ～図 48）

SX01 は調査区の西壁に沿って確認できた土塁で、旧五条川の西岸堤防も兼ねているものと考えられる。上端の幅は上面で 3.0m 以上、下端で 5.0m 以上を測り、その軸線は、N-30°-E で御園地区の城下町期の遺構の軸線と対応する。出土遺物には内耳鍋、大窯第１段階の瀬戸・美濃産陶器、土師器内示鍋が出土しており、SD06 ～ SD08 が埋没した城下町Ⅰ期以後で SD11 が営まれた城下町Ⅱ -2 期以前に成立した可能性が高い。

（4）石垣 SW01 と造成基壇 SX04（図 41・図 42・図 44 ～図 48）

SX04 は SX01 から東側に盛り土整地を行い、上面の平場を現五条川側に拡張した東西 13.4m、南北 9.0m 以上、高さ 2.80m 以上の方形状基壇であり、SW01 は SX04 の南法面と東法面を護岸する石垣である。この SW01 と SX04 の上面には櫓状建物が存在した可能性もあり、SK51 に確認された長径 0.85m、短径 0.52m を測る扁平な砂岩は建物の礎石であった可能性があり、多数検出された濃飛流紋岩、チャート、砂岩、ホルンフェルス、泥岩の亞角礫～亞円礫は礎石の根石になる可能性がある。06SX は SK51 より新しく、長軸 8.50m 以上を測る平面不整形な大型土坑で、廃城時の瓦を廃棄した土坑や廃城後の堤防造成に伴う遺構になる可能性が高い。

SW01 は高さ 1.21m 残存する部分があり、長径 0.50m ～ 1.65m 程で短径 0.70m ～ 0.80m 前後の巨礫が１石から３石積み上げられたものが残存していた。現五条川に面した残存状態が良い部分で 80°の傾斜角度で積まれていた。巨礫の間隙や裏込めには径 1cm 前後～ 20cm 前後の亞角礫～亞円礫が土とともに充填されていた。巨礫は濃飛流紋岩４個、チャート１個、砂岩 29 個、ホルンフェルス８個、アプライト１個の亞角礫～亞円礫であり、充填されたいた礫も濃飛流紋岩、チャート、砂岩、ホルンフェルス、泥岩、アプライトのものがみられた。

（5）土塁 SX01 と方形状基壇 SX04 に囲まれた区画（図 42 ～図 44・図 47・図 48）

SD13 は SX04 の南で SX01 がやや掘り下げられた形で検出された N-62°-W の軸線をもつ溝で、幅 2.15m、深さ 0.95m を測る。SD13 の北東に廃城時の遺構と考えられる SX03 があり、SD13 の北側は現五条川から西の城内に入る緩やかなスロープとなっていた可能性がある。また SD13 の南肩は SX01 が幅 1m 前後で東に 3m 程突出して下がる坂道状になっていた。

SX04 の南側は現五条川に面した SX02 からその上層とも言える SX03 が東から西に緩やかな皿状に堆積していた。SX02 は東西 13.4m 以上、南北 9.0m 以上の SD02 の北に面して平面三角形の東に扇状に開く形となっており、東側の底面は標高 1.7m 前後まで下がっていて、現五条川の水位と等しい高さである。SX03 は SX02 の上部に堆積して、SX04 の南で SX01 の東を SX02 に向かって 0.30m 程の層厚をもっていた。

SK30 は平面三角形の SX02 の西側頂点部に位置する長軸 2.38m、短軸 1.60m、深さ 0.62m の平面楕円形、断面丸底の土坑で、墨書のある砂岩で長径 0.75m、短径 0.45m の亞角礫の巨礫が埋没しており、さらに土坑の南隅に断面方形の角柱（W-193）が打ち込まれていた。また漆椀片（W-191）、有頭棒（W-194）、箸（W-192）が出土し、埋土は暗灰黄色細粒砂と灰白色中粒砂、暗灰黄色細粒砂の互層となっていた。調査時から廃城時における物資を搬出するのに用い

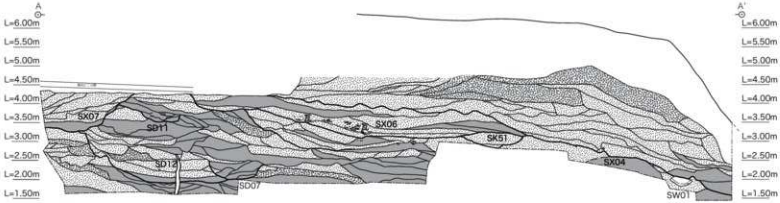


図46　00B区北4トレンチ土層図（1:100）

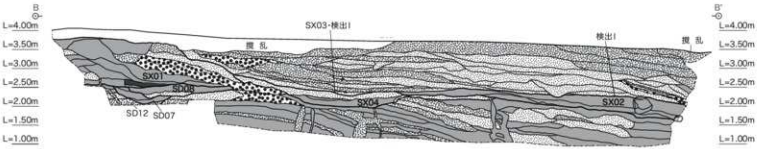


図47　00B区北2トレンチ土層図（1:100）

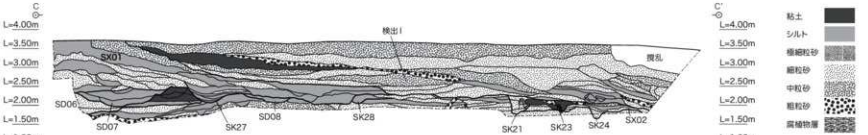


図48　00B区北1トレンチ土層図（1:100）

られた滑車などの支柱や物資を搬出する船着き場で使われた支柱かと思われた。

SX01 の東にある SD01・SD02・SD04・SD14 は現五条川に面して溝の内側で南北 22.5m を囲む方形区画の境溝で、調査時には SD14 が最も古く、続いて SD01、SD02、SD04 の前後関係が認められた。ただし、SD02 と SD04 は SD04 の北端でわずかに接しているのみであり、遺構の変遷から考えると SD02 が新しいものと思われる。SD14 は SD01 に向かって深くなって接続する様にもみえ、本来は同一の遺構の可能性があるもので、N-32°-E の軸線をもち、幅 1.50m 深さ 0.73m で長さ 10.6m を検出した。SD02 より北には伸びていない。SD01 は N-25°-E の軸線をもち、幅 2.40m、深さ 0.86m で SD14 と接続する部分で立ち上がっている様に検出できた。多くの漆製品、箸、折敷、板材などの木製遺物が出土した。SD02 は SD01 の外側をめぐる様に検出された溝で、N-34°-E の軸線をもち、北側は東に折れて調査区外に伸びており、南は東に屈曲した 3m 程の所で底面が立ち上がって途切れている、北側は SD04 の北に面して東に折れて調査区外へと続く。幅 2.25m、深さ 0.60m を測り、SD01 と同様、木製遺物が多く出土した。SD02 の南西隅の屈曲部に SD03 より古い SK04 を確認している。調査時は井戸・土坑などのより新しい時期の遺構と考えて調査したが、出土遺物に漆製品や箸、板材などの木製遺物を比較的多く含み、ほぼ SD02 に重複することから、SD02 の上層部分を別遺構として認識した結果の可能性が高い。SD04 は SD01 の東 1.5m 程離れて南北に流れる溝で、N-21°-E の軸線をもち、幅 1.45m、深さ 0.25m で検出できたのは 11.90m である。SD01 と同時存在しているならば、溝が途切れる部分と SD01 が北側で途切れる部分の位置がほぼ並んでおり、区画の出入り口に当たる可能性がある。これらの遺構の時期は、SD01 より大窯第３古段階～大窯第３新段階の瀬戸・美濃産陶器と「三斗付□付上清須外」・「ほしの新右衛門」木簡（W111）が出土しており、木簡に記された「ほしの新右衛門」は織田信雄分限帳に記載される人物の可能性が高いもので、城下町Ⅱ-2 期～Ⅲ-1 期に属するものと考えられる。SD02 からは大窯第２段階～大窯第３古段階の瀬戸・美濃産陶器、焙烙鍋、大窯第４段階の擂鉢が出土していることから、城下町Ⅲ期のものである。

（6）土塁 SX01 の上から掘削された他の遺構（図 42・図 44）

調査区西壁に沿って確認された SX07、SK31、SX08、SK05、SD03 は別々に検出された溝や不整形な大型土坑であるが、全て表土直下から掘り込まれた断面をもち、かつ比較的短期間に埋没した地層が観察できた。SD03 からは城下町期のものと考えられる漆製品なども出土していることから、これらの遺構を清須城に関わる遺構と考えた。

第3章　出　土　遺　物

第1節　出土遺物の整理方法

今回の調査で出土した遺物は城下町期を中心にコンテナにして約180箱である。清洲城下町遺跡では、これまでに多数の地点が調査され、当埋蔵文化財センターによる報告も11報告となる。特に本報告でかかる調査地点は鈴木正貴編1994『清洲城下町遺跡Ⅳ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第53集」において報告された調査地点と隣接しており、遺構と出土遺物も相互に比較分析することが必要である。この様な視点に基づき、本報告では『清洲城下町遺跡Ⅳ』の分類を基本的に踏襲し参考にした。

土器・陶磁器については、すべての出土遺物について出土した遺構や層位、出土地点を単位に『清洲城下町遺跡Ⅳ』の分類に従い、破片数によるカウントを行い、その後実測する遺物をBランク、観察表にのみ掲載するC1＊ランクの遺物を抽出した。BランクとC1＊ランクの土器・陶磁器を土器・陶磁器の抽出は、おおよその出土した遺構の時期や器種構成を反映することを目指し、また遺跡の特徴を示す遺物を注意して選び出した。また00A区に隣接する62D区・63D区の全ての遺物について、00A区SX8001と同一遺構と考えられる出土遺物を中心に接合を行い、同様に遺物を抽出し、実測を行い、観察表を作成した。

石製品については、調査現場で出土した製品・未製品・礫の全てを現場から取り上げて分類した。先ず、製品を中心に実測するものを抽出し一覧表を作成した。製品以外も石材・形態・大きさを分類してカウントを行なった（添付清洲城下町遺跡X出土遺物石材カウント表を参照）。

金属製品についても石製品と同様に、調査現場で出土した製品・未製品・粘土塊などの全てを現場から取り上げて分類した。先ず、製品を中心に実測するものを抽出し一覧表を作成した。また、鍛冶・鋳造関連資料については、日鉄テクノロジー株式会社に委託して金属分析を行なった。

木製品についても石製品と同様に、調査現場で出土した製品・未製品・木材の全てを現場から取り上げて分類した。先ず、全ての出土木材を出土遺構・地点毎に木材の簡易計測とカウントを行って観察表を作成し、合わせて写真撮影を実施し長期にわたる遺物管理を行なった。整理・報告作業に入るまで長期に渡ったため、漆製品を中心に劣化が進み、写真撮影は一部の製品に限られた。実測する遺物と樹種同定分析（添付株式会社パレオ・ラボ「清洲城下町遺跡出土木材の樹種同定」を参照）を行う遺物は製品を中心に抽出した。

第2節　土器・陶磁器

陶磁器・土器類の分類に関しては、先に述べた通り『清洲城下町遺跡Ⅳ』報告の分類に準拠する。また実測・写真撮影・観察表を作成した陶磁器について藤澤良祐氏からご教示を頂き、主に器種と器形、型式について反映した。本報告に関わる責任は当センターの報告担当者にあり、個別の資料の計測値・調整などの詳細については添付清洲城下町遺跡X出土遺物土器・陶磁器一覧表を参照していただきたい。

（1）00A区（図49～図56）

00A区の出土遺物は、62D区・63D区から西へ続くSX8001に含まれるものと考えられ、城下町Ⅲ-2期（大窯第4段階後半～登窯第1小期）の遺物を主体とする。

00A区検出1、SX8001（E00A001～E00A031）

E00A001～E00A017・E00A019～E00A021は瀬戸・美濃産陶器で、E00A001～E00A003は天目茶碗、E00A004は登窯第1小期の灰釉丸椀である。E00A005～E00A012は長石釉の製品で、E00A005は小碗、E00A006は角向付、E00A007は鉄絵蓋、E00A008は端反皿、E00A009～E00A011は丸皿、E00A012は内面に鉄絵の草文絵がある皿である。E00A013は黄瀬戸筒形片口鉢、E00A014は黄瀬戸鉢、E00A015は内面に蔦状の草文絵がある長石釉鉄絵大皿、E00A016は内面口縁部に葡萄唐草文、底部に直線文1条・雁2羽の鉄釉絵があ

00A 区検出 1、SX8001（E00A001 ～ E00A031）

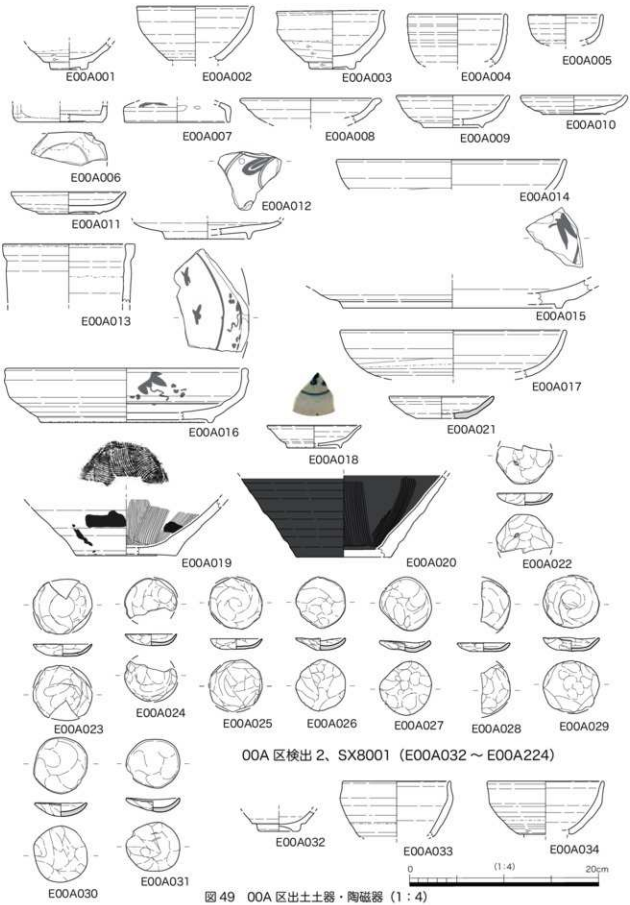


図 49　00A 区出土土器・陶磁器（1：4）

る長石釉鉄絵鉢、E00A017は鉄釉の大皿で志戸呂窯産の可能性があるもの、E00A019・E00A020は摺鉢で内・外面に煤が付着していること、E00A021は重圏皿である。E00A018は染付の磁器皿で、内面底部に直線文1条と文字かがみられる。E00A022～E00A031は土師器の非ロクロ成形の小皿で、丸みのある底部から口縁部が立ち上がるもので、E00A022～E00A030が口縁部を不連続で指ナデする非ロクロ成形小皿2類で、E00A031が口縁部に横ナデを施さない非ロクロ成形小皿3類のものである。

00A区検出2、SX8001（E00A032～E00A224）

E00A032～E00A045は天目茶碗で大窯第3段階後半～登窯第1小期のもの、E00A046は内・外面に線刻文のある青磁碗、E00A047は大窯第3段階後半の灰釉蓮弁文鉢で内面口縁部に波状文がみられるもの、E00A048は長石釉丸碗、E00A049は大窯第4段階末～登窯第1小期の鉄釉丸碗、E00A050は長石釉鉄絵丸碗で、口縁端部・口縁部内面・底部に各直線文1条の鉄絵があり、口縁部内面に有機物が付着する。E00A051は灰釉筒形碗の底部、E00A052・E00A053は長石釉小碗、E00A054は濃緑釉のかかる唐津産片口小杯である。E00A055は磁器の染付碗である。E00A056～E00A058は把手に注ぎ口が付く鉄釉水滴で、E00A056の把手はボタン状に粘土を貼り付けたもの、E00A057・E00A058は半円の環状把手が付くものである。E00A059は黄瀬戸向付で、外面に線刻の秋草文、内・外面を強く比熱しており、内面に有機物が付着する。E00A060～E00A062はやや丸味を帯びた方形で四隅が縦に窪む長石釉角向付で、E00A060はやや見込みが深く、外面に「×」に丸で囲んだ3個の鉄絵、E00A062は外面に蕨の鉄絵がみられる。E00A063～E00A065は鉄釉片口向付で、E00A064は鉢形になるもの、E00A063・E00A065は筒形になるものである。E00A066・E00A067はやや丸い肩部から口縁部が短く立ち上がる鉄釉茶入、E00A068はやや縦長の壺形で肩部が屈曲して短く立ち上がる口縁部にいたる鉄釉肩付茶入である。E00A069は灰釉内剝ぎ端反皿、E00A070～E00A077・E00A083は長石釉端反皿で、E00A071は内・外面に煤が付着しており、E00A077は内面に秋草門の鉄絵が描かれており、E00A083の外面底部には「二」か「可」の墨書がみられる。E00A078は灰釉丸皿で、E00A079～E00A082・E00A084～E00A088は長石釉丸皿である。E00A079～E00A082・E00A084は内・外面の長石釉の釉調が比熱のためか灰色化しており、E00A086は内面体部に花弁紋鉄絵があり、内・外面被熱している。E00A087は内面底部に直線文2条に梵字、内面体部に直線文2条に垂下文にツル性の草本鉄絵がみられる。E00A088は内面に草本文・蕨他の鉄絵がみられる。E00A089は灰釉内禿皿で灰釉の上に鉄釉を口縁部に流し掛けするもの、E00A090は灰釉折縁菊皿である。E00A091は長石釉ひだ菊皿、E00A092は登窯第1小期の鉄釉皿、E00A093～E00A096は長石釉鉄絵皿でE00A093は内面底部に草本鉄絵がみられるもの、E00A094は内面底部に直線文2条、文字絵、体部に蔓草文の鉄絵がみられるもの、E00A095は内面口縁部に鋸歯文の鉄絵、E00A096は内面底部に葡萄と思われる草本文の鉄絵がみられる。E00A097は重圏皿で口縁部に有機物が付着することから灯明皿に使われたと考えられるもの、E00A098は鉄釉口広有耳壺で、内面口縁部から外面にかけて鉄釉がみられる。E00A099は鉄釉片口鉢、E00A100は登窯第1小期の灰釉折縁深皿、E00A101は鉄釉丸大皿である。E00A102・E00A103は黄瀬戸のもので、E00A102は口縁部内外面に灰釉後の緑釉が施された大皿か向付、E00A103は折縁菊鉢である。E00A104は登窯第1小期の美濃唐津タイプの鉄絵鉢で、内面底部に草本の鉄絵がみられる。E00A105は長石釉鉄絵大皿で、内面底部に鴨と思われる鉄絵、外面底部に墨書「屋カ」・「んカ」がみられ、外面口縁部に有機物が付着する。E00A106は磁器の染付小皿で内面口縁部に染付の直線文1条、外面に唐草文が見られるもの、E00A107は白磁の端反皿で、中国漳州窯産の可能性がある。E00A108～E00A111・E00A112～E00A121は摺鉢で、E00A108・E00A121が大窯第3段階のもの、E00A109～E00A116が大窯第4段階後

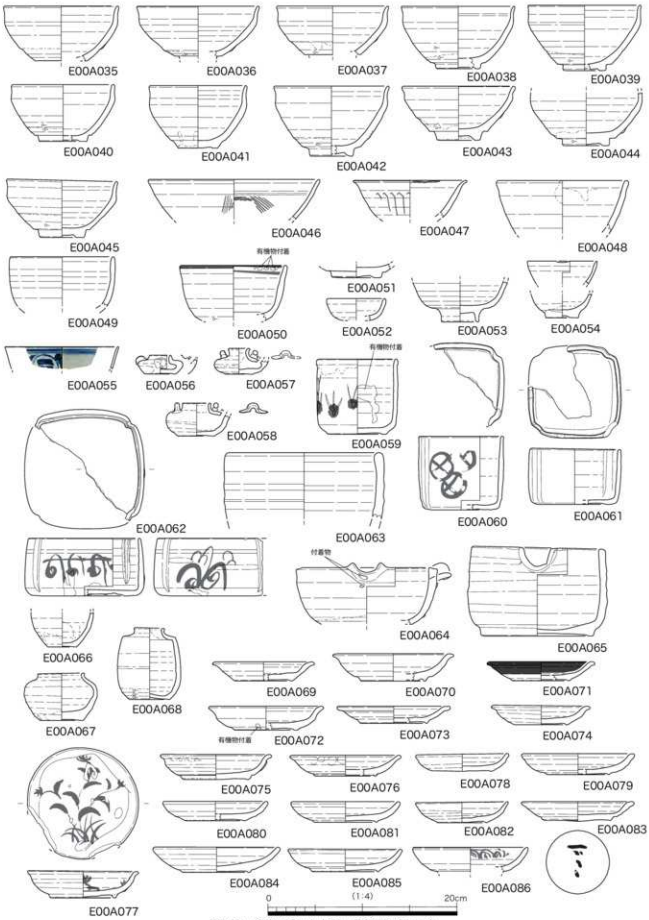


図50　00A区出土土器・陶磁器（1：4）

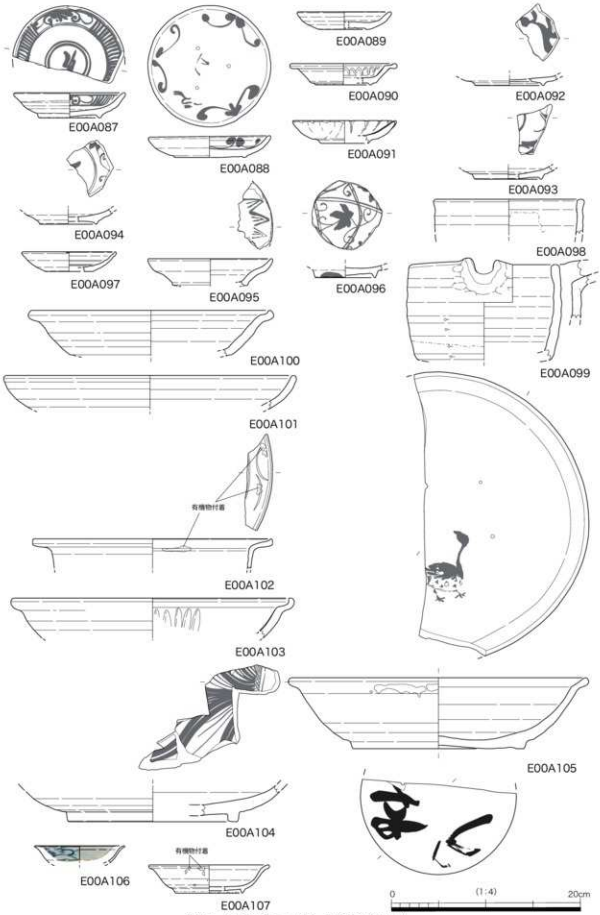


図51　00A区出土土器・陶磁器（1：4）

半～第4段階末のもの、その他が大窯第4段階のもので、E00A109・E00A110・E00A112・E00A117～E00A120の内・外面に煤が付着する。E00A122は常滑産の壺で口縁部が頸部から短く立ち上がるもの、E00A123・E00A124は鉄釉壺で、E00A123は大窯第4段階の双耳壺である。E00A125・E00A126は大窯第4段階～登窯第1小期の鉄釉徳利で、E00A127は信楽産の水差である。E00A128～E00A131は常滑産の鉢で、内・外面に煤が付着しており、E00A130は外面の表面が剥離している、E00A128・E00A129・E00A131はいわゆる赤物に分類されるもの、E00A133は口縁部が外面に長く折り返して肥厚する甕で、E00A134は甕で、内・外面の底部から体部にかけて煤が付着する。E00A132は口縁部が内湾する土師器の火舎で、内・外面に煤が濃く付着する。E00A135は土師器の焼塩壺で、丸底の底部から口縁部がややすぼまるコップ状の器形をしている。

E00A136～E00A138は瓦土器で、E00A136・E00A137が擂鉢の体部片を転用したもので側面を研磨しているもの、E00A138は土師器の皿底部を転用したもので、側面に研ぎ痕がみられる。

E00A139～E00A187は加工円盤で、平面円形の板状のもので、側面を破砕して成形し、側面を研磨するものがみられる。大きさは長径が3.0cm以下の小型のもの、3.1cm以上で4.0cm未満の中型のもの、4.1cm以上の大型のものにわかれ、厚みはE00A139の0.50cm～E00A184の2.00cmまであり、大きさに応じた厚みとなっている。転用した元はE00A139～E00A146が天目茶碗の口縁部から体部片、E00A147～E00A150が天目茶碗の底部片、E00A151が長石釉丸碗の体部片、E00A152が灰釉平碗の底部片、E00A153が灰釉碗底部片、E00A154～E00A157が長石釉碗の体部片、E00A158が鉄釉茶入体部片、E00A159が鉄釉向付の底部片、E00A160が鉄釉向付の体部片、E00A161が長石釉皿の底部片、E00A162が灰釉皿の底部片、E00A163～E00A178が擂鉢の体部片、E00A179・E00A180が鉄釉瓶の体部片、E00A181～E00A185が常滑産甕の体部片、E00A186が道具瓦、E00A187が瓦質の鉢か火舎の底部片である。側面を一部・全体を研磨しているものは、E00A141・E00A143～E00A146・E00A148・E00A149・E00A159～E00A161・E00A163～E00A167・E00A169～E00A173・E00A175・E00A178～E00A182・E00A184・E00A186・E00A187がある。

E00A188～E00A209は土師器の小皿で、口縁部に横ナデ調整がみられる非ロクロ成形皿1類のE00A188と1類に比べてやや小型の口縁部に横ナデ調整がみられない非ロクロ成形皿3類のE00A189～E00A209に大きく分かれる。また非ロクロ成形皿3類においても浅くて皿状のE00A189～E00A203とほぼ板状のE00A204～E00A209がみられる。調整はナデと指押さえと思われる調整が内・外面とも底部中央付近から口縁部にかけて螺旋状に調整されており、E00A196・E00A198～E00A201・E00A203のように最後に内面をハケ調整で整えるものがみられる。

E00A210～E00A212は土師器の内耳鍋で、E00A210・E00A212は口縁部がやや内湾するもの、E00A211は平底状底部から口縁部がやや斜め上に立ち上げるものである。外面はナデ調整と指押さえ、縦ハケ調整がみられ、内面は横ナデ調整と横ハケ調整がみられ、内耳は成形後貼り付けされている。E00A213～E00A217は土師器の茶釜形鍋で、体部上半の片部に紐などを通す穿孔のある多角形から丸い把手が二個対に、底部に断面三角形状の脚が3個付く。調整は内耳鍋に類似し、把手は成形後の貼り付けである。E00A218・E00A219は土師器の焙烙鍋で、E00A218は外面の口縁端部下に羽付鍋のような鍔が小さくなって受口状になったもの、E00A219は口縁部径36.4cmを測る大型のものである。

E00A220～E00A224は瓦で、E00A220～E00A222は軒丸瓦で、凸面はナデ調整、凹面弧引き痕と布目痕がみられ、E00A220・E00A222は瓦当部が素縁に珠文が廻り三巴文のもの、E00A223・E00A224は平瓦で、凸面はナデ調整とケズリ調整が見られ、凹面に弧引き後ナデ調整がみられるものである。E00A224

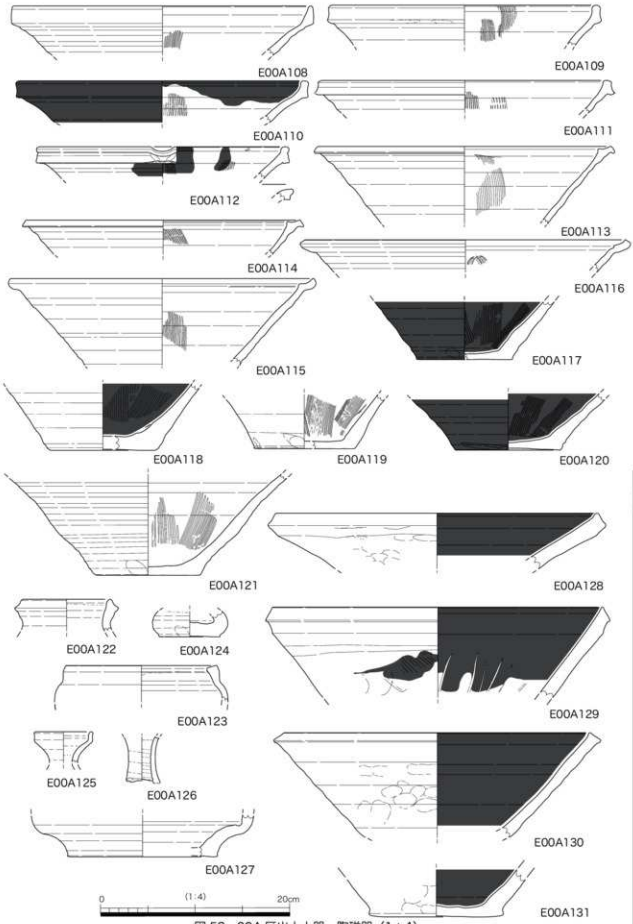


図 52　00A 区出土土器・陶磁器（1：4）

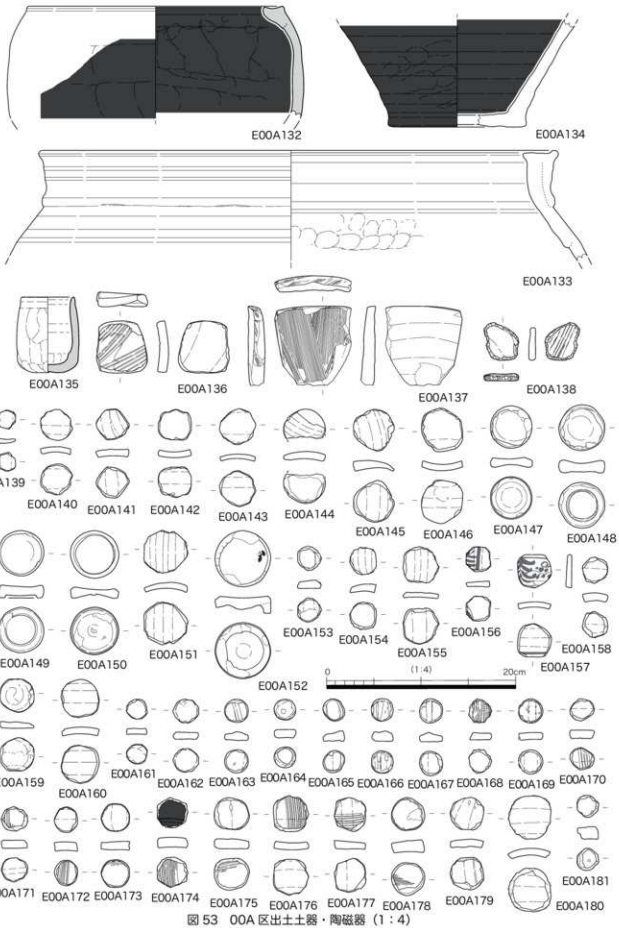


図53　00A区出土土器・陶磁器（1：4）

の長さは31.8cmである。

00A区検出3、検出4、SX8001（E00A225～E00A254）

E00A225～E00A227は、天目茶碗でE00A225が大窯第4段階前半～大窯第4段階末のもの、E00A228は鉄釉耳付水注で登窯第1小期のものである。E00A229・E00A230は長石釉端反皿で、E00A229の外面底部に墨書「○」の中に「×」を入れたもの、E00A230の外面底部には「○」が残る。E00A231は鉄釉甕か深鉢で大窯期のもの、E00A232は擂鉢で登窯第1小期のもので、内・外面に煤が付着している。E00A233はやや大部に丸みを持つ赤物の常滑産火舎で、前面に「U」字形に切り取られた窓がある。内面に煤が付着しており、「×」の線刻が残る。

E00A234～E00A241は加工円盤で、E00A237が小型のもの、その他が大型のものとなる。転用する元は、E00A234が灰釉丸皿の底部片、E00A235が長石釉碗の底部片、E00A236が長石釉端反碗か丸碗の底部片、E00A237が長石釉丸皿の体部片、E00A238が長石釉皿の底部片、E00A239が鉄釉瓶の底部片、E00A240が擂鉢の体部片、E00A241が平瓦片である。側面の一部・全体を研磨するものは、E00A235・E00A237・E00A238・E00A240・E00A241である。

E00A242は土師器のロクロ成形皿で、外面に煤が付着し、内面コゲが付着していることから灯明皿に使用されたと思われるものである。E00A243～E00A248は土師器の小皿で、E00A243が非ロクロ成形皿1類のもの、E00A244～E00A248は非ロクロ成形皿3類のもので、E00A244は底部に焼成後の穿孔がある。E00A248は板状になるものである。E00A249は土師器の内耳鍋で、丸底の底部に三足が付き、内部がやや深めになる。E00A250は平瓦で、凹面の煤の付着状況から葺いた平瓦の右上部部分と思われる。

E00A251は鉄釉皿の体部片を転用した小型の加工円盤、E00A252は長石釉丸碗の底部片を転用した大型の加工円盤で、側面を研磨している。E00A253は土師器の小皿で、非ロクロ成形皿3類のもの、E00A254は土師器の筒型台で、使用方法などは不明のものである。

00A区トレンチ、表土掘削（E00A255～E00A270）

E00A255・E00A256は天目茶碗で、E00A255が大窯第4段階前半のもの、E00A256が大窯第4段階末のものである。E00A257は長石釉鉄絵丸碗で登窯第1小期のもので、内面口縁部に直線文1条、外面口縁部に直線文2条と渦巻文の鉄絵がみられる。E00A258は長石釉小杯で大窯第4段階末のもの、外面底部に煤が濃く付着し、内面に被熱痕がみられる。E00A259は灰釉丸皿で大窯第3段階前半のもの、E00A260は灰釉内禿皿で大窯第3段階後半のものである。E00A261は三足が付く灰釉香炉で大窯第4段階のもの、E00A262は緑釉香炉蓋で大窯第4段階末～登窯第1小期のもので、落し蓋である。E00A263は長石釉薬鉄絵菊皿で大窯第4段階後半のもの、内面底部に草本の鉄絵がみられる、E00A264は長石釉鉄絵向付で大窯第4段階末のもの、体部から口縁部が稜を持って外反するもので、口縁端部の三方が内側に折り曲げられる、内面体部を蔓草文と鳥の鉄絵2単位がめぐる。E00A265は鉄釉水注か壺の底部で、大窯第4段階末～登窯第1小期のものである。E00A266は赤物の常滑産鉢で内面に煤が付着している、また内面に「×」の線刻がみられる。E00A268は土師器の内耳鍋で丸底の底部から球形の体部となり、口縁部がやや内湾しておわる。E00A269は丸瓦で、凹面は布目痕の上をナデ調整、凸面はナデ調整のもの、E00A270は平瓦で凹面は弧引き痕の上をナデ調整、凸面はナデ調整がみられる。E00A271は鴟尾の一部と思われるもので、円形の凹み部分に金箔が残る。

（2）62D区・63D区（図56～図59）

62D区と63D区の出土遺物は、00A区から東へ続くSX8001に含め、00A区の遺構・遺物を考える上で重要と考えられたことから、特徴のある出土遺物の100点を図化した。00A区と同様で城下町Ⅲ-2期（大窯第4段階後半～登窯第1小期）の遺物を主体とする。

62D区SD8005（E62D001～E62D007）

E62D001～E62D007は土師器で、E62D001・E62D002・E62D007は体部上半に穿孔のある

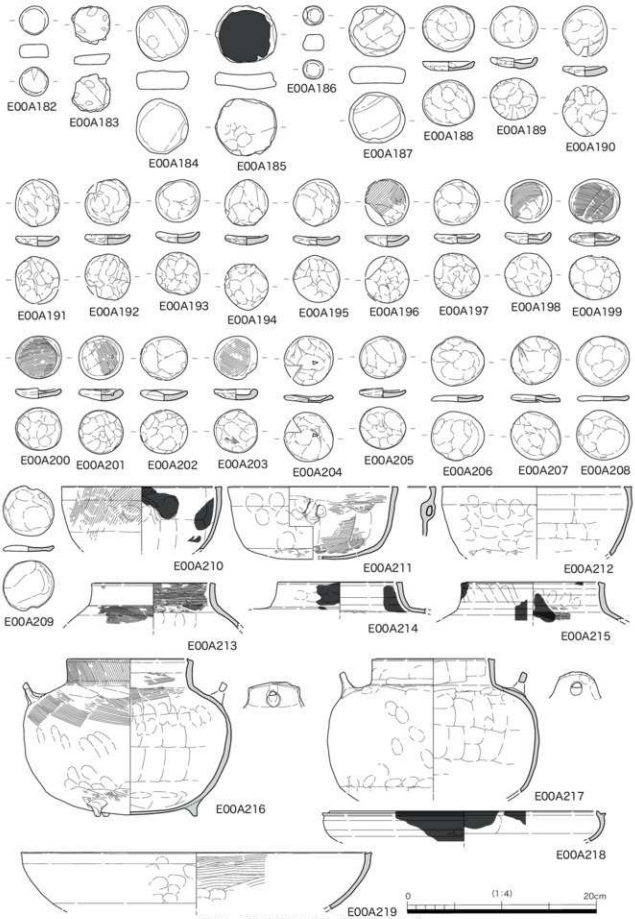


図54　00A区出土土器・陶磁器（1：4）

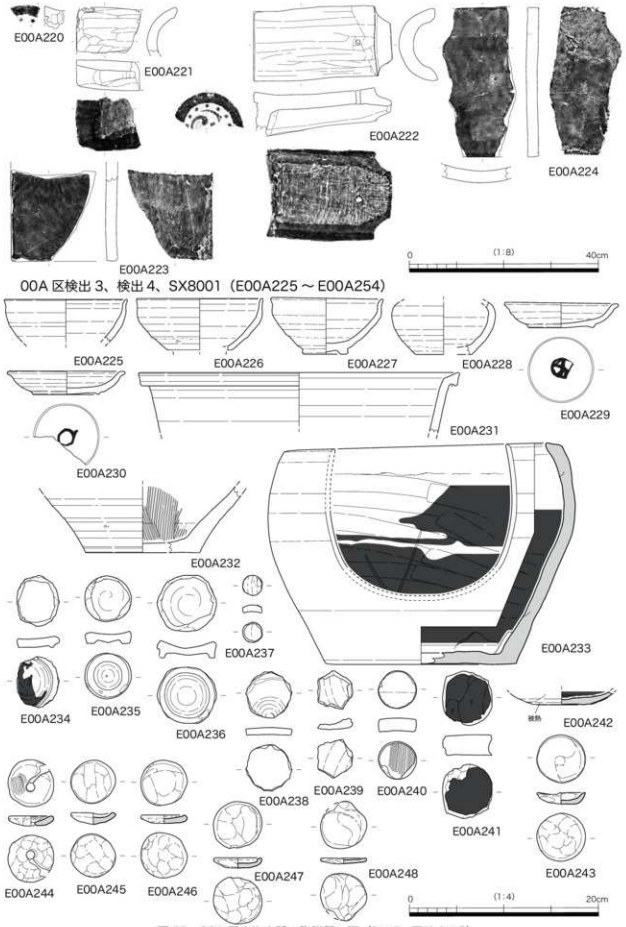
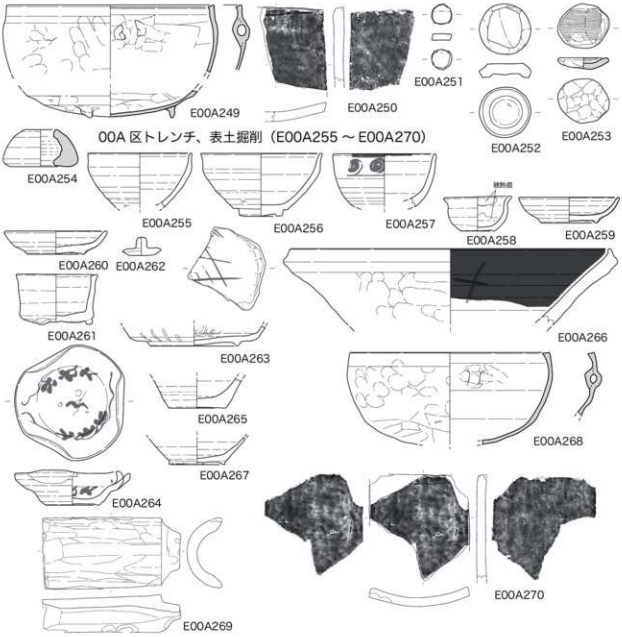


図 55　00A 区出土土器・陶磁器・瓦（1：4、瓦は 1：8）



62D 区 SD8005（E62D001 ～ E62D007）

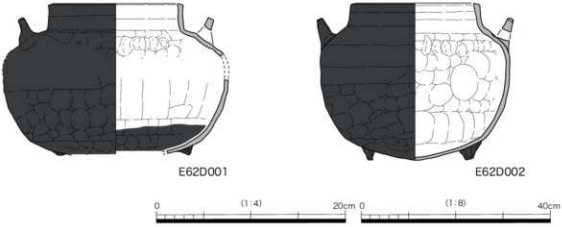


図 56　00A 区・62D 区出土土器・陶磁器・瓦（1：4、瓦は 1：8）

把手が付く茶釜形鍋で、E62D002はE62D001に比べて肩部が張る、E62D007はその把手の部分である。E62D003・E62D004は内耳鍋で内・外面に横ナデ調整が残り、E62D004の内面には横ハケ調整の痕跡が残る。E62D005・E62D006は小皿でE62D005は非ロクロ成形皿1類、E62D006は非ロクロ成形皿3類の板状のものである。

62D区SD8009（E62D008～E62D009）

E62D008は鉄釉口広有耳壺で、大窯第3段階～第4段階の底部から筒状に口縁部にいたるもの、E62D009は土師器の内耳鍋で、口縁部径17.3cm、器高8.85cmの小型のものである。

62D区SD8010（E62D010）

E62D010は大窯第3段階前半の天目茶碗である。

62D区SD8011（E62D011）

E62D011は焙烙鍋で口縁部径29.8cmの大型のもの、煤などの付着はみられない。

62D区SE8002（E62D012～E62D023）

E62D012は登窯第1小期の天目茶碗、E62D013・E62D014は長石釉端反皿で、E62D013が登窯第1小期、E62D014が大窯第4段階後半のものである。E62D015は磁器の染付皿で、外面に染付の直線文1条と絵、内面に花押文がみられる。E62D016は口縁部が端反りになる鉄釉大皿で、大窯第4段階のものである。E62D017は土師器の内耳鍋で、口縁部径15.5cm、器高8.5cm前後の小型のもの、E62D018は底部から丸く体部が張り、頸部が細くなる鉄釉徳利で、外面体部上半には灰釉が流し掛けされている、大窯第3段階のものである。E62D019は大窯期の鉄釉小瓶で、E62D020は大型の加工円盤で灰釉三叉文丸皿か端反皿底部を転用したもの、E62D021は土師器の皿で、ロクロ成形皿3類の丸皿、E62D022・E62D023は土師器の小皿で口縁部に横ナデ調整がみられる非ロクロ成形皿1類のものである。

62D区SE8003（E62D024）

E62D024は大型の加工円盤で、内・外面に煤が付着する常滑産鉢体部片を転用したもので、側面を研磨する。

62D区SK8026（E62D025）

E62D025は土師器の小皿で口縁部に断続横ナデを施す非ロクロ成形皿2類のものである。

62D区SK8032（E62D026）

E62D026は長石釉の鼠志野角向付で、外面体部に線刻の垂下直線文4条がみられる。大窯第4段階後半のものである。

62D区SX8001（E62D027～E62D060）

E62D027～E62D029は天目茶碗で、E62D028が大窯第4段階末のもの、E62D029が大窯第3段階後半のもので、口縁端部と外面体部下半に煤が付着し、口縁端部が細かく欠損することから、灰落としのように使用された可能性がある。E62D030は登窯第1小期の灰釉小杯で、外面に煤が付着する。E62D031は登窯第1小期の長石釉鉄絵筒型向付で、外面体部に直線文4条の鉄絵がみられる。E62D032は長石釉鼠志野ひだ向付で、内面口縁部に線刻の斜交子文がめぐる。E62D033は灰釉端反皿で、E62D034は大窯第4段階後半の長石釉丸皿である。E62D035は登窯第1小期の長石釉鉢で、内・外面に強い被熱痕がみられる。E62D036・E62D037は登窯第1小期の長石釉鉄絵大皿で、E62D036が体部片、E62D037が底部片で内面に鉄絵がみられる。E62D038は黄瀬戸折縁大皿で、内面口縁部に縁釉の「V」字文、底部に縁釉がみられる、登窯第1小期のものである。E62D039・E62D040は磁器の染付皿で、E62D039は内面に村落絵、外面底部と高台部に直線文1条が、E62D040は内面底部に瑞雲文がみられる。E62D041は尾張産の灰釉系陶器の小皿で尾張第5型式のもの、E62D042は窯道具のエンゴロで大窯第4段階～登窯第1小期のもの、E62D043は焼締陶器の壺で口縁部が内傾しておわるもの、E62D044・E62D045は常滑産の甕の底部で内面に煤が付着している、E62D046は土師器の火鉢の脚部、E62D047は～E62D051は加工円盤で、E62D047は中型のもの、その他は大型のもので、転用される元はE62D047が磁器染付皿の底部片、E62D048が擂鉢の底部片、E62D049が天目茶碗の底部片、E62D050が平瓦片、E62D051が擂鉢の体部片である。E62D047～E62D049・E62D051は側面の一部・全体を研磨している。E62D052～E62D058は土師器

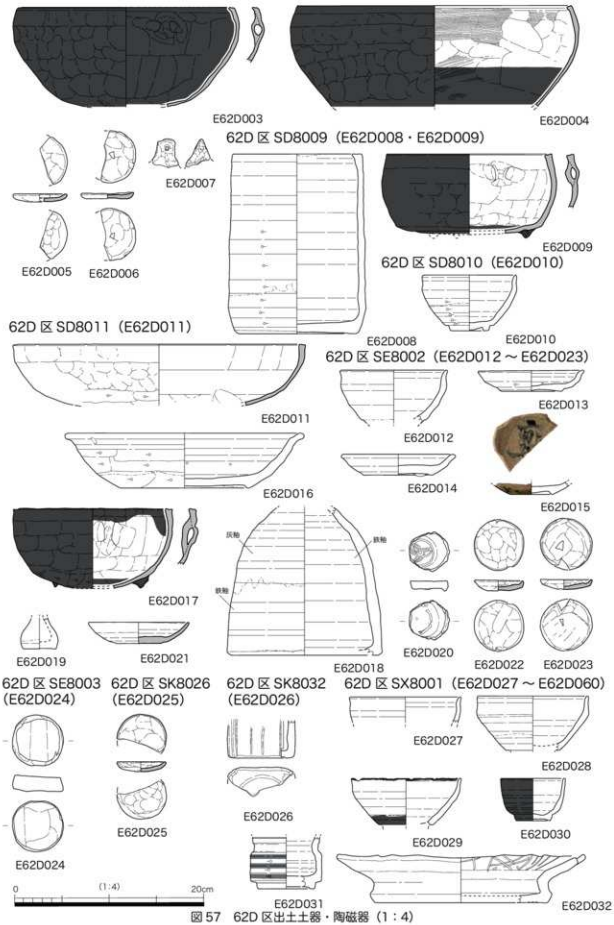


図57　62D 区出土土器・陶磁器（1：4）

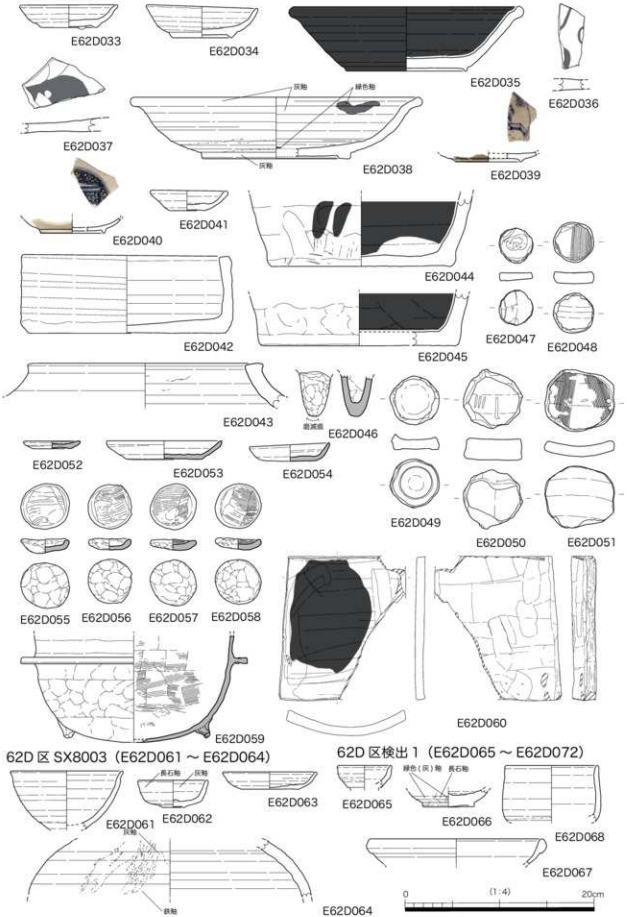


図 58　62D 区出土土器・陶磁器・瓦（1：4、瓦は 1：8）

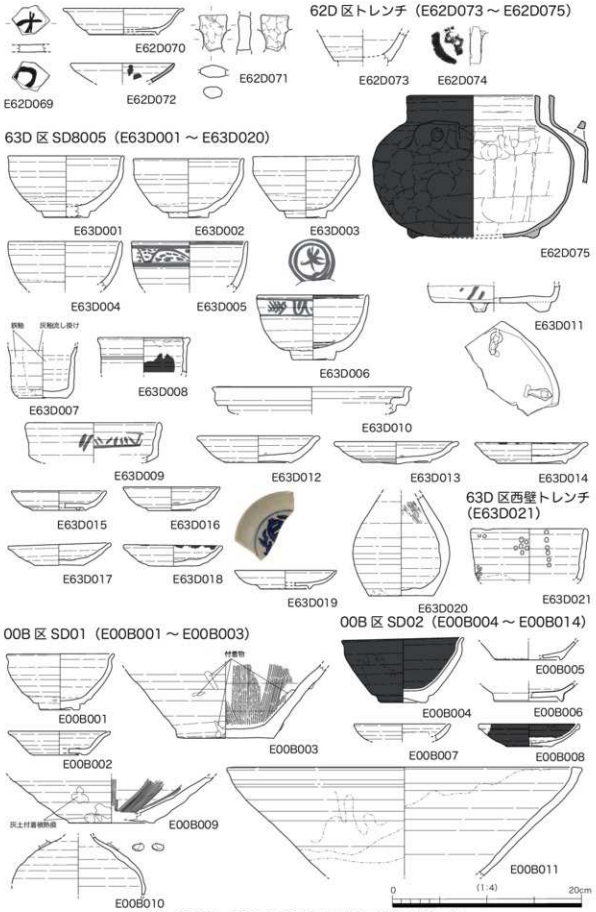


図59　62D 区・63D 区・00B 区出土土器・陶磁器（1：4）

の皿で、E62D052はロクロ成形皿1類の小皿、E62D053はロクロ成形皿2類の皿、E62D054はロクロ成形皿3類の皿、E62D055は非ロクロ成形皿2類の小皿、E62D056～E62D058は非ロクロ成形皿3類の小皿である。E62D059は土師器の羽付釜形鍋で丸底の底部に三足が付く。E62D060は凹面に煤が付着する平瓦で、長さ30.6cm、幅27.65cm、厚み5.35cmの台形状のものである。

62D区SX8003（E62D061～E62D064）

E62D061は登窯第1小期の天目茶碗、E62D062は大窯第4段階後半の長石釉小碗で、内面に灰釉が施されている、E62D063は大窯第2段階の重圏皿、E62D064は祖母懐茶壺の肩部で鉄釉の上に灰釉が流し掛けされている。

62D区検出1（E62D065～E62D072）

E62D065は大窯第4段階後半の小天目茶碗、E62D066は長石釉織部碗で緑色釉が流し掛けされている。E62D067は口縁部が外面側に肥厚する白磁碗、E62D068は大窯第4段階後半の鉄釉筒型碗、E62D069は大窯第1段階の灰釉緑釉挟み皿で外面底部に墨書「○〻」がみられる。E62D070は白磁の端反皿、E62D071は土師器の取手状不明品、E62D072はロクロ成形皿3類の土師器の皿で、内面底部に煤が付着することから、灯明皿に使用されたものと思われる。

62D区トレンチ（E62D073～E62D075）

E62D073は中国産と思われる天目茶碗、E62D074は土師器の茶釜形鍋で、内面にコゲ、外面に煤が付着する。E62D075は軒丸瓦の瓦当部で、瓦当部径12.0cm前後で素縁に桐紋がある清洲城下町遺跡のM401形式のものである。

63D区SD8005（E63D001～E63D020）

E63D001～E63D003は大窯第4段階～登窯第1小期の天目茶碗、E63D004は登窯第1小期の青織部平碗、E63D005・E63D006は登窯第1小期の長石釉鉄絵丸碗で、E63D005は内面口縁部に直線文1条、外面体部に直線文2条と波状文1条、列点文充填の鉄絵が、E63D006は内面口縁部に直線文1条、底部に直線文2条、花紋鉄絵、外面口縁部に直線文2条、斜格子文・花弁文鉄絵がみられ、定林寺窯産の可能性がある。E63D007は登窯第1小期の鉄釉茶入で外面に灰釉の流し掛けがみられる。E63D008は灰釉筒型香炉で外面体部に沈線直線文2条がある。E63D009・E63D010は大窯第4段階後半の長石釉向付で、E63D009は内面体部に直線文2条と垂下直線文の鉄絵がみられ、E63D010は比較的浅い器形で、口縁部が鍵状の受口となるものである。E63D011は大窯第4段階後半の長石釉鉄絵角向付で、外面体部下半に斜行線文の鉄絵があり、底部に4足が付く。E63D012～E63D014は大窯第4段階後半の長石釉端反皿で、E63D014は内面口縁部に黒色有機物が付着する、灯明皿に使用か。E63D015・E63D016は灰釉丸皿で、E63D015が大窯第4段階前半のもの、E63D016が登窯第1小期のものである。E63D017・E63D018は大窯第3段階の重圏皿で、E63D018の口縁部にはスス付着しており、灯明皿に使われたと思われる。E63D019は磁器の染付皿で、内面底部に直線文1条と文字文がみられる。E63D020は大窯第4段階後半の長石釉徳利で底部から体部がやや丸みをもってふくらみ、頸部が細くなるものである。

63D区西壁トレンチ（E63D021）

E63D021は登窯第1小期の織部向付で、内・外面に緑釉が施され、内面に六曜円形刺突文、垂下直線円形刺突文、外面に六曜円形刺突文がみられる。

（3）00B区（図59～図67）

00B区の出土遺物は、中世（鎌倉時代）から城下町Ⅲ-2期（大窯第4段階後半～登窯第1小期）の遺物があり、特に城下町Ⅲ期に存在した清洲城に伴う瓦が多数出土していることが特徴である。

00B区SD01（E00B001～E00B003）

E00B001は大窯第3段階後半の天目茶碗、E00B002削り出し高台から体部が斜め上に立ち上がり、口縁部が外折して終わる鉄釉腰折皿で大窯第3段階前半のもの、E00B003は鉄釉擂鉢で大窯第2段階～第3段階のものである。

00B区SD02（E00B004～E00B014）

E00B004は大窯第2段階の天目茶碗、E00B005は白磁碗の底部、E00B006は青磁碗の底部、E00B007は灰釉内禿皿、E00B008は

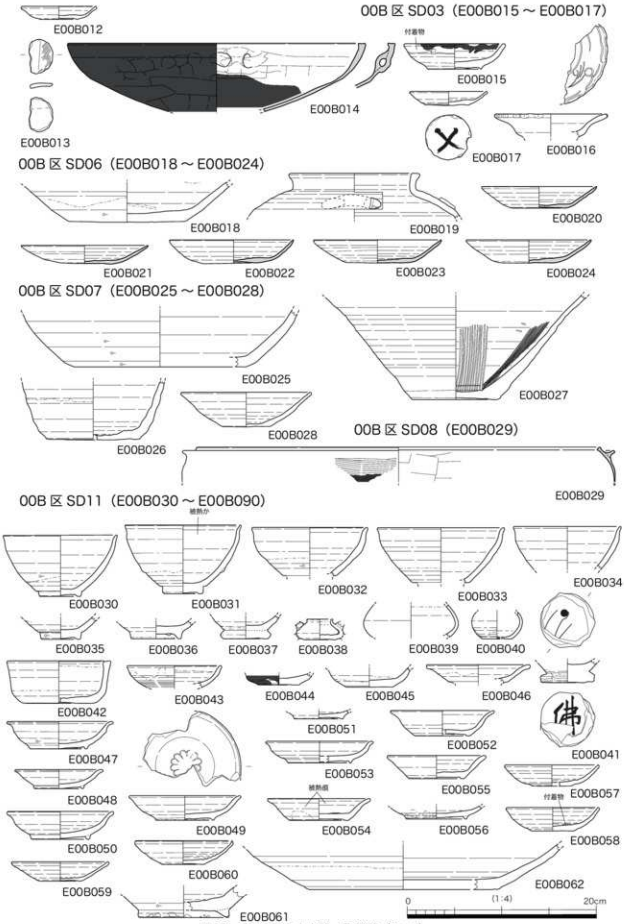


図 60　00B区出土土器・陶磁器（1：4）

重圏皿、E00B009は擂鉢、E00B010は鉄釉双耳徳利で大窯第3段階前半のもの、E00B011は鉄釉鉢で口縁部径35.7cm、E00B012は東濃型灰釉系陶器の小皿、E00B013は加工円盤で古式土師器甕の体部片を転用したもの、E00B014は土師器の焙烙鍋で口縁部径31.3cmである。

00B区SD03（E00B015～E00B017）

E00B015は大窯第2段階の灰釉丸皿で大窯第2段階のもの、口縁部の煤が顕著に付着しており灯明皿として使われたものと思われる。E00B016は青磁の平皿で、内面に唐草文の線刻がみられる。E00B017は東濃型灰釉系陶器小皿で明和窯式のものである。

00B区SD06（E00B018～E00B024）

E00B018は灰釉盤類で古瀬戸後4期古段階のもの、E00B019は口縁部が短く立ち上がる大窯期の鉄釉双耳壺、E00B020～E00B024は土師器の皿で口縁部が底部から斜め上にほぼ真っ直ぐ広がるロクロ成形皿2類のものである。

00B区SD07（E00B025～E00B028）

E00B025は灰釉盤類で古瀬戸後1期～後2期のもの、E00B026が鉄釉壺か瓶、E00B027は擂鉢で古瀬戸後4期新段階のもの、E00B028は東濃型灰釉系陶器山茶碗で脇ノ島窯式のものである。

00B区SD08（E00B029）

E00B029は土師器の羽付鍋である。

00B区SD11（E00B030～E00B090）

E00B030は灰釉天目茶碗で、E00B031～E00B035は天目茶碗でE00B031・E00B033が大窯第1段階のもの、E00B032が大窯第3段階前半のもの、E00B034が古瀬戸後4期新段階のもの、E00B035が古瀬戸後4期古段階のものである。E00B036は灰釉丸碗で大窯第1段階のものである。

E00B037は灰釉仏餉具で古瀬戸後3期のもの、E00B038は鉄釉水柱で大窯第4段階のものか、E00B039・E00B040は鉄釉茶入で大窯第1段階～第2段階のものである。E00B041は大窯第1段階の鉄釉仏餉具で外面底部に「佛」の墨書が残る、E00B042は灰釉筒形香炉で古瀬戸後4期古段階のものである。

E00B043～E00B060は瀬戸・美濃産陶器の皿類で、E00B043は大窯第1段階の鉄釉緣釉小皿、E00B044～E00B046は古瀬戸後4期新段階のもので、E00B044・E00B045が灰釉緣釉小皿、E00B046は灰釉腰折皿、E00B047～E00B050は大窯第1段階～第2段階の灰釉端反皿で、E00B049の内面底部に線刻の菊花文がみられる。E00B051は大窯第2段階～第3段階の灰釉丸皿、E00B052は大窯第2段階の灰釉稜皿である。E00B053は大窯第1段階の鉄釉端反皿、E00B054・E00B055は大窯第3段階前半の鉄釉稜皿、E00B056大窯第1段階～第2段階の鉄釉端反皿か丸皿である。E00B057～E00B060は重圏皿で、E00B057・E00B058が大窯第2段階のもの、E00B059が大窯第3段階のもの、E00B060が生田窯式のものである。

E00B061は古瀬戸後1期～後2期の灰釉盤類、E00B062は瀬戸産尾張10型式の灰釉系陶器の擂鉢、E00B063は古瀬戸後4期の鉄釉大皿で内面にはね上げの太い線刻がみられる、E00B064は古瀬戸後期の鉄釉盤類である。

E00B065は白磁の端反碗、E00B066は白磁の端反皿である。

E00B067～E00B075は擂鉢で、E00B067・E00B068・E00B073が古瀬戸後4期新段階のもの、E00B069・E00B070が大窯第1段階のもの、E00B071が大窯第2段階のもの、E00B072が大窯第3段階前半のもの、E00B075が大窯第1段階のものである。

E00B076は頸部が直立して口縁部がやや開く常滑産壺、E00B077は口縁部が肥厚して外面に端面をもつ鉄釉甕、E00B078は古瀬戸後4期の鉄釉口広有耳壺、E00B079・E00B080は鉄釉徳利で、E00B079が大窯期に、E00B080が古瀬戸後4期のものである。

E00B081は・E00B082は東濃型山茶碗で、E00B081が明和窯式、E00B082は生田窯式である。

E00B083～E00B090は土師器で、E00B083・E00B084はロクロ成形皿3類に分類でき、E00B083の内面底部に墨書がみられる、E00B084の内・外面口縁部に煤が付着しており灯明皿に使用されたものと思われる。E00B085

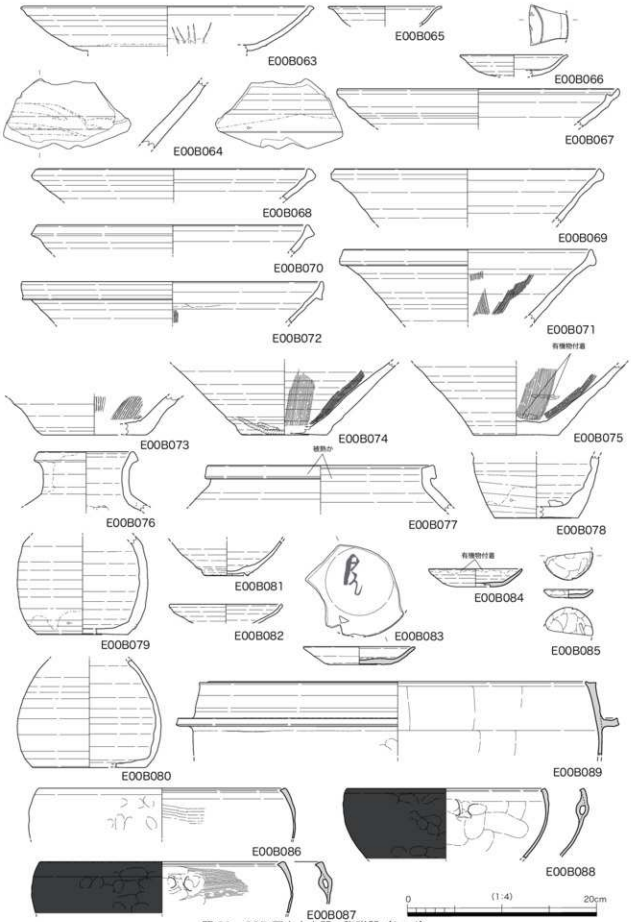


図61　00B区出土土器・陶磁器（1：4）

は非ロクロ成形皿1類の小皿である。E00B086～E00B088は内耳鍋、E00B089・E00B090は羽付鍋である。

00B区SK04（E00B091～E00B094）

E00B091は鉄釉土瓶の底部で古瀬戸後4期のもの、E00B092は常滑産甕で体部から口縁部にかけて緩やかにすぼまり、口縁端部が上下に少し伸びて外側に面をもつもの、E00B093は土師器のロクロ成形皿、E00B094は土師器の非ロクロ成形皿2類の小皿である。

00B区SK10（E00B095）

E00B095は尾張型山茶碗で、尾張7型式のものである。

00B区SK16（E00B096）

E00B096は土師器の皿でロクロ成形皿3類のものである。

00B区SD27（E00B097）

E00B097は土師器の皿でロクロ成形皿2類のものである。

00B区SK30（E00B098・E00B099）

E00B098は平瓦片を転用した加工円盤、E00B099は瓦当面が方形状の飾り瓦で瓦当部に三桐紋に雲文があるもので、凹部に金箔が残る。

00B区SK31（E00B100）

E00B100は土師器の皿で、ロクロ成形皿2類のもの、内面口縁部に煤が付着する部分が2ヶ所あり、灯明皿に使われた可能性がある。

00B区SX01（E00B101～E00B117）

E00B101は灰釉端反皿で大窯第1段階のもの、E00B102は窯道具のエンゴロで大窯第1段階のものである。E00B103は常滑産甕の底部片、E00B104・E00B105は東濃型山茶碗でE00B104は明和窯式のもので外面底部に墨書「×」がある。E00B105は窯原式のものである。E00B106～E00B117は土師器で、E00B106はロクロ成形皿2類の皿、E00B107～E00B117は非ロクロ成形皿1類の小皿である。E00B117は内耳鍋で、口縁部径26.3cmを測る。

00B区SX02（E00B118～E00B159）

E00B118は灰釉丸碗で大窯第1段階のもの、E00B119は鉄釉燭台で古瀬戸後3期～後4期のもの、E00B120・E00B121は灰釉折縁皿で大窯第4段階前半のものである。E00B122は磁器の染付小皿で、内面底部に菊花文、外面体部下半に鋸歯文がめぐる。E00B123は擂鉢で大窯第2段階のもの、E00B124は常滑産甕で、口縁端部を上下に幅広く外側に折り曲げたもの、中野11型式に属する。E00B125は尾張型灰釉系陶器の小皿で、尾張第8型式～第9形式のものである。E00B126・E00B127は尾張型の陶丸で、E00B128は加工円盤で擂鉢体部片を転用したもの、E00B129は土師器の小皿で非ロクロ成形皿3類のものである。

E00B130～E00B159は瓦で、E00B130～E00B139は丸瓦でE00B130は長さ28.8cm、幅16.65cm、E00B135は長さ31.0cm、幅17.1cmで、E00B137は幅15.3cm、E00B138は幅15.8cmを測る。表面に残る調整は、凹面に粘土の弧引き痕後成形時の布圧痕・縄目痕が残る、一部にナデ調整がされている、凸面はナデ調整痕がみられる。凹面の痕跡ではE00B130に弧引きAの痕跡、E00B135～E00B137に弧引きBの痕跡がみられる。E00B130～E00B136の軒丸瓦の瓦当部紋様は、E00B130・E00B131は素縁に三巴文、12個の珠文のM151形式、E00B132は素縁に三巴文、16個の珠文のM121b形式、E00B133は素縁に三巴文、8個の珠文のM341a形式、E00B134・E00B135は素縁に三巴文、16個の珠文のM221b形式、E00B136は素縁に珠文が残る、形式は不明である。E00B138は凹面に瓦の留板が貼り付けられており、E00B139は凸面にナデ調整後に釘穴が穿孔されている。E00B140～E00B151は平瓦で、大きさがわかるものでは、E00B146が長さ29.5cm、E00B148が幅25.9cm、E00B149が長さ33.3cm、幅29.6cm、E00B150が長さ33.3cm、幅28.8cm、E00B151が長さ34.1cm、幅28.1cmを測る。調整は凹面にE00B148で弧引きAの痕跡、E00B151で布目痕が一部にみられるが、基本的にナデ調整が全面になされている。凸面はE00B148は弧引きAの痕跡が一部に残るが基本的にナデ調整が全面になされている。瓦当部の文様はE00B140は素縁に桐文と唐草文のH102b形式、E00B141は素縁に桐文に4反転する均整唐草文のH102b形式、E00B142は素縁に唐草

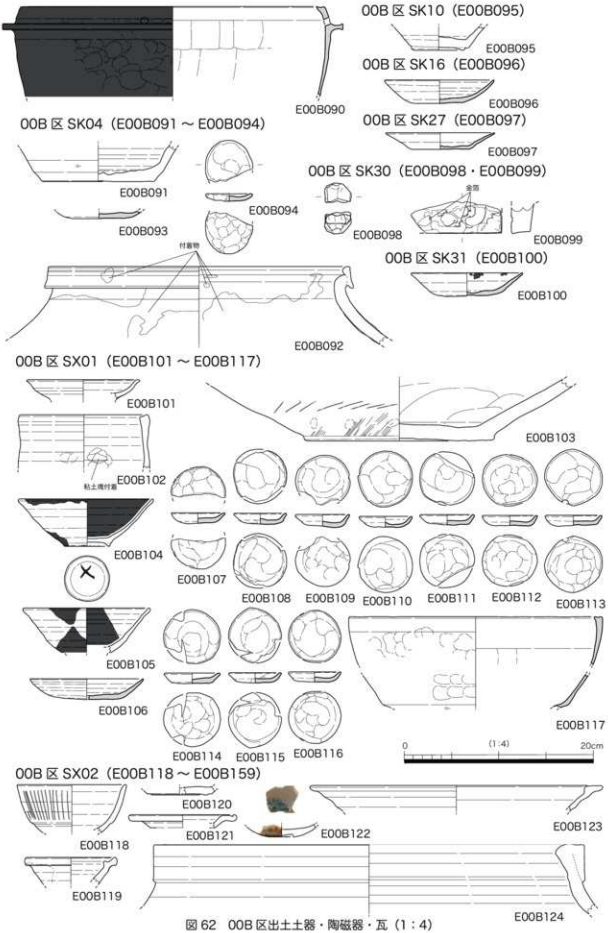


図62　00B区出土土器・陶磁器・瓦（1：4）

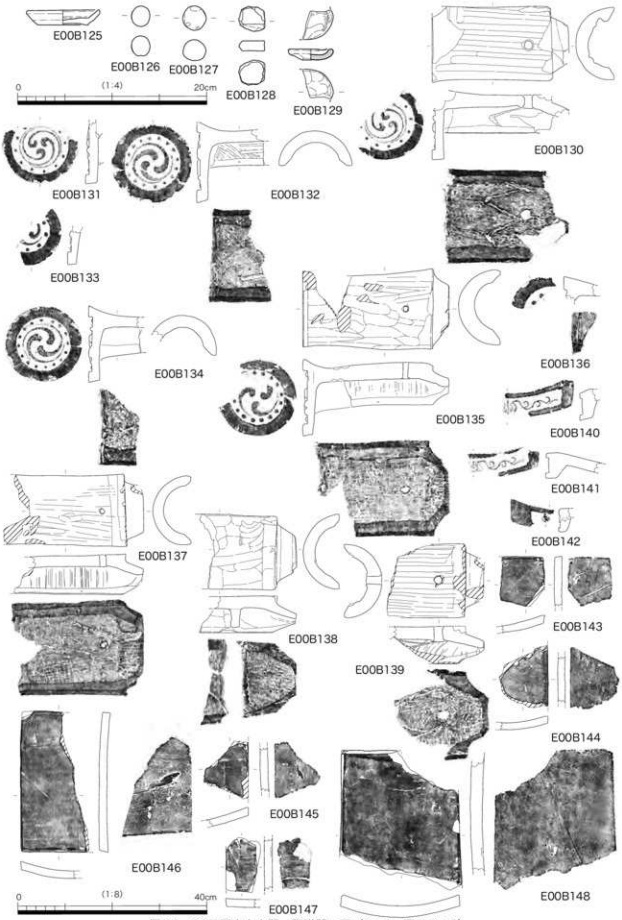


図63　00B区出土土器・陶磁器・瓦（1：4、瓦は1：8）

文がみられる。E00B152・E00B153は飾瓦で、E00B152は凸面に素縁がみられるもの、凹面に弧引きBと思われる痕跡があり、凸面・凹面ともナデ調整で仕上げられている、E00B153は凸面に桐文があるもので、釘穴が穿孔されている、凸面・凹面ともナデ調整で仕上げられている。E00B154・E00B155は輪違い瓦で、縦・横の長さが14.0cm～15.7cmの丸瓦のような湾曲をもつ台形状である。凸面・凹面とも弧引きBの痕跡が残り、E00B154の凹面には縄目痕もある、どちらも凸面はナデ調整がみられる。E00B156～E00B159は道具瓦で、E00B156は長方形状で先端部の厚みが薄くなる、E00B157は凸面に沈線が2条みられる、E00B158は隅瓦と思われるもので、角部がカットされるもの、E00B159は残る一辺が13.2cmの平瓦状のものである。

00B区SX03（E00B160～E00B175）

E00B160は加工円盤で古瀬戸後4期新段階の灰釉腰折皿の底部を転用したもの、E00B161は鉄釉ひだ稜皿で大窯第3段階のもの、E00B162は染付皿で内面底部に直線文2条と草本絵、外面体部に唐草文、高台部に直線文3条がみられる。E00B163は常滑産甕で、外反して開く口縁部の端部が上下に少し大きく面を作るものである。

E00B164～E00B167は土師器のロクロ成形皿で、E00B164～E00B166は口縁部の内・外面に煤が付着しており、灯明皿に使われたもの、E00B164はロクロ成形皿2類の皿、E00B165はロクロ成形皿2類の小皿、E00B166・E00B167はロクロ成形皿3類の皿である。

E00B168～E00B175は瓦で、E00B168は丸瓦、E00B169～E00B171は軒平瓦で、E00B169の瓦当部は素縁に桐文と唐草文、E00B170の瓦当部は素縁に三子葉文と唐草文、E00B171の瓦当部は素縁に唐草文がみられる。E00B172・E00B173は平瓦で、E00B173の幅は26.4cmである。E00B174・E00B175は道具瓦で、E00B174は凸面に釘穴が見られる。

00B区SX04（E00B176～E00B191）

E00B176は大窯第1段階の灰釉端反皿で内面底部に菊花文の印刻、E00B177は大窯第3段階の灰釉丸皿、E00B178は焼き締めの重圏皿で大窯第1段階のもの、E00B179は灰釉折縁深皿で古瀬戸後2期のもの、E00B180は内面に灰釉がみられる盤類で三足が付くもの、E00B181～E00B183は擂鉢で、E00B181が古瀬戸後4期新段階のもの、E00B182が大窯第3段階前半のもの、E00B183が大窯第1段階のものである。E00B184は鉄釉壺か瓶、E00B185は鉄釉徳利、E00B186は大窯第3段階～第4段階のものである、E00B187は古瀬戸後4期の鉄釉受口桶、E00B188は大窯期の鉄釉甕である。E00B189・E00B190は東濃型の山茶碗で、E00B189は大洞東窯式、E00B190は明和窯式のものである。E00B191は土師器の内耳鍋である。

00B区SX05（E00B192～E00B199）

E00B192は加工円盤で、常滑産甕の体部片を転用したもので、側面の研磨がされている。E00B193～E00B199は瓦で、E00B193～E00B195は軒瓦で、E00B193の瓦当部は素縁に桐文と均整唐草文のみられるH102a形式、E00B194の瓦当部は三子葉文に均整唐草文のあるH112a形式、E00B195の瓦当部は素縁に唐草文がみられる。E00B196・E00B197は平瓦で、E00B197は長さ31．0cmである。E00B198・E00B199は道具瓦で、小さい台形状のものである。

00B区SX06（E00B200～E00B208）

E00B200は楽焼碗で、高台は不明であるが、底部から丸みをもって体部が立ち上がり、口縁部がやや外に折れておわるもので、内面は黒色地に金色に発色する鉛釉、外面は白色地に緑色に発色する鉛釉か。E00B201・E00B202は土師器のロクロ成形皿で、E00B201は口縁部の内・外面に煤が付着することから灯明皿に使われたと思われるもの、E00B202は皿の底部である。

E00B203～00B208は瓦で、E00B203は丸瓦、E00B204・E00B205は軒平瓦でE00B204は幅28.0cmで凸面に桟、凹面の両側面に鰭が付けられている。E00B204の瓦当部は素縁に桐文、均整唐草文のあるH102b形式、E00B205の瓦当部は素縁に唐草文がみられる。E00B206～E00B208は平瓦で、E00B206の凹面に墨痕がみられる。E00B207は幅26.1cm、

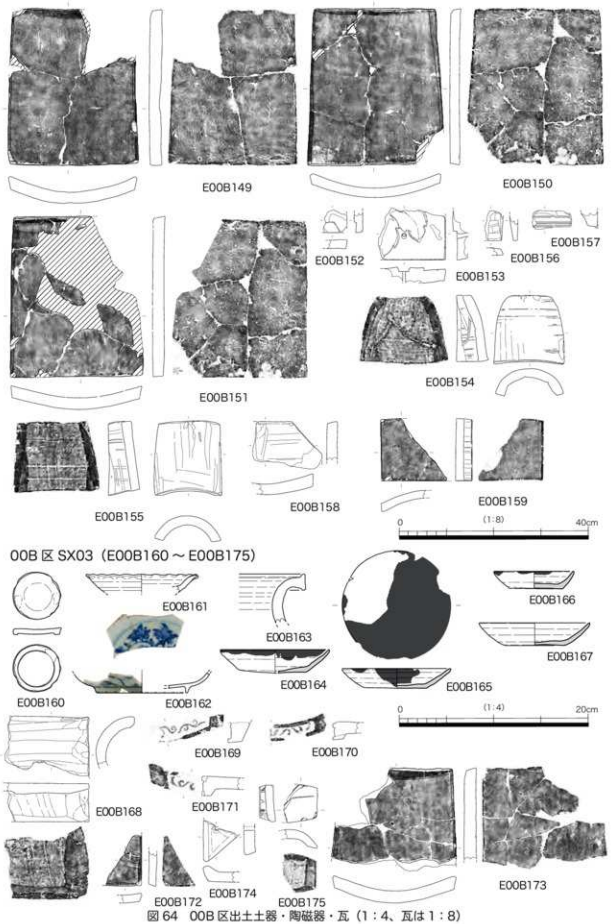
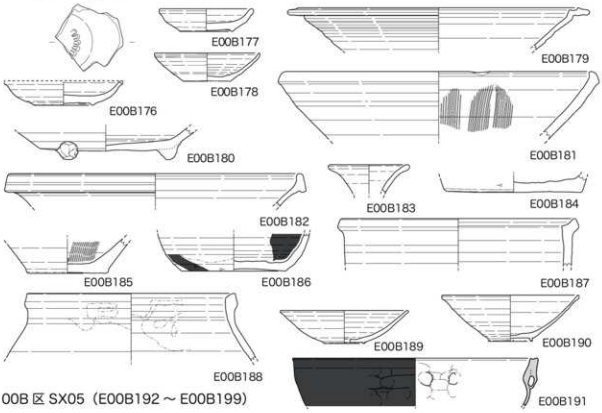
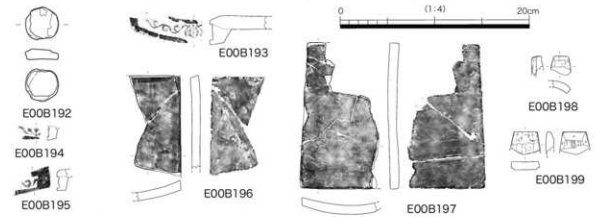


図64　00B区出土土器・陶磁器・瓦（1：4、瓦は1：8）

00B 区 SX04（E00B176～E00B191）



00B 区 SX05（E00B192～E00B199）



00B 区 SX06（E00B200～E00B208）

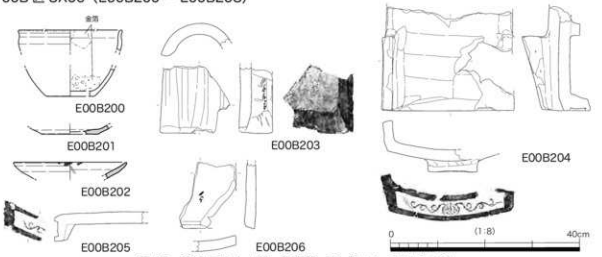


図 65　00B 区出土土器・陶磁器・瓦（1：4、瓦は 1：8）

E00B208は長さ32.2cm、幅27.9cmを測る。E00B208は凸面・凹面ともに弧引きAの痕跡後ナデ調整されている。

00B区SX07（E00B209～E00B231）

E00B209は大窯第4段階前半の天目茶碗、E00B210～E00B212は青磁の碗で、E00B210は外面口縁部に雷文の線刻があり、E00B211は口縁部径26.0cm、E00B212は内面底部に直線文1条、線刻文があるものである。B00B213は染付碗で、内面口縁部に直線文1条、外面口縁部に直線文1条がみられる。E00B214は大窯第1段階の灰釉端反皿で内・外面に煤が付着する、E00B215は大窯第1段階の灰釉豆皿、E00B216は大窯第2段階後半の灰釉丸皿、E00B217は大窯第1段階の重圏皿、E00B218は白磁の小皿、E00B219・E00B220は灰釉盤類で、E00B219が古瀬戸後1期～後2期、E00B220が古瀬戸後4期のものである。E00B221は古瀬戸後4期古段階の擂鉢、E00B222は大窯第2段階～第3段階の灰釉徳利、E00B223は大窯期の鉄釉徳利である。E00B224は・E00B225は常滑産鉢で、E00B224の内面には煤が付着する。E00B226は加工円盤で、擂鉢体部片を転用したもの、E00B227・E00B228は土師器の小皿で、非ロクロ成形皿1類のものである。

E00B229・E00B230は土師器の羽付鍋で、E00B229は口縁部径22.0cmの羽から口縁部が強く内傾するもの、E00B230は口縁部径41.7cmの口縁部から羽までが比較的長く立ち上がっているものである。E00B231は土製品の土鈴で摘み部に紐通しの孔が穿孔されている。

00B区NR01（E00B232～E00B243）

E00B232～E00B243は灰釉系陶器で、E00B232～E00B239は東濃型山茶碗、E00B240は尾張型山茶碗、E00B241～E00B243は東濃型小皿で、E00B232～E00B235・E00B241が明和窯式、E00B236～E00B238が大畑大洞窯式、E00B239が大畑大洞窯式（新）、E00B240が尾張7型式、E00B242・E00B243が白土原窯式のものである。墨書はE00B232の外面底部に「十」、E00B233の外面底部に「○」、E00B235の外面底部に「犬」、E00B236の外面底部に「の」、E00B238の外面底部に「十」、E00B239の外面底部に墨書、E00B242の外面底部に「可こ」、E00B243の外面底部に「南」がみられる。

00B区検出1（E00B244～E00B258）

E00B244は大窯第3段階前半の天目茶碗、E00B245は登窯第4小期の灰釉丸碗、E00B246・E00B247は大窯第1段階の灰釉端反皿でE00B246内面底部中央部に菊花文印刻がみられる。E00B248・E00B249は大窯第2段階の灰釉丸皿、E00B250は大窯第2段階の灰釉稜皿、E00B251は大窯第2段階の重圏皿である。E00B252は磁器の染付皿で、内面口縁部に直線文2条、底部に直線文2条と渦巻文などが、外面口縁部に直線文1条、草本絵がみられる。E00B253は大窯第2段階の擂鉢、E00B254は大窯第1段階の鉄釉花瓶である。E00B255・E00B256は東濃型山茶碗で明和窯式のものである。E00B257は土師器の羽付鍋、E00B258は鬼瓦の一部と思われ瓦当部に沈線による直線文と円形文がみられる。

00B区検出2（E00B259～E00B262）

E00B259は大窯第1段階の灰釉端反皿、E00B260は常滑産鉢で、口縁部径20.6cm、底部径13.8cm、器高8.45cmを測る。E00B261・E00B262は東濃型の山茶碗で、E00B261は明和窯式で外面底部に墨書「十」がある、E00B262は白土原窯式のものである。

00B区表土掘削等（E00B263～E00B267）

E00B263は磁器の染付碗で、内面口縁部に直線文3条と波状文、外面体部上半に直線文1条がみられる。E00B264は瓦当部が素縁に三角形文と唐草文がみられるH341b形式のもの、E00B265・E00B266は湾曲がある小型の道具瓦である。E00B267は大窯期の鉄釉茶入である。

（4）01区（図67・図68）

01区の出土遺物は、城下町後期のものがほとんどで、少数ではあるが古墳時代前期の古式土師器や古代の灰釉陶器、土師器などがある。

01区01SD（E01001）

E01001は鉄釉花瓶で、細い頸部から口縁部が大きくひらくもので、口縁部径13.1cmのものである。

01区02SD（E01002～E01006）

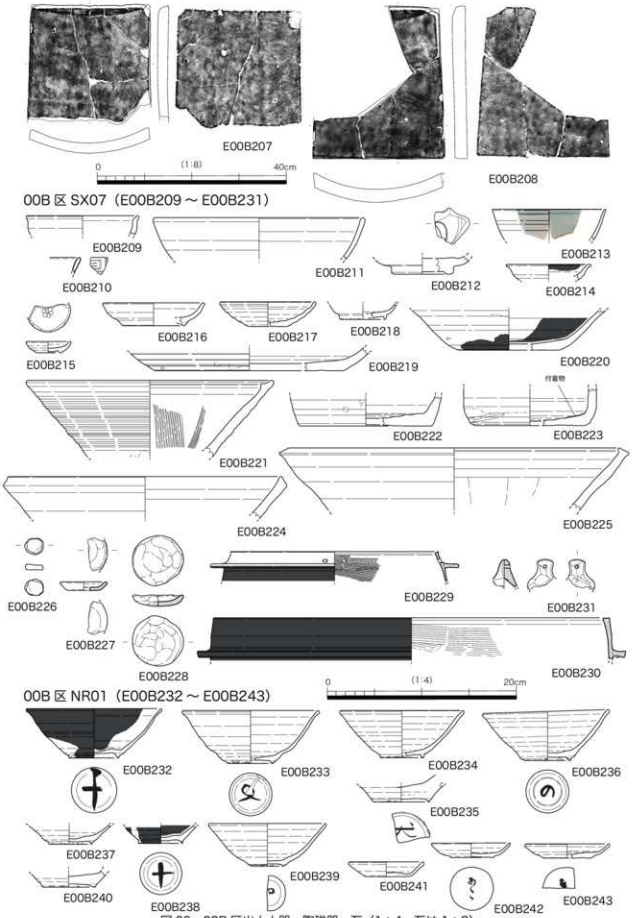
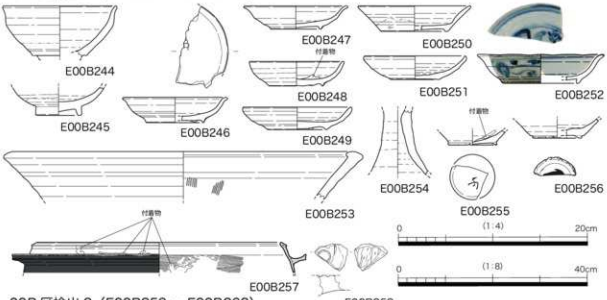
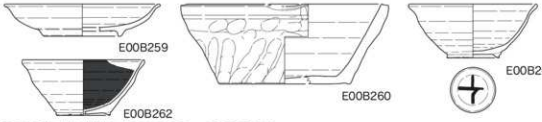


図 66　00B 区出土土器・陶磁器・瓦（1：4、瓦は 1：8）

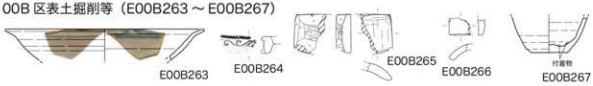
00B 区検出 1（E00B244 ～ E00B258）



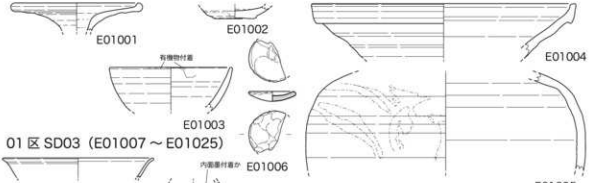
00B 区検出 2（E00B259 ～ E00B262）



00B 区表土掘削等（E00B263 ～ E00B267）



01 区 SD01（E01001）　01 区 SD02（E01002 ～ E01006）



01 区 SD03（E01007 ～ E01025）

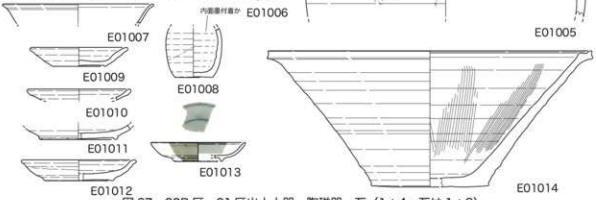


図 67　00B 区・01 区出土土器・陶磁器・瓦（1：4、瓦は 1：8）

E01002 ～ E01004 は瀬戸・美濃産陶器で、E01002 が大窯第 1 段階の灰釉の縁釉ハサミ皿、E01003 が大窯第 3 段階後半～大窯第 4 段階前半の灰釉丸碗、E01004 が大窯第 3 段階前半の擂鉢、E01005 は鉄釉に体部上半部に灰釉の流し掛けがみられる祖母壊茶壺、E01006 が土師器小皿で、非ロクロ成形皿 3 類のものである。

01 区 SD03（E01007 ～ E01025）

E01007 は口縁端部が端反りになる白磁碗、E01013 が磁器の染付小皿である。E01008 ～ E01012・E01014 ～ E01017 は瀬戸・美濃産陶器で、時期が判明するものでは大窯第 3 段階～大窯第 4 段階末のもので、E01008 が焼成不良の灰釉茶入、E01009 が灰釉稜皿、E01010 が重圏皿、E01011・E01012 が長石釉皿、E01014 が擂鉢、E01015・E01016 が鉄釉小壺、E01017 が鉄釉徳利の頸部である。E01010 の重圏皿は内外面が被熱しており、灯明皿に使われたものと考えられる。E01018・E01019 は常滑産陶器で、E01018 が甕の底部、E01019 が加工円盤である。E01020 ～ E01025 は土師器で、E01020 ～ E01023 は口縁部が底部から斜め上に直線的に広がるロクロ成形皿 2 類のもの、E01024 がロクロ成形皿 3 類でやや器高の低い丸皿である。

01 区 SK01（E01026）

E01026 は瀬戸・美濃産陶器で大窯第 4 段階後半の長石釉中皿である。

01 区 SK02（E01027）

E01027 は土師器皿でロクロ成形皿 2 類のものである。

01 区 SK05（E01028）

E01028 は瀬戸・美濃産陶器で大窯第 3 段階～第 4 段階の灰釉筒型香炉である。

01 区 SX01（E01029）

E01029 は瀬戸・美濃産陶器で大窯第 3 段階の天目茶碗である。

01 区東壁（E01030）

E01030 は内面に直線文 2 条、外面体部下半に直線文 1 条と草本の鉄絵がある磁器碗である。

（5）17A 区・17B 区（図 68・図 69）

17A 区・17B 区の出土遺物は、古墳時代前期の土師器や古代の須恵器なども出土するが、主体となるのは中世から城下町期に属するもので、瀬戸・美濃産陶器では大窯第 1 段階～大窯第 4 段階前半のものがある。

17A 区 006SK（E17001）

E17001 は土師器の壺で頸部が太く、短くやや外に立ち上がるもの、中世のものか。

17A 区 020SK（E17002・E17003）

E17002 は青磁の皿で、体部下半で稜をもち、口縁部が外反しておわるもの、E17003 は土師器の小皿で、非ロクロ成形皿 2 類のものである。

17A 区 033SD（E17004 ～ E17011）

E17004・E17005 は瀬戸・美濃産陶器で、E17004 が大窯第 1 段階の灰釉端反皿、E17005 は大窯第 2 段階の灰釉丸皿である。E17006 ～ E17009 は土師器皿で、非ロクロ成形皿 3 類のものである。E17010 は瓦当部素縁に三子葉紋・唐草紋・清洲城下町遺跡の H213 形式か H313 形式で、各三子葉が幅狭の剣菱状のものである。

17A 区 034SK（E17011）

E17011 は、瀬戸・美濃産陶器の擂鉢で、大窯第 2 段階～大窯第 3 段階のものである。

17B 区 039SD（E17012 ～ E17014）

E17012 ～ E17014 は土師器の小皿で、口縁部に横ナデ調整がみられる非ロクロ成形皿 1 類のものである。

17B 区 042SD（E17015 ～ E17017）

E17015・E17016 は土師器の皿で、E17015 は底部から丸みをもって口縁部が立ち上がるロクロ成形皿 2 類、E17016 は底部から口縁部が斜めに立ち上がるロクロ成形皿 1 類で口縁部内面・外面にススが濃く付着しており、灯明皿と思われる。E17017 は非ロクロ成形皿 1 類の土師器の小皿で、口縁部内面に煤が付着することから灯明皿と思われる。

17B 区 047SD（E17018）

E17018 は磁器の染付け小皿である。

17B 区 060SE（E17019 ～ E17022）

E17019 ～ E17021 は瀬戸・美濃産陶器で、E17019 が大窯第 3 段階後半の灰釉内禿皿、E17020 が大窯第 3 段階の灰釉丸皿、E17021 が大窯第 4 段階前半の擂鉢である。E17022 は土師器の小皿で、口縁部の横ナデ調整のない非ロクロ成形皿 3 類で、口縁部径 5.5cm である。

17B 区 061SK（E17023）

図68　01区・17区出土土器・陶磁器・瓦（1：4、瓦は1：8）

17A区・17B区 063NR（E17024～E17031）

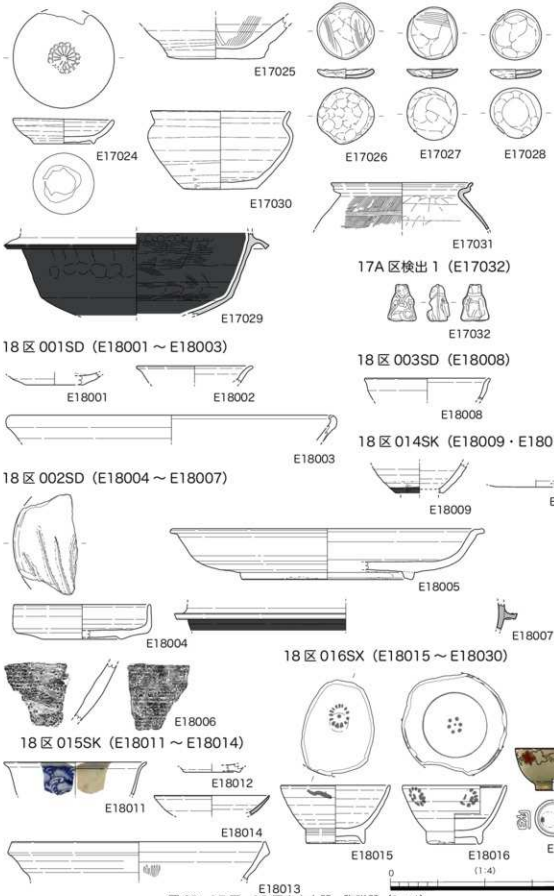


図69　17区・18区出土土器・陶磁器（1：4）

E17023はやや口縁部が内湾する土師器の内耳鍋で、口縁部径18.5cmである。

17A区・17B区063NR（E17024～E17031）

063NRでは、古墳時代前期前半から城下町期のものまである。E17024～E17025は瀬戸美濃産陶器で、E17024が大窯第2段階の灰釉丸皿で内面底部に菊花文印刻がある、E17025が大窯第1段階の擂鉢である。E17026～E17029は土師器で、E17026・E17028が非ロクロ成形皿3類の小皿、E17027は非ロクロ成形皿2類の小皿、E17029が羽釜である。E17030は須恵器の鉢で、頸部から口縁部が短く立ち上がるもの、E17031はS字状口縁台付甕の口縁部で、体部上半に横ハケ調整が巡るものである。

17A区検出（E17032）

E17032は型作りの土人形で、着物姿の狸であろうか。

（6）18区（図69～図80）

18区の出土遺物は、古瀬戸後4期～登窯第1小期の城下町期に属するものと登窯第9小期～第11小期以後の江戸時代後期～近代にかけてのものが主にみられる。また、発掘調査開始時にすでに遺構検出面まで近代以後の掘削が及ぶ箇所も多くみられた。この為、遺構の検出状況から戦国時代の可能性の高い遺構においても、江戸時代後期以後の出土遺物が混じるものがみられた。今回各遺構において報告する出土遺物については、この状況を含めて表現している。

18区001SD（E18001～E18003）

E18001は大窯第1段階の鉄釉緑釉挟み皿、E18002・E18003は大窯第4段階後半のもので、E18002は灰釉腰折皿、E18003は擂鉢である。

18区002SD（E18004～E18007）

E18004は大窯第4段階後半の変わり黄瀬戸向付で内面に鉄釉地に灰釉草本絵が描かれている。E18005は大窯第4段階の口縁部が強く外折する黄瀬戸鉢で口縁部径32.6cm、E18006は常滑産甕で鉄釉の釉調から、近代以後のものである。E18007は土師器の羽付鍋である。

18区003SD（E18008）

E18008は大窯第1段階の天目茶碗である。

18区014SK（E18009～E18010）

E18009は大窯第3段階の天目茶碗、E18010は土師器の皿で、ロクロ成形皿2類のものである。

18区015SD（E18011～E18014）

E18011は中国産の染付碗で、内面口縁部に直線文2条、外面口縁部に直線文2条、体部に青海波文がみられる。E18012は瀬戸丸皿で大窯第2段階～第3段階のもの、E18013は大窯第3段階の擂鉢である。

18区016SX（E18015～E18030）

E18015・E18016は登窯第11小期の長石釉薬陶胎鉄絵広東碗で、E18015は内面底部に十五曜文、外面口縁部に波状文1条の鉄絵がみられ、E18016は内面口縁部に直線文1条、体部下半に直線文1条、底部に七曜文、外面体部に十四曜文がみられる。E180017は江戸時代末の磁器で犬山産の灰釉小碗で、外面口縁部に紅葉絵がみられる。E18018は肥前産磁器の染付丸碗で、外面に草花文、高台部に直線文2条、底部に羽の絵がみられる。E18019・E18020は登窯第10小期の磁器で、E18019は染付広東碗で内面口縁部に直線文2条、体部下半直線文1条、底部花文、外面体部に二葉文、高台部に直線文2条があり、E18020は染付広東碗器で内面口縁部に直線文1条、体部下半に直線文1条、底部に六曜文、外面体部に山水図、高台部に直線文1条がみられる。E18021は登窯第9小期～第10小期の鉄釉ひょうそく、E18022は瀬戸の復興織部の丸皿、外面口縁部から内面に灰釉後鉄絵の六曜文とオモダカ絵、地面に緑釉があるもの、E18023は登窯第11小期の灰釉練鉢で外面に灰釉に緑釉流し掛け、口縁端部を折り返すものである。E18024は明治以後の高田徳利で、長石釉の地に鉄釉の「○常商店」「大黒屋」「百拾号」がある。

E18025は常滑産の火舎で、「く」の字状口縁の体部上半に径1.5cm程の通風孔2個があり、外面口縁部～内面に煤が付着する。E18026は加工円盤で常滑産甕の体部片を転用したものである。E18027・E18028は江戸時代後期以後の土師器の焙烙鍋、E18029は土師器の受口状口縁部の甕、E18030は土人形の衣片と思われるものである。

G001・G002は小型のガラス瓶で、G001は丸い瓶で体部に「タムシチンキ」・「小林盛太堂」

図70　18区出土土器・陶磁器・ガラス製品（1：4）

の陽刻がある、G002は方形の瓶で体部に「君の代」・「乙」、底部に「一」の陽刻がみられる。

18区017SD（E18031～E18127）

E18031は大窯第3段階後半の灰釉丸碗、E18032～E18039は天目茶碗で E18034が大窯第2段階、E18032・E18036・E18038が大窯第3段階後半、E18035が大窯第3段階、E18039が大窯第4段階前半、E18033・E18037が大窯第4段階後半のものである。E18040・E18041は灰釉丸碗で、E18040は大窯第3段階後半のものである。E18042は登窯第9小期の湯呑で、内面鉄釉に外面灰釉のものである。E18043は大窯第1段階の鉄釉仏餉具、E18044は大窯第3段階前半の鉄釉小杯で内・外面に鉄釉、内面に灰釉の流し掛けがみられる。E18045は唐津産の緑釉丸碗、E18046は大窯第3段階～第4段階の鉄釉耳付水注、E18047は大窯第3段階の鉄釉水滴である。

E18048は大窯第1段階の緑釉挟み皿、E18049は大窯第4段階前半の輪禿皿、E18050は灰釉端反皿か丸皿、E18051は大窯第4段階後半の長石釉端反皿、E18052・E18058・E18059は灰釉内禿皿で、E18052が大窯第3段階後半、E18058が大窯第4段階後半のもの、E18059が大窯第4段階前半のものである。E18053～E18055は灰釉丸皿で、E18053・E18054は大窯第4段階前半のもの、E18055は大窯第2段階～大窯第3段階のもの、E18056・E18057は鉄釉稜皿で、E18056が大窯第3段階のもの、E18057が大窯第3段階前半のものである。E18060は美濃産の長石釉皿で登窯第7小期のもので、内面に鉄釉がみられる。E18061・E18062は大窯第4段階の重圏皿である。E18063は古瀬戸中4期の灰釉折縁深皿、E18064は古瀬戸後4期新段階の灰釉腰折皿である。E18065～E18067は美濃産染付皿の登窯第10小期のもので、E18065は磁器皿で外面に草本絵、内面に不明の絵、E18066は炻器小皿で内面口縁部に直線文1条、底部に草本絵、外面口縁部に草本絵、E18067は磁器小皿で内面口縁部に直線文1条、底部に直線文と山水図、外面口縁部と高台際に各直線文1条がみられる。

E18068は瓦質陶器の鉢で外面に煤が付着するもの、E18069～E18076は擂鉢で、E18069・E18070は大窯第3段階～第4段階、E18071は大窯第1段階、E18072は大窯第3段階後半、E18073・E18074は大窯第4段階前半、E18075は大窯第4段階後半、E18076は古瀬戸後4期新段階のものである。

E18077・E18078・E18080・E18083～E18086は鉄釉口広有耳壺で、E18077・E18083～E18085が大窯期のもの、18078・E18086が古瀬戸後4期新段階、E18080が古瀬戸後4期のものである。E18079は江戸時代の灰釉壺である。E18081・E18082は江戸時代後期の美濃産の鉄釉壺、E18087は江戸時代後期の瀬戸産の鉄釉半胴、E18088は江戸時代後期の鉄釉甕である。

E18089は東濃産山茶碗で脇之島窯式のもの、E18090・E18091は加工円盤で、E18090は江戸時代後期の灰釉壺の体部片の転用したもの、E18091は常滑産甕の体部片を転用したものでで側面を部分研磨している。

E18092～E18096は土師器のロクロ成形皿で、E18092・E18093はロクロ成形皿2類、E18094・E18095はロクロ成形皿3類に分類できる、E18093は口縁部に煤が付着していることから灯明皿としての使用が推定できる。E18097～E18106は土師器の小皿で、E18097は非ロクロ成形皿1類、E18098～E18105は非ロクロ成形皿3類、E18106は非ロクロ成形皿2類で底部が丸くなる。

E18107～E18112は土師器の内耳鍋で、内面に煤やコゲ、外面に煤が付着する。E18113～E18118は土師器の茶釜形鍋でE18118のように内面に煤が付着するものもあるが、他は内面は煤の付着があまりなく、外面に煤の付着がみられる。

E18119は丸瓦、E18120は平瓦、E18121は道具瓦と思われるものである。E18122・E18123は常滑産火舎でE18122は体部上半に円形孔が廻り、一対の把手が付くもの、底部にも穿孔があり、大きな楕円形の透かしがある脚台がある、内面は煤の付着が顕著にみられる。E18124・E18125・E18127は江戸時代後期の美濃産陶器で、E18124は灰釉碗、E18125は灰釉香炉、E18127は鉄釉碗である。E18126

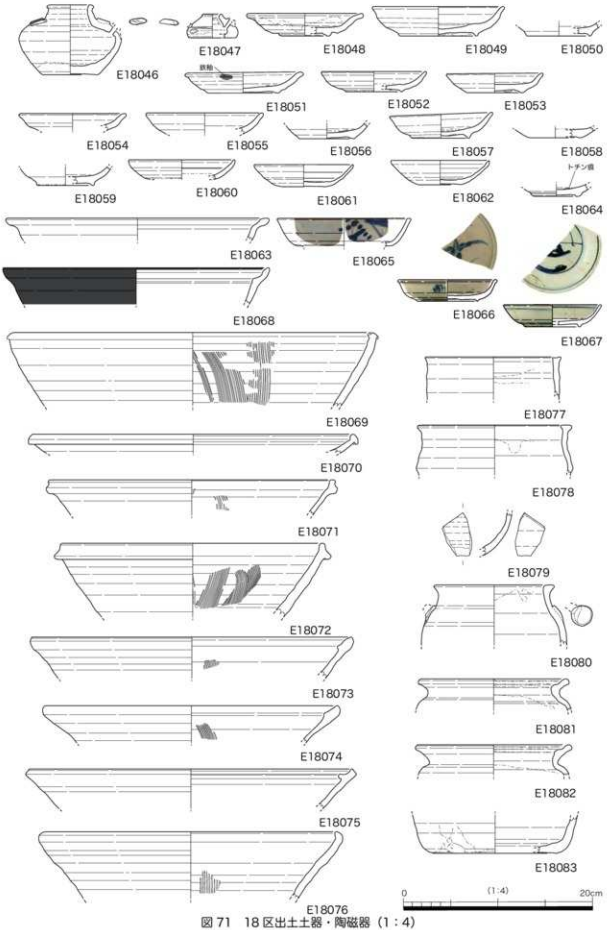


図71　18区出土土器・陶磁器（1：4）

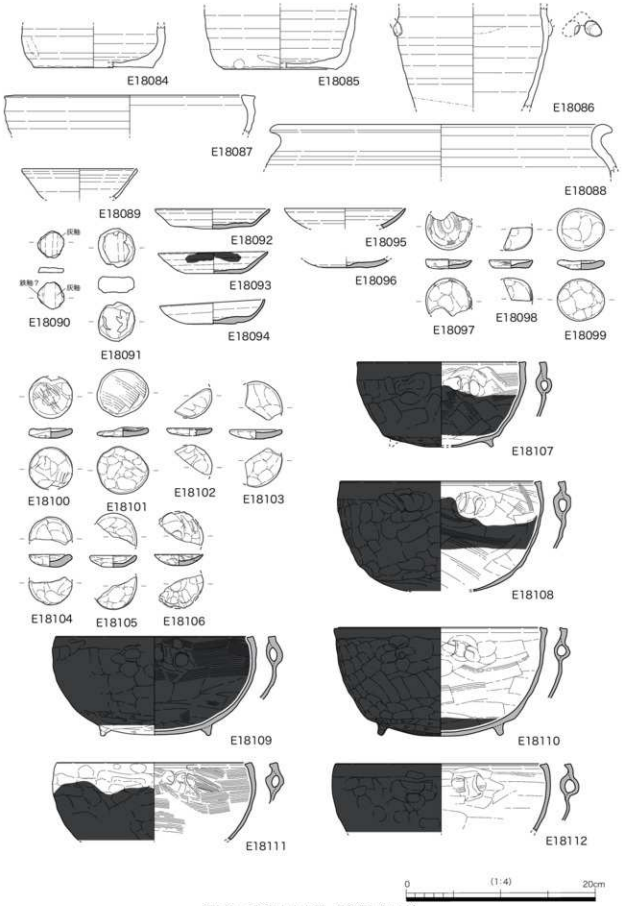


図72　18区出土土器・陶磁器（1：4）

は磁器の鉄釉碗で新しい時期のものである。

18区019SK（E18128～E18129）

E18128は江戸時代後期の灰釉碗、E18129は土師器の小皿で、ロクロ成形皿1類のものである。

18区021SD（E18130～E18148）

E18130・E18131は天目茶碗で、E18130は大窯第4段階後半、E18131は大窯第4段階前半のものである。E18132は江戸時代末の染付の磁器碗、E18133は江戸時代前期の鉄釉茶入・肩付、E18134は大窯第4段階前半の灰釉丸皿、E18135は大窯第4段階後半の長石釉鉄絵丸皿で、内面底部に草本文と格子文列の鉄絵がみられる。E18136は大窯第4段階前半の灰釉折縁皿、E18137は大窯第4段階後半の長石釉丸碗、E18138は大窯第3段階～第4段階の擂鉢、E18139・E18140は加工円盤で、E18139は大窯第3段階後半の天目茶碗の底部を転用したもの、E18140は大窯期の灰釉瓶の体部片を転用したものである。

E18141・E18142は土師器の皿で、E18141はロクロ成形皿3類で、外面口縁部から内面にかけて煤が付着しており、灯明皿としての使用が考えられるもの。E18142は非ロクロ成形皿1類のものである。E18143～E18148は土師器の小皿で、E18143が非ロクロ成形皿1類、E18144～E18146が非ロクロ成形皿2類、E18147・E18148が非ロクロ成形皿3類のものである。

18区022SE（E18149～E18153）

E18149は大窯第3段階後半の灰釉丸碗、E18150は大窯第4段階後半の長石釉丸碗である。E18151は大窯第4段階後半の長石釉端反皿、E18152は大窯第2段階～第3段階の擂鉢、E18153は常滑産甕である。

18区023SX（E18154～E18159）

E18154は大窯第3段階前半の灰釉丸皿、E18155は大窯第4段階後半の長石釉鉄絵丸皿で内面口縁部に直線文2条とその間に草本文、底部に直線文2条と鉄絵がみられる。E18156は大窯第4段階後半の擂鉢、E18157は加工円盤で、大窯第4段階の天目茶碗の底部片を転用したものである。E18158は砲弾形の製塩土器、E18159は土師器の皿で内面口縁部から外面に煤が付着しており灯明皿として転用されたもの、非ロクロ成形皿1類に分類できる。

18区024SD（E18160～E18161）

E18160は大窯第1段階の灰釉端反皿、E18161は大窯第3段階前半の鉄釉丸皿である。

18区028SD（E18162）

E18162は青磁の蓮弁文碗である。

18区029SD（E18163）

E18163は東濃産の山茶碗で、大洞東・脇之島窯式のものである。

18区030SK（E18164・E18165）

E18164は大窯第1段階の灰釉端反皿、E18165は土師器の皿でロクロ成形皿2類のものである。

18区031SE（E18166～E18169）

E18166は大窯第4段階の黄瀬戸腰折皿、E18167は大窯第3段階前半の灰釉輪禿皿、E18168は近代以後の可能性のある白磁皿である。E18169はロクロ成形の土師器の皿である。

18区032SD（E18170・E18171）

E18170は江戸時代の可能性のある天目茶碗、E18171は東濃産山茶碗で窯洞窯式のものである。

18区034SD（E18172・E18173）

E18172は大窯第3段階後半の灰釉丸皿、E18173は大窯第1段階の灰釉皿である。

18区040SD（E18174～E18183）

E18174・E18175は天目茶碗でE18174が大窯第4段階前半のもの、E18175が大窯第3段階後半のものである。E18176は大窯第4段階の黄瀬戸向付で内面底部に草花文の線刻があり、灰釉の地に緑釉が落とされている。E18177は大窯第2段階の灰釉丸皿、E18178は大窯第4段階前半の黄瀬戸中皿、E18179は東濃産の山茶碗で生田窯式のもの、E18180・E18181は擂鉢で、E18180は大窯第4段階前半の擂鉢である。E18182は常滑産甕、E18183はロクロ成形の土師器の皿である。

18区041SD（E18184～E18198）

E18184は口縁部が外折する青磁の碗で内面に外面に花弁文の線刻文がみられる。E18185は大窯第4段階前半の鉄釉六角杯、E18186は大窯第4段階の長石釉鉄絵丸碗で、外面体部に直線文と花弁文の鉄絵がみられる。E18187は白磁の端反皿、E18188は加工円盤で常滑産甕の体部片を転用したものである。E18189～

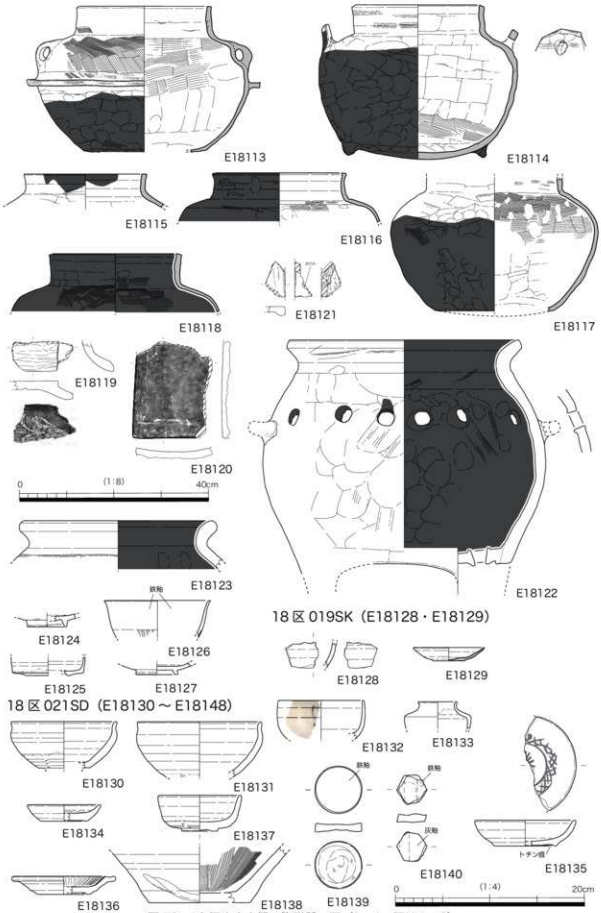


図73　18区出土土器・陶磁器・瓦（1：4、瓦は1：8）

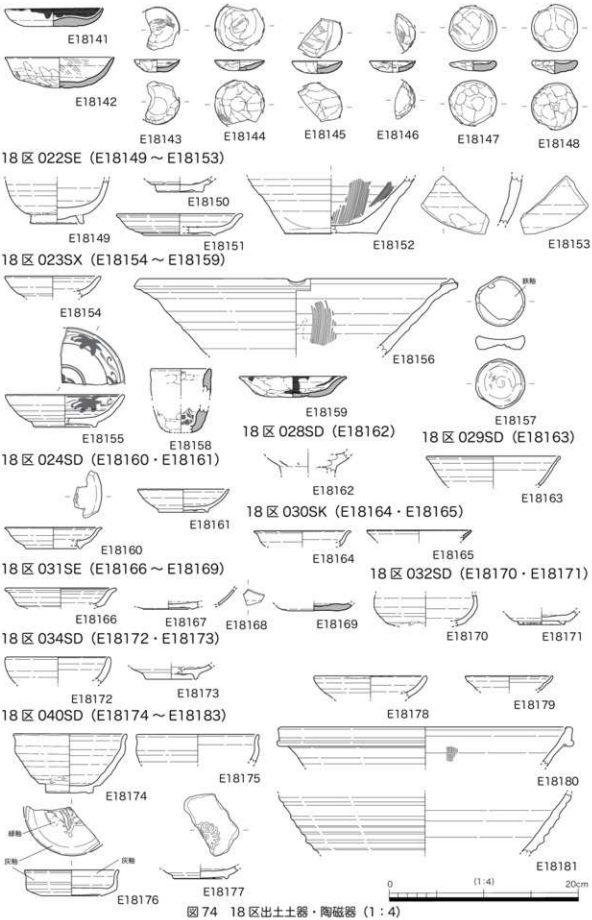


図74　18区出土土器・陶磁器（1：4）

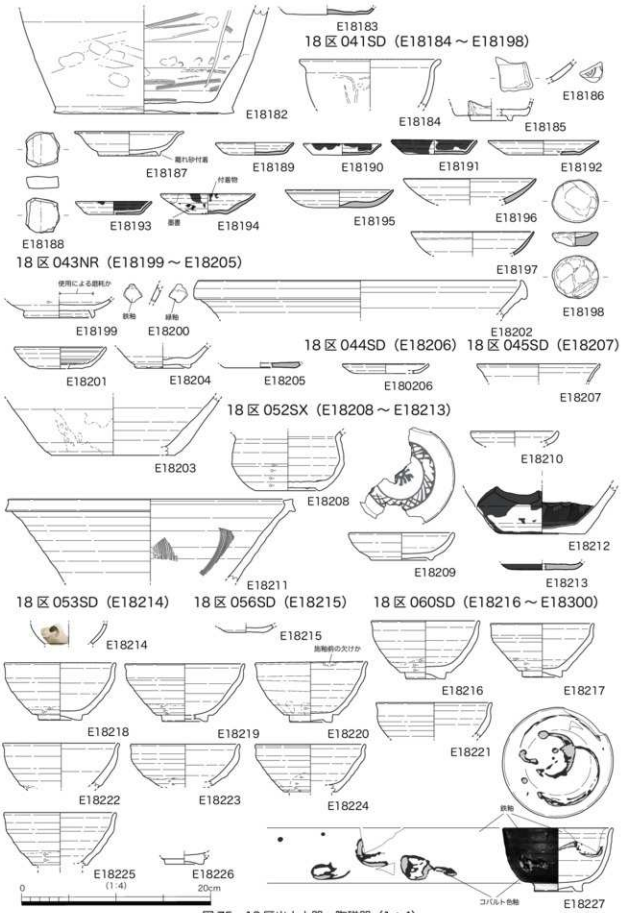


図75　18区出土土器・陶磁器（1：4）

E18198は土師器の皿で、E18189～E18194はロクロ成形皿2類、E18195～E18197はロクロ成形皿3類、E18198は非ロクロ成形皿3類の小皿で、E18189～E18191・E18193は小皿、E18192・E18194～E18197は皿である。E18190・E18191・E18193・E18194は内・外面に煤の付着がみられ、灯明皿としての使用が推定されるもの、またE18194の外面体部に墨書がみられる。

18区043NR（E18199～E18205）

E18199は折戸53号窯式古段階の灰釉陶器の碗である。E18200は楽焼の碗で、内面鉄釉、外面に緑色釉である。E18201は大窯第1段階の重圏皿、E18202は大窯第2段階の擂鉢である。E18203は鉄釉の祖母懐茶壺、E18204は尾張産山茶碗で尾張6型式のもの、E18205はロクロ成形の土師器の皿である。

18区044SD（E18206）

E18206は東濃産の小皿である。

18区045SD（E18207）

E18207は東濃産の山茶碗で大畑・大洞窯式のものである。

18区052SX（E18208～E18213）

E18208は大窯第4段階の黄瀬戸の唾壺、E18209～E18211は大窯第4段階後半のもので、E18209は長石釉鉄絵丸皿で内面口縁部に直線文1条、底部に直線文2条とその間に斜格子文と花文の鉄絵がみられる、E18210は長石釉丸皿、E18211は擂鉢である。E18212は古瀬戸後4期新段階～大窯第1段階の擂鉢、E18213は土師器の皿でロクロ成形皿2類のものである。

18区053SD（E18214）

E18214は近代以後の染付碗である。

18区056SD（E18215）

E18215は江戸時代後期の瀬戸産の炻器小皿である。

18区060SD（E18216～E18300）

E18216～E18226は天目茶碗で、E18217・E18221・E18225は大窯第2段階、E18224は大窯第3段階前半、E18216・E18218・E18220・E18223は大窯第3段階後半、E18222・E18226は大窯第3段階、E18219は大窯第4段階前半である。E18227は登窯第1小期の灰流し丸碗で、内面鉄釉にコバルト色釉巴流し掛け、外面鉄釉にコバルト色釉流れ玉文がみられる。E18228は灰釉筒形碗で大窯第4段階前半のもの、E18229は鉄釉小碗で大窯第3段階後半のもの、E18230は鉄釉小天目茶碗で、大窯第3段階のもの、E18231は白磁の端反碗である。

E18232は大窯第1段階の鉄釉耳付小瓶、E18233は大窯第4段階前半の灰釉茶入、E18234は大窯第3段階～大窯第4段階のエンゴロである。

E18235～E18246は瀬戸・美濃産陶器の皿で、E18235が大窯第3段階の灰釉端反皿、E18236～E18240は灰釉丸皿で、E18239・E18240が大窯第2段階、E18236が大窯第3段階後半、E18237・E18238が大窯第3段階である。E18241は鉄釉丸皿で大窯第3段階後半のもので、E18242・E18243は大窯第4段階前半の灰釉端反折縁皿、E18244～E18246・E18273は重圏皿で、E18246・E18273が大窯第1段階のもの、E18244が大窯第2段階、E18245が大窯第3段階のものである。

E18247は土師器の皿でロクロ成形皿3類に分類できる、内面に煤が付着しており、灯明皿として使われた可能性が高い。E18248～E18250は白磁の端反皿である。

E18251～E18255は擂鉢で、E18254は古瀬戸後4期、E18251は大窯第1段階、E18255は大窯第1段階～第2段階、E18253は大窯第3段階前半、E18252は大窯第3段階後半である。

E18256は江戸時代後期の美濃産灰釉徳利で、混入の可能性が高いものである。E18257は常滑産鉢、E18258は尾張産の山茶碗で尾張4型式のもの、E18259・E18260は加工円盤で、E18259は土師器のロクロ成形皿を、E18260は土師器の鍋体部片を転用したものである。

E18261～E18266・E18268～E18272・E18274・E18275は土師器のロクロ成形の皿で、E18261～E18266はロクロ成形皿2類、E18268～E18272はロクロ成形皿3類のものである、E18275は内面に煤が付着しており、灯明皿の使用が推定される。E18267は土師器の小皿でロクロ成形皿3類、E18276～E18282は土師器の非ロクロ成形の小皿で、E18276～E18278は非ロクロ成形皿1類、

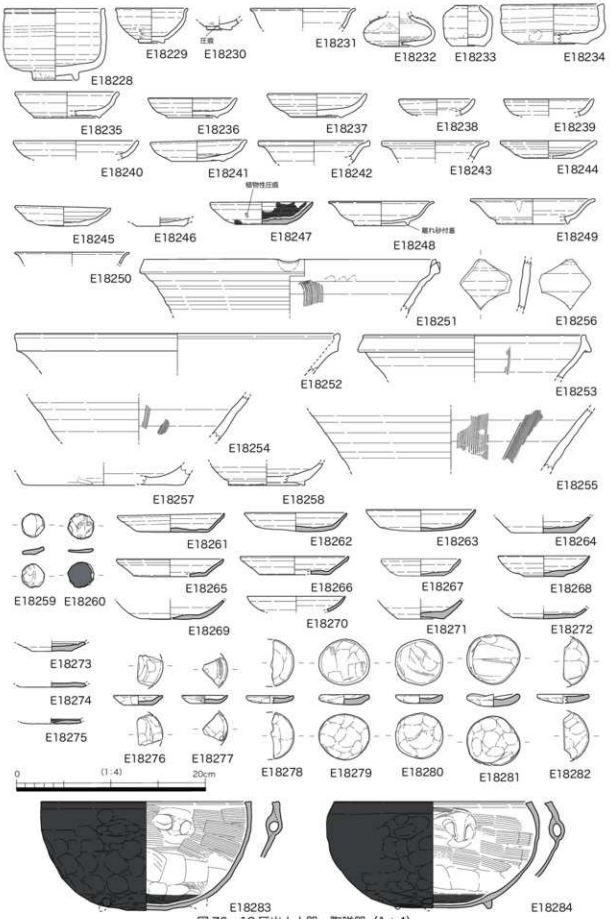


図76　18区出土土器・陶磁器（1：4）

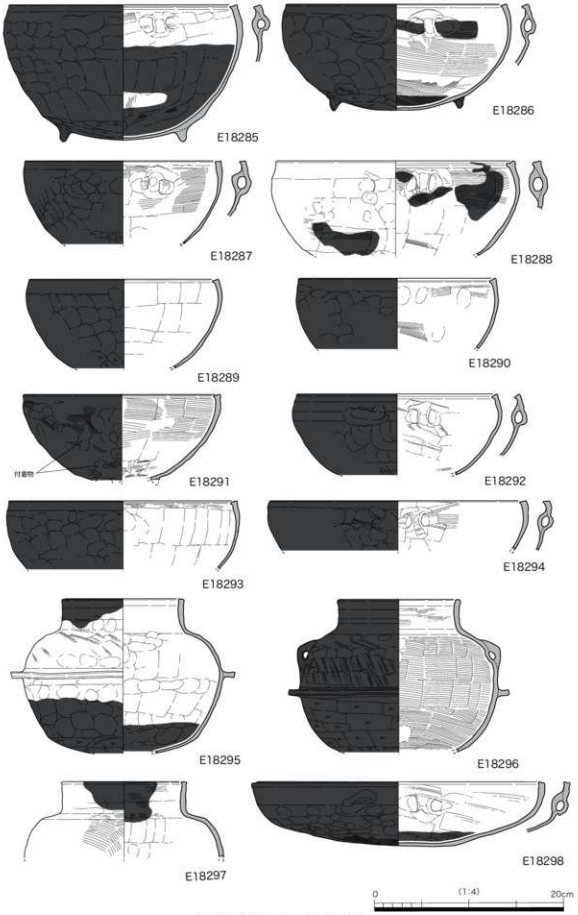


図 77　18 区出土土器（1：4）

E18279～E18282は非ロクロ成形皿3類のものである。

E18283～E18300は土師器の鍋で、E18283～E18294・E18300は内耳鍋、E18295・E18296は羽付茶釜形鍋、E18297は茶釜形鍋、E18298・E18299は焙烙鍋で E18299の焙烙鍋には内耳が付く。外面には煤が付着する。

18区062SK（E18301・E18302）

E18301・E18302は土師器の皿で、ロクロ成形皿2類のもの、E18301は外面口縁部から内面にかけて煤が付着しており、灯明皿として使用されたと考えられ、底部に焼成後の穿孔がみられる。

18区064SD（E18303～E18307）

E18303は古瀬戸後4期新段階の天目茶碗、E18304は大窯第1段階の灰釉丸碗、E18305は大窯第4段階前半の鉄釉折縁大皿、E18306は古瀬戸後4期新段階の擂鉢である。

18区066SD（E18308～E18309）

E18308は灰釉丸皿か端反皿で、E18309は大窯第3段階の鉄釉大皿である。

18区073SK（E18310～E18314）

E18310・E18311は天目茶碗で、E18310が大窯第3段階後半、E18311が大窯第3段階～第4段階のものである。E18312は大窯第1段階の灰釉端反皿、E18313は土師器の皿で、ロクロ成形皿3類のもの、内面に煤が付着しており、灯明皿と使用されたものと思われる。E18314は平瓦の隅部分である。

18区075SK（E18315～E18325）

E18315は大窯第4段階の天目茶碗、E18316は大窯第4段階後半の長石釉鉄絵丸碗で、外面口縁部に垂下直線文の鉄絵がみられる。E18317は登窯第1小期の長石釉小碗、E18318は大窯第3段階の鉄釉内海茶入、E18319は大窯第4段階後半の長石釉端反皿、E18320は大窯第4段階後半の長石釉菊ひだ皿である。E18321は中国景德鎮産の染付皿で内面に樹木図、外面体部に唐草文と直線文1条がみられる。E18322は常滑産の甕か、外面に煤が付着している、E18323・E18324はロクロ成形の土師器の皿で、E18323はロクロ成形皿2類のものである。E18325は土製品の鈴である。

18区077SD（E18326）

E18326は大窯第4段階前半の重圏皿である。

18区079SD（E18327～E18328）

E18327・E18328は常滑産の甕で、E18327は体部片、E18328は江戸時代後期以後の鍔部分である。

18区083SE（E18329～E18352）

E18329は大窯第4段階前半の天目茶碗、E18330は大窯第4段階後半の長石釉碗である。E18331は古瀬戸後4期の灰釉香炉、E18332・E18333は大窯第4段階後半の長石釉端反皿、E18334は大窯第3段階の灰釉丸皿、E18335･E18336は大窯第4段階後半のもので、E18335が長石釉丸皿、E19336が長石釉鉄絵菊折縁ひだ皿で内面口縁部に草葉文、内面底部に草花文の鉄絵がみられる。E18337は江戸時代の灰釉皿、E18338は登窯第1小期の長石釉皿、E18339は大窯第4段階後半の長石釉菊皿、E18340は古瀬戸後3期～後4期古段階の灰釉直縁大皿である。E18341・E18342は擂鉢で、E18341が大窯第4段階後半、E18342が大窯第3段階～第4段階のものである。E18343は備前産の徳利で、外面は鉄釉に灰釉の流し掛けがみられる、外面底部に線刻が残る。

E18344は常滑産甕で、内面にコゲが付着し、外面に煤の付着がみられる。E18345・E18346は加工円盤で、E18345は登窯第1小期の長石釉皿底部片を、E18346は大窯期の擂鉢体部片を転用しており、E18345は側面が研磨されている。E18347・E18348は土師器の皿でロクロ成形皿3類のものである、E18348は内面に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと思われる。E18349は土師器の小皿で、非ロクロ成形皿3類の板状のものである。E18350～E18352は瓦で、E18350は丸瓦、E18351は平瓦、E18352は道具瓦である。

18区084SE（E18353～E18358）

E18353は大窯第1段階の天目茶碗の底部片、E18354は大窯第3段階の灰釉丸皿、E18355は大窯第1段階～第2段階の擂鉢、E18156は土師器の小皿で非ロクロ成形皿3類のもの、E18357は土師器の非ロクロ成形の皿、E18358は土師器の茶釜形鍋である。

18区087SX（E18359・E18360）

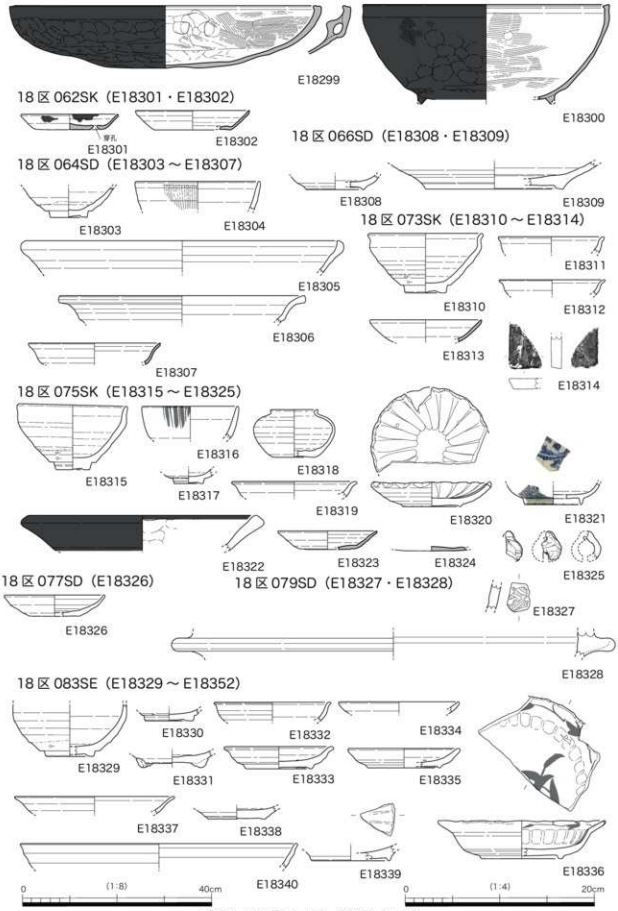


図78　18区出土土器・陶磁器（1：4）

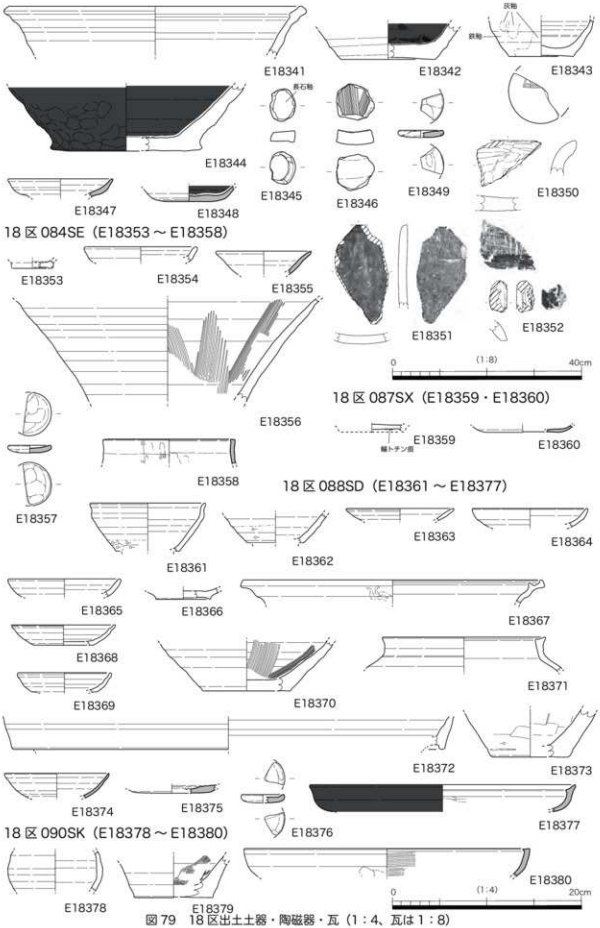


図79　18区出土土器・陶磁器・瓦（1：4、瓦は1：8）

E18359は大窯第3段階後半の灰釉内禿皿、E18360は土師器の皿でロクロ成形皿2類のものである。

18区088SD（E18361～E18377）

E18361・E18362は天目茶碗で、E18361が大窯第2段階、E18362が大窯第1段階～第2段階のものである。E18363は内・外面が被熱しており、灰釉丸皿か、E18364は大窯第3段階の灰釉丸皿、E18365は大窯第3段階の鉄釉丸皿、E18366は大窯第3段階後半の灰釉内禿皿、E18367は古瀬戸第4期新段階の灰釉折縁卸目付大皿である。E18368・E18369は重圏皿で、E18368が大窯第3段階、E18369が大窯第2段階のものである。E18370は大窯第2段階の擂鉢、E18371は大窯期の鉄釉土瓶、E18372は常滑産の甕で中野10型式のもの、E18373は常滑産の尾張型鉢である。E18374～E18377は土師器で、E18374はロクロ成形皿3類の皿、E18375はロクロ成形の皿、E18376は非ロクロ成形皿1類の小皿、18377は焙烙鍋である。

18区090SK（E18378～E18380）

E18378は古瀬戸後期の鉄釉小壺か小瓶、E18379は擂鉢、E18380は土師器の焙烙鍋である。

18区091SD（E18381～E18386）

E18381は大窯期の天目茶碗、E18382は古瀬戸後4期の灰釉緑釉小皿、E18383は大窯期の灰釉丸皿か稜皿、E18394は大窯第2段階の灰釉丸皿である。E18385は土師器の皿でロクロ成形皿2類のもの、E18386は土師器の小皿でロクロ成形皿1類のものである。

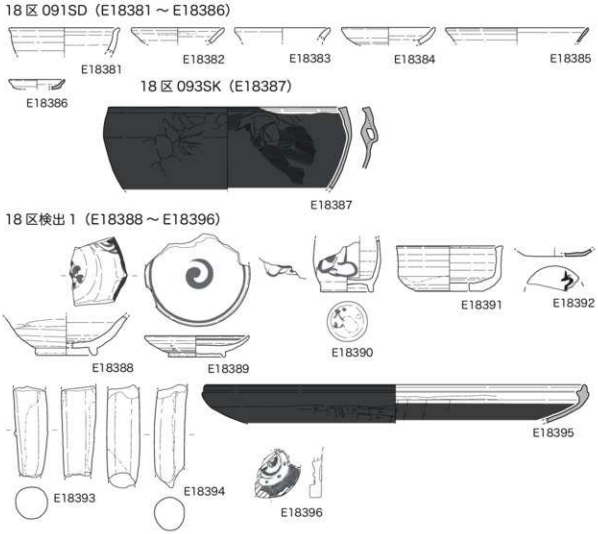


図80　18区出土土器・陶磁器・瓦（1：4、瓦は1：8）

18区093SK（E18387）

E18387は土師器の内耳鍋で、口縁部径25.0cmである。

18区検出1（E18388～E18396）

E18388は江戸時代後期の長石釉鉄絵鉢で内面底部に九羅文と草樹文鉄絵、E18389は大窯第4段階後半の長石釉丸皿で内面口縁部に直線文1条、底部に巴文鉄絵、E18390は犬山焼の小型徳利外面底部に「犬山」と体部に鉄絵2ヶ所がみられる。E18391は窯道具のエンゴロ、E18392・E18393は常滑産の鉢犬の脚部と思われるもので、E18392が左脚部、E18393が右脚部である。E18395は江戸時代後期以後の土師器の焙烙鍋で口縁部径40.0cm、E18396は素縁の瓦当部に巴文と珠文があるものである。

第3節　石製品（図81・図82）

石製品は48点出土した。出土点数は00A区が8点、00B区が24点、01区が0点、17A区が0点、17B区が4点、18A区が0点、18B区が1点、18C区が1点、18D区が5点、18E区が0点、18F区が5点である。00B区において出土点数が多いのは、石垣のあるSX04の整地土・埋土や石垣の裏込めに転用して用いられたものとSX04の解体に関連するSX02出土のものが含まれるからである。この中で、戦国時代から江戸時代前期にかけての遺構と遺物包含層から出土した43点と00A区に隣接する62D区・63D区から出土した1点を実測し（S001～S044）、残りの5点と62D区から出土した残り3点を計測した（S045～S052）。

石製品の内訳は、碁石が3点、硯が3点、火打ち石が3点、砥石が25点、磨き石が1点、台石が2点、茶臼が3点、石臼が7点、宝篋印塔が1点、五輪塔が2点、不明品が1点ある。尚、個別の資料の計測値などの詳細については添付清洲城下町遺跡X出土遺物石製品一覧表を参照していただきたい。

碁石（S001～S003）は、全て黒色の泥岩で楕円形板状の表面を研磨されたものである。

硯（S004～S006）は、S004・S005が泥岩、S006が砂質凝灰岩のものである。これらは、厚みの違いはあるが、全て長方形の板状のもので、幅5.5cm～5.6cmである。

火打ち石（S007・S008）は、チャートのもので、平面不整楕円形の薄くなる側面部に押圧剥離による打撃痕のような痕跡がみられる。

砥石（S009～S028）は、S009～S017が凝灰岩、S018が凝灰質泥岩、S019が砂岩、S020が砂質凝灰岩、S021～S024が泥岩、S025がホルンフェルス、S026～S028が緑色凝灰岩（笏谷石）で、厚みが2cm未満の板状のS011～S013・S018・S022・S024・S028と厚みが2cm以上の角棒状のS009・S010・S014～S017・S019～S021・S023・S025～S027がみられる。S020・S027は平面形状がバチ形になるもので、S019とS027は研ぎ目が比較的幅広の浅いくぼみ状になっている。

磨き石（S029）はチャートの亞円礫のもので、上面と下面が平滑になっている。

台石（S030・S031）はS030が砂岩、S031がホルンフェルスでS030は側面に敲打痕があるもので、他の製品からの転用されたものである可能性がある。S031は全体に表面が滑らかになっている。

茶臼（S032～S034）は玄武岩で、S032・S033が上面の周縁が山形で下面に円形の擦り面がある上臼、S034は上面に一段高くなった円形の擦り面とその周囲に茶粉を受ける縁のくぼみがめぐる。どちらも擦り面には幅1mm前後の斜め線刻による三角鋸歯状の擦り目がみられる。S032・S033にみられる上臼の中央回転軸の孔径は2.5cm程、S033にみられる上臼を回転させる棒の挿入孔の深さは2.8cm、挿入孔の周りは菱形の浮き彫りになっている。

石臼（S035～S041）は穀物などを挽いて粉にした挽臼で、S035～S038・S040・S041が花崗岩、S039が砂岩で、全体に表面が摩滅している。外径がわかるものは径28cm～35cmである。S035～S039が上臼、S040・S041が下臼、上臼の上面は周縁に平滑な縁が1cm～4cm前後めぐり、縁から中央回転軸に向かって皿状にくぼむ。下臼は上・下面とも平坦である。上臼の下面と下臼の上面は擦り面で、幅0.7cm～幅2.0cmの擦り目が斜めに三角鋸歯状にみられる、S035・S038・S041では擦り目が交差

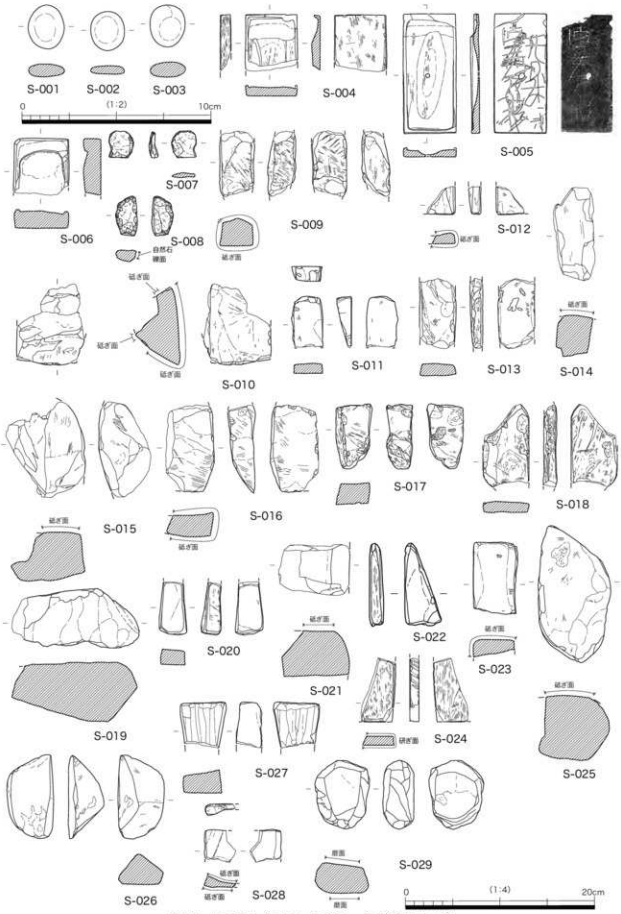


図81　石製品1（1：4、S-001～S-003は1：2）

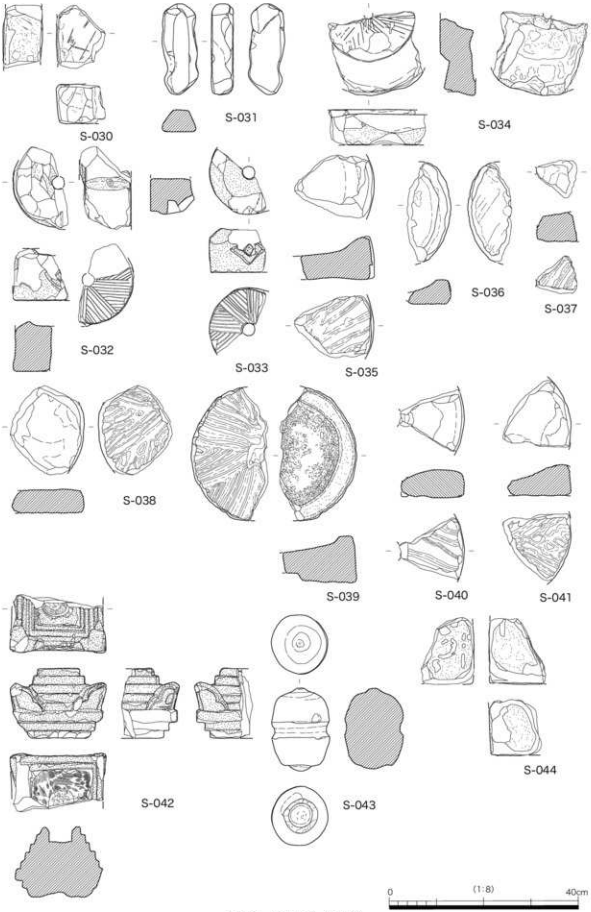

S-030
S-031
S-034
S-032
S-033
S-035
S-036
S-037
S-038
S-039
S-040
S-041
S-042
S-043
S-044
0
(1:8)
40cm

図82　石製品2（1：8）

する部分がある。

宝篋印塔（S042）は笠部で、全体の半分程が残る。全体に敲打調整痕がみられ、隅飾部にその外形に沿った線刻がみられる。上面に相輪部の伏鉢とのホゾ穴、下面に塔身部に接着するホゾ穴状のくぼみがある。

五輪塔（S043・S044）はS043が空風輪部、S044が地輪部で、どちらも花崗岩である。S043は中央付近に幅3.2cm前後の浅い溝状のくびれがあり、上部は宝珠状の突出部が残り、下面にはホゾ状の突出がある。S044は立方体で、隅が摩滅して丸くなっている。

第4節　金属製品（図83・図84）

金属製品と金属加工関連資料は合わせて182点出土した。出土点数は00A区が36点、00B区が129点、01区が0点、17A区が5点、17B区が7点、18A区が3点、18B区が4点、18C区が0点、18D区が7点、18E区が2点、18F区が9点である。この中で、戦国時代から江戸時代前期にかけての遺構と遺物包含層から出土した56点と00A区に隣接する62D区から出土した3点を実測し（M001～M059）、残りの123点を計測した。個別の資料の計測値などの詳細については添付清洲城下町遺跡X出土遺物金属製品一覧表を参照していただきたい。また鍛冶・鋳造関連資料については、日鉄テクノロジー株式会社に分析を委託した。分析成果は、本報告の種別などに反映させていただいており、その分析の詳細は添付日鉄テクノロジー株式会社「清洲城下町遺跡出土鍛冶・鋳造関連遺物の分析」を参照していただきたい。

銅製品（M001～M010）は10点で、M001が中央に下側からの切り込みがあり、丸い縁が小さく波状になる飾金具、M002がカップ状でやや花弁状、下側に固定用金具がある飾金具、M003は幅2.85cm、長さ10.05cmの薄い銅板を長方形状に巻いた留金具で、径1.5mm前後の孔が4個みられる。M004～M010は銭と硬貨で、M004は不明、M005が永楽通寶、M006が大元通宝、M007が治平元寶か瑞平元寶、M008が元符元寶、M009が景徳元寶、M010が十銭硬貨である。

鉄製品（M011～M035）は25点ある。M011は菱形の刃部に断面長方形の長い基部がつく鏃で、刃部には中央の円形中心と5枚の心葉形花弁の透かしがあるもので、透かし部の中に漆膜が残っていたことから、本来は全体に漆が施されていた可能性が高いものである。M012は柄部を銅板で巻く刀子、M013は径0.35cmで長さ14cm程の曲がった状態の針金、M014～M016は長方形の鉄板状の製品、M017は口縁部が受け口で口縁部径21.6cmの鋳物の鍋、M018は外面側にボタン状の円形突起が残る鍋の可能性のあるもの、M019～M035は頭部を折り曲げて整形する釘で、横断面は方形から長方形のもの、M019～M029は長さ8cm以上となる長いもの、M030～M035は長さ5cm前後の短いものである。

金属加工関連資料（M036～M059）は、M036～M039は鞴の羽口、M040～M044は坩堝・炉壁・鋳型などの可能性のある土製品、M045～M048はルツボ、M049～M059は椀型滓である。

鞴の羽口は、M036が羽口先端部の上側、M037が羽口先端部の下側で送風孔の径2.3cm程、M038が羽口先端部の上側で送風孔径3.0cm程、M039が羽口の基部側で送風孔径1.6cm程である。M036～M038は炉内となる先端部側に流動鉄滓とともに白色石材が付着する。M039は送風孔径が細く、銅などの加工関連の可能性がある。M040は鋳鉄の坩堝の可能性がある鉢状土製品で、口縁部径30cm前後のもの、M041は鋳鉄の甑炉の炉壁の底部の可能性のあるもの、M042は炉壁の鞴座部分で、炉内の部分に流動鉄滓と白色石材が付着する。M043は鋳鉄の炉壁で、ほぼ平坦なもの炉内側に流動鉄滓が付着する、平面方形状の炉形になるものか。M044は平坦な面に方形状に沈線がある鋳型の可能性のある土製品である。M045～M048は土師器で厚みのある皿状のルツボで、内面や外面口縁部に銅滓と思われる赤色付着物や黒色付着物がみられる。M045は口縁部径4.1cmの小型のもの、M047は口縁部径8.0cmの中型のもの、M048は口縁部径12.8cmの大型のもので、M047・M048には口縁部に白色石材が付着する、M046の内面に

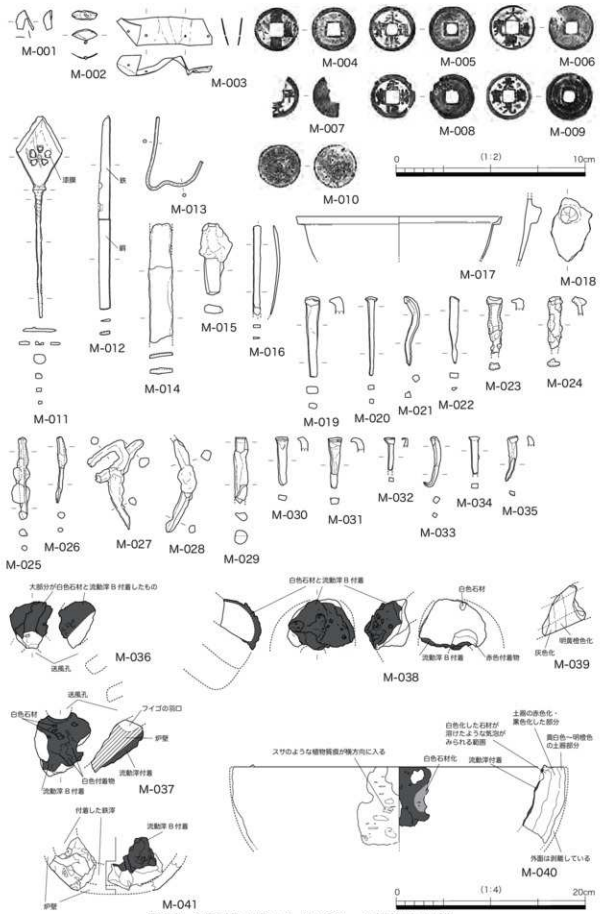


図83　金属製品1（1：4、M-004～M-010は1：2）

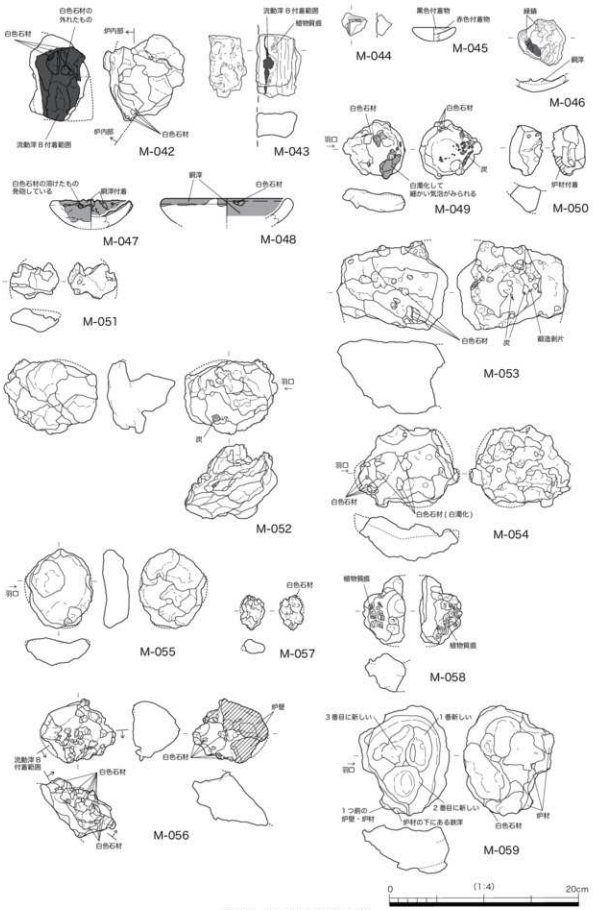

白色石材の外れたもの
白色石材
炉内部
流動滓B付着範囲
炉内部
白色石材
M-042
流動滓B付着範囲
植物質痕
M-043
黒色付着物
赤色付着物
M-044
M-045
緑錆
銅滓
M-046
白色石材
羽口
白色石材
炭
白黒化して細かい気泡がみられる
M-049
炉材付着
M-050
白色石材の溶けたもの発泡している
銅滓付着
M-047
銅滓
白色石材
M-048
M-051
白色石材
炭
鍛造剥片
M-053
羽口
炭
M-052
羽口
白色石材
白色石材（白黒化）
M-054
羽口
M-055
白色石材
M-057
植物質痕
植物質痕
M-058
炉壁
流動滓B付着範囲
白色石材
白色石材
白色石材
M-056
3番目に新しい
1番新しい
羽口
1つ前の炉壁・炉材
2番目に新しい
炉材の下にある銅滓
白色石材
炉材
M-059
0
(1:4)
20cm

図84　金属製品2（1：4）

付着する銅滓の上に緑錆がみられる。

鉄滓（M049 ～ M059）は、色調が黒色～暗黒褐色で気泡が比較的少ないガラス質に分類する鉄滓Aタイプがあり、気泡が少なく緻密な鉄滓A 1タイプ、気泡はあるが比較的緻密な鉄滓A2タイプ、気泡が比較的多く入りやや緻密な鉄滓A3タイプに分けることができる。一つの鉄滓においても単一のタイプになる場合は少なく、鉄滓A1タイプ～鉄滓A2タイプに分類できるものはM050・M053・M057・M059、鉄滓A1タイプ～鉄滓A3タイプに分類できるものはM052・M054、鉄滓A2タイプはM049・M051・M055・M058、鉄滓A3タイプはM056がある。同じタイプに分類したものでも、M059のような小型のものからM053のような大型のものまであり、上面に白色石材が付着するものが一定量みられる。また椀型滓の実測図では、上面や断面の形状などから上面左側を送風口側として図化した。

第5節　木製品（表1・図85～図94）

木製品は00A区の検出1～検出3のSX8001と00B区のSD01～SD03・SK30・SX02、01区SD01などにおいて多くの出土がみられた。00A区と00B区において出土した漆椀・漆皿などの漆製品は、特に脆弱な状態で、出土してからの経年による劣化もあり、現在では表面の漆膜が剥離しつつあり、自立しない状態となっている。したがって、これらの実測図では一部の計測からの復元図となっている。また、棒状製品の箸、折敷と思われる薄い板材は多くの出土点数があるが、小さな破片となっているものは実測できていない。個別の資料の計測値・調整などの詳細については添付清洲城下町遺跡X出土遺物木製品一覧表を参照していただきたい。

また木製品の樹種同定を株式会社パレオ・ラボに委託して行った。同定された樹種は、針葉樹ではモミ属とマツ属複維管束亜属、コウヤマキ、スギ、ヒノキ、サワラ、ネズコ、アスナロの8分類群、広葉樹ではクスノキ科、クリ、ツブラジイ、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属（以

表1　木製品・木材の樹種同定結果

樹種/器種	クサビ	クヌギ？	燃し	駄駄	下駄歯	下の	黒クシ	黒漆板	黒漆	漆椀	漆皿	漆？	漆椀	暗椀	橋板	側板	側板	曲物底板	曲物側板	曲物板	監製品	状シ	ハシ	折敷？？	折敷板	木簡	建柱	建材	井戸枠？	井戸枠	板製品	板状品	擬板	板状板	有孔板	有孔板	有棒	有棒	有角棒	有角材	有角材	有角材	不明	卒塔婆	明板	木製	木製品	分材	分枝	節？	炭	不明	合計
モミ属																							1			1	1	1	1		10							1			2											18
マツ属複維管束亜属			1																				1								7			1					2							1		1		1		15
コウヤマキ					1																					1					4																					6
スギ																				1		10									9					1									1							22
ヒノキ	2	1		5	1								1			1		5	8	1		27	3	3							34		1		1			5	1	2	2			6	1							110
サワラ	1																1		1			15	2	1	2	1		2	1		28	2				1	1					1	2		1						63
ネズコ																										1																										2
アスナロ									1																														1		1			1								4
針葉樹										1																																											1
クスノキ科																							1																											1		2
クリ										4																																1										5
ツブラジイ																															1																					1
ブナ属										26	1																																	1							28
コナラ属アカガシ亜属																															2		1																			3
コナラ属クヌギ節																																																		1		1
コナラ属コナラ節										1																																								3		4
クマシデ属イヌシデ節										1																																								2		3
アサダ										4																																								1		5
ヤナギ属																																																1				1
カエデ属										4																																										4
トチノキ										14			1																		1																					16
サカキ																																														1					1
ケヤキ										5																																										
ナシ亞科										1																																										
カキノキ属																																																		1		1
エゴノキ属																																				1																1
トネリコ属トネリコ節																																																		1		1
モチノキ属							1																																											2		3
タケ亞科																															1																			1		2
不明																																																			1	1
合計	3	1	1	6	1	1			61		1	1	1	5	10						55	5	4	5	1		3	2	97		1	2	1	2	1	7	4			1	12	1	4	1		14			315

00A 区検出 1、SX8001（W-001 ～ W-007）　00A 区検出 2、SX8001（W-008 ～ W-076）

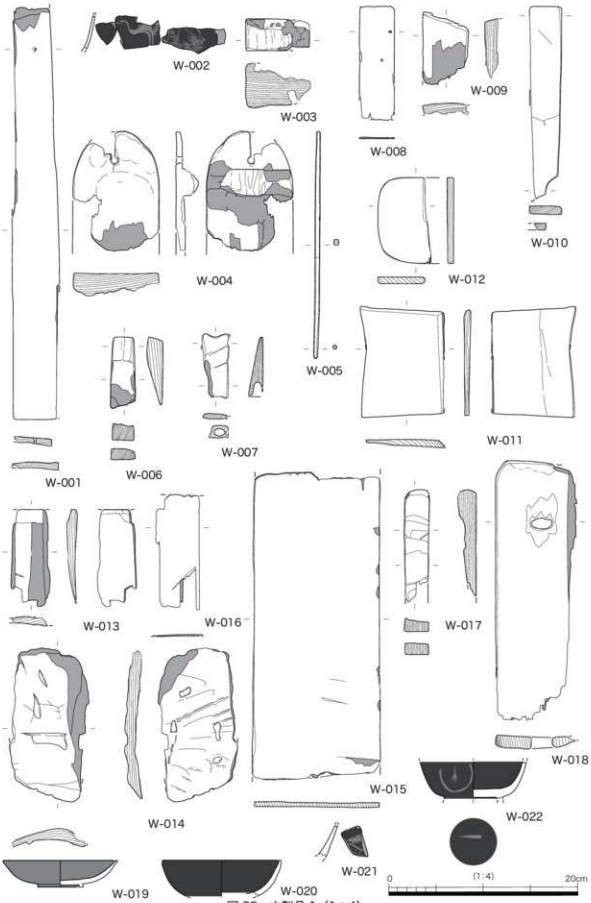


図 85　木製品 1（1：4）

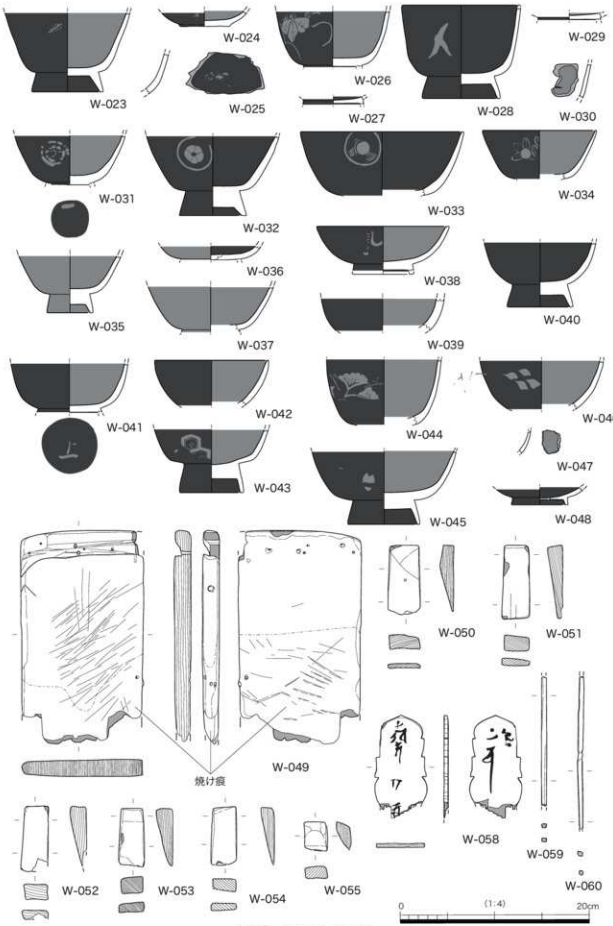

W-023
W-024
W-025
W-026
W-027
W-028
W-029
W-030
W-031
W-032
W-033
W-034
W-035
W-036
W-037
W-038
W-039
W-040
W-041
W-042
W-043
W-044
W-045
W-046
W-047
W-048
W-049
焼け痕
W-050
W-051
W-052
W-053
W-054
W-055
W-058
W-059
W-060
0
(1:4)
20cm

図86　木製品2（1：4）

下、アカガシ亜属)、コナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節)、コナラ属コナラ節（以下、コナラ節)、クマシデ属イヌシデ節（以下、イヌシデ節)、アサダ、ヤナギ属、カエデ属、トチノキ、サカキ、カキノキ属、エゴノキ属、トネリコ属トネリコ節(以下、トネリコ節)、モチノキ属の 17 分類群、単子葉ではタケ亜科 1 分類群の、計 26 分類群が確認された。木製品と樹種の関係は、表 1 に示す通りで、報告の詳細は添付株式会社パレオ・ラボ「清洲城下町遺跡出土木材の樹種同定報告」を参照していただきたい。

00A 区検出 1、SX8001（W001 ～ W007）

W001 は幅 5.0cm 程、厚さ 0.7cm の板、端がわかるところから 39.2cm のところに穿孔がある、W002 は外面黒漆（漆製品に残る黒色部分について、本来は「黒色漆」と記述して、黒漆とは分けるべきものではあるが、本報告では黒色漆を「黒漆」と便宜上記載する）に赤漆（黒色漆と同じ）の鶴と松の絵が残る漆椀、W003 は下駄の歯部分で高さ 3.4cm、W004 は下駄のつま先側部分でくり抜き歯に台の先が丸いもの、W005 断面方形から多角形の箸、W006・W007 は楔で、W006 が幅 2.5cm で片面が斜めに削られた角材、W007 が幅 3.6cm で片面が斜めに削られた角材の基部側端面に径 0.76cm ～ 1.04cm の穴がみられる。

00A 区検出 2、SX8001（W008 ～ W076）

W008 は長さ 12.0cm、幅 3.6cm、厚さ 0.2cm の薄い板、小穴の穿孔が 1 ヶ所みられる、W009 は端材の板、W010 は幅 3.3cm、厚さ 0.8cm、半月形の抉れがある細長い板、W011 は厚さ 0.6cm 前後の幅広の薄い板、W012 は厚さ 0.6cm の隅丸方形状の薄い板、大きな切り込みがあるものである。W013 は幅 1.1cm の小口端部に小さな段差がある細い板、W014 はやや反りのある板で削り痕が多数みられる。W015 は幅 13.5cm、厚さ 0.6cm の幅広の薄い板、W016 は厚さ 0.1cm の薄い板で折敷片か、W017 は幅 2.6cm、厚さ 1.8cm の上面にくぼみが瓔状にある板、W018 は井戸枠の板と思われるもので、端部の隅が落とされている、楕円形の穴がみられ、短軸上でわずかに内湾する。

W019 は漆皿で内・外面赤漆の端反皿、口縁部径 12.0cm、器高 2.8cm、高台部径 4.6cm のもの。W020 ～ W048 は漆椀で、W020 は口縁部径 12.4cm の程の外面黒漆の薄手の見こみの浅い丸碗、W021 は黒漆に赤漆の草木絵がみられる薄手の椀、W022 は外面黒漆に赤漆の円形文と外面底部に「一」のやや口縁部が開く筒形の椀、W023 は外面黒漆に赤漆の草木絵、内面に赤漆、底部径 7.2cm のものである。W024 は外面黒漆に赤漆の絵、内面赤漆の丸椀、底部径 5.1cm、W025 は外面黒漆に赤漆の絵の椀、W026 は外面黒漆に赤漆の桔梗文と唐草文の絵、内面赤漆のやや口縁部が広がる筒形の椀、W027 は内・外面黒漆の薄手の椀か皿、W028 は外面黒漆に赤漆の鳥絵、内面黒漆のやや口縁部が広がる筒形の椀、口縁部径約 12.5cm、器高 10.0cm、高台部径 8.0cm である。W029 は外面黒漆、内面赤漆の薄手の椀、W030 は内面赤漆の薄手の椀、W031 は外面黒漆の赤漆の渦巻文、底部に赤漆の「一」、内面赤漆の口縁部がやや開く筒形の椀、W032 は外面黒漆に赤漆の円形花文、内面黒漆の高台の高く、口縁部がやや開く筒形の椀、高台部径 6.8cm である。W033 は外面黒漆に赤漆の重圏文、内面黒漆の丸椀、口縁部径 13.2cm、W034 は外面黒漆に赤漆の花文の絵、内面赤漆のやや口縁部が広がる筒形の椀、口縁部径 12.0cm、W035 は内・外面赤漆のやや口縁部の広がる筒形の椀、高台が高く、高台部径 4.8cm のものである。W036 は外面赤漆、内面黒漆の丸椀、W037 は内・外面赤漆の口縁部がやや開く筒形の椀、W038 は外面黒漆に赤漆の絵、内面赤漆のやや見込みの浅い丸椀である。W039 は外面黒漆、内面赤漆の椀、やや器壁に厚みがある。W040 は内・外面黒漆の筒形の椀、高台がやや高く、高台部径 6.8cm、W041 は外面黒漆、内面赤漆の丸椀、外面底部に赤漆の「上」が残る。W042 は外面黒漆、内面赤漆の丸椀、口縁部径 12.0cm、W043 は外面黒漆に赤漆の六角亀甲文、内面赤漆に高い高台のもの、高台部径 6.5cm、W044 は外面黒漆に赤漆の樹木絵、内面赤漆の見込みのやや浅い丸椀、W045 外面黒漆に赤漆の絵、内面赤漆、高台がやや高い口縁部がやや開く筒形の椀、高台部径 6.7cm、W046 は外面黒漆に赤漆の四花弁文、内面赤漆の丸椀、W047 は外面黒漆に赤漆の絵、内面黒漆の底部に赤漆の

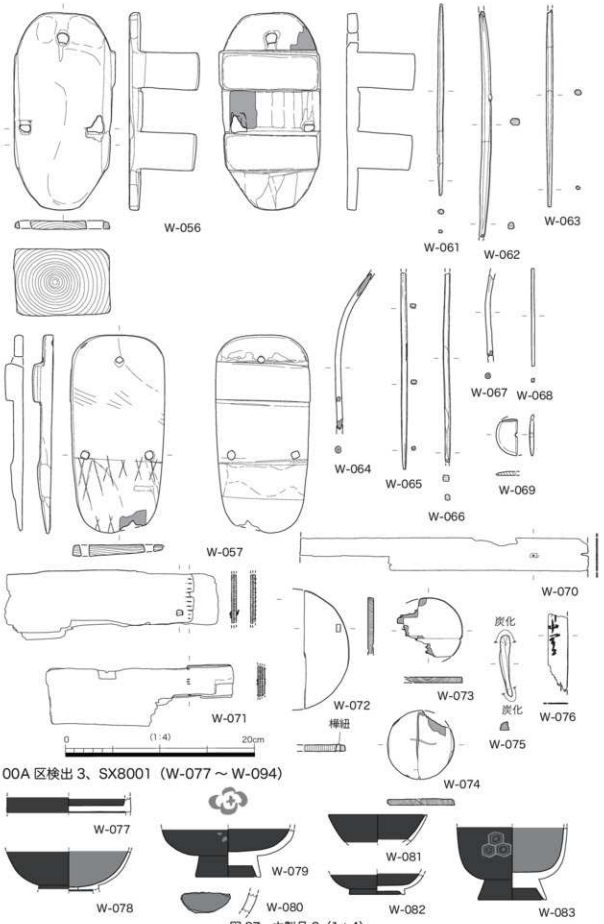

W-056
W-061
W-062
W-063
W-064
W-065
W-066
W-067
W-068
W-069
W-057
W-070
W-071
W-072
樺紐
W-073
炭化
炭化
W-076
W-075
W-074
0
(1:4)
20cm
00A 区検出 3、SX8001（W-077 ～ W-094）
W-077
W-078
W-079
W-080
W-081
W-082
W-083

図 87　木製品 3（1：4）

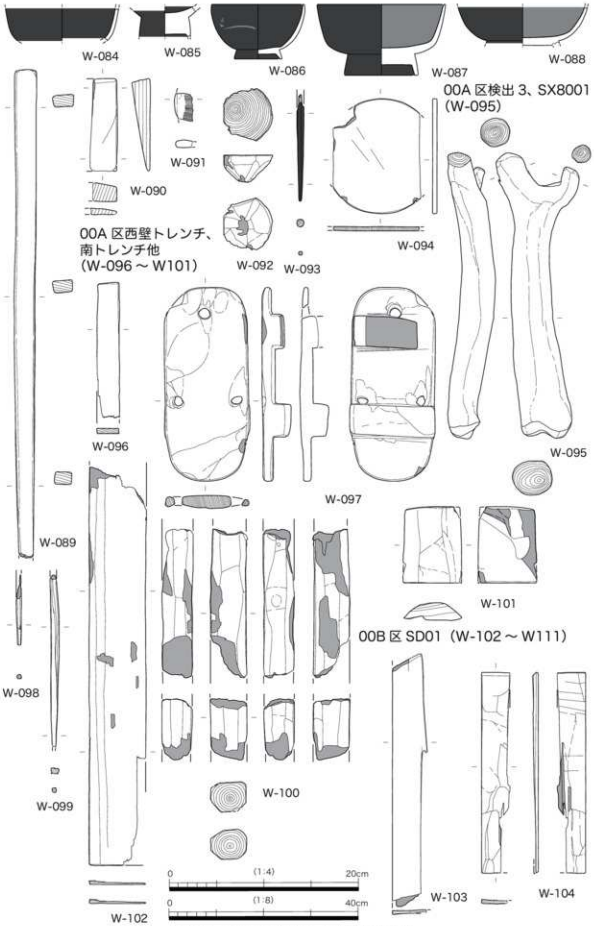


図88　木製品4（1：4、W095は1：8）

花絵、やや高い高台の丸椀、高台部径6.7cm、W048は内・外面黒漆、高台の低い丸椀である。

W049は折敷で、板の端に沿って幅1cmの溝がある、目釘穴が3ヶ所ある、板材長辺にも小孔が2ヶ所あり、表・裏面に刃物痕がみられる。W050～W055は楔で、角材の片面が斜めに削られている、W050は長さ7.3cm、幅3.1cm、厚み1.9cm、W051は長さ7.8cm、幅2.9cm、厚さ1.7cm、W052は長さ6.9cm、幅2.7cm、厚さ1.7cm、W053は長さ6.0cm、幅2.7cm、厚さ1.8cm、W054は長さ6.1cm、幅2.6cm、厚さ1.3cm、W055は長さ2.5cm、幅2.2cm、厚さ1.6cmを測り、W055は小さいが他は形態と大きさが近似している。W056・W057は下駄で、W056は台の四隅を切り落とした隅丸八角形で、上面に残る浅いくぼみから右足用と思われるもの、歯の高さ6.0cmのくり抜き歯である、W057は台が先太の俵形で、歯の高さ0.6cmのくり抜き歯のものである。W058は卒塔婆の先端部で石塔形の板、両面に墨書がみられる。

W059～W068は箸でW059は断面方形から長方形、W060は断面方形から台形、W061は断面多角形から楕円形で中央部が太く両端が細くなっている。W062は断面六角形から楕円形で中央部が太く両端が細くなっているもの、W063は断面多角形から楕円形で先が細くなっている、W064は断面多角形から円形のもの、W065は断面長方形から楕円形で、先が細くなるものである。W066・W068は断面方形、W067は断面円形のものである。

W069は板状の紡錘車の可能性のあるもので、径2.2cm程、厚さ0.4cmで片面の縁辺が斜めになっており、中央に穿孔がみられる。W070・W071は曲物の側板で、綴じ紐の樹皮が残る、W072～W074は曲物の底板で、W072が径12.8cm、厚さ0.7cmで樹皮紐が1ヶ所残る、W073は径7.2cm、厚さ0.6cm、W074は径7.3cm、厚さ0.6cmを測る。W075は長さ7.5cmの両端が丸く炭化する燃えさしの様なもの、W076は木簡で片面に墨書がみられる。

00A区検出3、SX8001（W077～W094）

W077は内・外面黒漆の筒形の漆容器で径13.2cmのものである。W078～W088は漆椀で、W078は外面黒漆、内面赤漆の薄手の丸椀、W079は外面黒漆に赤漆の絵、内面黒漆に赤漆の花弁文、高台の高い丸椀、高台部径6.6cmを測る。W080内面赤漆の椀、W081は内・外面黒漆の椀で口縁部径10.3cmのもの、W082は外面黒漆に赤漆の四曜文を亀甲文で囲んだものを三組にしたもの、高台の高い筒形の椀、口縁部径12.3cm、器高7.9cm、高台部径7.6cmを測る。W083は内・外面黒漆の低い高台の丸椀、高台部径5.8cm、W084は内・外面黒漆の椀、W085は内・外面黒漆の椀、高台がやや高く厚底になるもの、W086は外面黒漆に赤漆の絵、内面黒漆のやや薄手の丸椀、口縁部径9.8cm、器高5.8cm、高台部径5.0cmを測る。W087は外面黒漆、内面赤漆のやや高い高台で口縁部がやや広がる椀、口縁部径13.2cm、器高7.35cm、高台部径7.8cm、W088は外面黒漆、内面赤漆のやや薄手の丸椀である。

W089は断面長方形の角棒、細くなる側を欠損しており幅2.3cm、厚さ1.4cm、W090は楔で、角材の片面が斜めに削られたもの、長さ9.8cm、幅2.8cm、厚さ2.1cmのもの、W091は櫛の背側部分、W092は柱と思われるもので円錐形に削られたもの、W093は箸で外面黒漆が施された断面円形のもの、W094は曲物の底板で径12.2cm、厚さ0.5cmである。

00A区検出4、SX8001（W095）

W095は柱の挿又受けの可能性のあるもので、先端側が二又になっている。

00A区西壁トレンチ、南トレンチ他（W096～W101）

W096は幅2.3cm、厚さ0.5cmの板、W097は下駄で台が楕円形のもの、上面の痕跡から右足用で、歯が低いもの、長さ20.5cm、幅8.7cm、高さ2.5cmである。W098・W099は箸で断面円形から長方形のもの、W100は炭化している部分がある棒で、周囲に削り痕がみられる、W101は横断面が丸い山形に削られた板である。

00B区SD01（W102～W111）

W102は屋根材などのへぎ板と思われるもの、W103はへぎ板、W104は幅2.9cm、厚さ0.6cmの板で、両面ともカンナ等の削り痕がみ

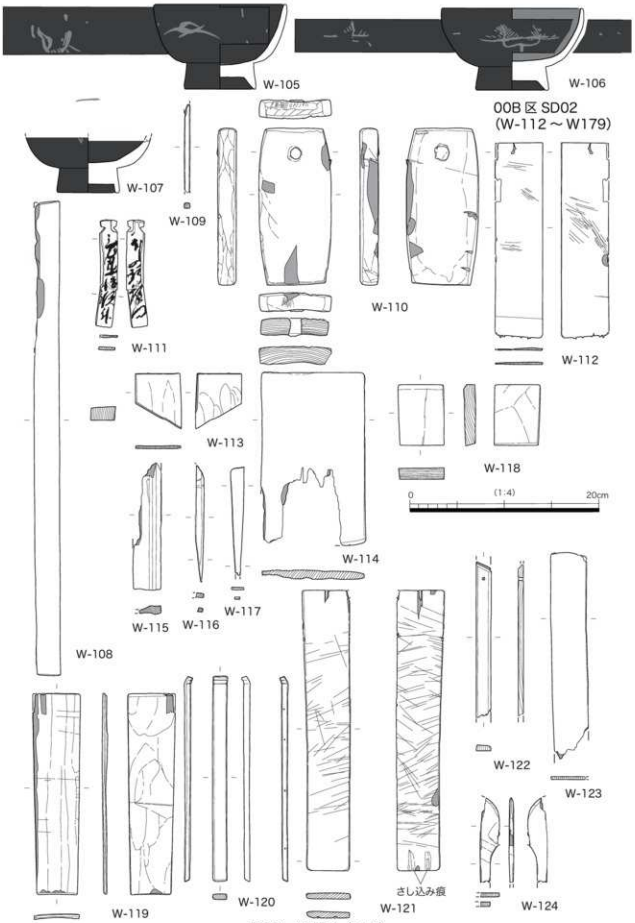

W-105
W-106
00B区 SD02
(W-112～W179)
W-107
W-109
W-110
W-111
W-112
W-113
W-118
0
(1:4)
20cm
W-114
W-115
W-116
W-117
W-108
W-122
W-123
W-119
W-120
さし込み痕
W-121
W-124

図89　木製品5（1：4）

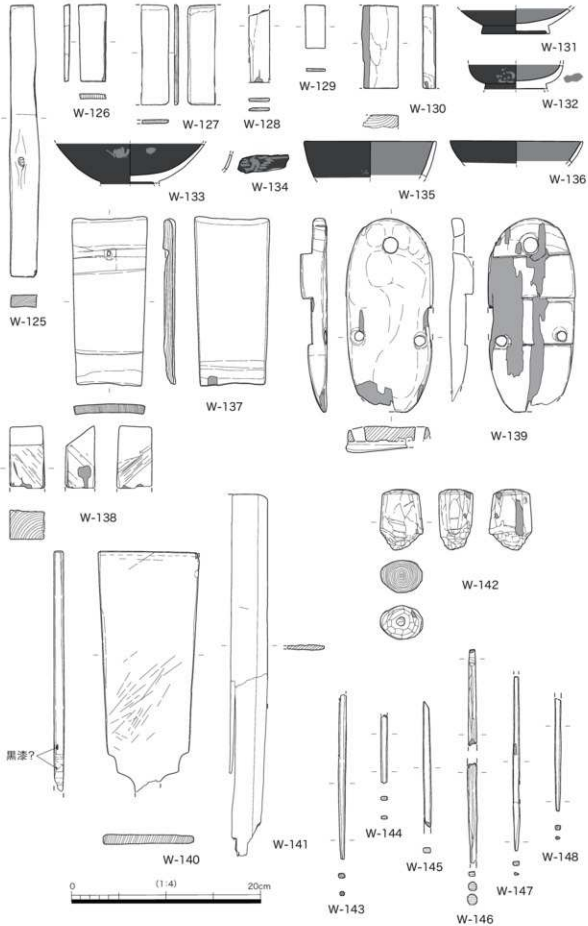

W-125
W-126
W-127
W-128
W-129
W-130
W-131
W-132
W-133
W-134
W-135
W-136
W-137
W-138
W-139
W-140
W-141
W-142
W-143
W-144
W-145
W-146
W-147
W-148
黒漆?
0
(1:4)
20cm

図90　木製品6（1：4）

られる。W105～W107は漆椀で、W105は外面黒漆に赤漆の鳥絵、内面黒漆に底部に赤漆の絵、高台の高い丸椀、口縁部径13.8cm、器高9.0cm、高台部径7.4cm、W106は外面黒漆に赤漆の松の絵、内面赤漆、高台の高い丸椀で、口縁部径14.7cm、器高8.7cm、高台部径7.4cm、W107は外面黒漆に赤漆の絵、内面黒漆の底部に赤漆の「一」、高台の高い丸椀、高台部径6.3cmである。W108は角棒で、長さ50.2cm、幅2.7cm、厚さ1.4cmの横断面やや台形のもの、W109は箸で断面方形のもの、W110は有孔板で、小口側がやや幅狭になる長方形状もの、長さ16.5cm、幅7.6cm、厚さ1.9cmを測り、側面が細かく削られている。W111は長方形の板状のもので、板の片側端部近くに両側面から抉りが入っている。部分的に欠損しているが、長さ11.4㎝、幅1.8㎝、厚さ0.3㎝を計る。両面に墨書があり、「三斗付□上清須外」・「ほしの新右衛門」と書かれている。形状から荷札木簡と考えられる。

00B区SD02（W112～W179）

W112～W130は板で、W112は幅5.0cm、厚さ0.2cmの薄い板で両面に短軸上から斜めの線状の刃物痕が見られる、W113は台形の長さ5.8cm、幅4.8cm、厚さ0.3cmのもの、W114は長さ18.4cm、幅10.5cm、厚み0.9cmの長方形のやや厚い板、W115は長軸方向に浅く削られた溝がみられるもの、W116は断面方形から長方形で幅0.9cm、厚さ0.5cmの先端が尖る棒状のもの、W117は厚さ0.2cmの薄い板状のもの、匙などの柄か、W118は長さ6.5cm、幅4.7cm、厚さ1.1cmの長方形のもの、削り痕が残る、W119は長さ21.3cm、幅4.9cm、厚さ0.4cmの長い薄板、W120は片端が鈍角に折れて鍵状になっている、長さ22.0cm、幅1.4cm、厚さ0.4cmのもの、W121は長さ29.7cm、幅4.8cm、厚さ0.5cmの板で片端に2ヶ所の差し込み痕、短軸方向に多数の刃物痕跡がある。W122は幅1.5cm、厚さ0.5cmのもので1ヶ所小さな円形の穿孔がある、W123は幅3.8cm、厚さ0.3cmの薄く長い板、W124は厚さ0.4cmのものでしゃもじを縦に半裁したものか、W125は長さ23.8cm、幅3.0cm、厚さ1.2cmの棒状のもの、W126は長さ8.3cm、幅2.8cm、厚さ0.5cmの薄板、W127は長さ10.5cm、厚さ0.4cmの薄板、W128は幅2.3cm、厚さ0.3cmの薄い板、W129は長さ4.6cm、幅2.0cm、厚さ0.2cmの長方形の薄板、W130は比較的大きな削り痕がみられる角材状の板、長さ8.9cm、厚さ1.3cmである。

W131～W136は漆椀で、W131は外面黒漆、内面赤漆の高台の低い椀、高台部径7.0cm、W132は外面黒漆に赤漆の花絵、内面赤漆の丸椀、W133は外面黒漆に赤漆の花？絵、内面黒漆に赤漆の絵、口縁部が大きく開く椀、W134は外面黒漆に赤漆の絵のある薄手の椀の体部片、W135は外面黒漆に赤漆の絵、内面赤漆ののもの、口縁部径13.9cm、W136は外面黒漆、内面赤漆のやや見込みの浅い椀、口縁部径13.7cmを測る。

W137は桶の側板で、幅8.0cm、高さ18.1cmを測る、外面にタガを締めた横帯状の凹みがあり、内面の下側にも底板の痕跡がみられ、上部のタガ付近に穿孔がみられる。W138は片端が斜めに切られた角材、幅3.5cm、厚さ3.0cmで側面に刃物痕が多数みられる。W139は一体型の下駄で、長さ20.5cm、幅9.2cm、高さ2.5cmの台が楕円形のもの、上面に残る痕跡から右足用と思われる。W140は羽子板形の建築材、側面に黒漆痕と思われるものがあり、片方の端部にえぐりがある、表面に刃物痕が多くみられる。W141は長く薄い板、W142は荒く周りが削られている胸形の栓である、長さ6.2cm、幅4.0cm、厚さ3.4cm。

W143～W175は箸で、断面方形・長方形から多角形・楕円形に削られて両端が細くなるもの、全体の長さはW159・W171で分かるもので24cm～25cm前後、幅と厚さは、W146・W149・W150の1cm前後のものを除くと、0.5cm～0.7cmのものが主体である。

W176～W178は小型の曲物の底板で、W176は径8.9cmの楕円形のもので厚さ0.9cm、W177は径5.3cmの円形のもので厚さ0.3cm、W178は径4cm前後の楕円形のもので厚さ0.2cmである。W179は片端部が焼けて炭化している棒で、長さ14.2cm、削って成形されている。

00B区SD03（W180～W184）

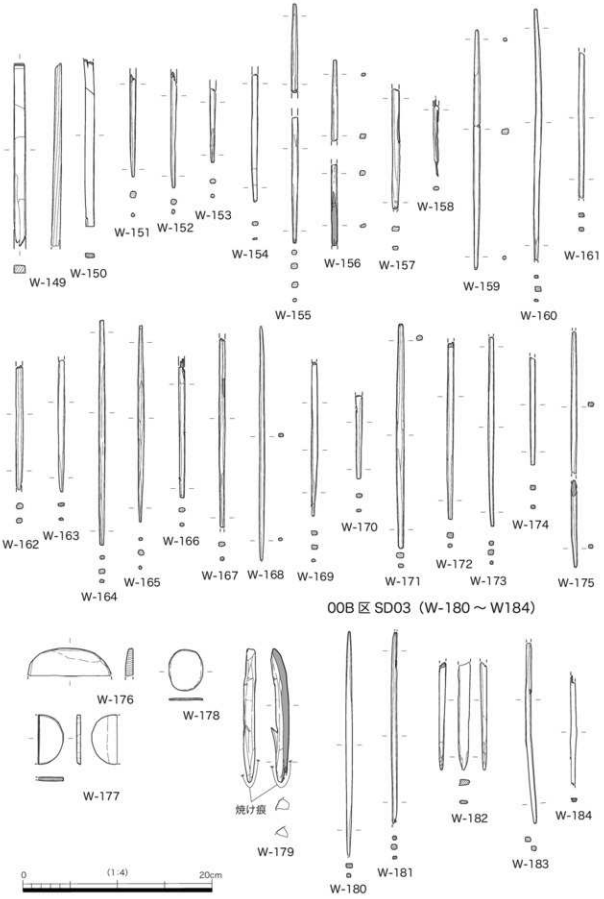

W-149
W-150
W-151
W-152
W-153
W-154
W-155
W-156
W-157
W-158
W-159
W-160
W-161
W-162
W-163
W-164
W-165
W-166
W-167
W-168
W-169
W-170
W-171
W-172
W-173
W-174
W-175
00B区 SD03（W-180～W184）
W-176
W-177
W-178
焼け痕
W-179
W-180
W-181
W-182
W-183
W-184
0
(1:4)
20cm

図91　木製品7（1：4）

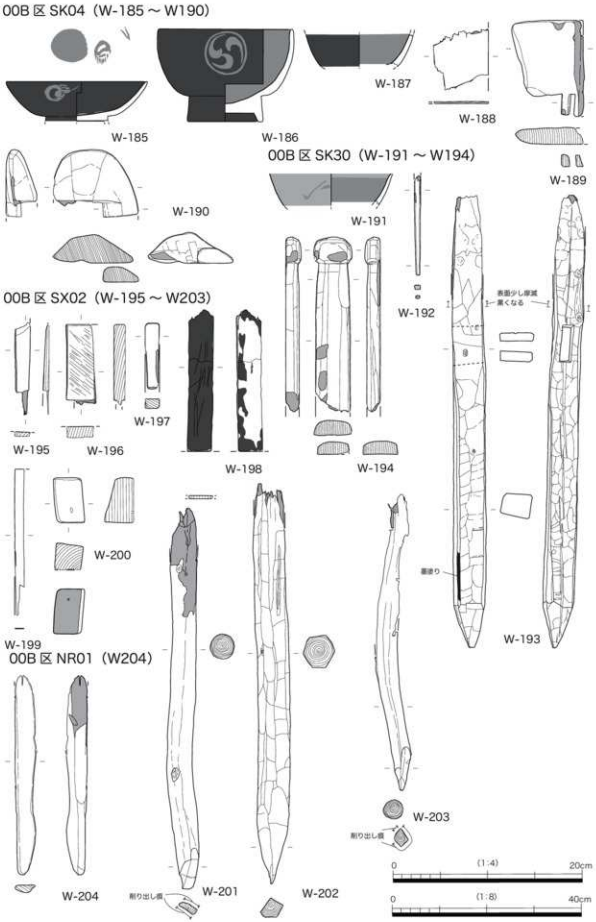


図92　木製品8（1：4、W-193は1：16、W-201～W-203は1：8）

00B区検出1（W205～W209）

00B区西トレンチ・西壁トレンチ・
北2トレンチ・2トレンチ（W210～W214）

01区SD03（W215～W236）

W-205　W-206　W-207　W-208　W-209　W-210　W-211　W-212　W-213　W-214　W-215　W-216　W-217　W-218　W-219　W-220　W-221　W-222　W-223　W-224　W-225　W-226　W-227　W-228　W-229　W-230　W-231　W-232　W-233

炭化している

0　(1:4)　20cm

0　(1:8)　40cm

図93　木製品9（1：4、W210は1：8）

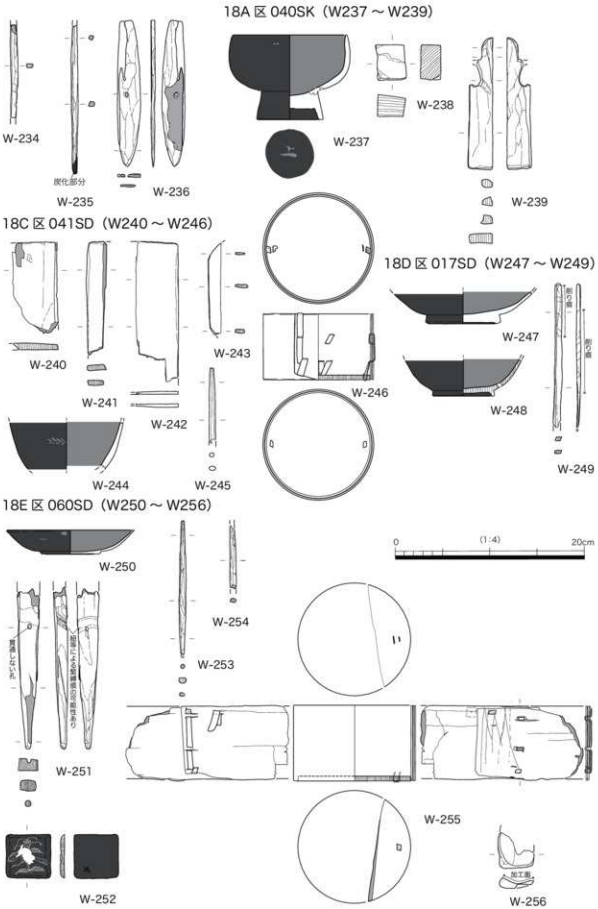

18A 区 040SK（W237 ～ W239）
W-234
W-235
炭化部分
W-236
W-237
W-238
W-239
18C 区 041SD（W240 ～ W246）
W-240
W-241
W-242
W-243
W-244
W-245
W-246
18D 区 017SD（W247 ～ W249）
W-247
W-248
W-249
18E 区 060SD（W250 ～ W256）
W-250
W-251
W-252
W-253
W-254
W-255
W-256
0
(1:4)
20cm

図 94　木製品 10（1：4）

W180 ～ W184 は箸で、W143 ～ W175 と大きさと形態は同様である、W182 はやや偏平で、先端が削り尖らせている。W180 は長さ 23.6cm、幅 0.6cm、厚さ 0.5cm を測る。

00B 区 SK04（W185 ～ W190）

W185 ～ W187 は漆椀で、W185 はやや見込みの浅い椀、外面黒漆に赤漆の流れ玉の絵文、内面黒漆に底部の赤漆の流れ玉の絵文、口縁部径 15.0cm、W186 は外面黒漆に赤漆の巴文が三方、内面赤漆の高台がやや高い見込みの深い丸椀、口縁部径 14.0cm、器高 9.8cm、高台部径 7.7cm を測る、W187 は外面黒漆、内面赤漆の椀である。W188 は折敷と思われる薄板、厚さ 0.2cm、W189 は側面にソケット状の切り込みがあるもので建築材か、W190 は丸い山形で面取りがあるもので下側は差し込み用か、二又になる。

00B 区 SK30（W191 ～ W194）

W191 は口縁部径 13.0cm の漆椀で外面黒漆の上に金彩、その上に赤漆の絵、内面赤漆に口縁部の金彩がみられる。W192 は箸で断面方形から長方形のもの、W193 は長さ 193cm 以上、幅 12.5cm、厚さ 11.0cm の断面方形の柱、表面がカンナにより削られており、片隅が削り尖らせている、一部黒塗りがみられる、柱に長方形の貫抜き穴がみられる。W194 は有頭棒で、片面は丸く削り出されており、片面は平坦になっている。

00B 区 SX02（W195 ～ W203）

W195 は～ W199 は板で、W195 は幅 1.6cm、厚さ 0.4cm 程の板材、W196 は端面や片面に削り痕がみられるもの、幅 3.1cm、厚さ 1.1cm、W197 は断面長方形の板、幅 1.4cm、厚さ 0.9cm を測る。W198 は両面に炭化部分がみられるもので、片面に刃物痕がみられる、幅 2.5cm、厚さ 0.3cm である。W199 は細長い薄板で、幅 0.8cm、厚さ 0.1cm である。W200 はやや台形状の角材、長さ 4.7cm、幅 3.1cm、厚さ 2.8cm を測る。W201 ～ W203 は杭で、W201 は小枝のみ削られた径 5.0cm の丸柱、W202 は断面六角形に削られた角柱で径 6.7cm、W203 は径 4.2cm の丸柱である。

00B 区 NR01(W204)

W204 は断面三角形状の板材で幅 2.1cm、厚さ 0.8cm である。

00B 区検出 1（W205 ～ W209）

W205 ～ W209 は板で、W205 は細長い板材で片端が斜めに削り出されている、幅 1.7cm、厚さ 0.3cm、W206 は厚さ 0.4cm、W207 は厚さ 0.4cm、W208 は厚さ 0.25cm で W206 ～ W208 は同じ形状のものである。W209 は箸で断面長方形のものである。

00B 区西トレンチ・西壁トレンチ・北 2 トレンチ・2 トレンチ（W210 ～ W214）

W210 は径 4.5cm の丸杭で全体が炭化しているもの、W211 は断面長方形の箸と思われるもの、W212 は幅 3.3cm、厚さ 0.2cm の薄板、W213 は片端が斜めに削り出されている楔で、幅 4.8cm、厚み 1.9cm を測る、W214 は箱板の一部と思われる幅 3.3cm、厚さ 0.4cm の薄板で、片端部の突出部に 2 ヶ所の小孔、その凹み部に小孔 2 ヶ所がみられる。

01 区 SD03（W215 ～ W236）

W215・W216 は漆椀で、W215 は外面黒漆に赤彩の絵文 3 個、内面赤漆、やや高台の高い丸椀、高台部径 7.0cm、口縁部径は 13cm 前後のもの、W216 は内・外面黒漆の丸椀、高台部は径 8.0cm である。W217 は桶の側板で、内面側がわずかに内湾する、内面側に削り痕が多数残る。W218 は上部に径 0.5cm 程の穿孔のある長方形の板材で木札と思われるもの、墨書はみられなかった。W219 ～ W228 は柿経の断片で、上部と思われるものは山形になっており、幅 2.5cm ～ 2.6cm が残る。W219 は「□道属行者摩頂之大士□然今當都」、W220 は「菩勢□者□」、W221 は「□断之勢奉□□□依之」、W222 は「□春草□□□春」、W223 は「南□」、W224 は「□南□」、W225 は「□持海□□」、W226 は「南無」、W227 は「海水」、W228 は「南無」の文字がみられる。W229 は栓で、上部は板状で下部 5cm 程が断面方形状に端側が細く削り出されている、W230 は穿孔のある細長い板で、片端部が剣状に削り出される、板材中央に径 0.3cm 前後の穿孔が 3cm 離れて 2 個ある、両面の短軸方向に刃物痕が多数みられる。W231 ～ W233 は卒塔婆で、W231 は上部に左右からの切れ込みがある有頭状の長い板材、上部の切れ込みの下に長さ 2.0cm、幅 0.8cm 程

の楕円形の穿孔がみられる、W232は塔形が小さく表現されるもの、W233は厚みのあるもので上部の塔形が比較的明確に作り出されているものである。W234・W235は箸で、W234は断面長方形状のもので上・下端を欠損している、W235は断面方形状のもので片端部が炭化している。W236は短剣形をする箆で、身の中央部で幅広になり、柄側でやや細くなっており、先端が鋭く削り出されている、中央部に径0.5cm程の穿孔がある。

18A区040SK（W237～W239）

W237は漆の口縁部がややすぼまる高台の高い丸椀で、外面黒漆に赤漆の絵文、外面底部に赤漆の「上」、内面赤漆、口縁部径12.0cm、器高9.0cm、高台部径6.8cmを測る。W238は角材で長さ3.6cm、幅3.0cm、厚さ2.4cm、W239は片端が抉りのある板材で建築部材と思われるもの、長さ13.9cm、幅2.5cm、厚さ1.0cmである。

18C区041SD（W240～W246）

W240～W243は板で、W240～W242は長方形状のもので W240は厚さ0.7cm、W241は厚さ0.5cm、W242は厚さ0.3cm、W243は円形状の板が割れたもので、厚さ0.3cmを測る。W244は漆の椀で、外面黒漆に赤漆の綾杉文、内面赤漆、W245は箸で断面八角形に削られたもの、W246は曲物で、径11.8cm、器高7.0cmを測る、径11.0cmの円形の底板に側板が二重に巻かれており、二方で樹皮により固定されている。

18D区017SD（W247～W249）

W247・W248は漆椀で、W247は外面黒漆、内面赤漆、やや浅い皿状の椀、高台部径6.3cm、W248は外面黒漆、内面赤漆の椀、高台部径6.3cmである。W247は劣化のために体部が底部から開いたために皿状になっている可能性がある。W249は断面長方形の箸である。

18D区060SD（W250～W256）

W250は口縁部がやや端反りにひらく漆皿で、外面黒漆に赤漆の絵文、内面赤漆のもの、口縁部径13.4cm、器高2.5cm、高台部径6.1cmを測る、W251は片端が尖る断面長方形の角棒、太くなった部分に紐ずれのような緊縛痕と貫通しない小孔がある。W252は一辺6.6cm～6.7cmの方形の飾り板で、上面・下面とも黒漆で上面に金彩の草花絵、上面の縁が山形となる。W253・W254は断面長方形から楕円形の箸、W255は曲物で、径12.3cm、器高8.0cmのもの、径11.8cmの円形の底板に三重の側板を巻いて樹皮で留めている。W256は凹みの整形のある不明製品である。

第4章　自然科学的分析

第1節　清洲城下町遺跡の金属製品の蛍光X線分析

堀木真美子・沓名貴彦*・鈴木正貴・蔡山誠一

1. はじめに

本項では、今回の調査区および隣接調査区(99A区等)で出土した、金属製品とその生産関連遺物について、主な金属元素の特定を目的に分析を行なった。2002年に刊行した報告書(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第99集

清洲城下町遺跡VIII)においては、99A区や97B区からは、鏡や飾金具、刀子、煙管、笄、銭などの銅製品、鉛玉などの他に、金属関連遺物として、鉄滓、鞴の羽口、銅塊、とりべ(ここではルツボと称す)などが出土していることが報告されている。またこの報告を行なった際には、99A区の非鉄金属製品および金属関連遺物の出土状況から、飾金具や笄などの小型の銅製品の生産(銅細工師)に関わる資料群であると予想された。

今回の調査区では、金属製品や金属関連遺物が、数は少ないものの出土している(図95・表1)。金属製品としては、飾金具(M001・M002)や留金具(M003)、刀子(M012)がある。金属関連遺物は鞴の羽口(M-039)やルツボの破片(M-045,M-046,M-048)が存在した。今回の調査区が99A区の南側となることや、製品だけではなく、ルツボなどが出土していることなどから、99A区との関連が強いと予想される。また2007年度に愛知県埋蔵文化財センター内に蛍光X線分析装置が配備されたことから、今回新たに出土した遺物と2002年に報告されたものと合わせて、写真撮影、透過X線撮影および元素の同定分析を行なった。

2. 分析方法と試料

分析方法は、試料の写真撮影を行なったのち、三重県立総合博物館内のデジタルX線透過装置(エクスロン・インターナショナル社製)をもちいてX線透過画像を撮影した。それらの画像を参照しつつ、測定箇所を特定し、蛍光X線分析を行なった。分析装置は、愛知県埋蔵文化財センター内の(株)堀場製作所製XGT-5200IIを使用した。測定条件は、雰囲気:大気中、X線照射径:100 μ m、測定時間:100s、X線管球:Rh、管電圧:50kVである。各試料において、最低2箇所の測定ポイントを設定し、測定を行なった。検出された元素のうち、土壌成分と思われるSi(珪素)、Al(アルミニウム)、については、金属成分とは見なさなかった。またFe(鉄)については、試料の状態から、土壌による付着物か製品の構成元素であるかを判断した。

なお、遺物の写真撮影は沓名が担当し、X線透過撮影は、三重県立総合博物館の間渕 創氏と甲斐由香里氏にご協力をいただいた。蛍光X線分析は堀木が行なった。

分析に用いた試料および測定点は図95・図96・図98に示した。図96と図98の遺物は、愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第99集

清洲城下町遺跡VIIIで報告されたものである。図中のP-01、P-02などは蛍光X線を照射した場所を示す。検出されたおもな元素については、各箇所毎で検出されたものを示した。

3. 分析結果

図95・表2は、00A区・00B区・18A区・18B区・62D区で出土した金属関連遺物のうち、色調から銅を含んでいると思われる製品と、金属製品の加工に関わる遺物から今回分析を行なったものを示している。M001,002,003は色調から、銅を含んでいると予想され、X線分析の結果からも銅が確認された。このうちM002については、P-02,03の蛍光X線分析でAu(金)の微弱なピークが認められた。が、模様などは確認できなかった。M003の板状の銅製品についても、透過X線画像と蛍光X線分析の結果からも、模様等は確認できなかった。M012は、刀子の柄部分でCu(銅)が、刃部でFe(鉄)が検出された。この柄部分においては、P02に

*国立科学博物館理工学研究部

おいて、銅板の継ぎ目が観察され、その継ぎ目からは Sn(錫）が検出された。M039 は羽口である。先端部に白色の付着物質がみられたことから、その部分の分析を行なった。その結果、Cu、Pb(鉛)、Fe、Mn(マンガン）が検出された。このうち、Fe と Mn は粘土胎土に普通に含まれるため、付着物に Fe や Mn が含まれていたかは不明である。M045,046,048 はルツボとしたものである。皿状の陶器に分厚い付着物が見られるものである。付着物は緑青と思われる緑や、赤褐色の不定形な付着物である。M045 では Cu と As(ヒ素）が、M046 では Cu、Pb、Sn と As が確認された。

図 96・図 97・表 3、図 98・図 99・表 4 は、本報告に隣接する調査区から出土した遺物である。ほぼ同時期の遺物と思われることから、今回の分析試料とした。図 96・図 97・表 3 は金属製品で、3096,3099 は飾金具と目貫と思われる銅製品である。それぞれ 3 箇所を測定した。3098 では Cu、Pb、As を、3099 では Cu、Pb、As、Sn、Zn（亜鉛）を確認した。3100 から 3104 は刀子などである。3102 は 3099 と同様に Cu、Pb、As、Sn、Zn を確認した。その他のものは、主に Cu が確認されている。3106 と 3107 は匙状のものである。共に Cu、Pb が確認でき、3106 では Zn が含まれていた。3108 では Cu、Pb が、3109 は Cu だけが検出された。3111 から 3115 までは、小さな塊であったり棒状のもので、製品よりは細工などの材料かと思われるものである。主に Cu が確認されている。3112 と 3117 では Cu の他に Pb が確認された。3111 と 3114、3117 では Cu 以外の主要な元素として As が確認された。3118 と 3119 はキセルである。3118 では Cu、Zn が主に、1 箇所で Pb が確認された。3119 では Cu、Pb、Zn が主として確認でき、継ぎ目と思われる箇所で Sn が確認された。3120 は Cu、Pb、Sn、As が確認できた。

図 98・図 99・表 4 は、金属製品の加工に関わる遺物である。「ルツボ」とした 3170 から 3196、3216 は、皿状の焼物に、スラグ状の物質が付着しているものである。用途として、取鍋として溶融した金属を受けるために使用したのか、坩堝として容器内で金属を溶融させたのかは判断できなかったため、便宜上「ルツボ」とした。3170、3183、3184 では Cu、Pb、As が確認された。3171、3188、3190、3192 では Cu と Pb が、3175、3198、3191 は Cu が確認された。3177 では、全ての測定点で Pb が、P-01、05 のみで Cu が確認された。3180 では 3 点の測定点で Cu、Pb、Zn が確認された。3196 は P-02 でのみ Cu、Pb、Zn が確認され、他の測定点では Pb が確認されなかった。3198 では全ての測定点で Zn が確認された。この 3198 は取手付きの小壺の形状を成しており、取手の外側部分からは Cu が確認された。3216 はルツボの蓋と思われるもので付着物部分を測定すると Cu が全ての測定点で、P-04 以外の 4 箇所で Zn が確認された。3200、3204、3232 は不定形の金属塊と思われる。これらはいずれも Cu と Sn が安定して確認できた。3232 は Cu と Sn に加え、Pb と Zn、Sb（アンチモン）が確認できた。3231 は Pb が確認された。

4. 考察

○キセルや刀子の鞘のつなぎ目について

今回の分析試料のうち、キセルの吸口である 3119 では、板状の素材を綴じ合せたと思われる部分から、Sn が検出されている。図 100 に 3119 の Sn が確認された測定点 P-04 と P-05 の画像を示す。画像中の直線部分が合わせ部分である。測定箇所は、十字の中心の円形部分である。P-04 では平坦部分を測定し、P-05 では凸部を測定している。その結果、P-04 では Cu、Pb、Zn が確認され、P-05 では Cu、Pb、Zn に加え Sn が確認できた。そこで元素マッピングを行なった結果、Sn が直線状に分布することが確認できた。これは真鍮製の板を筒状にした際に錫を用いてつなぎ合わせたものと思われる。

○亜鉛に関わる遺物について

今回の分析試料の中で、特質すべき遺物が 3198 の「ルツボ」である。この遺物に関しては、堀木ほか（2020）にてすでに報告を行なっているが、清洲城下町遺跡では 6 点の亜鉛に関わる遺物が確認されている。ここでは、3198 について報告を行う。複数の測定点で Zn が確認され、このうち「ルツボ」の外面や取手部分から

はCuが認められた。「ルツボ」の容器内の測定箇所からは、Zn以外の金属材料由来の元素は認められなかった。図101に元素マッピングの画像を示す。堀木ほか（2020）で報告を行なった他の5点の遺物に関しても、同様にほとんどの測定点でZnが確認され、数カ所の測定点でCuが確認されている。これらのZnが集中して認められる「ルツボ」が、Znを含む銅製品と、どのように関係したかは現時点で確認することはできないが、今後これらZnを含む「ルツボ」とそれ以外の「ルツボ」、Znを含む銅製品などとの出土位置や時期の関係を整理し、生産活動の様子を明らかにできればと考える。

謝辞
本研究は、JSPS科研費JP26350385の助成を受けたものである。

＜参考文献＞

鈴木正貴・藤山誠一（2004）「清須城下町における銅製品生産　ー愛知県における金属器生産（7）」『研究紀要　第5号』、p.47-62、愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
堀木真美子・香名貴彦・鈴木正貴・藤山誠一（2020）「清洲城下町遺跡出土の「るつぼ」の分析 -99A区 -」『日本文化財科学会第37回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会
愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第99集　『清洲城下町遺跡VIII』2002

図 95　本報告の金属製品の透過 X 線画像

表 2　本報告の金属製品の分析結果

番号	調査区	遺構	種別	形状等	測定箇所	検出された主な元素				
M001	00A	西壁トレンチ	銅製品（飾金具）	扁平	P-01	Cu	As			
					P-02	Cu	As			
M002	00B	検出 1	銅製品（飾金具）	球状の板	P-01	Cu	As			
					P-02	Cu	As		Au?	
					P-03	Cu			Au?	
					P-04	Cu	As			
M003	00A	検出 2	銅製品（留金具）	板	P-01	Cu	As			
					P-02	Cu	As			Fe
M012	00A	検出 1	鉄製品（刀子）	柄	P-01	Cu				
				柄の継ぎ目	P-02	Cu		Sn		
				刃	P-03					Fe
				柄の元	P-04	Cu				
M039	18B	017SD	輪の羽口の先端部	付着物	P-01(白)	Cu				Fe Mn
					P-02(白)	Cu	Pb			Fe Mn
M045	00A	検出 1	ルツボ	付着物	P-01	Cu	As			
				付着物	P-02	Cu	As			
M046	62D	検出 1	ルツボ	付着物	P-01(赤)	Cu	Pb	As	Sn	
					P-02(黒)	Cu	Pb		Sn	
					P-03(断面)	Cu	Pb		Sn	
M048	18A	検出 2	ルツボ	付着物	P-01(黒粒)	Cu	As			
					P-02(黒)	Cu				Fe

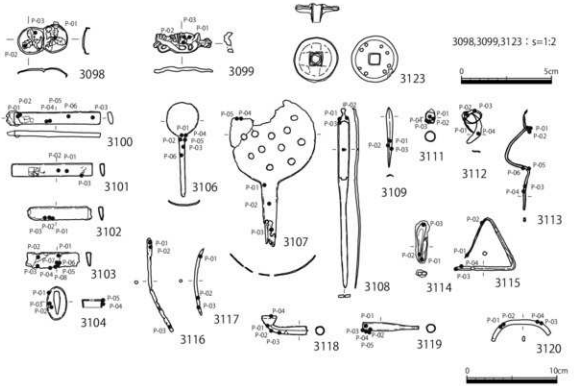


図 96　報告済の金属製品実測図

表 3　報告済の金属製品の分析結果

資料番号		出土地点	種　類	測定点	金属元素					
3098	97B	NR02植物層	銅製品(鈴金具)	P-01	Cu	Pb	As			
				P-02	Cu	Pb	As			
				P-03	Cu	Pb	As			
3099	95B		銅製品(目釘かくし)	目貫	P-01	Cu	Pb	As	Sn	Zn
					P-02	Cu	Pb	As	Sn	Zn
					P-03	Cu	Pb	As	Sn	Zn
3100	97B	NR02植物層	銅製品(小柄)		P-01	Cu				S
					P-02	Cu	Pb			
					P-03	Cu				
					P-04	Cu				
					P-05	Cu				
					P-06	Cu				
3101	97B	NR02植物層	銅製品(小柄)		P-01	Cu	Pb			
					P-02	Cu	Pb			
					P-03	Cu				
3102	99B	整地層	銅製品(小柄)		P-01	Cu	Pb	As	Sn	Zn
					P-02	Cu	Pb		Sn	Zn
					P-03	Cu	Pb		Sn	Zn
3103	96	横II	銅製品(刀子サヤ)		P-01	Cu				Zn
					P-02	Cu				Zn
					P-03	Cu		As		Zn
					P-04	Cu		As		
					P-05	Cu				
					P-06	Cu		As		S
					P-07	Cu				
					P-08	Cu			Sn	
3104	97C	横I	銅製品(ノV字)		P-01	Cu	Pb		Sn	
					P-02	Cu				
					P-03	Cu				
					P-04	Cu	Pb			
					P-05	Cu				
3106	97B	中央トレンチII	銅製品(サジ)		P-01	Cu				Zn
					P-02	Cu				Zn
					P-03	Cu	Pb			Zn
					P-04	Cu	Pb			Zn
					P-05	Cu	Pb			Zn
					P-06	Cu	Pb			Zn
3107	97B	南壁トレンチII	銅製品(灰吹)		P-01	Cu				S
					P-02	Cu	Pb		Sn	
					P-03	Cu	Pb			
					P-04	Cu	Pb			
					P-05	Cu	Pb			
3108	97B	NR02植物層	銅製品(釘)		P-01	Cu	Pb			
					P-02	Cu	Pb			
					P-03	Cu	Pb			
3109	96	T06 SX01の下	銅製品(留金具)		P-01	Cu				
					P-02	Cu				
					P-03	Cu				
3111	99A	SK116	銅叶	鼻平	P-01	Cu		As		
					P-02	Cu		As		
					P-03	Cu				
					P-04	Cu		As		
3112	99A	SK94	銅製品(金具)	円盤状	P-01	Cu	Pb			
					P-02	Cu	Pb			
					P-03	Cu	Pb			
					P-04	Cu	Pb			
3113	99A	SD12	銅製品(不明)	棒状	P-01	Cu				
					P-02	Cu				
					P-03	Cu				
					P-04	Cu				
					P-05	Cu				
					P-06	Cu				
3114	99A	1S94	鐙瓦(不明)		P-01	Cu		As		
					P-02	Cu		As		
					P-03	Cu				
3115	99A	SK182	銅製品(不明)	棒状	P-01	Cu				
					P-02	Cu				
					P-03	Cu				
					P-04	Cu				
3116	99A	SK94	銅製品(不明)	棒状	P-01	Cu				
					P-02	Cu				
					P-03	Cu				
3117	95B	SK192	銅製品(鐶)		P-01	Cu	Pb			
					P-02	Cu	Pb	As		
					P-03	Cu				
3118	95B	トレンチ	銅製品(キセル雁首)		P-01	Cu				
					P-02	Cu				Zn
					P-03	Cu	Pb			Zn
					P-04	Cu				Zn
3119	99A	SK88	銅製品(キセル吸口)		P-01	Cu				Zn
					P-02	Cu	Pb			Zn
					P-03	Cu	Pb		Sn	Zn
					P-04	Cu	Pb			Zn
					P-05	Cu	Pb		Sn	Zn
3120	95B	SK183	銅製品(不明)	棒状	P-01	Cu	Pb	As	Sn	
					P-02	Cu	Pb	As	Sn	
					P-03	Cu	Pb	As	Sn	
					P-04	Cu	Pb	As	Sn	

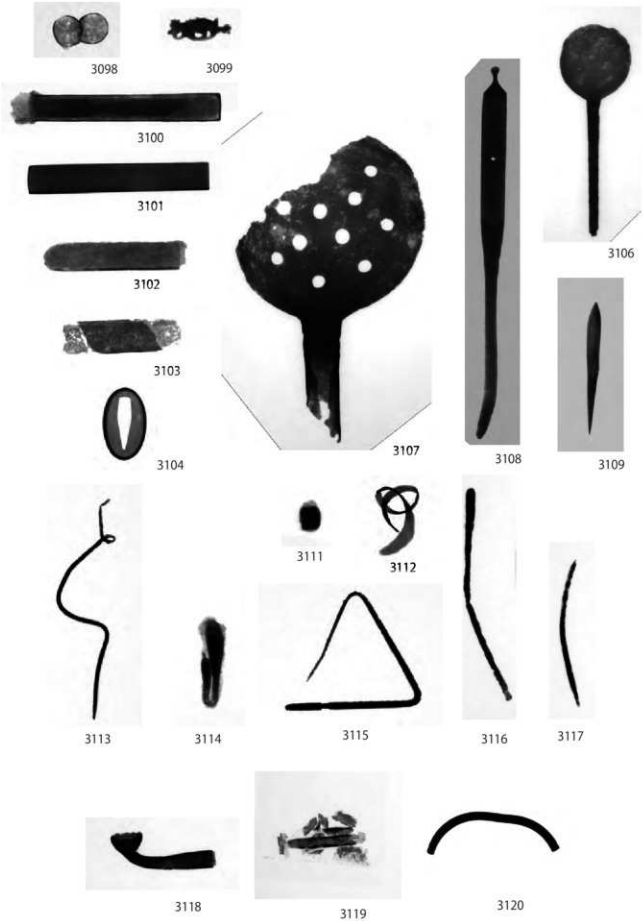


図97　報告済の金属製品の透過X線画像

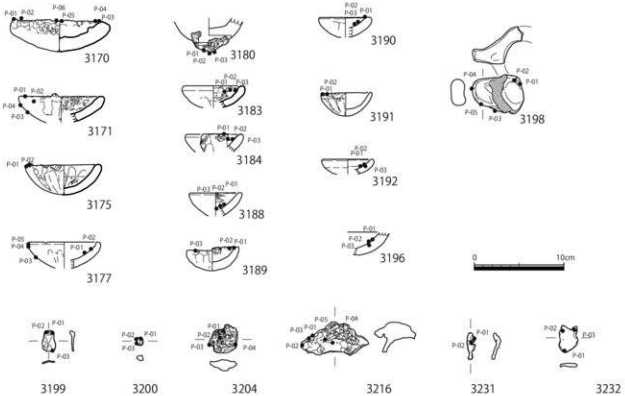


図 98　報告済のルツボ・銅滴・銅塊実測図

表 4　報告済のルツボ・銅滴・銅塊の分析結果

資料番号		出土地点	種　類		測定点	金属元素				
3170	99A	検II	ルツボ	椀型	P-01	Cu	Pb	As		
					P-02	Cu		As		Sr
					P-03	Cu	Pb	As		
					P-04	Cu	Pb	As		
					P-05					
					P-06	Cu		As		Sr
3171	99A	検II	ルツボ	椀型	P-01	Cu	Pb			
					P-02	Cu	Pb		Zn	
					P-03	Cu				
					P-04	Cu				
3175	99A	SK198	ルツボ	椀型	P-01	Cu				Sr
					P-02	Cu				Sr
3177	99A	検II	ルツボ	椀型	P-01	Cu	Pb			
					P-02		Pb			
					P-03		Pb			Bi
					P-04		Pb			Bi
					P-05	Cu	Pb			Bi
3180	99A	SK89	ルツボ	椀型	P-01	Cu	Pb		Zn	
					P-02	Cu	Pb		Zn	
					P-03	Cu	Pb		Zn	
3183	99A	検II	ルツボ	椀型	P-01	Cu	Pb	As		
					P-02	Cu	Pb	As		
					P-03	Cu	Pb	As		
3184	99A	SK198	ルツボ	椀型	P-01	Cu	Pb	As		
					P-02	Cu	Pb	As		
					P-03	Cu	Pb	As		
3188	99A	SK198	ルツボ	椀型	P-01	Cu	Pb			
					P-02	Cu	Pb			
					P-03	Cu	Pb	As		
3189	99A	検II	ルツボ	椀型	P-01	Cu				
					P-02	Cu				
					P-03	Cu				
3190	99A	検II	ルツボ	椀型	P-01	Cu	Pb			Bi
					P-02	Cu	Pb			Bi
					P-03	Cu	Pb			Bi
3191	99A	SK89	ルツボ	椀型	P-01	Cu				
					P-02	Cu				
3192	99A	検II	ルツボ	椀型	P-01	Cu	Pb			
					P-02	Cu	Pb			
					P-03	Cu	Pb			
3196	99A	検II	ルツボ	椀型	P-01	Cu			Zn	
					P-02	Cu	Pb		Zn	Zr
					P-03	Cu				
3198	99A	SD12	ルツボ	柄付	P-01				Zn	
					P-02				Zn	
					P-03	Cu			Zn	Rb Sr
					P-04				Zn	
					P-05	Cu	Pb		Zn	
3199	99A	NO113	鐸貨(不明)		P-01	Cu	Pb	As	Sn	
					P-02	Cu	Pb			
					P-03	Cu	Pb			
3200	99A	検II	銅塊	棒状	P-01	Cu			Sn	
					P-02	Cu			Sn	
					P-03	Cu			Sn	
3204	99A	SK89	銅滴	椀型	P-01	Cu			Sn	
					P-02	Cu			Sn	
					P-03	Cu	Pb		Sn	
					P-04	Cu				
3216	99B	整地層	(ルツボフタ?)		P-01	Cu			Zn	Rb
					P-02	Cu			Zn	
					P-03	Cu			Zn	Zr
					P-04	Cu				
					P-05	Cu	Pb		Zn	Sr
3231	95A	検I-1	転塊?	棒状	P-01		Pb			
					P-02		Pb			
3232	95A	検I-1	銅塊	扁平	P-01	Cu	Pb		Sn Zn	Sb
					P-02	Cu	Pb		Sn	Sb
					P-03	Cu	Pb		Sn Zn	Sb

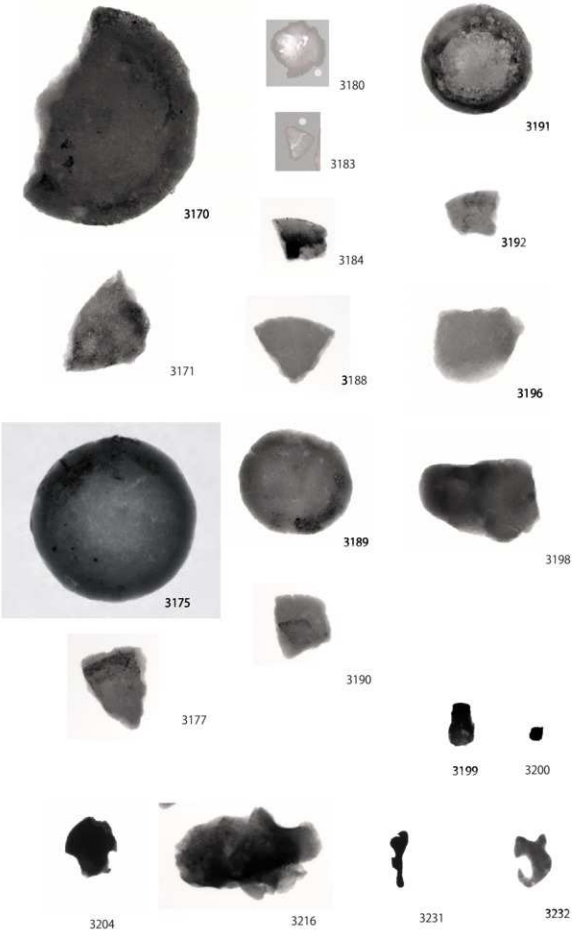
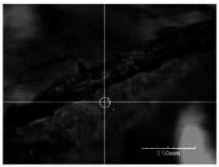
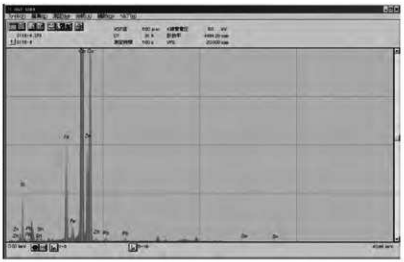


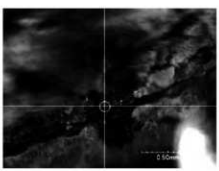
図 99　報告済のルツボ・銅滴・銅塊の透過 X 線画像



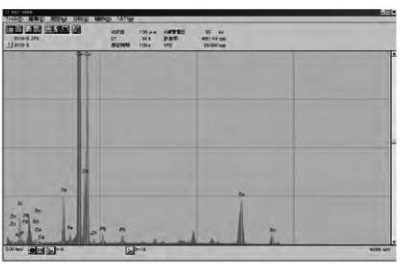
▲ P-04 測定箇所



▲ P-04 測定箇所のスペクトル

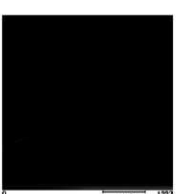


▲ P-05 測定箇所



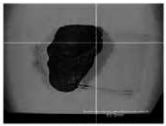
▲ P-05 測定箇所のスペクトル

▲ Cu の分布状況

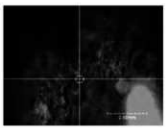


▲ Sn の分布状況

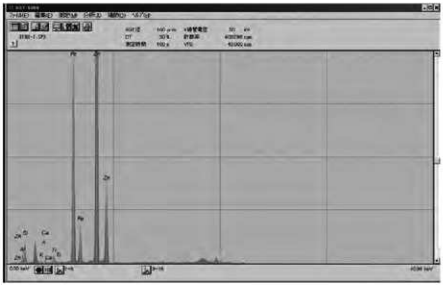
図 100　金属製品 3119（キセル 吸口）の 分析結果



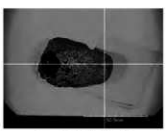
▲ P-01 測定箇所



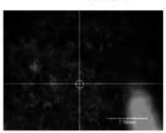
▲ P-01 測定箇所拡大



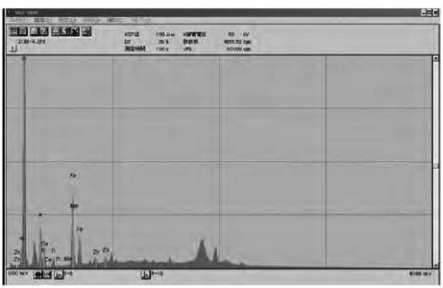
▲ P-01 測定箇所のスペクトル



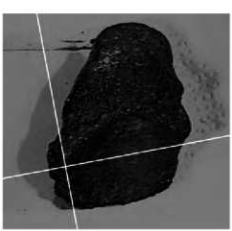
▲ P-04 測定箇所



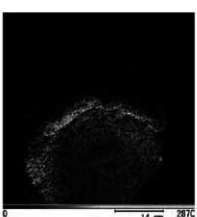
▲ P-04 測定箇所拡大



▲ P-04 測定箇所のスペクトル



▲「ルツボ」3198



▲ Zn 分布状況

図101　ルツボ3198の分析結果

第2節　清洲城下町遺跡における層序と古環境

鬼頭　剛・株式会社パレオラボ AMS 年代測定グループ

1. はじめに

清洲城下町遺跡にて地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、放射性炭素年代測定および地形解析の結果を報告する。

2. 試料および分析方法

各調査区で地表から、あるいは遺構検出面からバックホーにより掘削し層序断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行なった。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。また、各調査区の層序断面からは放射性炭素年代測定の試料を採取した。分析方法の詳細を以下に記す。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析（AMS）法により測定を行なった。加速器質量分析法は 125 μ m の篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨（グラファイト）に調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH）にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。^{14}C 年代値の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。^{14}C 年代の暦年代への較正には OxCal4.3（較正曲線データ：INTCAL13）を使用した。なお、2 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された放射性炭素年代誤差に相当する 95.4% 信頼限界の暦年代範囲であり、カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。

調査地点を含めた広域的な周辺地形を解析するため、1/2500 スケールで等高線図を作成した。作成には愛知県西春日井郡清洲町発行（市町村合併前の地図を用いたので発行時の市町村名を使用する。）の「都市計画図（1/2500）」、同郡春日町の「都市計画図（1/2500）」、同郡新川町発行の「都市計画基本図（1/2500）」、同郡西春町発行の「都市計画図（1/2500）」、財団法人名古屋市都市整備公社発行の「用途地域指定図（1/2500）」にプロットされた標高値を基に等高線間隔 0.2m で描画した。なお解析にあたって、河川堤防や高速道路、工場や学校のような、人工的に建設・造成されたことが明らかな標高値は除外して等高線を描画した。描画後には現地踏査を実施し、さらに航空写真を基に検討を加えた。

3. 分析結果

（1）各調査区での試料採取

清洲城下町遺跡の 17A 区・18B 区・18E 区の 3 調査区において層序の記載と分析試料を採取した。調査年度の古い順に記す。

17 区は、五条川の東西方向にかかる橋のうちのひとつ船杁（ふないり）橋が、五条川の左岸堤防にかかる場所からまっすぐ東へゆるやかに下って傾斜する東西方向の道路に沿う南側に、西から 17A 区、17B 区として設定された。調査地点は五条川の流路から約 50m 東にある。17A 区の南側で東西 2.3m、南北 2.4m の長さのトレンチが掘削された（図 102）。トレンチの壁面でみられる地層は、白色～灰白色を呈する下位層と灰色の上位層とに大きく 2 層に区分される（図 103a）。下位層より、標高 1.00m ～ 1.80m には灰白色 (新版標準土色帖によるカラーチャートで 5Y8/2 ; 以下ではカラーチャート記号のみを記す) あるいは明褐色 (7.5YR5/6) の粗粒砂の混じる細粒～中粒砂層が堆積し、その上に標高約 1.80m ～ 3.50m までを灰色（5Y4/1）を呈する現代の水田耕作土やにぶい黄褐色 (10YR5/4) の現代の盛土によって覆われている。下位層の砂層の断面には葉片などの植物片が濃集する層準もみられる。砂層にはシルトや粘土の基質が少なく海法は良好である。また、トラフ状斜層理が観察される。この砂層中の、層厚約 1cm のレンズ状に挟まれる植物片の濃集層について、トレンチ西側の標高 1.39m で放射性炭素年代測定用の試料 1 を（図 103b）、トレンチ北側の標高 1.36m で試料 2 を採取した（図 103c）。

五条川流路河川敷の高水敷に設定された 18

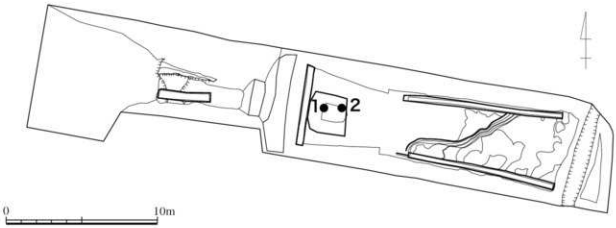


図 102　17A 区における分析試料採取地点
黒い丸は採取地点、数字は試料番号を示す。

図 103　17A 区における分析試料の採取状況
a. トレンチの全景 (南東から)
b. 西壁での試料 1 採取状況 (東から)
矢印は試料採取層準、数字は試料番号を示す。
ヘルメットの長さは 28cm
c. 北壁での試料 2 採取状況 (南から)
矢印は試料採取層準、数字は試料番号を示す。
草刈り鎌の長さは約 40cm

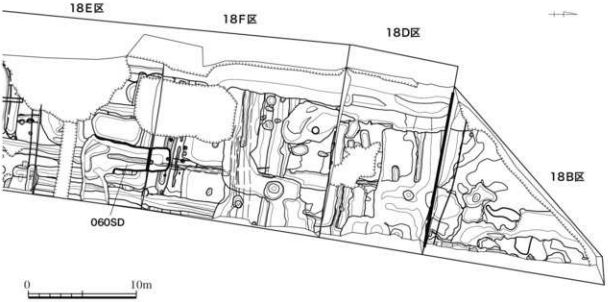


図104　18B区,18E区の地層観察および分析試料採取地点
太線が分析試料を採取した地層断面にあたる。

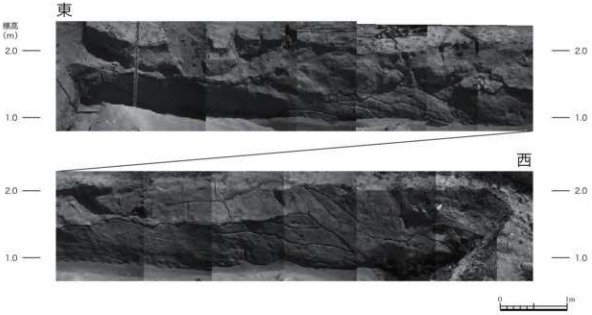
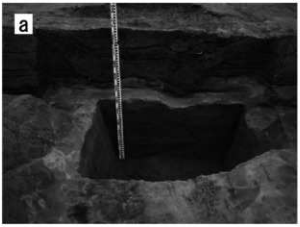


図105　18B区南端における東西方向の地層断面
標高1.5m付近を境に上位層ではシルト成分が、下位層では砂成分が卓越する。

図 106　18B 区南端の東西方向地層断面の様子
a. 東西方向地層断面の全景 (北東から)
写真奥が現在の五条川の流路と堤防
b. 下位層の砂層に認められるトラフ状斜層理
(北から) 砂層の厚さは約 50cm
c. 試料 1 および 2 の採取状況 (北から)
矢印は試料採取層準を示す。(試料 1,2 とも同じ層準から採取)



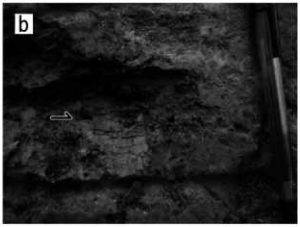


図 107　18E 区北端の遺構 060SD と下位層の東西地層断面
a. 遺構 060SD 堆積物と下位の中粒砂層の堆積状況 (南から)
遺構検出面の標高は約 2.0m
b. 遺構 060SD 堆積物内の試料 1 堆積状況 (南から)
矢印は試料 (炭化材) と試料採取層準を示す。
ボールペンの径は 1cm

区は、北から18B区、18D区、18F区、18E区、18A区、18C区に分けられた。18B区の南端（18B区と18D区との境界）では東西方向に長さ14.53mのトレンチが掘削された（図104・図105・図106a）。掘削されたトレンチの西の端は現在の五条川の流路左岸から東に約1mの近距離にある。トレンチで観察される地層は標高1.45m付近を境にして2層に分けられる。下位層である標高1.00m～1.45mには淡黄色（2.5Y8/3）や灰白色（2.5Y8/2）の中粒砂層が堆積する。この砂層を覆って上位層となる標高1.45mから標高2.00mまでの地層は、堆積物の構成粒子の粒度や色調の差により2層に分けられた。この2層は、にぶい褐色（7.5YR5/4）を呈する細粒砂混じりシルト層や、にぶい黄橙色（10YR6/4）の中粒砂層であり、下位層である標高1.00m～1.45mの中粒砂層を広く覆っている。上位層のこれらの地層は考古遺構を埋める堆積物で前者は017SDの、後者は022SEを埋める堆積物である。標高1.00m～1.45mでみられる中粒砂層と標高1.45m～2.00mまでの考古遺構を埋める堆積物を削剥するのが、トレンチの西の端でのみみられる標高1.00m～2.00m考古遺構の地層である（図105下段右端）。褐色（7.5YR4/3）あるいは、にぶい黄橙色（10YR7/2）で細粒砂の混じる粘土質シルト層ないしシルト層からなり、出土する考古遺物から明治時代の堆積物であると推定されている。標高1.00m～1.45mの下位層でみられる中粒砂層には明瞭な堆積構造が認められ、トラフ状斜層理や板状斜層理が観察された（図105・図106b・図106c）。斜層理から求められる古流向はおおむね北東から南西方向を示した。本砂層の標高0.98mから放射性炭素年代測定用の炭化材と木材片の2試料を採取した（図106c）。

18E区の北端（18E区と18F区の境界）において考古遺構060SDの横断面（東西断面）とその下位層の堆積状況を確認した（図103・図106a）。標高1.60m付近を境に地層は下位層である砂層と、それを覆うシルト層や粘土層からなる。下位層は標高0.96mから標高1.60mまで、にぶい黄色（2.5Y6/3）を呈する細粒砂～中粒砂層が堆積する。基質としてシルトや粘土といった細粒な堆積物粒子をあまり含まず、淘汰は良い。この砂層を覆って標高1.60mから標高2.00mまでに褐色（10YR4/4）のシルト混じり細粒砂層や、黄褐色（2.5Y5/3）の粘土層ないし粘土質シルト層が堆積する。なお、標高2.00m前後が18E区の遺構検出面の標高となる。これらの地層を掘削して考古遺構060SDが埋積される。遺構を埋める地層は下位層より灰黄褐色（10YR5/2）の粘土質シルト層、それを覆う褐灰色（10YR4/1）の極細粒砂層、さらにそれらを覆うにぶい黄褐色（10YR5/3）の極細粒砂層からなる（図106a）。遺構を埋める堆積物中には、下位層でみられた標高0.96mから標高1.60mまでの細粒砂～中粒砂層や、それを覆う標高1.60mから標高2.00mまでのシルト混じり細粒砂層や粘土質シルト層に比べると、肉眼でも観察できる径2～3mmほどの炭化物が多く含まれており、その特徴から地層を区分することができる。遺構を埋める堆積物の、とくに褐灰色（10YR4/1）の極細粒砂層には炭化物が多く認められる。考古遺構060SDを埋めるこの褐灰色極細粒砂層中の標高1.85mの層準より放射性炭素年代測定用の炭化材を採取した（図106b）。

（2）放射性炭素年代測定

17A区・18B区・18E区の3調査区、3地点で採取した試料5点の放射性炭素年代測定を行った（表5～表7）。古い数値年代では、17A区の標高1.00m～1.80mでみられた粗粒砂の混じる細粒～中粒砂層の標高1.39mで採取された植物の生材（試料1）が2780-2742 cal yrs BP (831-793 BC: PLD-39324) の2700年前代があるものの、同じ調査区かつ同じ砂層内の標高1.36mより採取された植物の生材（試料2）は1185-1065 cal yrs BP (765-886 AD：PLD-39325) と1100年前代を示した。18B区の南端で掘削されたトレンチにおいて、標高1.00m～1.45mの中粒砂層と互層する灰黄褐色を呈する細粒砂の混じるシルト層の標高0.98mからは試料を2点採取しており、試料1は1264-1171 cal yrs BP (686-779 AD: PLD-39326) を、試料2は1262-1198 cal yrs BP (688-752 AD: PLD-39327) と共に1200年前代であった。18E区の考古遺構060SDの遺構を埋める

表5　17A 区分析試料の放射性炭素年代測定結果

試料 No.	調査区 (区)	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C年代 (yrs BP)	δ^{13}C PDB (‰)	2σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
1	17A	1.39	粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂層	生材	2639 ± 23	−23.90 ± 0.23	831 − 793 BC (95.4 %)	2780 − 2742 (95.4 %)	PLD − 39324 (AMS)
2	17A	1.36	粗粒砂混じり細粒砂～中粒砂層	生材	1219 ± 22	−24.78 ± 0.20	765 − 886 AD (81.4 %)	1185 − 1065 (81.4 %)	PLD − 39325 (AMS)
							713 − 745 AD (14.0 %)	1238 − 1206 (14.0 %)	

表6　18B 区南端、東西方向地層断面の放射性炭素年代測定結果

試料 No.	調査区 (区)	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C年代 (yrs BP)	δ^{13}C PDB (‰)	2σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
1	18B	0.98	灰黄褐色細粒砂混じりシルト層	炭化材	1241 ± 21	−24.14 ± 0.19	686 − 779 AD (73.0 %)	1264 − 1171 (73.0 %)	PLD − 39326 (AMS)
							790 − 869 AD (22.4 %)	1160 − 1082 (22.4 %)	
2	18B	0.98	灰黄褐色細粒砂混じりシルト層	生材	1235 ± 24	−25.72 ± 0.31	688 − 752 AD (42.7 %)	1262 − 1198 (42.7 %)	PLD − 39327 (AMS)
							767 − 877 AD (38.6 %)	1183 − 1074 (38.6 %)	
							759 − 780 AD (14.0 %)	1191 − 1170 (14.0 %)	

表7　18E 区遺構 060SD から採取した分析試料の放射性炭素年代測定結果

試料 No.	調査区 (区)	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C年代 (yrs BP)	δ^{13}C PDB (‰)	2σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
1	18E	1.85	灰黄褐色粘土質シルト層	炭化材	336 ± 21	−26.86 ± 0.21	1481 − 1638 AD (95.4 %)	470 − 312 (95.4 %)	PLD − 39328 (AMS)

灰黄褐色（10YR5/2）の粘土質シルト層中に分散して含まれる炭化材は 470-312 cal yrs BP (1481-1638 AD; PLD-39328) と今回分析に供した試料の中ではもっとも新しい数値年代であった。

（3）遺跡周辺の等高線図

東西約 2.9km、南北約 4.1km の範囲全体では等高線間隔 0.20m で、標高 1.40m から標高 6.40m までの等高線が描かれる（図 108）。解析範囲全体では図の北と北東方向で相対的に高く、北名古屋市法成寺米田付近の標高 6m を超える場所が解析範囲内でもっとも標高の高い場所となる。対して、図の西と南西方向で相対的に低く、北の稲沢市井之口鵜田町から南のあま市小路や石作までには標高値 1.40m よりも低い場所がみられる。解析範囲の中央を五条川が北から南へ流れており、五条川の流路から西へ最大距離 1.8km には福田川が、東へ最大距離 940m には水場川がそれぞれ北から南へ流下している。解析範囲の中央付近を北西 - 南東方向に東海道本線が通り、それに並行して東海道本線の東に県道名古屋一宮線や、さらに東側に国道 22 号線が通っている。国道 22 号線は清須市朝日地域で名古屋第二環状自動車道（通称：名二環）と交差する。解析範囲の南西には北西から南東方向に東海道新幹線や名古屋鉄道（通称：名鉄）本線が通り、南東角には東海交通事業城北線が通っている。

解析図の等高線間隔には粗密差がみられ、粗密差の空間的な配置状況から低平な場所の起伏が読み取れる。解析範囲では等高線が閉曲線となり島のように相対的に標高の高いところや、それらの間に散見される谷地形が判別できる。標高の高いところでみられる特徴を北から南へ順に述べる。

1. 図の北側、稲沢市下津寺前町には標高 5.00m ～ 5.40m の閉曲線で囲まれた北西 - 南東に約 200m、北東 - 南西に約 130m の島状に標高の高い地形がみられる。

2. 図の北方、清須市春日壱屋敷には標高 4.00m ～ 4.80m の閉曲線で囲まれた北西 - 南東に約 260m、北東 - 南西に約 160m の島状に標高の高い地形がみられる。

3. 図の中央、清須市春日野方には標高 4.00m ～ 4.60m の閉曲線で囲まれた北西 - 南東に約 530m、北東 - 南西に約 170m の島状に標高の高い地形がみられる。

4. 図の中央、稲沢市北市場本町から清須市一場にかけて標高 4.00m ～ 5.00m の閉曲線で囲まれた北西 - 南東に約 800m、北東 - 南西に約 240m の島状に標高の高い地形がみられる。

5. 図の中央から南端にかけて、清須市春日川中から清須市鍋片にかけての標高 4.00m ～ 4.80m の閉曲線で囲まれた南北に約 2300m、東西に約 320m の島状に標高の高い地形がみられる。

6. 図の南方、清須市廻間から土田にかけて名鉄本線新清洲駅の北にひろがる地域には、廻間に

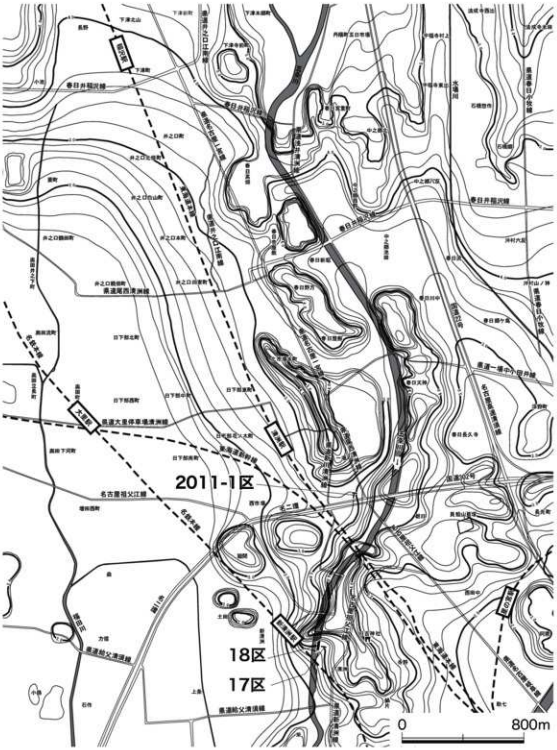


図 108 清洲城下町遺跡と周辺地域の等高線図
17 区・18 区が今回の調査地点、2011-1 区は清須市による調査地点を示す。

おいて北西 - 南東に約 290m の長さで、北東 - 南西に約 190m の長さの島状に標高の高い地形と、さらにその東にも南北の距離約 160m、東西距離約 220m の島状に標高の高い地形がみられる。また、土田には南北距離約 100m、東西距離約 150m の島状に標高の高い地形が２つ見られる。このように解析範囲には相対的に周りよりも標高の高い島状の地形が９つ認められる。

いっぽうで、谷地形もみられる。北東から南西へ順に列記する。

1. 図の北東、北名古屋市宇福寺村上から北名古屋市中之郷八反を通り、清須市春日川中、春日長久寺、名古屋市西区長先町にかけて標高 2.00m ～ 5.00m で北から南にのびて南に開口する谷地形が認められる。

2. 図の中央付近において、清須市春日宮重町から北名古屋市中之郷西野、中之郷池田、清須市春日天神、清須市西市場にかけて標高 1.40m ～ 5.80m で北から南西方向にのび、南西方向に開口する谷地形がみられる。

3. 図の西側、稲沢市長野から稲沢市菱町、井之口鶴田町、奥田立長町、あま市方領、あま市石作にかけて標高 1.40m ～ 5.00m で北から南へのび、南方向に開口する谷地形が認められる。この谷地形内を現在の福田川が流れている。上記のほかにも相対的に標高が高い凸状地形を刻む微小な谷地形がみられるものの、解析範囲には大きく３つの谷地形が認められる。

4. 考察

(1) 清洲城下町遺跡で観察される砂層について

河川の流路には土木工学、河川工学的に細かな区域が設定されており、河川流路の両側に並行する、堤防と堤防とに挟まれる範囲を河川区域とよび、堤防によって氾濫や洪水から守られて住居や農地がひろがる範囲を河川区域に対して堤内地とよぶ。実際の流路が流れる河川区域は、堤防の部分の堤防敷と流路部分の堤外地とに分けられる。堤外地はさらに通常、水が流れている低水路と、洪水時に増水し水位が高くなった時だけ流れる高水敷に分けられる。今回の清洲城下町遺跡の調査区は、清須市清洲町内を流れる五条川の堤外地側の高水敷に 18 区が、堤内地側に 17 区が設定された。いずれの調査区も現在の五条川流路にきわめて近い場所での調査であるため、五条川が現在の位置を流れるようになった時期に関する地質情報が得られるものと期待された。

さて、堤内地側の 17 区において、深掘を実施した 17A 区では標高 1.00m ～ 1.80m には灰白色を呈する粗粒砂の混じる細粒～中粒砂層が堆積し、その上を標高 1.80m ～ 3.50m までが現代の水田耕作土や現代の盛土によって覆われていた。一般に堤内地の土地利用は住居や農地に使われるため、標高 1.80m ～ 3.50m までが水田耕作土や盛土であったことは想定内ではあった。ところが、水田耕作土と盛土の下位層には淘汰の良好な中粒砂～粗粒砂層が確認でき、さらに砂層には、堆積物が運搬される際に地層につくる特徴的な縞模様であるトラフ状斜層理の堆積構造が良好に保存されていた（図 103）。トラフ状斜層理は河川流路といった一定の方向へ向かう流れ（一方向流という）が、流路の底につくる砂堆（デューン）の移動とその累積によって形成されるものである。この砂堆の形態には二次元と三次元のものがあり、二次元的なものが板状（プラナー）斜層理、三次元的なものがトラフ状斜層理にあたる（Harms, et al., 1975）。一般に三次元的な方が大きな流速で形成される（Costello and Southard, 1981）。17A 区の深掘で確認された細粒～中粒砂層にはトラフ状斜層理が認められたことから、調査地点はかつて河川の流路底であり、堆積物を運搬する水理エネルギーの高い、水深が浅くて流速の速い水の流れがあったことがわかる。また、その年代について、細粒～中粒砂層の標高 1.39m から採取した生材 (試料 1) の放射性炭素年代が 2780-2742　cal yrs BP(831-793 BC : PLD-39324)、細粒～中粒砂層の標高 1.36m から採取した生材 (試料 2) の放射性炭素年代が 1185-1065　cal yrs BP(765-886 AD : PLD-39325) で、約 2700 年前代と約 1100 年前代（8 世紀～ 9 世紀）の２つの数値年代が得られた（表 5）。いっぽうで、堤外地側の 18B 区においても、標高 1.00m ～ 1.45m の中粒砂層にはトラフ状斜層理や板状斜層理が観察されたことから（図 105・図 106）、18B 区の地

表8　清須市 2011 年調査地点試料の放射性炭素年代測定結果
調査区 1tr, 地点 1

試料 No.	標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C年代 (yrs BP)	δ^{13}C PDB (%)	2σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	2σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
1	1.53	暗灰色粘土層	炭化材	1081 ± 18	−24.17 ± 0.15	948 − 1020 AD (68.1 %) 895 − 926 AD (29.3 %)	1002 − 931 (68.1 %) 1055 − 1025 (29.3 %)	PLD − 21359 (AMS)
2	2.13	青灰色砂質シルト層	炭化材	694 ± 20	−24.45 ± 0.19	1275 − 1305 AD (78.7 %) 1365 − 1383 AD (16.8 %)	675 − 645 (78.7 %) 585 − 567 (16.8 %)	PLD − 21360 (AMS)
3	2.50	淺黄色シルト層〜砂質シルト層	炭化材	345 ± 18	−24.38 ± 0.15	1542 − 1634 AD (59.1 %) 1475 − 1529 AD (36.3 %)	408 − 316 (59.1 %) 475 − 421 (36.3 %)	PLD − 21361 (AMS)
4	2.80	灰白色シルト層	炭化材	16264 ± 45	−24.90 ± 0.18	17678 − 17558 BC (95.4%)	19627 − 19507 (95.4 %)	PLD − 21362 (AMS)

点も河川流路底であったことがわかった。この中粒砂層の標高 0.98m から採取した炭化材(試料 1)の放射性炭素年代が 1264-1171　cal yrs BP(686-779 AD：PLD-39326)、同じ層準から採取した生材(試料 2)の放射性炭素年代が 1262-1198　cal yrs BP(688-752 AD：PLD-39327)と約 1200 年前代（7 世紀〜 8 世紀）であった。

述べてきたように、17 区と 18 区の標高 1.00m 〜 1.80m には細粒〜中粒砂層や中粒砂層が確認でき、それらの砂層にはトラフ状斜層理や板状（プラナー）斜層理がみられることから、17 区から 18 区にかけての地下にはかつて当地を流下していた河川流路堆積物があることがわかった。また、放射性炭素年代測定により河川が流下していたのは約 1200 〜 1100 年前代（7 世紀〜 9 世紀）であったと推定される。

（2）清須市における砂層の分布

今回の清洲城下町遺跡の調査地点では、17A 区では標高 1.00m 〜 1.80m には灰白色を呈する粗粒砂層の混じる細粒〜中粒砂層が堆積し、18B 区では標高 1.00m 〜 1.45m には淡黄色や灰白色の中粒砂層が、18E 区でも標高 0.96m から標高 1.60m までを、にぶい黄色の細粒砂〜中粒砂層が堆積していた。これらの砂層には明瞭なトラフ状斜層理や板状斜層理が認められたことから、調査地はかつて河川流路であったことがわかる。この流路の数値年代について、17A 区の標高 1.00m 〜 1.80m でみられた細粒〜中粒砂層の標高 1.36m より採取された植物の生材が 1185-1065 cal yrs BP (765-886 AD：PLD-39325) と 1100 年前代を示した。また、18B 区の南端で掘削されたトレンチにおいては、標高 1.00m 〜 1.45m の細粒砂の混じるシルト層の標高 0.98m から試料を 2 点採取し、試料 1 が 1264-1171 cal yrs BP (686-779 AD: PLD-39326)、試料 2 は 1262-1198 cal yrs BP (688-752 AD: PLD-39327) と 1200 年前代を示した。放射性炭素年代測定により、調査地点を河川が流下していたのは約 1200 〜 1100 年前代（7 世紀〜 9 世紀）であったと推定される。この考古遺跡の基盤層として確認される砂層に関して、今回の清洲城下町遺跡の調査地点から北へ約 1.3km の清須市一場神明前において清須市により行われた調査結果が参考になる(柴垣・筧編 ,2012)。調査は名二環および国道 302 号線が尾西清洲線と交わる交差点から北西方向で行われた(図 108)。2011 年(平成 23 年)に実施された調査ではアルファベットの T の字形の調査区が設定され、南北方向に長い調査区が 1tr.、東西方向に長い調査区が 2tr. とされた。これらの調査区では遺跡の基盤層の確認のためにバックホーによる掘削が行われ、1tr. では調査区南東角で地点 1、調査区の中央で西壁に沿って地点 2 を、2tr. では調査区の北壁に沿って東西方向に約 20m の長さでトレンチを掘削し地点 3 とした。南北方向に長い調査区 1tr. の南東角の地点 1 では（図 109）、下位層より標高 -0.45m 〜 1.40m には明黄灰色（2.5Y6/6）を呈する粗粒砂層が堆積し、この砂層を標高 1.40m 〜 1.70m で暗青灰色（10BG3/1）の粘土層が覆う。この粘土層の標高 1.53m の層準で放射性炭素年代測定用の試料 1 を採取した。標高 1.70m 〜 1.85m は褐色（10YR4/6）の砂質シルト層で、標高 1.85m 〜 2.05m は黄灰色（2.5Y5/1）の砂質シルト層からなる。標高 2.05m 〜 2.35m は青灰色（5B5/1）の砂質シルト層で、本層の標高 2.13m で放射性炭素年代測定用の試料 2 を採取した。標高 2.35m 〜 2.75m は浅黄色（2.5Y7/3）のシルト層ないし砂質シルト層からなり、オリーブ黒色（5Y3/1）の砂混じりのシルト質粘土層のブロックが混じ

図 109　清須市 2011 年（平成 23 年）調査地点
a. 調査区 1tr. 南東角の地点 1（北東から）
b. 地点 1 の層序と試料採取状況（西から）
矢印は試料採取層準、数字は試料番号を示す。
スタッフの長さは 2.3m
c. 最下位砂層の堆積状況（北西から）

る。本層の標高 2.50m で放射性炭素年代測定用の試料 3 を採取した。標高 2.75m ～ 3.15m は灰白色（N7/0）のシルト層からなり、オリーブ黒色（5Y3/1）の砂混じりのシルト質粘土層のブロックが混じる。本層の標高 2.80m で放射性炭素年代測定用の試料 4 を採取した。標高 3.15m ～ 3.30m は暗灰色（N3/0）の砂質シルト層であり、現代の水田耕作土であった。本層の頂部標高 3.30m が地表面となる。清須市一場神明前でも標高 1.40m を境として地層は下位層である標高 -0.45m ～ 1.40m には粗粒砂からなる砂層が観察され、その上を覆って標高 1.40m ～標高 3.30m にはシルトや粘土からなる細粒な堆積物で覆われており、今回の愛知県埋蔵文化財センターの調査地と同様な層序関係が観察されている。この一場神明前でみられた地層の堆積年代について、放射性炭素年代測定によると標高 1.40m ～ 1.70m の暗灰色粘土層の標高 1.53m から採取した炭化材が 1002-931 cal yrs BP (948-1020 AD: PLD-21359) 、標高 2.05m ～ 2.35m の青灰色砂質シルト層の標高 2.13m から採取した炭化材が 675-645 cal yrs BP (1275-1305 AD: PLD-21360) 、標高 2.35m ～ 2.75m の浅黄色シルト層ないし砂質シルト層の標高 2.50m から採取した炭化材が 408-316 cal yrs BP (1542-1634 AD: PLD-21361) 、標高 2.75m ～ 3.15m の灰白色シルト層の標高 2.80m から採取した炭化材が 19827-19507 cal yrs BP (17878-17558 BC: PLD-21362) であった (表 8)。なお、これらの ^{14}C 年代の暦年代への較正には OxCal4.4（較正曲線データ：INTCAL20）を使用したことをお断りしておく。最下位層の砂層からは数値年代が得られていないものの、砂層の上を覆う標高 1.53m の粘土層の数値年代が 1002-931 cal yrs BP (948-1020 AD: PLD-21359) であり、約 1000 ～ 900 年前代（10 世紀～ 11 世紀）に堆積していたことがわかった。最下位層の砂層を覆う粘土層の数値年代が得られたことから、最下位層の砂層の堆積年代はこの粘土層よりも古くな

くてはならないため、約 1000 年前以前の堆積年代が予想される。愛知県埋蔵文化財センターの今回の調査地点で確認された下位の砂層が約 1200 ～ 1100 年前代（7 世紀～ 9 世紀）であった。清須市の調査でみられた粘土層の数値年代とは 200 年ほどの差異がみられるものの、今からおよそ 1000 年前代前後には、北の清須市一場神明前から新清洲駅のある南へ約 1.3km の間には、堆積構造として斜層理がみられるような水深が浅くて流速の速い活動的な河川流路が流れていたことがわかる。この特徴は現在の五条川の流路底で観察される砂層のものと同様であり、約 1000 年前代前後に調査地を流下していた河川景観は、河川流路の分岐数や川幅・流量などは不明であるが、現在われわれが目にしている景観とは大きく変わらないものと思われる。

（3）調査地周辺の地形解析

東西約 2.9km、南北約 4.1km の範囲全体では標高 1.40m から標高 6.40m までの等高線が描かれた。等高線の空間配置をみると等しい値の等高線ひとつひとつは北西から南東方向に並行し、解析範囲全体では北および北東方向で相対的に標高は高く、南西方向で低く、北東から南西方向へ標高が次第に低くなる傾斜地形であることがわかる。これらの等高線の空間的な配置状況から地形の起伏が読み取れ、相対的に周りよりも標高の高い島のような凸状の地形が 9 つと大きく 3 つの谷地形が認められた。これらの地形の起伏のうち、以下では現在の五条川の流路に沿う地形に注目したい。現在の五条川について解析図をみると、北の稲沢市下津本郷町から清須市春日新堀を通り、図の中央にある南の春日天神までに至る範囲では、五条川の流路は周りよりも相対的に低い谷地形の中を流下している。また、その流路に沿って、流路の近傍には、たとえば解析図北の清須市春日壱屋敷において標高 4.00m ～ 4.80m の閉曲線で囲まれた北西 - 南東に約 260m、北東 - 南西に約 160m の島状に標高の高い地形、その南にある清須市春日野方には標高 4.00m ～ 4.60m の閉曲線で囲まれた北西 - 南東に約 530m、北東 - 南西に約 170m の島状に標高の高い地形、さらに南の稲沢市北市場本町から清須市一場にかけての標高 4.00m ～ 5.00m の閉曲線で囲まれた北西－南東に約 800m、北東 - 南西に約 240m の島状に標高の高い地形が五条川の流路の西側に認められる。また、流路の東側には、解析図の中央から南端にかけて認められる清須市春日川中から清須市鍋片にかけての標高 4.00m ～ 4.80m の閉曲線で囲まれた南北に約 2300m、東西に約 320m の島状に標高の高い地形のうち、北の春日川中から春日天神を通り春日長久寺に至るまでは、五条川流路に沿って周りよりも相対的に標高の高い凸地形を形成している。低地を形成する河川環境では、河川の氾濫に伴って流路の両側には堆積物の累積により周りよりも相対的に標高の高い地形が堤防状をなす、いわゆる自然堤防をつくる。現在の五条川の流路の、北の稲沢市下津本郷町から清須市春日新堀を通り南の春日天神までに至る範囲では、河川流路の西および東の両側には周りよりも標高の高い凸地形が認められた。これらは五条川のつくる自然堤防であり、流路に沿う凸状の地形が明瞭に現れている。

対して、五条川流路の中央から南側、北の春日長久寺付近から朝日を通り南の清須市鍋片に至る範囲では、春日川中から鍋片にかけての標高 4.00m ～ 4.80m の閉曲線で囲まれた南北に約 2.3km、東西に約 320m の島状に標高の高い地形がみられるが、五条川の流路は本来流下できない周りよりも標高の高い場所を流れていることがわかる。解析図を基にすれば、清須市春日天神付近から南の部分の五条川の流路に関して、現在の流路の西側に標高 2.00m から標高 3.00m の等高線で表される谷地形が認められる。頭の中の想像で行なう実験、いわゆる思考実験をすれば、図の中央の春日天神付近に広範囲に一斉に雨を降らせた場合、位置（ポテンシャル）エネルギーの低い最短距離を流れるという水のもつ物理学的・水理学的性質から、標高 2.00m ～ 3.00m の等高線で示された谷地形があった現在の五条川流路の西側を、北の春日天神から西の清須市西市場へ、あるいは北の春日天神から名鉄本線の新清洲駅北側を通り清須市土田へと向かって流れ下るはずである。ところが、実際の五条川の流路は春日天神から朝日を通り鍋片までの間を、周りよりも相対的に標

高の高い凸地形のある場所を通っており、自然の状態ではあり得ない場所を流れているのである（図108）。つまり、春日天神から朝日を通り鍋片までの間は人工的に流路の方向が規制されていると考えなくてはならない。さらに解析図の南側、日吉神社の立地する清須市清洲・寺野・鍋片の標高2.00mから標高4.00mの凸地形上は、これまでに発掘がされてきた清洲城下町遺跡の調査範囲に当たり、かつての城や町家が検出されてきた所である。ヒトの生業活動が盛んであった場所であり、河川流路が人工的に制御・規制されている可能性が考えられる。さらに地形の特徴を解析図より読み取ると、現在の名鉄本線、新清洲駅の東に位置する今回の調査地の北には、標高3.00mから標高4.00mまでの、現在の新清洲駅にかけて北西 - 南東方向の幅約170m、北東 - 南西方向に約220mで西に突き出した舌状の地形が認められる。舌状地形の南には、舌状地形とは正反対に標高3.00mから標高4.00mまでに北西 - 南東方向の幅約300m、北東 - 南西方向に約280mで南西方向に開口した谷地形がみられる。今回の調査地点は舌状地形の南側縁辺に位置していることがわかる。この舌状地形に関わるヒトの生業活動について、たとえば18E区の考古遺構060SDからは、瀬戸・美濃窯産陶器の大窯第四段階末である16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土する。愛知県埋蔵文化財センターの鈴木正貴は、瀬戸・美濃産陶磁器の年代観をまとめた藤澤(1987,1988,1989)を基に清州城下町遺跡における時期区分を行ない、城下町期Ⅰ期、城下町期Ⅱ期、城下町Ⅲ期に区分した(鈴木、1994,1995)。この区分に従えば、18E区の考古遺構060SDは城下町期Ⅲ期に当たり、さらにⅢ-1、Ⅲ-2(この順に新しくなる)と細分される時期のⅢ-1期末ごろの遺構と考えられるようである(蔭山誠一氏のご教示による)。考古遺構060SDの溝の規模から中・上級の武家屋敷域、あるいは寺社を囲む溝と推定され、生業活動が盛んであった地形との推定とも調和的である。さらに、舌状地形の南には標高3.0mから標高4.0mまでに北東 - 南西方向の距離約280mで南西方向に開いた谷地形がみられた。先の18E区の考古遺構060SDから出土する土師器・陶器は北東側から廃棄されているとの考古学的な所見があり、解析図から読み取れる谷の開口方向とも調和的であった。いずれにせよ、解析図の名鉄本線、新清洲駅の東には標高3.0mから標高4.0mの等高線に表れる、距離約220mで北東から南西の方向をもつ西へ突き出した舌状地形がみられた。今回の調査結果では地形の南端には武家屋敷域、あるいは寺社の存在が推定されたことから、舌状地形上の、標高が相対的に高い尾根状の場所には、さらなるヒトの生業活動跡が検出される可能性がある。

謝辞

本論を作成するにあたり、2011年（平成23年）の清須市による清洲城下町遺跡の発掘調査では、清須市教育委員会の柴垣哲彦氏と株式会社島田組の筧和也氏には地層観察の機会を与えていただいた。図表の作成では国際文化財株式会社にお手伝いいただいた。分析試料の整理・保管と原図の作成では整理補助員の前田弘子氏・鈴木好美氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

Costello,W.R.and Southard,J.B.,1981,Flume experiments on lower-flow-regime bedforms in coarse sand,J.Sed. Petrol.,51,849-864.

藤澤良祐編,1987,瀬戸市歴史民族資料館研究紀要VI,瀬戸市歴史民族資料館,260p.

藤澤良祐編,1988,瀬戸市歴史民族資料館研究紀要VII,瀬戸市歴史民族資料館,239p.

藤澤良祐編,1989,瀬戸市歴史民族資料館研究紀要VIII,瀬戸市歴史民族資料館,269p.

Harms,J.C.,Southard,J.B.,Spearing,D.R.and Walker,R. G.,1975,Depositional Environments as Interpreted from Primary Sedimentary Structures and Stratification Sequences,Short Course Notes,2,SEPM,Dallas,161p.

柴垣哲彦・筧和也編，2012，清須市埋蔵文化財調査報告Ⅲ清洲城下町遺跡Ⅲ-清須市一場地内道路敷設に伴う発掘調査報告-，清須市教育委員会・イデアコンサルタント株式会社・株式会社島田組，32p.

鈴木正貴編,1994,愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第53集清洲城下町遺跡Ⅳ(本文編),愛知県埋蔵文化財センター,282p.

鈴木正貴編,1995,愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第54集清洲城下町遺跡Ⅴ,愛知県埋蔵文化財センター,266p.

第５章　総　括

第１節　清洲城下町遺跡の遺構変遷
－南部地区と御園地区－

ここでは、本報告でかかる南部地区の 00A 区・01 区・17A 区・17B 区・18A 区～ 18F 区と御園地区の 00B 区における調査成果をまとめ、これまでの調査成果を参考に清洲城下町遺跡全体の中でどのように位置付けができるのか整理してまとめとしたい。まずは調査区毎の調査結果を整理し、その後に調査における課題などについて若干分析を行う。

１.南部地区南半部（00A 区）

00A 区は名鉄名古屋本線の南側に位置する地点で、既報告においても南部地区南半部の中で分析が行われている。愛知県埋蔵文化財センターによる『清洲城下町遺跡Ⅳ』報告にある 63D 区～ 91C 区～ 90F 区と『清洲城下町遺跡Ⅷ』報告にある 95A 区・95B 区、清須市教育委員会による 2015 区の報告（清須市 2017）がある。

（１）00A 区 SX8001（図 110）

00A 区で確認できた土坑 SX8001 は東に隣接する 62D 区・63D 区において確認されている城下町期Ⅲ -2 期の SX8001 の西側部分にあたる。『清洲城下町遺跡Ⅳ』報告において土坑Ⅲ類（比較的大規模で、平面プランが方形または長方形を基準とした形態となるもの。）とされたもので、今回の調査により東西 22.5m、南北 45m 以上の規模が確認できた。出土した瀬戸・美濃窯産陶器では大窯第４段階から登窯第１小期のものを主体に出土し、城下町Ⅲ -2 期に位置付けられてきた遺構である。『清洲城下町遺跡Ⅳ』報告では区画 8007 に伴う巨大な土坑とされており、居住空間とは考えられていない。本報告にあたり、この大型土坑が清須越しに伴う廃棄土坑とも考えたが、多様な出土遺物が、遺構の南西側から廃棄されたものと考えられ、遺構の北東側では出土遺物が希薄となることから、遺構全体が引越しに伴う廃棄土坑とは考えられないものと考えられた。

次に SX8001 の軸線について検討すると、遺構の軸線は 00A 区と 63D 区では N-8°-W となり、00A 区の南西隅に確認できた SD01 も同じ軸線をとる。一方で 62D 区で確認されている東上端ラインの軸線は N-10°-E となり、62D 区・63D 区で確認されている溝 SD8005・SD8009 の軸線 N-10°-E と類似する。SX8001 内部には、西上端から中位に残る南北の石列 SX01 が確認でき、石積みの護岸が存在した可能性がある。

（２）周囲の遺構との関係（図 110 ～図 112））

周囲の遺構について検討すると、城下町Ⅲ -1 期には溝Ⅴ類（溝の規模による分類は『清洲城下町遺跡報告Ⅳ』第Ⅲ章 城下町期の遺構第４節 溝にある溝の分類に準拠する、以下は同じ）の 62D 区 SD8008 の北側に区画 8001、SD8008 と溝Ⅴ類の SD8010 の間に区画 8002、SD8010 の南から 91C 区の北側にかけて区画 8003 と区画 8004 が設定されており、大型の土坑 SX8003 が区画 8002 から区画 8003 の中にある。城下町Ⅲ -2 期には溝Ⅳ類～Ⅴ類の 62D 区 SD8005 の西側で溝Ⅳ類～Ⅴ類の SD8006 の北側を区画 8007、SD8006 と溝Ⅳ類～Ⅴ類の SD8009 の間を区画 8008、SD8009 と溝Ⅳ類～Ⅴ類の 91C 区 SD8013 の間を区画 8009 として設定されており（清洲城下町遺跡Ⅳ）、井戸の SE8001 と SE8002 が区画 8008 と区画 8009 の境界となる SD8009 付近にある。掘立柱建物 SB8001 と井戸 SE8003 は区画 8009 の中にある。遺構からの出土遺物では今回第３章で資料化した SX8001・SD8005・SE8002・SX8003 では大窯第４段階～登窯第１小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土しており、SD8009・SD8010 から大窯第３段階～第４段階の瀬戸・美濃窯産陶器が出土している。また SD8011 からは土師器焙烙鍋が出土しており、ほぼ同時期のものと考えられる。

次に 95A 区では溝Ⅴ類～溝Ⅵ類の SD01 ～ SD04・SK26、95B 区では溝Ⅳ類～Ⅴ類の SD101・SD102・SD107・SK207 が確認されており、95A 区 SK26 は城下町Ⅲ期、その他は城下町Ⅲ -2 期とされる。95A 区・95B 区の東に隣接する 62B 区・91C 区・90Fa 区で確

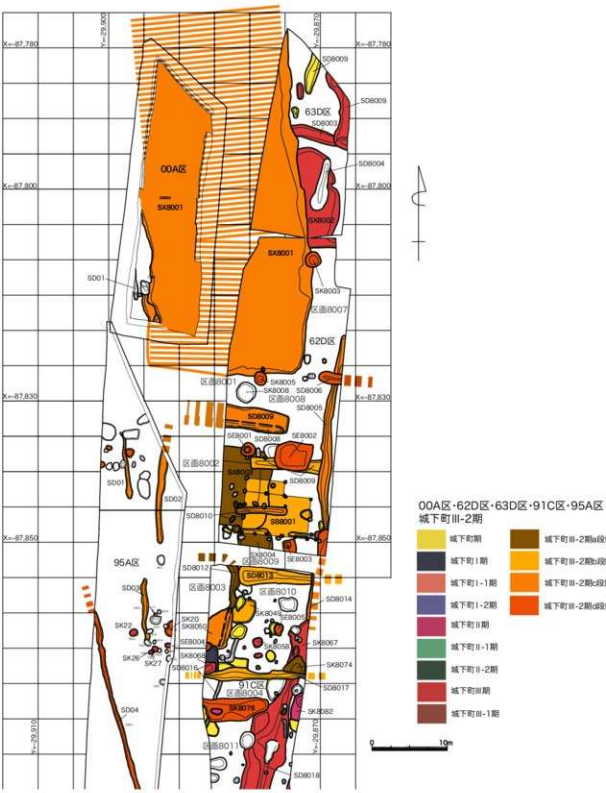


図 110　00A 区・62D 区・63D 区・91C 区・95A 区の遺構変遷（1：500）

認されている遺構と合わせて検討すると、95A 区 SD04 と 95B 区 SD101 は溝Ⅴ類の 62B 区 SD8024 と溝Ⅳ類～Ⅴ類の 62B 区・90Fa 区 SD8028・SD8030 と同じ軸線をもち、また 95A 区 SD04 と 62B 区 SD8024 と同一である可能性があって、道路 SF8001 の東側側溝と考えられるものである。また 95B 区 SD102 と同 SD107 は 62B 区 SD8025 との関連性から城下町Ⅲ-1 期の区画 8005 の西側とされ、SD102 の北を区画 8014、SD107 の南を区画 8015 とした（清洲城下町遺跡Ⅷ）。後述する SD108 が清須市 2015 区 242SD と 90Fa 区 SD8030 に囲まれた範囲を区画 8012 と考えると区画 8015 の南北幅は 6m 前後となる。また 62B 区 SD8025 と同 SD8028 の前後関係から、方形区画 8005 の後に道路 SF8001 が城下町Ⅲ-2 期に形成された（清洲城下町遺跡Ⅷ）。

清須市教育委員会による 2015 区の調査においては（清須市 2017）、90Fa 区 SD8031 の西に延長する位置で溝Ⅳ類～Ⅴ類の 2015 区 242SD が確認されており、区画 8012 は 242SD の北側に東西 35m 以上の区画となる。また溝Ⅳ類～Ⅴ類の 90Fa 区 SD8032 も SD8031 に隣接して同一軸線で東西に流れていることから、溝の掘り直しや区画の変遷が考えられる。90Fa 区 SD8030 の北端部で途切れる部分の西に 242SD と軸線がほぼ同一である 95B 区 SD108 があり、この溝を区画 8012 の北端部に当てると、南北 26.5m 前後となる（90Fa 区 SD8030 の北端部の西に隣接する SK8145・SK8146 は同じ城下町Ⅲ期とされる）。これはこれまで現地付近に残る字の地名から「櫓」の軍事的施設が想定されてきたものである（清洲城下町遺跡Ⅳ・Ⅴ）。この 242SD の南に約 11m に 152SD、152SD から南約 3m に 134SD、134SD から南約 3.5m に 133SD、133SD から南約 4m に 078SD、078SD から南約 14m に 017SD がほぼ同じ軸線を持つ溝Ⅳ類～Ⅴ類の東西溝として確認されており、城下町Ⅲ-2 期に属する可能性のある区画溝と考えられる。133SD・134SD・152SD は約 5m 間隔で同一方向に並行することから、間口が細い短冊型地割の町屋が想定されている（清須市 2017）。またこれらの東西溝に直行する南北溝 132SD・033SD があり、SF8001 を構成する SD8028 や SD8030 のような道の側溝が想定されている（清須市 2017）。他の遺構では、134SD と重複して古い 127SK や 152SD と重複して古い SK151 など五輪塔の笠（火輪）部が出土する土坑など柱穴の可能性があるものがあり（清須市 2017）、先に述べた東西溝が同一時期ではなく、また周囲に居住域が展開した可能性が高い。

以上より、00A 区・62D 区・63D 区・62B 区・91C 区・90Fa 区・95A 区・95B 区・清須市 2015 区における遺構の時期はあまり時期差がなく、かつ 62D 区・91C 区北側では大きくは城下町Ⅲ-2 期において土坑 62D 区 SX8003 のａ段階、東西溝 62D 区 SD8009・91C 区 SD8013 などのｂ段階、南北溝 62D 区 SD8005 のｃ段階、東西溝 62D 区 SD8006・井戸 62D 区 SE8001・SE8002・SE8003 などのｄ段階に区分できる。90Fa 区・95A 区・95B 区・清須市 2015 区でも同様で、先に検討した溝や土坑は正方位に近い 62B 区 SD8025・95B 区 SD102・同 SD107 を構成する区画 8005 は、62D 区・91C 区北側で段階を想定した古い段階に当たる可能性が高く、SF8001 を構成する 62B 区 SD8024・同 SD8028・同 SD8030 と同じ軸線を持つ溝や区画は新しい段階にあたるものと思われる。また先に述べた 95A 区 SD02 は遺構の軸線方向から考えると 62D 区 SD8005 から 23m ～ 24m 程西を並行して流れており、関連が想定される遺構である。同様に SD02 と同一時期ではないが、95A 区 SD01 と SD03 は同一の溝になる可能性があり、91C 区 SD8012・SD8016 は同 SD8018（SD8014・SK8067）も軸線が近く、10m の間隔をもって南北に流れる一連の溝と考えられる。

（３）00A 区 SX8001 の性格

よって、SX8001 は時期の判明する主要な遺構との前後関係などは不明であるが、井戸 62D 区 SE8001 の北 10m 前後にある SK8005 より古いようであることから、東西や南北方向に溝が掘削される段階のものと思われる。掘立柱建物 62B 区 SB8001 は井戸 SE8003 とは建物南側が重複するものと思われ、溝 SD8005 とも 0.5m ～ 1.0m 程しか離れていないことか

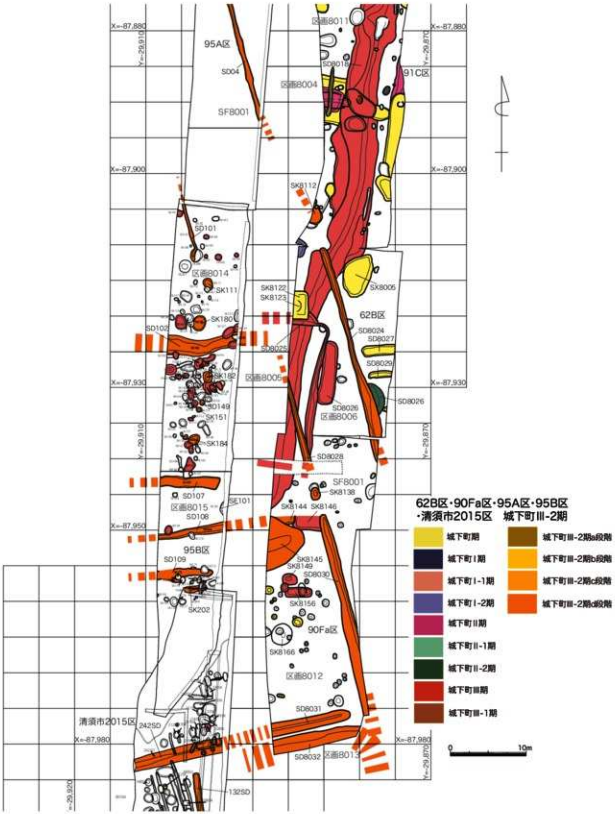


図 111　62B 区・90Fa 区・91C 区・95B 区の遺構変遷（1：500）

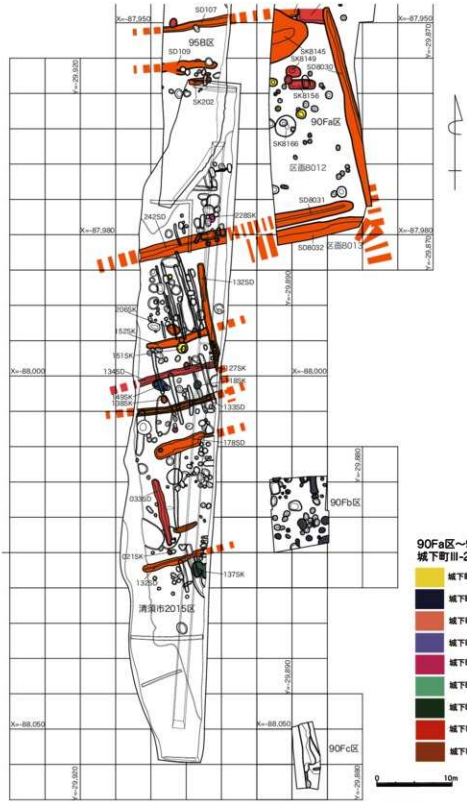


図112　90Fa 区～90Fc 区・95B 区・清須市 2015 区の遺構変遷（1：500）

ら同一存在する可能性は低く、東西溝 62D 区 SD8009・SD8013 の段階のものと考えておきたい。

このように考えてくると、井戸が存在する段階は、遺構の位置関係から東西溝 62D 区 SD8005・91C 区 SD8017 や 土 坑 SK8076 と共存する可能性があるが、東西溝 62D 区 SD8009・91C 区 SD8013 には伴わない。ここで述べている溝は幅が 1m ～ 2m 前後の溝Ⅳ類・溝Ⅴ類に分類されるもので、小型の区画Ⅰ類・区画Ⅱ類にあたる下級クラスの居住域―町屋の想定がなされてきたものであるが（清洲城下町遺跡Ⅳ・Ⅴ）、町屋域において想定される長細い区画のいわゆる短冊型地割に伴う区画が東西や南北の溝であるかという認識の問題があるように思われる。これまでの分析では、ほぼ同時期の井戸が一定の近い間隔で存在する列状分布を形成することをもって町家域想定の条件とするならば、単純に遺構の重複・位置関係からは同時存在は少ないように思われる。したがってあまり明確な根拠はないが、この地区は純粋な町屋域ではなく、中・下級の武家屋敷域があって、さらに町屋域への変遷が想定できないであろうか。よって SX8001 は中・下級の武家屋敷域に伴う大きな遺構であり、00A 区で確認された石列を評価するならば、溝Ⅰ類に相当する可能性がある。さらに付言するならば、62D 区・91C 区北側では、溝Ⅳ類～Ⅴ類の溝で囲まれた方形状区画のある中・下級の武家屋敷域・寺社域の段階から井戸で構成される町屋域への変遷が想定され、90Fa 区・95A 区・95B 区・清須市 2015 区では、想定した溝Ⅳ類～Ⅴ類の溝で囲まれる方形状区画は最も新しい時期の中・下級の武家屋敷域・寺社域と道 SF8001 の段階であると想定できないであろうか。

２.南部地区北半部（01 区・17A 区・17B 区・18A 区～ 18F 区）

01 区・17A 区・17B 区・18A 区～ 18F 区は名鉄名古屋本線の北側に位置する地点で、愛知県埋蔵文化財センターによる清洲城下町遺跡Ⅳ報告にある 63S 区・89D 区・91B 区の南にある。

（１）01 区の遺構変遷（図 113 ～図 115）

01 区では東西溝 SD01 ～ SD03 が確認されており、おおよそ北側の SD01 から南にある SD03 にかけて溝が掘り直されたことがわかる。SD01 ～ SD03 の深さは 0.32m ～ 0.51m と浅いが幅は 2.5m 以上あるものばかりで、SD01・SD02 は溝Ⅳ類に、SD03 は溝Ⅲ類に相当する。溝の軸線は SD01・SD02 が N-85°-E のほぼ正方位、SD03 が N-17°-W の正方位からやや南東に振れる軸線となる。興味深いのは先に述べた SX8001 の 00A 区と 63D 区の軸線に類似するのが SD01・SD02 で、62D 区の軸線に類似するのが SD03 となる。出土した瀬戸・美濃窯産陶器は、SD02 が大窯第３段階～大窯第４段階前半、SD03 が大窯第３段階～大窯第４段階後半のものが出土することから城下町Ⅲ -1 期のものと考えられる。SD03 からは陶器・土師器の他に卒塔婆や柿経などの木製品が出土しており、墓域が隣接する寺院に関わる溝の可能性がある。SD03 の出土遺物は溝の北側から廃棄された様子が窺え、また SD01 ～ SD03 の埋没が北からの土砂堆積により埋まっていることが確認できる。よって SD01 ～ SD03 の北側に寺院に伴う区画が想定され、この区画の北側の溝は 18A 区・18C 区で確認されているほぼ同時期の 040SD・041SD が軸線が N-91°-W の正方位で対応していることから、この区画は溝の内側で南北 32m ～ 37m を測る。

（２）17A 区・17B 区の遺構変遷（図 113 ～図 115）

次に 17A 区・17B 区では、城下町Ⅱ -1 期と想定される自然流路 063NR、城下町Ⅲ -1 期と想定される井戸 060SE、溝 039SD・042SD、城下町Ⅲ -1 期～Ⅲ -2 期に想定される溝 033SD がある。060SE と 063NR・039SD・033SD には重複部分があり、城下町Ⅱ -1 期から城下町Ⅲ -2 期にかけて４段階の遺構変遷が確認できる。城下町Ⅱ -1 期の 063NR は 18A 区・18C 区 043NR とほぼ同時期で、流れる方向からも同一の自然流路である可能性がある。続く城下町Ⅱ -2 期は不明であるが、063NR が流れていた可能性もある。城下町Ⅲ -1 期ではまず居住域の一部と考えられる 060SE があり、城下町Ⅱ期以後の遺物が出土する 020SK・034SK などの土坑があることから、城下町Ⅲ―1 期には井戸 060SE に伴う段階、042SD と 039SD に伴う居住域の段階を経て、城下町Ⅲ -1 期～

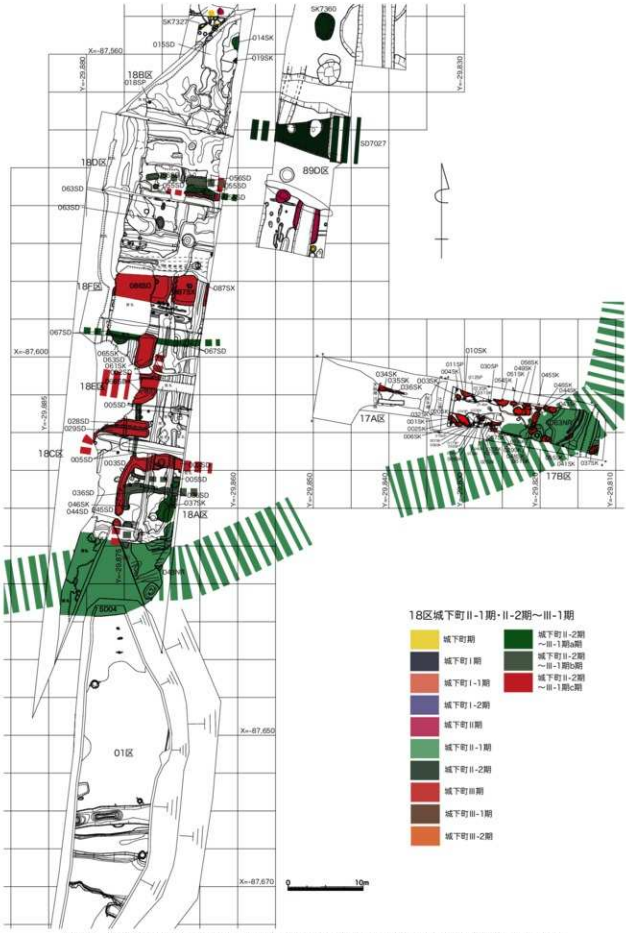


図113　01 区・17A 区・17B 区・18A 区～ 18F 区の城下町Ⅱ -1 期～Ⅲ -1 期の遺構変遷（1：500）

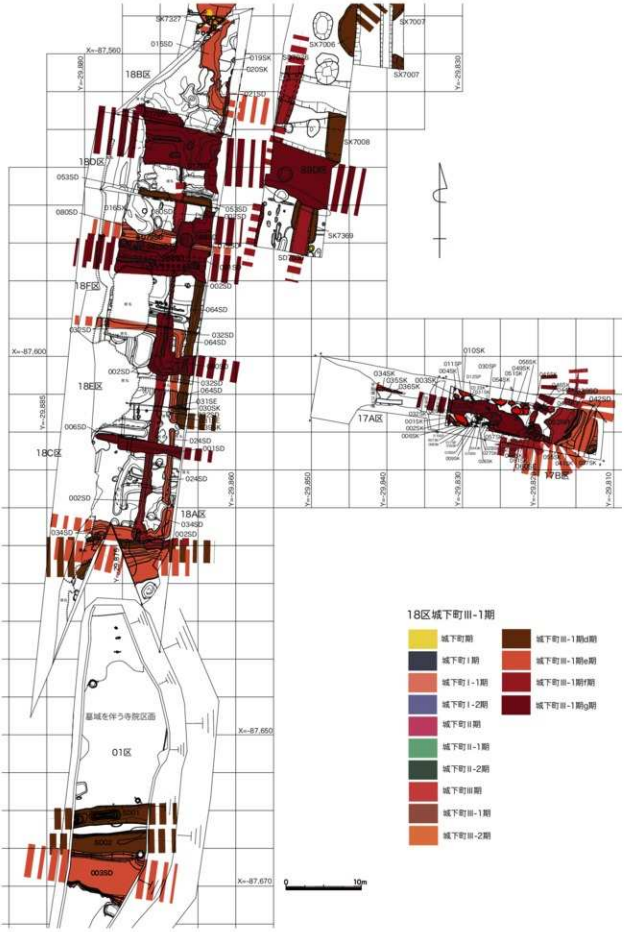


図114　01区・17A区・17B区・18A区～18F区の城下町Ⅲ-1期の遺構変遷（1：500）

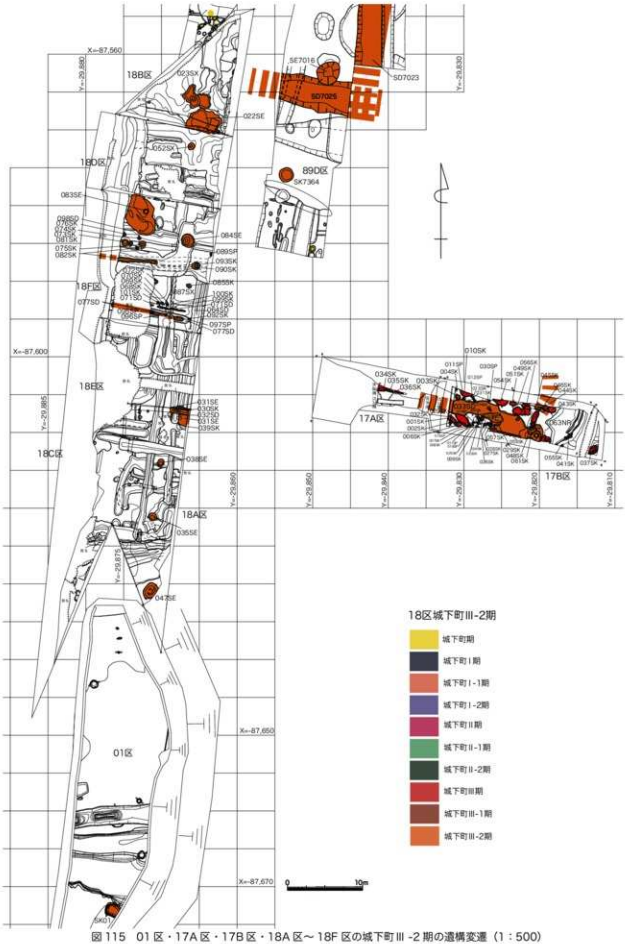


図 115　01 区・17A 区・17B 区・18A 区～ 18F 区の城下町Ⅲ -2 期の遺構変遷（1：500）

Ⅲ-2 期の 033SD の段階の変遷が考えられる。033SD・039SD・042SD は、溝の北西側を区画しており、深さは浅いが幅は溝Ⅲ類～溝Ⅳ類の規模をもつことから、上級クラスの武家屋敷や寺院・神社などの区画が想定される。033SD は溝の軸線や位置から 18E 区 060SD につながる可能性があり、この想定で東西 48m 程の区画となる。039SD と 042SD は、18E 区の南側で 18A 区の他の溝とつながる可能性もあるが、その東で北に折れて曲がる可能性もある。

（３）18A 区～ 18F 区の遺構変遷（図 113 ～図 115・表 9）

最後に 18A 区～ 18F 区の遺構変遷を考える。この調査区では、最も古い遺構は、城下町Ⅱ-1 期の自然流路 043NR が 18A 区・18C 区の南端を東北東から西南西に流れており、続いて城下町Ⅱ-2 期～城下町Ⅲ-1 期に想定できる溝のある段階、最後に城下町Ⅲ-2 期に想定される井戸や土坑がある段階の大きく３時期に区分できる。さらに遺構の重複・位置関係から、大窯第４段階後半の瀬戸・美濃窯産陶器が出土する 18A 区・18C 区 041SD 以後の城下町Ⅲ-1 期を４段階（城下町Ⅲ-1 期の d 期～ g 期）と同 041SD より古い時期のものと考えられる城下町Ⅱ-2 期～城下町Ⅲ-1 期を３段階（城下町Ⅱ-2 期～城下町Ⅲ-1 期の a 期～ c 期）に区分したのが、表９である。

（A）城下町Ⅱ－１期

先に述べた 043NR が流れる段階で、17B 区 063NR とつながる可能性がある。

（B）城下町Ⅱ-2 期～城下町Ⅲ-1 期

a 期：18D 区 055SD・18F 区 086SD・　同 087SX・18E 区 065SX・　同 067SD・18A 区 037SK の段階で、18A 区・18C 区の南北方向の溝より古い可能性がある遺構の時期である。086SD と 087SX が溝になるか土坑になるか不明であるが、055SD と 064SD は幅 1m 以下の規模の溝Ⅵ類の東西方向の溝で、溝の間隔は約 20m である。037SK は不整形な土坑で、自然流路の可能性もある。

b 期：18D 区 056SD・18F 区（18E 区）063SD・18A 区 005SD・18A 区 036SD（18C 区 045SD）の段階で、18A 区から 18E 区の東側を囲む溝Ⅵ類の 005SD と 18A 区南東側を囲む溝Ⅴ類の 036SD・045SD の２つの区画が成立する。036SD と 045SD が西辺の北側にて途切れる部分が区画の入口となる可能性があり、その想定にたてば 003SD と 036SD の西側に道・通路の存在が想定される。

c 期：18D 区 054SD・18E 区 061SK・　同 066SD・18C 区 028SD・　同 029SD・18A 区 003SD（18C 区 044SD）の段階で、061SD は南北の幅は溝Ⅳ類に相当するが、北に折れた部分は溝Ⅴ類で、区画溝になるかは不明である。18D 区の北西側を囲む溝Ⅵ類の 054SD の区画、18A 区南東側を囲む 003SD（044SD）の区画、その北西側 3.5m ～ 4m 並行してはしる 028SD・029SD がみられる。これらの溝が関連して同時に存在したとすると、東から南に折れる道・通路が想定される。028SD と 054SD の間は南北約 30m の区画となる可能性がある。

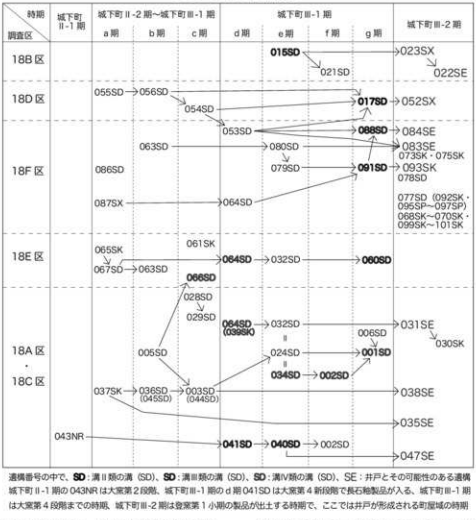
（C）城下町Ⅲ-1 期

d 期：18F 区 053SD・18E 区 064SD（18F 区・18E 区 039SK）・18A 区 041SD（18C 区）の段階で、溝Ⅴ類の 053SD・064SD・039SD はつながる可能性があるが、053SD は 18F 区を 064SD は 18E 区と 18F 区の東外側を囲むものと思われるものである。18B 区 015SD もこの段階になる可能性がある。また、041SD は 01 区 SD01 ～ SD03 に伴う寺院の区画の北側溝になる可能性が高い。

e 期：18B 区 015SD・18F 区 080SD・　同 079SD・18E 区 032SD・18A 区 024SD・18A 区 034SD（18C 区）・18A 区 040SD（18C 区）の段階で、溝Ⅴ類の 015SD は 91B 区 SK7327 に続く溝で、18B 区の東端部から 89D 区を囲むと思われるものである。032SD・024SD・034SD は 18E 区と 18C 区の西側を囲む南北 26m 前後の方形区画を構成する溝と考えられ、区画の東辺に溝の途切れる場所が２ヶ所あることから、南北の道・通路に面している可能性がある。079SD と 080SD は溝Ⅴ類の東西溝で、北にある 015SD まで 16m 程、南にあ 032SD まで 10m 程の位置にあり、中間を区画するものであろうか。南には d 期から続く 01 区にある寺院の区画の北側溝と思われる 040SD がある。

f 期：18B 区 021SD・18A 区 SD002（18E 区・18F 区）の段階で、溝Ⅳ類の 002SD が 18A 区

表９　18区の遺構変遷



遺構番号の中で、**SD**：溝Ⅱ類の溝（SD）、**SD**：溝Ⅲ類の溝（SD）、**SD**：溝Ⅳ類の溝（SD）、SE：井戸とその可能性のある遺構
城下町Ⅱ-1期の043NRは大室第２段階、城下町Ⅲ-1期のｄ期041SDは大室第４新段階で長石軸製品が入る、城下町Ⅲ-1期は大室第４段階までの時期、城下町Ⅲ-2期は登室第１小期の製品が出土する時期で、ここでは井戸が形成される町屋域の時期

北東側から18E区東側と18F区南東側を囲むものと思われるもので、18F区091SDまでは明確に辿れるが、091SDの北は同じ方向の溝を検出したが、溝底が浅く同一の溝でない可能性が高い。よって002SDは南北35m程の方形区画を形成していた可能性が高い。021SDは幅が不明であるが、溝底が土坑状に落ち込む部分が確認できた。

g期：18D区017SD・18F区088SD・同091SD・18E区060SD・18A区001SD・同006SDの段階で、東西溝の091SDは調査区中央部で北に折れて、さらに東に屈曲する088SDに掘り直されており、006SDはやや溝が東側に溝が短くなって001SDに掘り直されている。この段階は溝Ⅱ類の017SD、溝Ⅲ類の088SD・091SD・060SD、溝Ⅳ類の001SDと大規模な溝が主体で、017SDは89D区に伸びる。また017SDは18D区東端で南に折れて立ち上がり、088SDは先に述べたように18F区東側で二度折れて調査区の東外側に伸びる。また060SDは東から伸びてきて北に折れて088SD・091SDの南5mの位置で止まり、001SD・006SDも18C区北側で立ち上がる。017SDと088SD・091SDの間隔は南北10m程、091SDと060SDの間隔は南北10m程、060SDと001SDの間隔は南北9.5m程で、大規模な区画の複雑に入り組んだ門・入口や大道・通路が屈曲する辻部分に当たるのであろうか。060SDは17A区033SDとつながる可能性があり、遺物の出土状況から陶器・土師器は北東側から廃棄された可能性が高い。

（D）城下町Ⅲ-2期

清洲城下町遺跡Ⅳ報告にある城下町Ⅲ-2期の町屋域として想定される段階で、井戸・土坑・区画境の柱穴列・溝などがみられる。井戸と井戸の可能性があるものは、18B区023SX・同022SE、18D区052SX・18F区083SE・同084SE・同093SK・18A区031SE・同

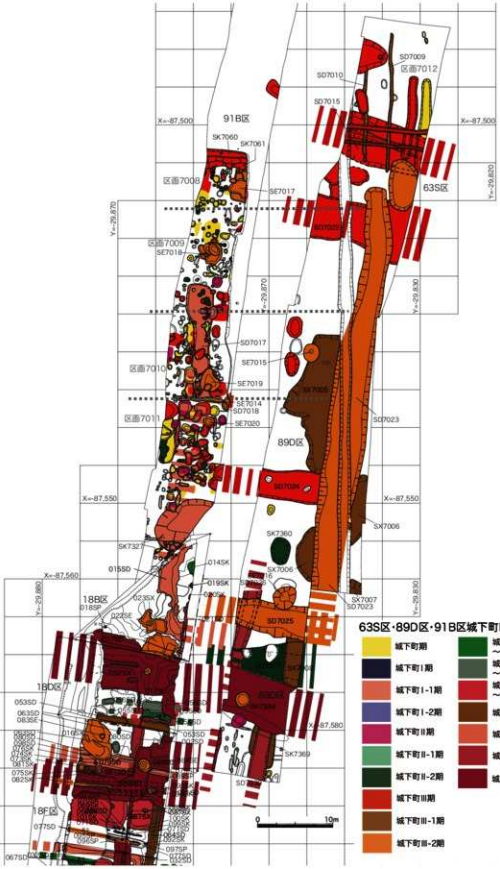


図 116　63S 区・89D 区・91B 区・18 区の遺構変遷（1：500）

038SE・同 035SE・同 047SE がある。土坑は 18F 区 073SK・ 同 075SK・ 同 085SK・18A 区 030SK がある。区画の境を示す柵と思われる柱穴列や溝は 18F 区 071SD・同 078SD・同 077SD（これに伴う 092SK・095SP ～ 097SP）・068SK ～ 070SK・099SK ～ 101SK が確認できた。井戸の間隔は 023SX と 022SE・052SX は 1m 以内で南北 8m 程の間に隣接しており、052SX から南に 10m 離れて 084SE、同じく西に 3.5m 離れて 083SE、同じく南東に 2m 離れて 093SK が隣接してある。093SK から南に 5m ～ 6m 離れて、071SD・077SD（これに伴う 092SK・095SP ～ 097SP）・068SK ～ 070SK・099SK ～ 101SK の区画の境を示すと思われる柱穴列や溝が東西方向にみられ、この部分には小道・通路も存在した可能性もある。そして 093SK から南に 18m に 031SE があり、031SE から南 4.5m に 038SE、038SE から南 6m に 035SE、035SE から南 8m に 047SE が南北に並んで確認された。これは 89D 区と 91B 区南側に設定された井戸を伴う区画 7008 ～区画 7011 の南に続く東西に細長い幅 5m ～ 10m 程の区画が７区画ほど続く状況を示しているものと思われる。そして区画の中には土坑などがみられ、居住域に伴うものと思われる。

（４）91B 区南側・89D 区・63S 区の遺構との関係（図 116）

ここでは、前節で述べた 18 区と隣接する 91B 区南側・89D 区・63S 区の遺構との関係を述べてこの地区のまとめとしたい。

『清洲城下町遺跡Ⅳ』報告において城下町Ⅲ -1 期以前と城下町Ⅲ -2 期の遺構変遷が想定されている。城下町Ⅲ -1 期以前において、63S 区では溝Ⅱ類 ～ Ⅲ 類の SD7015・SD7022、89D 区では SX7005・SX7006・SE7015・SK7360・SK7366・SE7016、91B 区南側では SK7253・SK7270 などの城下町Ⅲ -1 期以前の土坑が抽出されている。城下町Ⅲ -2 期において、63S 区 SD7009・SD7010・SE7013・SX7004、89D 区 SD7023・SD7025・SK7308・SK7310・SK7363、91B 区 SK7060・SE7017 ～ SE7020・SK7327 などが抽出されている。そして城下町Ⅲ -2 期には 91B 区において北から井戸 SE7017 ～ SE7020 が 3m ～ 13m の間隔で南北に列状に存在することから、これらの井戸を中心に SE7017 に伴う区画 7008、SE7018 に伴う区画 7009、SE7019 に伴う区画 7010、SE7020 に伴う区画 7011 の４つの東西に細長い区画を東にある SD7023 と南にある SD7025 でさらに囲むことを想定した。また SD7023 は井戸を伴う細長い区画の背割り溝の想定もされた。また SD7023 の西上端の北延長線上にある SD7010 と東上橋の北延長線上にある SD7009 の東側にある範囲を区画 7012、SD7025 の南を区画 7013 とした。

今回の報告にあたり、89D 区・91B 区の遺構からの出土遺物を検討した結果からは、SD7023・SD7025 は大窯第４段階～登窯第１小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土しており、城下町Ⅲ -2 期に存在した遺構であることを確認した。また先に述べた 63S 区 SD7015・同 SD7022、89D 区 SD7023・SD7025・SX7005・SX7006、91B 区南側では SK7327・SD7017 などの他に、89D 区 SD7023・SD7024・SD7030 などでは、大窯第４段階後半までの瀬戸・美濃窯産陶器が出土する遺構があり、89D 区 SD7027 では大窯第３段階の瀬戸・美濃窯産陶器を中心とした出土遺物があることを確認できた。18B 区の発掘調査時に 015SD の北が 89D 区 SK7327 に繋がり、さらに 91B 区 SD7017 付近まで伸びる可能性も想定された。また一方で、SD7025･SD7027 は 18B 区の遺構検出面が 2.0m より低い高さであったためか、溝の西側延長部分を確認することができなかった。同様に 89D 区で確認された SD7022 は 91B 区では溝が伸びていないためか確認されていない。

63S 区・89D 区・91B 区南側で確認された SD7015・SD7017・SD7022・SD7023 ～ SD7025・SD7027 は、幅 4m を超える溝Ⅱ類 ～Ⅲ類の溝であり、また SD7026・SD7030 も幅 2m を超える溝は溝Ⅴ類に分類されるものである。城下町Ⅱ -2 期に属する可能性のある SD7027 を除くと、これらの溝は 18 区における遺構変遷で想定した城下町Ⅲ－１期の d 期 ～ g 期に対応する可能性が高い。89D 区南端部にある溝では、SD7026(SD7028)・SD7030 の段階、18D 区 SD17 とその東側の溝の段階、SD7025 の段階の３～４時期の変遷がみられ、

18D 区 SD17 が 18 区の g 期に相当するので、SD7026・SD7030 の段階は 18 区の d 期～ f 期にあたる。18 区の e 期に分類した 18B 区 015SD は 91B 区 SK7327 や SD7017 に対応する可能性が高く、89D 区を囲む区画溝と考えられるので、その他の遺構の前後関係や調査区外にのびる溝は、時期の決まる溝とは異なる時期の溝と考えられる。

最後に井戸と溝との関係であるが、『清洲城下町遺跡Ⅳ』報告で指摘されたように、89D 区 SD7023 や SD7025 が城下町Ⅲ-2 期の遺構として 91B 区で確認された井戸に伴う東西に細長い区画の大囲い溝の可能性はあるが、18 区や 89D 区では井戸と溝は重複するものが多い。全ての井戸が溝より新しいわけではないが、全体としては井戸が溝より新しい傾向がある。溝の分析にあたり、溝の規模では溝Ⅱ類～溝Ⅴ類に相当するものが多く、近在する溝は複雑に変遷して同時存在のものは少ないようである。よって、短冊型地割の区画に対応するのは、例えば 91B 区南側の SE7019 の南 0.8m にある幅 0.6m 程の東西溝 SD7018 のような溝Ⅵ類に分類されるような小規模な溝などが対応するように思われる。また、これまでにも溝の規模に応じた区画の規模の違いが想定されており（清洲城下町遺跡Ⅴ）、このことを併せて考えると溝Ⅱ類～Ⅲ類に相当する溝は中・上級の武家屋敷域・寺社域を構成する区画溝に、溝Ⅴ類に相当する溝は下・中級の武家屋敷域・寺社域を構成する区画溝に対応するものと思われ、溝の規模に応じた出土遺物量の多寡が反映されてくるものと考えておきたい。

（5）南部地区の小結

南部地区では、城下町Ⅱ-1 期以前の城下町に関する明確な遺構は確認できず、旧五条川の旧河道と考えられる自然流路が広く展開した可能性が高い。城下町Ⅱ-2 期では、南部地区の 91B 区付近までは溝Ⅱ類～Ⅲ類の溝で囲まれるような比較的大きな区画が営まれ、その南に位置する 18 区でも比較的小規模な区画が営まれたものと考えられる。続く城下町Ⅲ-1 期（後半）には、南部地区北半部では溝Ⅱ類～Ⅴ類の溝で囲まれるような大小様々な区画が営まれ、18A 区・18C 区南端部から 01 区にかけて寺院の可能性が高い区画を想定できた。この時期の最終段階では大規模な溝が屈曲してめぐる区画が 18F 区から 17B 区に存在した可能性を指摘した。南部地区南半部では、この時期の明確な遺構がみられない。

続く城下町Ⅲ-2 期には、南部地区北半部では井戸が南北に列状に分布する状況が現れ、溝Ⅵ類に相当する溝や柵列などに区画された東西に細長い区画が全体に広がることを追認した。南部地区南半部では、この時期以後に遺構が展開し、その北側では溝Ⅳ類～Ⅴ類の溝で囲まれた区画や 00A 区 SX8001 が前半期に営まれ、後半期に井戸が南北に列状に分布することから、東西に細長い区画が全体に広がることを想定した。この南部地区南半部の南側では、前半期は北側と同じ溝Ⅳ類～Ⅴ類の溝で囲まれた区画が形成されたが、後半期は軸線を西に振る溝Ⅳ類～Ⅴ類の溝で囲まれた区画や道 SF8001 が形成されることを明らかにした。この中には地名から想定される「櫓」の存在した可能性もある。

南部地区全体に見ると、当初（城下町Ⅱ-2 期～Ⅲ-1 期以後）は大小の様々な規模の方形状区画を構成すると思われる溝が北から南へと展開していく過程が想定でき、城下町Ⅲ-2 期以後に町屋域を想定するような東西の細長い区画がその北側から遅れて形成されていくことが窺われた。課題としては細長い区画に伴う井戸は想定できたが、方形状区画に伴う井戸の存在があまり明確ではないように思われる。遺跡全体の中では一部のみの調査であるため、未調査部分に井戸が存在するのだろう。

3．御園地区（00B 区）

00B 区は清須城本丸の天守台跡から北東約 220m に位置する地点で、北約 60m には現在の名古屋環状道路の地点で愛知県埋蔵文化財センターによる調査が行われ、後期清須城の北側中堀（60A 区～ 60D 区 SD52）が確認されている（清洲城下町遺跡Ⅱ）。

（1）中世（図 117）

調査区の南側にて 14 世紀～ 15 世紀の河道部にあたる NR01 が確認されている。

（2）城下町Ⅰ期～城下町Ⅱ-2 期（図 117・図 118）

城下町Ⅰ期以前の遺構として、溝Ⅲ類～Ⅳ類

の SD12 と溝Ⅳ類～Ⅴ類の SD06 ～ SD08、土坑 SK27・SK28 があり、城下町Ⅰ期～城下町Ⅱ -2 期に形成された土塁 SX01、城下町Ⅱ -2 期の遺構として溝Ⅳ類の SD11 がある。SD07・SD11・SD12 は N-25°-E ～ N-30°-E の軸線をもち、SD06 もこれらに直行する N-67°-W であるが、SD08 は N-32°-W の軸線をもって斜行する。SD08 を除く溝と土塁 SX01 は軸線が対応しており、SX01 は旧五条川の西岸堤防と考えられるものなので、おおよそ地形に制約された地割と考えられる。SD06・SD08 は東南東に伸びることから、現在の五条川にかけて区画が存在した可能性が高い。その他の溝は、区画など性格は不明である。

（３）城下町Ⅲ期（図 118）

調査区の北側に造成基壇 SX04 が造成され、基壇の東側と南側に石垣 SW01 が築かれる。土塁 SX01 と方形状基壇 SX04 に囲まれた南側には溝 SD13 の北側に SX01 からのスロープ状に下がる幅 6m 程の通路と、溝Ⅳ類～Ⅴ類の SD01・SD02・SD04・SD14 に囲まれた区画がある。溝は調査区の東外側を囲んで、旧五条川に面していたものと思われる。これらの遺構の時期は、SD01 より大窯第３古段階～大窯第３新段階の瀬戸・美濃窯産陶器と「三斗付□上清須外」・「ほしの新右衛門」の墨書のある荷札木簡が出土しており、木簡に記された「ほしの新右衛門」は織田信雄分限帳に記載された人物の可能性が高いもので、城下町Ⅱ -2 期～Ⅲ -1 期に属するものと考えられる。SD02 からは大窯第２段階～大窯第３古段階の瀬戸・美濃窯産陶器、焙烙鍋、大窯第４段階の擂鉢が出土していることから、城下町Ⅲ期のものである。第２章でも述べたが、SD01 と SD14 の途切れる部分は東西に並んでおり、同時に存在すれば区画への出入り口が想定でき、SD02 の調査区南東隅

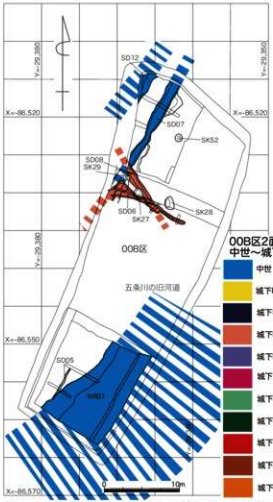


図 117　00B 区２面　中世～城下町期の遺構変遷（1：500）

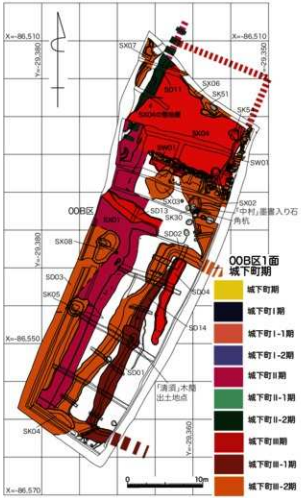


図 118　00B 区の城下町Ⅱ期～Ⅲ -2 期の遺構変遷（1：500）

図 119　名古屋市蓬左文庫所蔵『春日井郡清須村古城絵図』（中央部分）における 00B 区の位置（赤色矢印）

で止まるところも同様な出入り口の存在が推定できる。SD02 のめぐる範囲から南北約 24m を囲む区画溝と考えられ、SD01 から荷札木簡が出土していることから、この区画が後期清須城に関わる船着場であった可能性が高い。また石垣 SW01 で護岸された方形状基壇 SX04 には櫓などの建物もあった可能性がある。

以上の城下町Ⅲ期の遺構より新しい遺構として、SX02 と SX03 がある。出土遺物には江戸時代以後のものがないが、SX04・SW01 の南から東にかけて溜まる堆積であること、多くの瓦や石垣の石材と思われる石材やその裏込めの可能性ある礫が多数出土したことから、城下町Ⅲ -2 期にあたる清須越しに伴う遺構を想定したい。SX02 の中にある SK30 も、墨書のある巨礫の砂岩や角柱が遺存しており、土坑の埋没する堆積状況からもほぼ同時期のものと考えられることから、清須越しに伴う遺構と考えておきたい。

（4）00B 区の後期清須城の中における位置

発掘調査時から、調査地点が五条川に東面して 60B 区・60C 区で SD52 として報告され、名古屋市蓬左文庫所蔵『春日井郡清須村古城絵図』に描かれた御園の下に東西にのびる「水堀」である中堀の南側で、天守閣から北にある内堀と考えられる「田」と「水堀」の北側にあることは明らかであり、さらに相対的位置から『春日井郡清須村古城絵図』に描かれた「御園」の下に東西にのびる「水堀」の南で「畑」を挟んで南に東西に描かれた「堀形　田」の東端付近に位置することは予想された（図 119）。

本報告において、00B 区南西隅部にて確認された SD03 などをこの「堀形　田」の東端部分に想定したり、また鈴木正貴が推定したこの「堀形　田」の南にある「土居」の部分を 00B 区北側にある SX04 に当てること（鈴木 2012）も考えた。しかし、00B 区は愛知県公文書館所蔵明治 17 年（1884）作成『地籍字分

図 120　00B 区の調査中の風景
（南より、丸の位置が SX04 の位置）

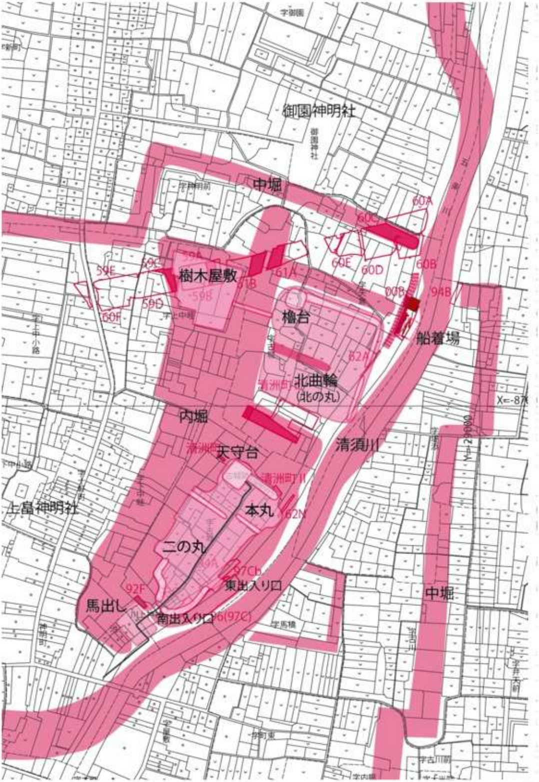


図 121　00B 区の船着場の想定（1：5,000）
鈴木正貴 2012「後期清須城本丸考ー臼杵市立臼杵図書館所蔵絵図を中心にー」
『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第 13 号掲載の図 18 と図 23 を合成一部改変作成

全図』の五条川の西岸堤から五条川にかかる位置にあり（図 121）、金原 宏（金原 1986）や鈴木 (鈴木 2012) が想定した『地籍字分全図』の東西にのびる田域をこの「堀形　田」に当て、00B 区の一部が『春日井郡清須村古城絵図』の「堀形　田」に重複しないで、この「堀形　田」の東で堤道が五条川に張り出して曲がる部分の南側に当てることが妥当と考えられた。また、00B 区の SX04 は五条川にやや張り出した屈曲部分として調査時には残っていた（図 120）。

このような検討結果から、00B 区を含む五条川へ張り出した屈曲は『地籍字分全図』には現われず、また『春日井郡清須村古城絵図』には堤・道が五条川へ張り出した屈曲として描かれているが、城に関わる施設はこの部分に描かれていない。よって、00B 区にて確認された後期清須城に関わる遺構は、中堀の内側にある曲輪内の部分ではなく、五条川と堀に挟まれた地点にある溝 SD01・SD02・SD04・SD14 などに囲まれた船着場と船着場に隣接する石垣 SW01 を伴う方形状基壇 SX04 に推定される施設（例えば櫓状建物）が想定される。

４.まとめ

最後に城下町Ⅲ期における遺構を形成する時代背景を考えたい。

御園地区に見られた後期清須城に伴う船着場はこれまでの清須城の研究の中で、江戸時代の絵図などに描かれていない部分における遺構のあり方を示すものとして、貴重な成果を提供できた。これは SD01 出土の墨書木簡に残された「ほしの新右衛門」が織田信雄分限帳に記載された人物の可能性が高いものであり、後期清須城の成立と合わせて、興味深い成果となった。

南部地区ではこれまでの調査・研究により、東西の細長い地割から想定される町屋城の展開が城下町Ⅲ－２の特徴とされてきた。今回の分析により、南部地区の遺構変遷の中では、この井戸の列状分布から想定される東西の細長い地割の形成が城下町Ⅲ -2 期であることを改めて追認し、城下町Ⅱ－２期から展開する大小の方形状区画が展開した後で、登窯第１小期の瀬戸・美濃窯産陶器が出土する遺構のものであることが明らかにできた。これを清洲城下町遺跡の歴史と併せて考えると、この城下町Ⅲ -2 期の始まりは出土遺物では織部などに代表される登窯第１小期の瀬戸・美濃窯産陶器が指標であるが、遺構の形成もその前後にあることがわかる。この時期は慶長５年（1600 年）の関ヶ原の戦いと江戸幕府成立以後で尾張藩主が松平忠吉から徳川義直である時期と重なる。よって南部地区における城下町Ⅲ－２期の遺構群の形成が、江戸時代における街道整備などと連動した城下町整備と関連したものと考えられるのである。

以上、少ない手がかりから推測を重ねる部分も多くあり、また既報告の調査成果との整合性を急ぎ考えるあまり、遺構の理解が不十分になる部分もあると思われる。今後の調査と研究に託すところである。本報告を作成するにあたり、清須市教育委員会の柴垣哲彦氏と当埋蔵文化財センターの鈴木正貴氏には多くのご教示とご支援をいただいた。記して感謝の意とした。

参考・引用文献
金原 宏 1986「清洲城下町の堀の復元」『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報昭和 60 年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴 1994「第Ⅴ章 城下町期の遺構配置」『清洲城下町遺跡Ⅳ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 53 集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴 1995「第Ⅸ章 考察 第２節 城下町の復元的研究（1995 年覚書）」『清洲城下町遺跡Ⅴ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 54 集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴 2012「後期清須城本丸考－臼杵市立臼杵図書館所蔵絵図を中心に－」「愛知県埋蔵文化財センター研究紀要」第 13 号、（公財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
○遺構・出土遺物の時期区分は次の文献に準拠している
鈴木正貴 1995「第Ⅸ章 考察 第１節 清須城下町の遺物様相」『清洲城下町遺跡Ⅴ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 54 集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
藤澤良祐 1993『瀬戸市史陶磁史篇四』、また本報告に関わる瀬戸・美濃窯産陶器は藤澤良祐氏によるご教示を頂いている。
○清洲城下町遺跡の遺構の時期などを考える上では、刊行された全ての報告書を参考にしているが、本文に関わるもののみをここでは挙げる。
小澤一弘編 1992『清洲城下町遺跡Ⅱ』「清洲城下町遺跡Ⅴ」「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 27 集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴編 1994『清洲城下町遺跡Ⅳ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 53 集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴編 1995『清洲城下町遺跡Ⅴ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 54 集」財団法人愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴・宮腰健司他 2002『清洲城下町遺跡Ⅷ』「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 99 集」財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
田邊一元・柴垣哲彦 2017『清洲城下町遺跡Ⅸ・総合治水対策特定河川事業に伴う発掘調査報告書－』「清須市埋蔵文化財調査報告Ⅴ」愛知県尾張建設事務所・清須市教育委員会・株式会社イビソク

第２節　清洲城下町遺跡における茶陶の分布 －黄瀬戸と楽系陶器－

１.はじめに

桃山陶器と認識される茶陶類は、清洲城下町遺跡出土遺物の中でも調査時、また整理段階においても比較的目を引き抽出され易い資料である。

このうち多量に出土する志野釉・長石釉の製品は清洲城下町遺跡の時期区分、城下町期 III 期の遺構の時期を決定する指標ともなっている[註１]。ただ、向付などの茶陶のほか碗・皿類の汎用飲食器までの器種が広範かつ多量に出土するため、同時期の遺構の展開を把握するには有効な資料であったが、出土地点の性格の違いを鮮明にするものではなかった。そこで瀬戸・美濃窯産陶器のうち桃山陶器初期の段階に登場する黄瀬戸[註２]を軸に茶陶の共伴関係から分析を試みることにした。また、地元瀬戸・美濃窯の製品ではない茶陶として楽系の軟質陶器（主に碗・水滴）を選択し、これらの分布域の比較・検討を行った。

２.清洲城下町遺跡出土の黄瀬戸資料

清洲城下町遺跡出土の黄瀬戸の器種には、大皿･鉢類、向付、半筒碗、筒形容器などがある（図 122・図 123）。大皿・鉢類では、銅鑼鉢、輪花鉢と呼称される器形をはじめとして、向付類には半筒形や猪口などの様々な形状・規格のものがあり、黄瀬戸に特有ともいえる形と焼締陶器や錆釉・鉄釉・志野（長石）釉製品大皿・鉢などの素地に共通するような、口縁部を折縁状にする器形、平鉢形や浅鉢形などがある。黄瀬戸にはヘラによる刻紋や印花、櫛状工具による波状文などの施文がみられ、黄釉の地に緑彩（胆礬）、褐彩（鉄）が施される。窯詰方法の違いも認められ、内面などに小さな目跡のみられるもの、トチンや重ね焼の置き跡が明瞭なものとがあり、前者の器壁は全体にやや薄手で丁寧な造りとなる傾向が認められる。大皿類の施文方法では、前者にはヘラによる刻紋、後者には波状文が多い･という対応関係が認められる。

３．茶陶の共伴関係

黄瀬戸と共伴する主な茶陶器種の有無を表 10 ～表 13 に示す （ただし瀬戸・美濃窯産天目茶碗、志野・長石釉の小型の皿類は城下町期 III 期に共通するため、項目から除外している）。（１）91A 区 SK6151 は天正地震（1586 年）以降の掘削と考えられる遺構であり、17 世紀初頭の資料を含む城下町期 III-1 期の基準資料となっている。長軸 11.9m、短軸 10.5m、深さ 0.85m の規模をもつ平面形状が不定形となる大型の廃棄土坑であり、複数の土坑が重複する。黄瀬戸は内面にヘラによる花文を施した大皿（9,10）があり、志野では向付・折縁皿、その他の茶陶に筒形碗、瀬戸黒茶碗、灰釉向付、茶入、花瓶、唐津窯産向付・碗があり、景徳鎮窯系青花、漳州窯系青花皿も一定量が含まれる。（２）63S・89D 区 SD7023 は 幅 5.2m、深さ 0.63m の規模の溝である。南北方向に続く 53.6m の範囲が確認されており、側溝のような性格が想定されている。黄瀬戸は大鉢、向付（1,21,40）があり、図化資料に志野では四方向付が数点、志野織部向付・大皿などがあり、大皿類には織部平鉢、青花、朝鮮産白磁、備前窯産製品も含まれる。その他に楽茶碗、筒形碗、香茶碗、美濃唐津向付、建水や茶壺、唐津窯産向付などが含まれる。青花皿の数点には漆継が認められる。

（３）61C・61D 区 SK7029 は、城下町期 III-2 期の基準資料である。長軸 17.36m、検出幅 7.47m、深さ 1.59m の規模をもつ大型の方形土坑であり、性格は不明ながら隣接する寺院（久証寺）との関連も指摘されている。黄瀬戸は繊細な造りの鉢・向付（3,4,24,25）があり、志野では大型の浅鉢形向付・水注・蓋付小壺・志野茶碗など多様な器形や鉄絵文様がみられる。他にも青花大皿、大皿（焼締、錆・鉄釉）、瀬戸黒茶碗、筒形碗、花生、唐津窯産向付があり唐津窯産ひだ皿は複数がみられる。図化資料に茶入は６点があり、茶陶器種・形態のバリエーションや個体数も豊富である。

（４）99A 区 SK31,SK33 は直径がそれぞれ約 3.4m と 1.8m、深さ約 0.8m の規模をもつ土坑であり、出土遺物は接合関係にある。黄瀬戸は

鉢・浅鉢形向付（5,6,22）があり、ほかに青花碗・丸皿が含まれる。瀬戸・美濃窯産製品では重圏皿が伴うのみである。99A 区全体では黄瀬戸向付・筒形容器・半筒碗など（31,32,34,36,37,43）があり、志野向付・盤・大皿、志野茶碗、鼠志野向付・大皿、鳴海織部向付、美濃唐津向付など多様な形態のものがみられ、他に筒形碗、香茶碗があり、大皿（焼締・錆・鉄釉）も多数が出土している。99B 区全体では黄瀬戸向付・小鉢など（8,29,30,33,38）があり、その他に志野茶碗、志野向付・盤・大皿、灰釉向付、瀬戸黒茶碗、黒織部茶碗、大皿（錆・鉄・灰釉）、遺物の接合関係にある SD20、SX01 では、黄瀬戸と共に楽（茶碗と菊皿）が出土している。

（5）10A･B 区全体では黄瀬戸大皿（13,14,15）があり、志野では向付・碗がみられるが大皿類も含めて少量である。他には織部向付・織部香合蓋、華南三彩鉢などがある。

（6）11B 区全体では黄瀬戸向付・大皿・中皿・碗など（17,19,23,28,42）があり、志野向付は少なく、志野茶碗、志野丸碗、焼締大皿、建水、青花碗・皿、瓦質風炉などがみられる。

（7）朝日西遺跡 59F 区 SK133 では黄瀬戸大皿（16）が出土している。共伴資料は不明である。このほか包含層出土資料に、黄瀬戸鉢・大皿・小杯など（7,12,18,44）があり、灰志野向付、青花大皿、楽茶碗、織部香茶碗、水滴が数点と朝鮮産徳利などがみられる。59G 区 SD63 では楽茶碗と共に志野向付、香茶碗、長石釉折縁稜花皿が出土しているほか、茶入や向付類が一定量出土する遺構が散漫ながらも広がりをみせる。

（8）00A 区 ,62D 区 SX8001 は大窯第３段階後半から連房式登窯第Ⅰ小期までの遺物を含む巨大な方形土坑である。黄瀬戸は大皿・鉢・筒向付・筒形片口鉢があり、志野向付・大皿類も数多く含まれ、他に鼠志野大皿、長石釉鉄絵大皿・向付、茶入、水滴、美濃唐津大皿、唐津窯産碗、信楽窯産水指がみられる。

（9）18 区 002SD では黄瀬戸向付と大皿、017SD では黄瀬戸輪禿皿と唐津碗、031SE では黄瀬戸腰折皿、052SX では黄瀬戸鉢と長石釉鉄絵丸皿がある。遺構単位の茶陶器種のセット関係は明確ではないが、調査区全体では志野丸皿が多く含まれるなど、城下町期 III-1 期終盤から III-2 期を中心とした遺構が濃密に分布している。

以上から遺構で共伴する器種を整理すると、黄瀬戸「向付」を含む遺構では、志野（長石）向付・大皿・鉢、焼締・錆（鉄）釉の大皿類、茶入などの瀬戸・美濃窯産製品が併せて含まれる割合が高い。これに青花大皿、備前大皿、楽茶碗、朝鮮徳利、青花･白磁青磁の皿、水滴（楽、瀬戸･美濃窯産、備前窯産）、香茶碗、花生、建水、瓦質風炉など多様な器種や瀬戸・美濃窯産陶器以外の製品が加わるといった状況を読み取ることができる。

清洲城下町遺跡は沖積地に立地する上に生活域としての改変の頻度が高く、削平を免れた遺構でも重複が著しい。出土遺物の一括性の精度は必ずしも高くはないという状況を踏まえた上で、ここでは黄瀬戸向付と共にやや幅をもつ時期の多様な器種の茶陶が廃棄されているという状況を確認しておきたい。

4．茶陶の分布範囲から

黄瀬戸を含む茶陶の出土地点は、清須城下町のどのような場所なのだろうか。美濃窯産の黄瀬戸と京より運ばれた楽（系陶器）の茶碗・水滴について出土遺構のある調査区を単位として分布傾向の比較を行った（図 124）。

黄瀬戸は遺跡の広い範囲に分布がみられる。城下町北側の地域では、神明地区西部（60F 区）と神明地区東部（60A・B 区）、そして本町西部地区と本町東部地区へと続く範囲（10A・B 区、11B 区）や本町西部地区のさらに西側の地区、そして南部地区でも南端付近にまで及び、城下でも周縁部にまで確認されている。対照的に本丸地区、五条橋地区、田中町（北部・南部）地区など清須城に近い中心域では確認がなく空白域となっている。

楽系陶器の分布範囲は黄瀬戸に比べて狭く、部分的には重なりつつも大きく異なる様相を示している。集中域が五条橋地区、田中町南部地区にあり、そこから広がるように本町西部地区から南部地区の北側の一部が分布範囲となっている。また、城下町の北部地域では神明地区に加えて御園地区で確認されている。

以上の分布範囲を、これまでの研究成果として想定されている清須城下町（後期）復元案[註3]等を参考に置き換えてみると、楽（系陶器）のみが分布する五条橋地区は63C,89E区SD6001が比定されている清須城中堀より内側にあたり、調査で明確な遺構が確認されない範囲として広場のような空間が想定されている。田中町南部地区も中堀の内側と考えられる範囲で、ここでは城下町期Ⅱ期に存在した大型の方形区画がⅢ期に小型化していることなどから、下級家臣団の武家屋敷地と推定されている。

楽・黄瀬戸の両者の分布する範囲のうち、神明地区も同様に中堀の内側の空間と想定され、出土遺構の60A・B・C区SD52が北側中堀に比定されている。五条橋地区と本町西部地区との間の63C,89E区SD6001が南側中堀に比定されており（この遺構には黄瀬戸・楽ともに含まれていないが）、それより外側となる本町西部地区・本町東部地区との間（10A・B区,11A・B区）・南部地区、そして城下町北部の御園地区では、小型の溝と井戸の配列を基本とした遺構の検討から、街路に面して間口の狭い空間、いわゆる短冊形地割が並ぶ町屋の景観が復元されている。

なお瀬戸・美濃窯産の擂鉢の時期別出土分布のデータ[註4]によれば、中堀のすぐ南側に位置する本町西部地区は本丸地区、清須城の成立とともに早くから開発されており、南部地区は61D,89D,91C区などの一部の範囲以外では大窯第3段階、すなわち城下町期Ⅱ-2期以降に活動が本格的となっている。01区以南は城下町の拡張により新規に整備された範囲と考えられる。本町西部地区と本報告17,18区、00A区が含まれる南部地区は同じく町屋の空間が想定されているが、それぞれに異なる経緯を経て成立した場所であることをつけ加えておきたい。

5. まとめ

清須城下町（後期）における茶陶の分布に関連しては既に指摘がなされており、武家・寺社地と比較して、商・職人居住域と想定される町屋の方が圧倒的な出土量と器種の豊富さで勝ること、武家・寺社地では瓦質風炉、茶臼などが特徴的にみられることなど器種別の差異も示されている[註5]。これらは黄瀬戸分布の様相と概ね一致しているが、楽（系陶器）のあり方を重ねると少し別の表現が可能となろう。

ここで出土地点の様相からず問題としたいのは、実際に茶陶を使用した空間についてである。武家・寺社地は、突出した規模の溝をもち、敷地内部の詳細は明らかでないものの単独でも周囲の軸線方向を推定できるような大型の方形区画の存在などから推定されている。町屋が想定される遺構は、遺存状況も不安定な規模や構造の境界が共有される形で並ぶ狭い長方形区画であり、内部の施設はどれも画一的な配置であったと推測される。少なくとも、数多くの多彩な茶陶を継続的に使用した空間を後者には求めづらい。また、今回の検討により黄瀬戸の分布と茶陶のバリエーション、とりわけ瀬戸・美濃窯産製品器種と量においては一定の相関関係が認められると考えている。多くの茶陶が町屋の空間に出土するとしても、それは茶の湯の席で使われたとは限らず、商品として存在したものが多く含まれている可能性を考える必要があろう。つまり、町屋の敷地内、あるいは近接した場所に保管（廃棄を含む管理）のための空間が想定できるのではないだろうか。

武家・寺社地から周辺町屋へ拡散するような分布がみられた楽（系陶器）は、基本的に出土地点の近辺で使用・廃棄されたものと推測される。楽（系陶器）の分布については、茶の湯文化の広がりに関わる時期差、階層による嗜好や流通経路の違いなどの影響が想定されるが、この点はさらに他の茶陶器種との関連も含めて考える必要があろう。

さて、京・大坂・堺に比較して清洲城下町遺跡では織部が「極めて少ない」と評される[註6]。洛中の織部製品の流通については、三条「せと物屋町」の問屋、消費地（公家・武家・豪商など）などそれぞれに異なる出土状況が明らかにされてきているが、清須城下において茶の湯文化の受容層の実態は考古学的にはどのような形で把握できるのだろうか。また、茶陶の流通に関してはどのような都市と位置付けられるのだろうか。瀬戸・美濃窯で生産された茶陶類のうち、黄瀬戸と志野が盛行し量産化された段階の消費地遺跡として、改めて清洲城下町遺跡の重要性が認識されるところである。

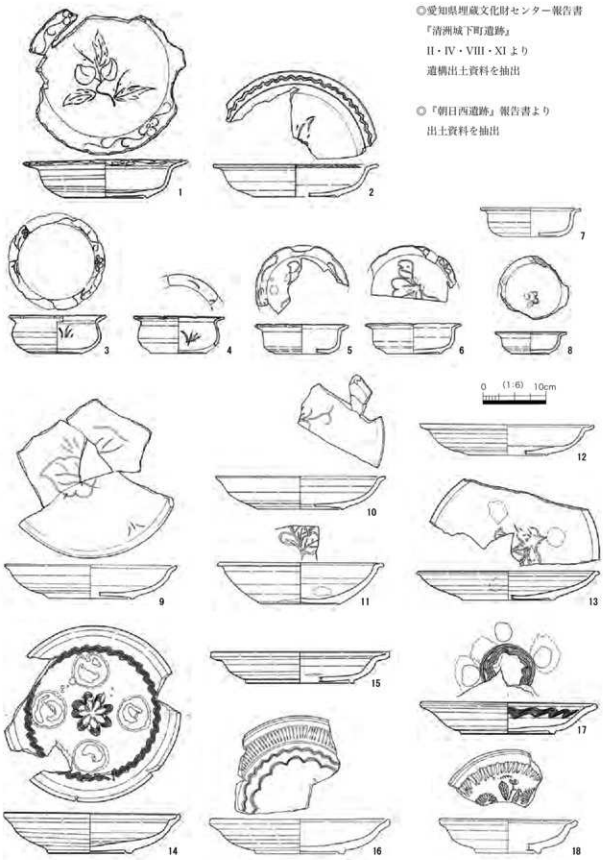
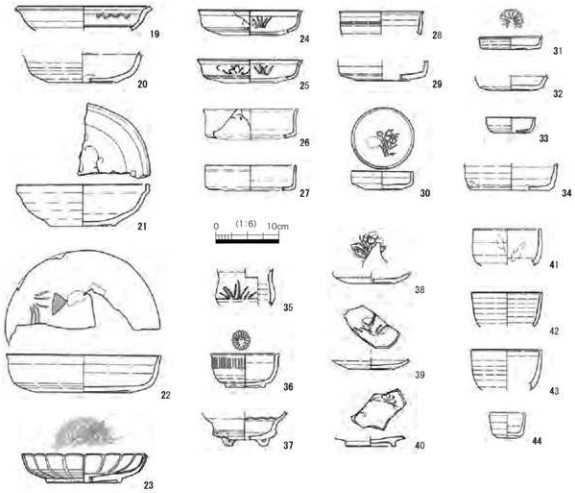


図 122　清洲城下町遺跡出土の黄瀬戸類（1）　縮尺 1/6



（　）内は報告書と図版番号

1（IV-819）63S 区 SD7023
2（II-1172）60F1 区 SK40
3（IV-983）61D 区 SK7029
4（IV-982）61D 区 SK7029
5（VIII-951）99A 区 SK31
6（VIII-952）99A 区 SK31・SK33
7（朝日西 -530）検出
8（VIII-1738）99B 区トレンチ
9（IV-573）91A 区 SK6151
10（IV-574）91A 区 SK6151
11（VIII-44）95B 区 SD102
12（朝日西 -533）検出
13（XI-946）10B 区 418SD
14（XI-972）10B 区 443SD
15（XI-929）10A 区 301SE
16（朝日西 -532）59F 区 SK133
17（XI-380）11B 区 0528SE
18（朝日西 -531）
19（XI-501）11B 区 0655SK
20（VIII-1179）99B 区 SX02
21（IV-815）89D 区 SD7023
22（VIII-958）99A 区 SK31・SK33
23（XI-564）11B 区 0732SK
24（IV-974）61D 区 SK7029
25（IV-975）61D 区 SK7029
26（IV-685）89D 区 SX7005
27（IV-684）89D 区 SX7005
28（XI-639）11B 区 0815SD
29（VIII-1742）99B 区 SX01
30（VIII-1739）99B 区 SX02
31（VIII-955）99A 区 SK89
32（VIII-956）99A 区 SK71
33（VIII-1762）99B 区 SK173
34（VIII-1063）99A 区検出
35（II-729）SD52-60A, 60B, 60C 区
36（VIII-959）99A 区 SD11・SD03
37（VIII-957）99A 区 SK71
38（VIII-1741）99B 区 SK194
39（II-566）SD16-59C, 59D 区
40（IV-801）89D 区 SD7023
41（II-542）SD16-59C, 59D 区
42（XI-409）11B 区 0530SK
43（VIII-802）99A 区 SK68
44（朝日西 -529）検出

図 123　清洲城下町遺跡出土の美濃戸類（2）　縮尺 1/6

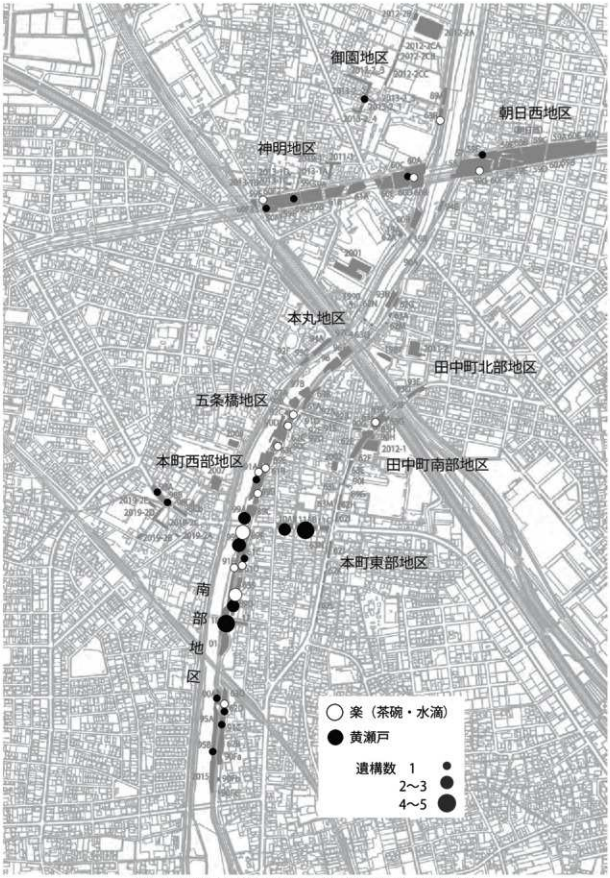


図124　清洲城下町遺跡の黄瀬戸・楽系陶器の分布　縮尺 1/10,000

表 10　清洲城下町遺跡出土の茶陶類（1）

		�fl瀬戸				向付			大皿・鉢					茶入	碗					皿				唐津	備考	文献
調査区	遺構番号	向付	鉢	大皿	皿	碗	志野（長石釉系）	織部	その他	志野（長石釉系）	焼締	鉄釉・織釉	灰釉	青花	その他	瀬戸・美濃窯	黒茶碗	香茶碗	青花	青磁	朝鮮	唐津	青花	白磁	青磁	唐津		
91AⅠ区	SK6151			○			●		灰釉, 唐津	●	●						●	●	●			●	●	●	●		瀬戸黒茶碗, 花瓶	5
89DⅠ区	SD7023	○	○	○			●	●	灰釉, 唐津	●	●	●		●	織部平鉢, 朝鮮白磁, 備前	織部 ●	●	●	●			天目 ●	●	●			瓦質風炉, 水滴（瀬）	5
61CⅢ区	SK7029	○	○				●	●	唐津	●	●	●	●	●		●	●	●				●	●	●	●	●	瀬戸黒茶碗, 花生（朝鮮・瀬）	5
99AⅠ区	SK31, 33, 71, SD11, 03/2ど	○	○			半筒 ○	●		美濃唐津, 鳴海織部, 猿志野	●	●	●					●		志野 ●								鉢花生（瀬）, 水滴（瀬）	6
93EⅠ区	SD102			○																			●					6
99B	S302	○		○					灰釉			●			鉢皿（瀬）													6
99B	SD20	○					●		灰釉			●					●	●										6
99B	S301	○										●					●	●										6
89DⅠ区	SX7005	○					●				●	●	●		唐津			●				●	●	●			花生・建水（瀬）, 水滴（瀬・瀬）	5
91CⅠ区		○																										5
59C, 59DⅠ区	SD16	○				○					●	●	●				●				●		●	●	●		建水（瀬）	2
60A～CⅠ区	SD52	○					●		灰釉, 唐津	●				●	備前		●	●	●			●		●	●			2
60F1Ⅰ区	SK40			○																								2
98AⅠ区	SB01					天目？○	●												志野									7
98BⅠ区	SD02		○				●				●																	7
10AⅠ区	3015E		○						灰釉																			8
10BⅠ区	442SK			○											象嵌・彩盤													8
10BⅠ区	443SD			○																			●				肥前銅器碗	8
11BⅠ区	052SSE	○									●																徳利（鉄絵）, 瓦質風炉	8
11BⅠ区	053OSK					○					●													●			瓦質風炉, 建水	8
11BⅠ区	065SSK	○																										8
11BⅠ区	073ZSK				輪花 ○						●								志野	●			●					8
11BⅠ区	081SSD	○																										8
朝日西50F	SK133			○											緑釉盤										●			4
朝日西	検出	○	○	○			灰志野 ●							●			黒茶 ●	織部 ●	●	肥前 ●	●		●	●	●		小皿（備前）, 鉢口皿（丹波）, 瀬戸徳利, 水滴1点	3
62LⅠ区	SD164					半筒 ○																						1
00AⅠ区	S38001（地1）		○	○			●		長石釉絵皿		●		●		長石釉鉄絵 鉢								●					本報告 P. 48
00AⅠ区	S38001（地2）	○	○	○			●				●				美濃唐津鉄絵大皿	●			●	●		●	●	●			水指（信楽）, 水滴（瀬）	本報告 P. 49～51
62DⅠ区	S38001			○			●			猿志野 ●					長石釉鉄絵 大皿								●					本報告 P. 57
18EⅠ区	002SD	○		○																								本報告 P. 68
18EⅠ区	017SD				輪花 ○																	●						本報告 P. 69
18EⅠ区	031SE				端反 ○																			●				本報告 P. 73
18EⅠ区	040SD	○			中皿 ○																							本報告 P. 73, 74

表 11　清洲城下町遺跡出土の茶陶類（2）

調査区	遺構番号	黄瀬戸					向付					大皿・鉢					茶入	碗					皿				備考	文献
		向付	鉢	大皿	皿	碗	志野（長石釉地）	織部	その他	志野（長石釉地）	瀬戸	鉄釉・織釉	灰釉	青花	その他	（瀬戸・美濃窯）	薬茶碗	香茶碗	青花	青磁	朝鮮	唐津	青花	白磁	青磁	唐津		
																												本報告 p. 74
18区	052SX		○																									
62E区	SD118						●										●											1
62H, 63LK	SD137						●										●											1
62JK	SD142							筋 ●																●			瓦質風炉, 織部筋, 灰釉壺	1
62KK	SK142																						●					1
62LK	SE133						●				●		●															1
62LK	SK148																										瓦質風炉	1
63FK	SD104						●								備前													1
63FK	SD101																●											1
63FK	SD105										●																	1
63KK	SD110																●			●	●		●		●			1
63KK	SD111											●						●			●		●					1
59A, 59BK	SD19						●																●	●	●		水滴（瓶）	2
59A, 59BK	SB03																								●			2
59C, 59DK	SD66																			●				●	●		青白磁水注, 青磁盃, 青磁鉢	2
59C, 59D, 60F2K	SD13																●						●	●			水滴（瓶）	2
59FK	SK05						●											●						●	●			2
60F1K	SD08											●															鉄釉灯篭々瓦質風炉	2
61A, 61BK	SE09						●					●															呂宋壺, 備前壺	2
朝日西 57, 58, 59GK	SD027						●		灰釉		●				施釉中皿					●								3
朝日西 59GK	SD063						●								長石釉折縁 櫛花皿			●	●								志野茶碗	3
朝日西 59C, 59DK	SD177						●					●	●				●		●				●				茶壺	3
朝日西 59A, 59B, 60EK	SD200						●				●						●			小杯 ●								3
朝日西 59CK	SE062																●											3
朝日西 58EK	SK026													●														3
朝日西 58EK	SK046						●				●	●																3
朝日西 58EK	SK065																		●									3
朝日西 58EK	SK096						●																					3
朝日西 59EK	SK124																										鳥形水注（人型）	3
朝日西 59EK	SK139													●													青花徳利？	3
朝日西 59EK	SK292						●				●				長石釉折縁 櫛花皿				●									3
朝日西 59EK	SK293										●				長石釉折縁 櫛花皿													3
朝日西 60EK	SK541																●											3
91EK	SK109																						●				瓦器六耳（瓶）	4
92BK	SK250																				粉青沙鉢						鉢（朝鮮）	4
89GK	SD605																						●					4
63C, 89EK	SD6001						●		鉄釉		●	●		●			●				●		●	●	●		茶臼, 徳利	5
89DK							●		鼠志野																		花生（朝鮮）	5
61BK	SD6031																赤 ●											5
62CK																	赤 ●											5
62DK																	白 ●											5
63CK	SE4073																黒 ●											5

表 12　清洲城下町遺跡出土の茶陶類（3）

		黄瀬戸				向付			大皿・鉢						茶入	碗					皿					
調査区	遺構番号	向付	鉢	大皿	皿	碗	志野―長石釉― 織部	その他	志野―長石釉― 徳利	鉄釉・錆釉	灰釉	青花	その他	瀬戸・美濃窯	染茶碗	香茶碗	青花碗	銅鍔	唐津碗	青花	白磁	青磁	唐津	備考	文献
89BEK													備前		● ● 白 ● 黒 白 ●									花生（朝鮮）	5
90BEK	SK4463																								5
91BEK																								大歯（瀬）	5
91AEK	SD6068														●		●					●		花生（瀬）	5
91AEK													備前, 朝鮮											花生（朝鮮）	5
92C, 62C, 90CDEK	NE4001														●						●				5
89EEK													朝鮮					●							5
61DEK	SD7008																							建水（備前）	5
61DEK																		●							5
91AEK	SK6570																			●				焙烙建水（瀬）	5
62CEK	SK4604																							花生（朝鮮）	5
95AEK	SX01					●		長石釉鉄釉																	6
99B	SD01														●										6
99B	SK191							灰釉					瓶底（瀬）												6
98AEK	SD09					●				●	●						●								7
98AEK	SD01						●																	香炉（志戸呂）	7
98BEK	SD07					●																			7
98BEK	SD03																			●					7
98CbEK	SK20・21					●										●	●			●					7
10AEK	010SK																							鉄釉灰被し掛け徳利 短筒壺（志戸呂）	8
10AEK	012SX																			●					8
10AEK	108SK									●					●					●		●			8
10AEK	177SE						●			●	●									●				橋脚書合盃	8
10AEK	検出																			●				古天盃	8
10BEK	418SD									●				華南三彩盤											8
10BEK	検出																			●				天目茶碗（志戸呂）	8
11BEK	653SD																	●						建物平碗	8
11BEK	0631SE					●				●										●					8
62DEK	SK8032					●		鼠志野																	本報告 P. 56
62DEK	検出 1																				●			筒型鉢盃	本報告 P. 57, 58
63DEK	SD8005					●									●					●					本報告 P. 58
63DEK	西壁トレンチ						●																		本報告 P. 58
01EK	03SD													灰 ●	●						●	●			本報告 P. 66
18EK	041SD																●				●			鉄釉六角柱	本報告 P. 74
	SD01					●																			9
	SK03					●																		擂鉢	9
	SK12					●																			9
	SK16					●																		大歯（瀬）	9
	018SK					●																			11
AEK	001NR					●						●													11
AEK	005SX						●																		11
CEK	包含層					●				●				鼠志野				●			●				11

表 13　清洲城下町遺跡出土の茶陶類（4）

		黄瀬戸					向付			大皿・鉢					茶入	碗						皿				備　考	文献
調査区	遺構番号	向付	鉢	大皿	皿	碗	志野～織部～	織部	その他	志野～織部～	絵織	鉄釉・錆釉	灰釉	青花	その他	瀬戸・美濃系	染茶碗	各茶碗	青花碗	青磁	朝鮮	唐津碗	青花	白磁	青磁	唐津		
CIX	002SD						●																					11
CIX	072SD						●				●					●											太浦（瀬）	11
	214SD						●																					12
	169SK						●																					12
	包含層											●																9
	SK07										●					●												9
	001NR																									●		10

文献番号1．　1990.『清洲城下町遺跡I』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集
2．　1992.『清洲城下町遺跡II』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第27集
3．　1992.『朝日西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第28集
4．　1994.『清洲城下町遺跡III』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第50集
5．　1994.『清洲城下町遺跡IV』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第53集
6．　2002.『清洲城下町遺跡VIII』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第99集
7．　2005.『清洲城下町遺跡X』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第131集
8．　2013.『清洲城下町遺跡XI』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第183集
9．　清須市教育委員会.2007.『清洲城下町遺跡I-清洲小学校プール建設に係る発掘調査報告』
10．清須市教育委員会.2009.『清洲城下町遺跡I-清洲小学校体育館建設に係る発掘調査報告』
11．清須市教育委員会.2013.『清洲城下町遺跡V-清洲内屋地区店舗開発に伴う発掘調査報告-』
12．清須市教育委員会.2015.『清洲城下町遺跡VIII-一蓮御園地区宅地造成に伴う発掘調査報告書-』

註１）鈴木正貴編.1995.『清洲城下町遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 54 集

註２）　黄瀬戸の定義と年代観についての代表的な見解を記しておく。

・「黄瀬戸は黄釉が掛けられていることが必要条件ではあるが、通常黄釉地に緑彩（胆礬）および褐彩（鉄）が施されたものを主体とし。特に安土桃山時代の茶碗・花入・鉢・向付類を限定して呼んでいる。」

「黄瀬戸の製作年代は大窯Ⅳ期の 1580 年（天正８年）頃を上限として始まり、最盛期となる大窯Ⅴ期の天正末から文禄年間を経て慶長 10 年を下限とする約 25 年間が推定される。」

「志野の出現は天正 13 年（1585）説を提唱してきていると ころであるが、大坂城跡の発掘調査による編年観によれば、大坂城三の丸の造営時の慶長３年（1598）以降に盛行する とされている。」（井上喜久男 ,2009,「桃山陶の変革と創造」愛知万博記念特別企画展図録『桃山陶の華麗な世界』愛知県陶磁資料館）

・「大窯第４段階前半に登場する桃山陶器は筒形碗（瀬戸黒）・薬茶碗、黄瀬戸製品の向付・鉢類があり、大窯第４段階後半には長石釉単味の志野製品が多様な器種で盛行する。また これに先行して灰志野が成立する。そして大窯第４段階末期には織部黒・鼠志野・美濃唐津が成立する。黄瀬戸が 焼成された年代については、紀年銘の文禄２年（1593）まで遡る可能性があり、大窯第４段階後半は 1590 年代の終わり頃と考えられている。」（『愛知県史　別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系』）

註３）鈴木正貴作成図　清須城下町（後期）の復元想定案（名古屋市博物館他 ,2019, 地域展『尾張の城と城下町　三英傑の城づくり・町づくり』ガイドブック）

註４）第 142 図瀬戸・美濃窯産錯鉢の時期別出土分布（鈴木正貴編 ,1994,『清洲城下町遺跡Ⅳ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 53 集）

註５）　鈴木正貴 ,2006,「清須城と名古屋城における茶の湯について」『関西近世考古学研究 14』

註６）林順一 ,1998,「美濃窯の生産と消費地清須と名古屋」『城下町のやきもの　清須城・名古屋城』土岐市美濃陶磁歴史館

【引用・参考文献】

土岐市美濃陶磁歴史館 ,2001,『三条界隈のやきもの屋』

土岐市美濃陶磁歴史館 ,2000,『大坂城出土の桃山陶磁　豊臣期のやきもの』

東洋陶磁学会 ,2002,『東洋陶磁史―その研究の現在―』

愛知県陶磁資料館 ,2009,『桃山陶の華麗な世界』愛知万博記念特別企画展図録

(公財) 瀬戸市文化振興財団 ,2016,『織豊期の瀬戸窯と美濃窯』

瀬戸市 ,1993,『瀬戸市史　陶磁史篇』四

愛知県 ,2007,『愛知県史　別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系』

00A 区全景（南東より）

00A 区全景（北より）

00A 区 SD01・SK01・SK02（南より）

00A 区 SX8001 完掘状況（南より）

00A 区 SX8001 下駄・獣骨など出土状況（北より）

00A 区 SX8001 漆椀・天目茶碗など出土状況（南より）

00A 区 SX8001 黄瀬戸向付（E00A059）出土状況

00A 区 SX8001 土師器皿・内耳鍋出土状況（北より）

00A 区 SX8001 鉄釉茶入（E00A067）出土状況

00A 区 SX8001 鉄釉屑付茶入（E00A068）出土状況

00A 区 SX8001 鉄釉水注（E00A058）出土状況

00A 区 SX8001 鉄釉水滴（E00A056）出土状況

00A 区 SX8001（E00A003）出土状況

00A 区 SX8001 天目茶碗（E00A040）出土状況

00A 区 SX8001 灰釉丸皿（E00A078）出土状況

00A 区 SX8001 加工円盤出土状況（E00A096）

00A 区 SX8001 長石釉鉄絵丸皿（E00A087）出土状況

00A 区 SX8001 長石釉鉄絵丸皿（E00A088）出土状況

00A 区 SX8001 長石釉鉄絵大皿（E00A105）出土状況

00A 区 SX8001 鉄釉片口向付（E00A065）出土状況

00A 区 SX8001 鉄釉片口鉢（E00A099）出土状況

00A 区 SX8001 軒丸瓦（E00A222）出土状況

00A 区 SX8001 鉄鏃（M011）出土状況

00A 区 SX8001 刀子（M012）出土状況

00A 区 SX8001 宝篋印塔（S042）出土状況

00A 区 SX8001 桶のタガ出土状況（北より）

00A 区 SX8001 曲物側板（W071）出土状況

00A 区 SX8001 下駄（W057）・角棒（W089）出土状況

00A 区 SX8001 漆椀（W045）出土状況

00A 区 SX8001 漆椀（W032）出土状況

62D 区 SX8001 漆椀（W083）出土状況

00A 区 SX8001 獣骨出土状況

00A 区 SX8001 縄出土状況

00A 区 SX8001 縄出土状況

00B 区全景（北より）

00B 区全景（西より）

00B 区 SX04・SW01（南より）

00B 区南側下層 NR01（北より）

00B 区 SW01 東側石列（南より）

00B 区 SW01 南側石列（東より）

00B 区 SK51（南東より）

00B 区 SX02・SD01・SD02（北より）

00B 区 SX02 遺物出土状況（北より）

00B 区 SX02 検出状況（南東より）

00B 区 SX02・SD06（南東より）

00B 区 SD06・SD07・SD08（北西より）

00B 区 SK30 有頭棒（W194）出土状況

00B 区 SK30 柱材（W193）出土状況（南西より）

00B 区 SK30 出土石材にある墨書（S051）

00B 区 SD02・SD12・SK52・SK53（北より）

00B 区 SD01・SD02（北東より）

00B 区 SD01 箸などの木製品出土状況（北より）

00B 区 SD02 下駄（W139）・鉄釉双耳徳利（E00B010）出土状況

00B 区 SD01 獣骨出土状況

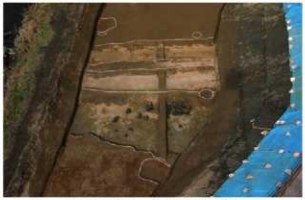
00B 区 SD01 東壁断面（西より）

00B 区 SD02 漆椀出土状況（W132）

00B 区 SK04 漆椀（W186）出土状況

00B 区 SD03 青磁皿（E00B016）出土状況

01 区全景（北より）



01 区 SD01 ～ SD03（南より）

01 区 SD01 断面（西より）

01 区 SD03 遺物出土状況（東より）

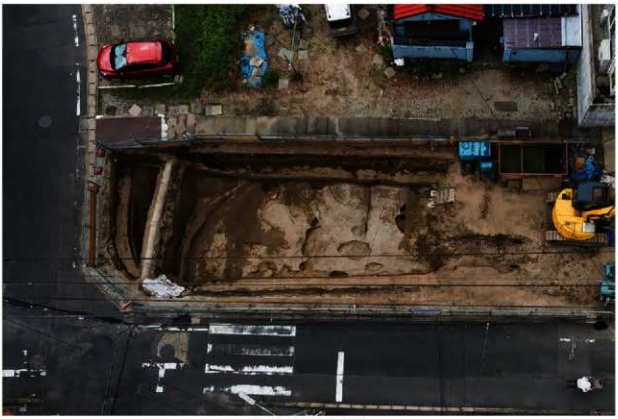
17 区遠景（東より）

17A 区全景（上より）

17A 区東側全景（北東より）

17A 区西側 034SK ～ 036SK（南より）

17A 区 033SD（西より）



17B 区全景（上より）

17B 区全景（南西より）

17B 区東側（北より）

17B 区西側（北より）

17B 区 060SE 遺物出土状況（東より）

17B 区 060SE 断面（北東より）

17B 区 029SK・030SD（東より）

17B 区 063NR（南東より）

17B 区 063NR 灰釉丸皿（E17023）出土状況

17B 区 063NR 土師器（E17027 ～ E17029）出土状況

18 区遠景（南より）

18A 区全景（北より）

18A 区全景（北東より）

18A 区北側（東より）

18A 区 001SD・006SD 断面（東より）

18A 区 035SE、桶の一部が残る（北より）

18A 区 031SE 断面（南より）

18B 区全景（西より）

18B 区 015SD（北より）

18B 区 021SD 遺物出土状況（北より）

18B 区 022SE（北より）

18C 区全景（北より）

18C 区 040SD・041SD（北東より）

18C 区 041SD 曲物（W246）出土状況（南より）

18C 区 041SD 漆椀（W244）出土状況（西より）

18C 区 041SD 土師器皿（E18194）出土状況（西より）

18D 区全景（北より）

18D 区全景（東より）

18D 区 017SD（東より）

18D 区 017SD 獣骨出土状況（北より）

18D 区 052SX 断面（南より）

18E 区全景（北から）

18E 区全景（東より）

18E 区 032SD・064SD（南より）

18E 区 060SD 遺物出土状況（南西より）

18E 区 061SK・063SD（東より）

18F 区全景（北より）

18F 区全景（東より）

18F 区 073SK 断面（北より）

18F 区 083SE（北西より）

18F 区 084SE 硯（S005）出土状況（北より）

18F 区 077SD･078SD･092SK･095SP ～ 097SP（西より）

00A 区 8001SX 出土遺物（62D 区・63D 区出土遺物も含む）

00B 区 SX02・SK30 出土遺物

00A 区 SD01 出土木簡、左：三斗付□上清須外、右：ほしの新右衛門（W111）

00A 区 SX8001 出土鉄鏃（M011）

18E 区 060SD 出土飾り板（W252）

00A 区 SX8001 出土宝篋印塔（S042）

00A 区 SX8001 出土長石釉鉄絵大皿、左：内面の鳥の絵、右：底面に墨書「屋ん」（E00A105）

00A 区 SX8001 出土長石釉鉄絵端反皿（E00A077）

00A 区 SX8001 出土長石釉鉄絵角向付（E00A062）

62D 区 SX8001 出土黄瀬戸折縁大皿（E00A038）

00A 区 SX8001 出土黄瀬戸向付（E00A059）

00B 区 SX02 出土軒丸瓦（E00B130・131）

00B 区 SX02 出土軒丸瓦（E00B132・134・135）